

---

# 嘘と話術とノラ猫

まあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘と話術とノラ猫

### 【Nコード】

N1890N

### 【作者名】

まあ

### 【あらすじ】

家族に捨てられ1人で生きている少年『黒須 伐』  
人を信じる事のない彼は文月学園Fクラスで大切なものを見つけられるのでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』では別ルートとともに連載しています。

## ブローグ

「……眠い。なあ、めんどくさいし、このまま、戻ってさっきの続きをしないか？」

「バカな事を言わないの。あなた、学生でしょ。そっちは授業中、寝てれば良いだけなんだから、文句言わないでよね」

少年は車の助手席であくびをしながら、運転席の女性に声をかけると女性は少し呆れたように言う。

「へいへい。わかりましたよ」

「到着よ。また、お願いね。少年」

少年は女性の言葉に苦笑いを浮かべると車は少年の通う文月学園の校門前に到着し、女性は少年に1センチほどの厚みがある封筒を手渡す。

「まいど、今後ともごひいきに」

「その時はよろしくお願いするわ。じゃあね」

少年は封筒の中身を確認すると女性の頬に軽くキスをするとう女性はそのキスに特別な感情など入っていない事を理解しているようで、頷くと少年を校門前において車を走らせて行く。

(……こんなもんか、世の中不景気だな)

少年は封筒の中身をもう1度、確認し、中身に納得がいかないうような表情をした時、

「……黒須、お前は停学明けからそんな登校なのか？」

浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした西村教諭が少年の名字を呼ぶ。

「仕方ないでしょ。ノラ猫だって、飯を食わないと生きてけないですから、別に生に執着はないですけど、餓死だけは避けたいですからね。まあ、希望としては腹上死ですね」

男に黒須と呼ばれた少年はくすりと笑う。その様子は異性からだけではなく同性ですら目を奪われるくらいに魅力的であるが、

「……お前は学生なんだ。言葉や付き合う人間を選べ」

西村教諭には少年の笑顔は効果はなく、少年に説教をし始めるが、

「西村先生、残念ながら、その言葉は聞けないですね。だいたい、俺みたいな社会的に最下層の人間に人を選ぶ権利はありませんよ」

少年は男に向かい背を向け、手をヒラヒラと振り、校舎内に入って行こうとするが、

「待て。黒須」

「何ですか？ まだ、用があるんですか？」

「振り分け試験の結果だ」

西村教諭は少年に封筒を手渡すと、

「俺、停学中で試験を受けてないんだから、Fでしょ」

「そうだが、規則だからな」

「相変わらず、変なところで義理堅いですね……ほら、やっぱりね」

少年は呆れたように良いながら封筒を開けるとそこには『黒須 伐  
Fクラス』と大きく書かれており、少年はヒラヒラと見せると西村  
教諭はため息を吐き、

「……お前の家庭環境には同情するが、あまり卑屈になるなよ」

「卑屈になって何かが変わるなら、いくらでも卑屈になりますよ」

少年を心配するが、少年は気にする様子も見せずに笑顔で言うと、

「それじゃあ、俺は行きますね」

「ああ」

西村教諭に別れを告げて、自分が今年1年学生生活を送る事になる  
教室に向かい歩き出す。

## オリキャラデータ（前書き）

なんとなく書いて見ました。

投稿ペースは他もあるから遅いと思います。

原作沿いと言うあまり作者はあまり書かないものですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## オリキャラデータ

黒須<sup>くろす</sup> 伐<sup>ばう</sup>

性別 男

所属 21F

文月学園に通う問題児。売春をしているややクザとつながっている  
と言う危ない噂をされている。

実際は家族が借金を残し蒸発したため、1人で生計を立てており、  
夜遅くや朝までバイトをしている。

容姿は中性的で美少女と間違えられる事も多い。

自分の容姿が金になる事を理解しているため、康太からはモデル料  
を取り、自分の写真集を扱わせている。

成績は本来はBクラスなみだが、日本史と保健体育だけはAクラス  
なみ。数学や物理などの理系はCクラス程度。

あまり人を信用していない節があり、1人で行う事が多いが、1人  
で生きているためか、交渉術は周りより飛び抜けており、交渉に使  
う情報を集めている節があり、学園の1部の生徒から『詐欺師』と  
呼ばれている。

## オリキャラデータ（後書き）

オリキャラはこんな感じですね。

今のところヒロインは未定です。

美波か愛子で考えてみようと思ってますがどうしようっと思って感じます。ハーレムはありえないので期待しないでください。

ヒロインは希望があつたら感想でとか言ってみます。



## 第1問

(……卓袱台にボロボロの畳?　こりゃ、噂にそぐわぬボロさで、まあ、雨風は防げるから良いか)

伐は自分が1年間過ごす教室を見つけてため息を吐きながらも、躊躇する事なく、Fクラスのドアを開けると、

「だ、誰だ。あの美少女は?」

「男ばかりだと思ったが天使が天使が舞い降りた」

伐を女の子と勘違いしたのか、バカな男子生徒が歓喜の声をあげている。

(……うぜえ。ホントにバカばかりだな。俺は男子の制服を着てるのがわかんないのか)

伐は鬱陶しいのか心の中でつぶやいた後、

「……康太、先月の俺のモデル料」

知り合いの土屋康太を見つけて声をかける。

「……………」

「……少なくないか?」

「…………… 最近是不景気な上に春休みがあつた」

「確かにな。休みが多いと売れないか」

「……………」

伐は康太との間に何かあるようで康太から封筒を受け取り中身を見てため息を吐いた時、

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

バカ面をした少年が教室に入ってきて、ボクサーのような少年に罵倒され、その言葉が引き金になったのか2人で罵倒しあっている。

「何だ？ あれは？」

「……………気にするな」

「まあ、そうだな。康太、席って、どうなってるんだ？」

「……………どこでも良い」

「ん。さんきゅ」

伐は2人のバカを気にかける事なく、康太に礼を言々と教室の1番後ろ卓袱台の上にカバンを置き、寝るつもりのように卓袱台に突っ伏し、

「……………」

浅い眠りに入り始めた時、

「ねえ。起きなさいよ。あんたの自己紹介の番よ」

前の席にいたポニーテールの少女が伐の身体を揺する。

「……………パス」

「できるわけないでしょ」

伐は面倒だから飛ばせと言うが、少女は呆れたように言う。

「……………黒須 伐。性別は男以上」

伐はそれだけ言うともう1度、眠りに着こうとすると、

「ウソだ！？ あんな可愛い天使が男のわけがない」

「黒須 伐？ へえ、あいつがねえ」

教室の中から伐を見て声があがっているなか、伐はクラスの奴らに興味などないため眠りに着こうとするが、

「島田 美波です。海外育ちで日本語は会話ができるけど読み書きは苦手です。あ、でも、英語も苦手です。育ちはドイツだったので趣味は吉井 明久を殴る事です」

先ほど、伐を起こした女子生徒の自己紹介にさすがに驚き卓袱台に額をぶつける。

（危険な。女だ。それに見た目は割と良いのに、なんか………ああ、胸か）

伐はぶつけた額をさすりながら、目の前の美波と名乗る少女を見て、彼女の残念な部分に目が行き、そんな事を考えていると、

「……黒須、あんた、今、おかしな事を考えているわね？」

伐の考えている事になぜか気づいたようで美波は拳を握りしめながら、伐に向かい言うが、

「おかしな事？ お前の胸が残念だと言う事か？」

「あんた、殺すわ」

伐は彼女をまるで挑発するように言うつと美波の腕が伐に向かい伸びてくるが、伐はその腕を捕まえると、

「別に、どっかの誰かが『貧乳はステータス』とか言ってるし、需要はあんだろ。他は一定水準をだいぶ上回ってるんだ気にし過ぎるのもつたいないぞ」

「!？」

彼女を引き寄せ、耳元でささやき、美波は言われなれない言葉を聞いて驚いたのか顔が赤く染まって行く。

「はい。2人とも騒がないでください。自己紹介の続きをお願いします」

黒板の前に立っている担任らしき男が伐と美波の話を終わらせると、自己紹介が再開されて行き、伐が再度、眠りにつこうとした時、

「ーコホン。えーっと、吉井 明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアアーリーーン!!』

教室に不愉快極まりない野太い声の大合唱が起き、

「ー失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

事の原因を作った男子生徒は苦笑いを浮かべて席に着くが、

「黒須君、どうかしたんですか？」

「さっきの大合唱のせいで気持ち悪くなったので保健室に行ってきます」

先ほどの大合唱で吐き気がするため、教室を出て行こうとドアを開けた時、「ぼふっ」と伐の胸のなかに少女がぶつかる。

「あ、あの。すみません」

「いや、気にしないで良い。なかなかの感触だったから」

伐にぶつかった時に少女の成長した胸の感触を楽しんだようで彼女の肩に手を起き、教室を出て行こうとした時、

「裏切り者には死の制裁を！！！！」

教室の男子生徒のほとんどが怪しい覆面をかぶり叫んでいた。

## 第2問

「何だ？」

伐は教室からあがった声に怪訝そうな表情をして振り返ると怪しげな覆面の集団は手にカッターを持ち、伐に向けて狙いを定めるが、

「それを今、投げるとこの巨乳娘にも当たるぞ」

伐は慌てる事なく、先ほどの少女の後ろに隠れながら言う。

「貴様、卑怯だぞ。姫路さんを解放しろ！！」

「黙れ。ダーリン、貴様の一言で俺の具合が悪くなったんだ。原因を作ったお前が言うな」

そんな伐の様子を見て、先ほど、クラスに『ダーリンと呼んでください』と言った吉井明久と言う男子生徒が叫ぶが、伐は冷たく言い放つと、

「き、貴様、汚いぞ」

「汚いも何もあるか。世の中ってのは正直者や善人は損しかしないんだ。世間も知らないバカが偉そうに俺に説教をするな」

伐に向かい怪しげな覆面集団の先頭に立っていた生徒が伐を罵倒するが、伐は懷からナイフを取り出すとその生徒の足元に投げつける。

「おい。そこまでにしろ。確かに今回の原因の全ては明久にあるん

だ。黒須に言うのは筋違いだ。黒須、これで良いか？」

その様子に先ほど明久と罵倒しあっていた男子生徒が場を鎮めようと間にわってくるが、

「俺は許す気はない。しっかりと訴えて搾取してやる」

「そうか。それなら、明久から絞りとつてくれ」

伐は不愉快なようで許さないと言うと言つと男子生徒は取るなら明久から取れと言う。

「……金も幸も無さそうな顔だぞ。取れるのか？ まあ、肺と腎臓は2つあるし取っても問題ないよな？」

「ああ、胃もこいつにはあまり必要ないから全摘して良い」

「そうか」

「ちょっと、雄二、止めてよ！？」

伐は明久を顔を覗き込み恐ろしい事を平然と言うと言つと明久は伐の意見に賛成した男子生徒の名前を呼ぶが、

「知るか。バカ明久」

雄二は明久を助ける気はない。

「……………伐、それは犯罪」



「大丈夫だ。無免許だがきつちりと仕事をしてくれ医者を知っているから、販売ルートも足がつかないようにする」

「……………なら、安心」

「安心なわけあるか!？」

康太が伐を止めようするが、伐は問題ないと言い切るとなぜか康太は納得し、明久は声をあげる。

「はい。みなさん、落ち着いてください。黒須君も席に戻ってください。姫路さん、今は自己紹介の最中ですので、ついでにお願いします」

「は、はい。あの、姫路 瑞希といいます。よろしくお願いします」

(……姫路 瑞希。あいつ、Aクラス候補だろ。なんで、こんなところにいるんだ?)

伐は担任の一言に仕方なく席に戻ると姫路と呼ばれた少女は自分の名前を言い頭を下げるなか、伐は少女の名前に心当たりがあり、首を傾げた時、

「はい。質問です。えーと、何でここに居るんですか？」

「その、試験の最中で高熱を出してしまいました……」

失礼だが教室の生徒全員が思っている質問がでると、瑞希は恥ずかしいのか頬を染めながら言う。

（なるほどね。まあ、俺には関係ないな……寝よう）

教室では生徒達が瑞希の言葉を聞いて、自分がここにいるのは運が悪かったからだと言いたげに話し始めているなか、伐は興味がないため、目を閉じた時、「ガラガラ」と音を立てて教卓が崩れ落ち、担任は替えを持ってくると教室を出て行く。

（……屋上にも行くか？ ん？ あいつらは何をしてるんだ？  
まあ、俺には関係ないな）

流石に埃が待っている教室では寝る気になれなかったため、教室を出て行こうとすると明久と雄二と言うバカが何かを相談している。

「おい。黒須、どこに行くつもりだ？」

「……お前に説明する必要性はねえよ」

「待て。お前に話がある」

「俺にはない」

伐に雄二が声をかけるが、伐は興味なさそうに先に行こうとする。

「待て。俺達は試召喚戦争をしたいと思っているんだ。それで、お前にも協力して欲しいんだ」

「黒須くん、君だって、この環境じゃいやだろ？」

2人は伐に向かい言うが、

「興味ない。やりたければ勝手にやれ」

伐は2人の話にのる事はない。

「まあ、聞け。俺は世の中は学力じゃないと思っている。それに俺はAクラスに勝つ秘策も思いついた。悪い話じゃないだろ？」

「それを信用させるものがあるのか？　□先だけで言うなら勝手にやれ」

「何をすれば納得するんだ？」

雄二は彼の戦略上伐を絶対に取り込みたいのか聞き返すと、

「一先ず、1万で手を打つ」

「それは無いだろ！？　高すぎだ。だいたい、俺達が負ければ参加しなくても設備を落とされるんだぞ」

「だから、どうした？　設備が落とされても死ぬわけじゃない」

伐は試召喚戦争に本当に興味が内容でそう言い切ると、

「だけど、体の弱い子にはこれ以上、設備が酷くなったら危ないだろ」

明久が伐につかみかかる勢いで言うが、

「俺は他人の心配をするほどのお人好しじゃない。それにさっきも言っただろ。正直者や善人は損しかしないってな。俺は誰かのため

に何かをしてやるほど優しかねえ」

伐の言葉は明久の行動にヘドが出ると言いたげである。

## 第2問（後書き）

原作沿いつて逆に難しい気がしますね。……えっ？ 原作沿いぽくない？

気のせいですよ。

伐を動かすのがめんどくさいなあ………とっつてしまいます。

感想いただけたら頑張れますので一言でも良いのでお願いします。

### 第3問

「何だと？ 誰かを心配して何が悪いんだよ！！」

明久は伐の言葉で火が点いたようで伐の胸倉をつかむが、

「あだだだ」

伐は明久の手をつかみ捻ると、

「先に仕掛けてきたのはお前だ。そっちの……」

「坂本 雄二だ。好きに呼べ」

「坂本、問題になったら、ちゃんと証言しろよ」

「ああ。当然だ」

雄二は彼にとっては当たり前なのか、明久を見捨てる。

「ちょっと、雄二！？」

「なら、ネジ切っても良いな」

「いだ。いだだ。無理、ボクの腕はそんなに回らないよ！？」

「別に回る必要はない。ネジ切るんだからな」

「ちょっと、この人、危ないよ！？ 雄二も笑ってないで助けてよ」

伐は平然と明久の腕をネジあげると明久は悲鳴をあげるが、雄二はその姿を見て腹を抱えて笑っている。

「言った通りだろ。偽善者ぶったって、自分が危険におちいった時は誰も助けてくれないんだよ」

伐はすでにどうでも良くなったようで手を放すと明久を見下すように言う。

「これは相手が雄二だからだよ。他の人だったら」

「無いな」

明久はそれでも伐の考えには納得できないので伐に向かい言うが、伐は一言で切り捨てるが、

「明久、良くやった。おかげで、こいつとの交渉方法が見つかった」

雄二は何か企んだようで明久に向かい言うのと、

「黒須、お前は善人ぶった偽善者が許せないんだろ？ なぜかは知らないがそれはお前にコンプレックスがあるからだ。お前は明久を見下しているように言うが、お前が見下しているのはお前自身だろ？ 違うか？」

伐の目から視線を逸らす事なく言い、雄二の目は伐を哀れむような目である。

「だから、どうした？」

「簡単な事だ。お前が自分を見下しているのは自分がダメだと思っているからだ。その考えを改めるために上でふんぞり返っているやつらを叩き潰さないか？」

雄二は伐の弱みに付け入る先を見つけたため、たたみかけようとするが、

「悪いな。俺は人を信じるつもりはない。俺が信じるのは金だ。だいたい、仮にお前の作戦が上手く行こうとAクラスの設備を取り替えて直ぐに攻めかけられれば簡単に負ける。お前の考えは先を見ていない。それともEクラスから順に倒して行くつもりか？」

「……」

伐は雄二の言葉にのらない。

「勝つてもそれを守るために努力するような人間はFにはいない。あいつらはその時が楽しければ良いと刹那的に生きてるだけだ。違うか？」

「……否定はできないな」

「ちょっと、雄二！？ 交渉方法が見つかったんじゃないの。負けてるじゃないか……！」

伐の言葉に雄二は苦虫を噛み潰したような表情をした時、明久は声をあげる。

「俺を引っ張り出したいなら、最低でも諭吉を3人用意しな」



「……………これで良いか？」

「ムッツリーニ！？」

伐は話にならないと言いたげに歩き出そうとすると康太が伐の希望額を持って現れる。

「……………康太？ お前が出す理由がないと思うが」

「……………話は聞かせて貰った」

「……………なるほど、Aクラスの設備があれば、授業中でもいろいろとできるからか」

伐は康太の思惑を読み切ったようでそう言つと、

「……………成功報酬はモデル料2割アップ」

「受けよう」

康太からは伐の希望額＋ が提示され、伐は直ぐに頷く。

「えーと、これで良いのかな？」

「良いんだろ。康太、助かった。姫路や康太、明久に秀吉に黒須が入れば上のクラスとも対等以上に戦える」

明久は目の前で行われてる裏取引に苦笑いを浮かべると雄二は何かを企んでいるように笑つと、

「黒須君、坂本君、土屋君、吉井君、HRを再開しますので教室に戻ってください」

担任が戻ってくると4人を教室に入るように言い、しばらく、自己紹介を続けて行く。

「坂本君、キミ、自己紹介最後の1人ですよ」

「了解」

担任に呼ばれた雄二は立ち上がると当たり前のように教壇の上にかかる。

「Fクラス代表の坂本 雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「じゃあ。霧島で良いな」

雄二が自己紹介を始めると伐は話を折る。

「て、てめえ。黒須、それをどこで!？」

「どこでも良いだろ。好きに呼べと言ったのはお前だ。金を出すなら情報元を教えてやる。それより続ける」

雄二は伐の口からでた『霧島』と言う言葉に顔をゆがませるが伐は興味がなさそうに雄二に向かい続けると言う。

## 第4問

「……話を折られたが続けよう」

雄二はゆつくりと、全員の目を見るように告げる。

間の取り方が上手いせいか、伐を抜かした全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられたようにクラスメートは雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがー」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「ー不満はないか？」

『大ありじゃあっ！！』

Fクラス生徒魂の叫びを聞きながら、

(……なるほどな。それなりの才能はあるわけだ。腐っても『神童』  
つてのは嘘じゃないようだな)

伐はあまり興味がなさそうに欠伸をする。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

『そうだ。そうだ！！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！！ 改善を要求する！！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！！』

雄二の問いかけに堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

(……自分達が何もしなかった事は棚にあげるようだな)

伐は雄二の言葉にのせられているクラスメートを後ろの席から冷めた目で見ているが、

「これは代表としての提案だがー」

雄二は自分の演説が上手くいっている事に満載しているのかニヤリ

と笑うと、

「イーFクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」  
Fクラス代表、坂本 雄二は戦争の引き金を引いた。

しかし、Aクラスへの宣戦布告は最下層のFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えず、

『勝てるわけがない』

『これ以上、設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

当然、そんな悲鳴が教室内のいたるところであがる。

（まあ、妥当な意見だ。バカがエリートに勝てるなんて普通は思わないな。実際はエリートは融通がきかないから、やりようによってはどうにでもなるんだけどな）

最初から無理だと決めつける声を聞きながら、伐は欠伸をしていると、

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

雄二の中では完全にAクラス撃破までの道筋が出来上がっているように自信ありげに宣言をするが、

『何をバカな事を』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんな事を』

当然、否定的な意見が教室に響き渡る。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

教室のなかがざわめいているなか、雄二は不適な笑みを浮かべると壇上からクラスメートを見下ろし、

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

康太は必死になって否定しているが顔にはしっかりと畳の跡がついている。

「土屋 康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性職者だ」  
ムツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

雄二による康太の紹介を聞き、クラスメート達が声をあげているが、瑞希と美波の女子生徒2人は意味がわからずにきょんとしている。

「姫路の事は説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですか？」

続けて瑞希が紹介されるなか、

（……坂本が強気ででるわけだ。あいつがいれば1人でも下手したらくらいには勝てるな）

伐は瑞希の成績の良さを思い出していると、

「木下 秀吉だっている」

（……木下 秀吉？ 確か演劇部のホープだったか。双子の姉は優秀とか言う話だったな）

「それに、『黒須 伐』もいる」

伐が雄二の演説を聞きながら彼なりに戦力分析をしていると雄二はニヤリと笑いながら、伐の名前を呼ぶ。

「あんたって、有名人なの？」

「さあな。周りが何を言おうと俺には関係ないしな」

前にいた美波が振り返って伐に聞くと伐は興味なさそうに言うが、

「雄二、黒須君って有名人なの？」

「明久、お前、知らないでさっき話をしてたのか」

明久が雄二に質問すると雄二は呆れたようにため息を吐いた後、

「黒須 伐。生活態度には少々問題があるが、普通に振り分け試験を受けていれば、Aクラス下位かBクラス上位に入るくらいの実力はあったはずだ」

「それがなんで、Fクラスにいるのじゃ？」

伐の成績を説明すると秀吉と言われた生徒が首を傾げる。

「あるところから出てくるところを見つかって停学を喰らっただけだ」

「あるところってどこよ？」

「ヤクザの事務所」

伐は興味なさそうに自分が停学になった事を言つと美波は恐る恐る聞くと、伐は隠す事なく答える。



## 第5問

「つて、あんた、何をしたのよ!？」

「あん？ 別に俺を買った人間がヤクザの組頭の女だったただけだ。良くある話だろ。ガタガタ騒ぐな」

美波が伐の言葉に声をあげると伐は鬱陶しいと言いたげに言う。

「じ、事情は良くわからんのじゃが、良く生きておったのう」

「それでも、しばらくはそちで稼げなくなったんだ。ったく、めんどくせえ。自分が下手だから、女が男を買ってるって気づけよな」

伐には反省する気はなくめんどくさそうに言う。

「裏切り者には死の制裁を!!」

クラスメート達は再び、怪しい覆面を被り、伐に向かいカッターを投げつけようとするが、

「俺は需要があるから売ってるんだ。好きな女なんて抱いた事はねえよ。自分も捨てずに甘えてる人間が嫉妬なんかするんじゃない。好きな相手としてえとか夢持ってるヤツが頭にのんな!!」

伐は怪しい覆面集団を一括すると伐の言葉には重みがあり、『家族と言う自分を守ってくれるもの』がある人間達は伐の言葉に固まる。

「霧島、続ける」

「ああ。あいつはいろいろとあつて修羅場を何度も越えてるし、もしかしたら、知っている人間もいるかも知れないが、さっきのようにその場の空気を読み切り、自分の優位に話を進める力に長けている。そして、付いたあだ名が『詐欺師』」

雄二は伐に付いたあだ名を言つと場は固まる。

『ちよつと待て。詐欺師つて、ヤクザと取引してるつて噂だよな？』

『ああ。つて事はさっきの話も本当か？ ヤクザの女を囲っているつて事は下手したら殺されるんじゃない』

『待て。詐欺師だぞ。その話もうソつて可能性も』

クラスメート達は伐のあだ名に冷たいものを感じている。

「黒須の説明はもう良いな。当然、俺も全力を尽くす」

雄二が自分も全力を尽くすと言うと、これ以上、伐の話をすると自分達に身の危険があると思ったように伐の話を止めて雄二の話を始めだし、士気が上がり始めた時、

「それに、吉井 明久だっている」

……シーン――

そして、一気に士気が下がる。

「ちょっと、雄二ー！！ どうして、そこで僕の名前を呼ぶのさー！！  
全くそんな必要ないよねー！！」

（……ああ。あいつが観察処分者が確かにバカそうだ。まあ、確かに戦力を見れば悪くはないな。後はどれだけ、あいつが捨てゴマを上手く使えるかだ）

明久が雄二に向かい叫んでいるなか、伐は目の前で行われているやりとりなど気にする事なく、戦力分析をしていると、

「黒須、お前は観察処分者は使えないと思っているのか？」

「あん？ 使い方しだいだよ。感覚のフィードバックがあつて、雑用をさせられてれば扱い方になれるんだ。いくら破壊力があつても箱のなかのものは取り出せないしな」

雄二が観察処分者の扱い方を伐に聞き、伐は自分の意見を言つと雄二は満足げに笑つと、

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だー！！』

「なら、筆を執れ！！ 出陣の準備だ！！」

『うおおーっ！！』

「お、おー」

瑞希が取り残されているが、雄二はFクラスの士気を上げきり、満足そうな笑みを浮かべると、

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役を果たせ！！」

何か考えがあるのかニヤリと笑いながら言う。

（……あれで、良く誰かのためにとか言えるよな。吉井は生贄確定だな）

伐は雄二の笑顔の意味をすぐに理解するが、

「……下位勢力の使者って、たいてい、酷い目に合うよね？ それにさ。せっかく、詐術師とまで言われる黒須君が居るんだよ。使者とか交渉役って黒須君の方が合ってるんじゃないかな？」

「……ちっ。明久バカのくせに気づいたか」

明久は雄二を疑っているのとそれなりに伐の評価をしているようで伐が適任だと言うと、雄二は悔しそうに舌打ちをする。

「ちょっと、雄二！？ 今の舌打ちは何だよ！！ 完全に僕を生贄にするつもりだったね！！」

「明久がこう言ってるんだ。黒須、めんどうだろうが、行ってくるか？」

雄二は明久を無視して伐に聞くと、

「俺は今回、康太に買われた身だ。康太以外に指示を受けるつもりはない」

「……ムツツリーニ、お主、まさか」

「……………！！（ブンブン）」

伐の言葉に秀吉は何かを思ったようで康太を見ると康太は全力で首を振る。

「黒須、あんた、おかしい事を言うの止めないよね」

「別に、おかしい事は言っていない。『俺が欲しいなら、金を積みめば良い。それに見合った事はしてやる。相手が女でも男でも関係ない』」

「

美波は伐の言葉にため息を吐くが、伐は微笑みながら言う。

その様子は妖艶で全ての者を自分の手のなかで弄ぶような背徳的な姿であり、そこにいた人間は言葉を飲む。

「それで、どうする？」

「……………行ってきてくれ」

「ああ、俺は行ってくるから、待ってろ」

伐は自分の姿に目を奪われているクラスメートの事を気にする事なく、教室を出て行く。

## 第6問

「……失礼、代表はいるかい」

伐は下位クラスからの宣戦布告の使者とは言わずに当たり前のようにDクラスの教室のドアを開ける。

「えーと、僕が代表の平賀だけど、君は？」

伐の声に代表らしき少年が伐に声をかける。

「ああ、Fクラスからの宣戦布告の使者の黒須だ。別に覚えなくても良い」

「！？」

伐は言葉を濁す事なく、自分がFクラスからの宣戦布告の使者だと言うと伐の言葉に教室の空気がざわめきたつ。

「……1人で乗り込んで着たのかい？ Fクラスなのにずいぶんとボクたちをなめているみたいだね」

「別に、下位クラスの使者相手にランクが2つも上の人間達がよつてたかって何かするつもりか？ それなら、準備を完全に終わらせてから、日を改めてくるが」

平賀と言う少年の脅しの意味を込めた言葉に伐は表情を変える事なく言つとDクラスの生徒達は伐を逃がさないように伐と平賀を中心に囲みを作って行く。

「そんな事しても所詮はFクラスだろ。ボクたちを脅しているつもりかい？」

「脅す？ あんた、俺達より、成績は多少良いが、バカだろ。俺達が上のクラスの人間を脅して何の意味がある？」

平賀は伐の言葉に何かを探るつもりなのか、伐に向かい言うが、伐は呆れたようなため息を吐くと平賀を小バカにする。

「代表！！ こいつ、どうするんだ？」

「……黒須君だったね。こんな状況で良くそんな強気でこれるね。君がどういう経緯で宣戦布告の使者を受けたかは知らないけど、ボクたちがそこまで挑発されて無傷で君を返すと思うのかい？」

伐の言葉が頭にきたようでDクラスの生徒から、伐に制裁を与えろと言う声が上がりはじめると、平賀は伐に向かい態度を改めると言いだけに言うが、

「別に、俺に手を上げれば無抵抗の使者相手に手を出したあんたらの評価ってどうなるんだろうね？ 別に学園の規則は知らないが、無抵抗な俺はこれから、Dクラスからリンチを受けるわけだしな。まあ、出るそこには出させて貰う。まあ、学園での規則を取るか。警察介入の社会的問題を取るか。それは俺達Fクラスより賢いあんた達に任せるよ。決まるまで、俺は逃げないし、速く決めてくれないか？」

伐はその脅しを鼻で笑うと教室から逃げる事なく、まるでそこにいるのが当たり前だと言いたげな態度でイスに腰を下ろす。



「……君は、この状況で良くそんな事を言えるね」

「別に、バカはバカらしく戦う方法もあるんだろ。俺は俺の役割を果たすだけだ。まあ、いくらあいつらがバカでも、無抵抗な使者がボコられれば戦意にも火がつくかも知れないし、後は変な正義感を出すヤツも出てくるかもな。使者をボコなぐりにした卑怯者達を倒せとか言ってな。クラス設備は変わらなくても自分を周りから良く見せるために汚い手を使うヤツがこの学園にはいるだろ？」

「……ああ。Bクラスの代表だと言う話を聞いたね」

伐は平賀の言葉に表情を変える事なく言うと、平賀には伐が言いたい事がわかるようで疲れたようなため息を吐き、

「わかったよ。君はずいぶんと口が上手いみたいだね。このまま、宣戦布告を受けなくても、君に何かしても、ボクたちのメリットはなさそうだ」

「理解が速くて助かるよ。代表さん」

Fクラスからの宣戦布告を受けると言うとな伐はくすりと笑い、

「開戦は今日の午後で問題ないか？」

「ああ。時間があけば君たちFクラスにも回復試験を受ける時間を与える事になるからね。振り分け試験の点数のまま、戦えるから、こちらとしても都合が良いよ」

開戦時間を提案すると平賀はすぐに頷く。

「それじゃあ、お手柔らかに」

伐は平賀の返事を聞いて立ち上がるが、

「代表！！ 本当にこいつをそのまま帰すつもりですか？」

血の気の多そうな男子生徒3人が伐を囲む。

「ああ。そのつもりだよ」

「俺達はこちらまでバカにされて帰してやるほど甘くないんだ……えっ！？」

平賀の言葉に反発するように男子生徒の1人が伐の胸倉を掴むと伐は流れるようにその男子生徒を投げ飛ばすと、

「……大人しく帰るんだ。邪魔するなよ。俺達バカは頭よりこっちの方が得意な人間が多いんだ。試験召喚戦争の前に戦力外にしてやるのか？」

ドスを聞かせて男子生徒の胸倉をつかみ言った後、

「悪いな。通してくれるか？」

「は、はい」

伐の行動に驚いた少女の耳元で優しくささやき道をゆずって貰い、Fクラスの教室に戻る。



## 第7問

「おつ、帰ってきたな」

「おかえり、どうだった？」

「無事なようじゃな」

伐がFクラスの教室に戻ると、明久、雄二、康太、秀吉、瑞希、美波の6人が伐を出迎える。

「……今日の午後から開戦だ」

伐は自分の仕事は終わったと言いたげにそう告げると教室を出て行くこうとするが、

「待て。黒須、お前もこっちにこい。作戦をねるから」

「お前の指示に……」

「康太から、お前の指示件を預かった」

「……そうか」

雄二は伐を呼び止め、康太と交わした約束をメモとした紙をヒラヒラとさせており、伐は面倒くさそうに頷く。

「それじゃあ、屋上にも行くか」

「そうじゃのう」

雄二は伐の返事に満足そうに笑うと秀吉は返事をし、他のメンバーは頷き、屋上に向かい歩き出す。

（……眩しいな）

先頭を歩いていた雄二が屋上に通じる扉を開けると雲一つない空から眩しい光が差し込む。

「……康太、何色だ？」

「水色」

伐は屋上にでた時に風になびいた瑞希のスカートを直視している康太に尋ねると康太からは即答で回答があり、瑞希はスカートを押さえ、顔を赤らめる。

「……康太、黒須、遊んでないで始めるぞ」

「ああ」

雄二は伐と康太の様子にため息を吐くとフェンスの前にある段差に腰を下ろすと雄二にならうように集まったメンバーは腰を下ろす。

「黒須、開戦は今日の午後って言ったな」

「……ああ」

雄二は伐に向かい試験召喚戦争開戦の時間を確認すると伐は頷き、

当たり前のように制服のポケットからタバコを取り出し、火を点ける。

「ちょっと、あんた、いきなり、何をしてるのよ!？」

「タバコは健康に良くないと思います」

伐がタバコに火を点ける仕草に周りのメンバーは一瞬、見とれるがすぐに瑞希と美波は伐にタバコをやめさせようとするが、

「……うるせえな。俺がタバコを吸おうとお前らに関係ないだろ」

伐は表情を変える事なく言うと、

「……霧島、始めるなら早くしろ」

「……その呼び方は止めてくれ」

「ねえねえ。黒須君、どうして、雄二の事を『霧島』って言うの？」

雄二に向かい早く始めろと言うと雄二はため息を吐き、明久は伐の口からでる『霧島』と言う言葉に首を傾げる。

「明久、お前は気にしなくて良い。それじゃあ、先に飯だな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ?」

「そう思っならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

「えっ? 吉井君ってお昼食べない人なんですか?」

雄二はよほど明久達に『霧島』と呼ばれる理由を知られたくないのか、話を切るように昼飯の話題を振ると明久の言葉に瑞希は驚いたように聞き返す。

(……早くしてくれないか?)

伐は制服から携帯灰皿を取り出すと短くなったタバコの火を消すと、

「……早くしてくれ。ダーリンが塩と水しか口に入れてようがどうでもいい」

「な、なんで、それを!?!」

「お前のバカさはお前と関わりの薄いヤツでも知っているんだろ」

早くしてと言うが話は一向に進みそうにない。

「……飯くらい、ちゃんと取らないと死ぬぞ。餓死する前に生活を改めろ」

「し、仕送りが少ないんだよ」

伐は興味はなさそうだが一先ず、形だけは明久に食生活を改めるよと言うが、明久は自分は悪くないと言いたげに言う。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか?」

「え?」

瑞希の優しい言葉に明久は一瞬、耳を疑った後、

「本当に良いの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるのは久しぶりだよ」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか。明久、手作り弁当だぞ」

「うん」

突如として舞い降りた幸運に明久は笑顔を見せる。



## 第8問（前書き）

ユニークが1000を超えました。

ありがとうございます。

原作にオリキャラを混ぜるのがこんなに難しいとは思っていませんでした。

勉強になりますね。

これからも頑張りますので感想と評価をしてければ幸いです。

## 第8問

「……ふーん。瑞希って、ずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

美波は面白くなさそうに言うと、瑞希は慌てて明久以外にもお弁当を作ってくると言う。

「俺達にも？ 良いのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

瑞希の言葉に雄二が確認するように言うと瑞希は笑顔で頷き、

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

秀吉、康太、美波は瑞希からのお弁当を貰う気のように頷き、

「黒須君も食べていただけますか？」

「……………俺はいらない」

瑞希は伐にも聞かぬが、伐はそっけなく返事をする。

「そ、そうですか。それじゃあ、明日は私がお弁当を作ってきますね」

瑞希は伐の返事に驚いたような表情をした後、すぐに笑顔を見せる。

「ねえ。あんた、普通は、お弁当貰わない？ 失礼よ」

「……悪いな。俺にも事情があるんだ」

「……………」

美波は伐の態度が気に入らないようで伐を睨みつけるが、伐は面倒くさそうに言くと、康太だけは伐が断った理由を知っているように見える。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……」

明久は伐と美波の不穏な空気を感じ取ったのか、何も考えてないのか瑞希を誉めると彼女は顔を赤くする。

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好きー」

「おい。明久、今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「ーにしたいと思ってました」

明久は瑞希に告白しようとする雄二が明久に言い、明久は何を考

えているのかわからないが瑞希に欲望を暴露する。

「明久、それでは欲望をカミングアウトしただけじゃ」

「明久、お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」

「だって……お弁当が……」

秀吉と雄二は明久を見て呆れたように言う。明久はよほど、お弁当が欲しいようで肩を落としてうなだれている。

「……欲しいなら、今、言った事を実行すれば良いだろ」

「え？ どう言う意味？」

「……そのままだ。こいつを美味しくいただけば。弁当は明日だけじゃないだろ」

明久の言葉に周りが呆れているなか、伐1人だけは違う反応を示す。

「姫路さんを美味しくいただく？ ……ぶほっ!？」

「……………」

「あ、明久!？ 康太!？」

「……想像だけでそこまで興奮できるのか？ なかなか器用だな」

明久と康太は伐の言葉に何かを想像したようで2人とも鼻から大量の赤い液体を流し始めると伐はその様子に表情を変える事なく、2

本目のタバコに火を点ける。

「……あんだ、何を言ってるのよ？」

「……おかしい事は言っていないだろ」

美波は伐に向かい冷たい視線を向けるが、伐は表情を変える事なく言うつと、

「……それで、俺はいつまでこのくだらないやりとりにつき合わないといけないんだ？」

解放してくれと言う意味を込めて言う。

「……そうだな。話がかかなりそれだな。試験戦争に戻るつ」

「雄二、1つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくなら、Eクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスじゃろう？」

「そう言えば、確かにそうですね」

「まあ、当然、考えがあつての事だ。黒須はわかるよな？」

雄二は明久と康太を見て、1つため息を吐いた後、試験召喚戦争の話を話し始めると、伐を試そうとしているのか伐を見てニヤリと笑う。

「……ザコと戦うのは時間のムダだから、試験召喚戦争になれさせるため」

「そう言う事だ。Eクラスは戦う価値がないから、飛ばす」

伐は興味などなさそうに言う。雄二は伐の解答に満足げに笑うが、

「え？でも、僕らよりクラスは上だよ？」

復活した明久はEクラスを攻めない意味がわかってないよう。首を傾げる。

## 第9問（前書き）

アクセス数が10000を超えました。

ありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

## 第9問

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかも知れないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーっと……」

雄二の言葉に明久はその場にいるメンバーを見回し、

「美少女2人、バカが2人、ムッツリが1人と……」

「……何だ？」

伐の顔を見て何かを考えるような仕草をし、伐は明久の様子に目を細めて聞き返すと、

「訂正するよ。美少女は3人だ!!」

明久は拳を握りしめて叫ぶ。

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？ 雄二が美少女に反応するの!？」

「……………（ポッ）」

「ムッツリーニまで!？ どうしよつ。僕だけじゃツッコミ切れない!！」



明久の言葉になぜか、雄二と康太が反応し、明久はどうして良いかわからないように声をあげる。

「……おい。俺はいつまでこれに付き合わないといけないんだ？」

「えーと、わかりません」

伐は目の前で行われているやりとりには伐はため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべると、

「霧島、康太、バカな反応するな。美少女は誰が見ても姫路と島田、木下だろ」

「ワシは男じゃ!？」

伐はため息を吐いて明久が美少女だと言ったであろう3人の名前を口に出すと秀吉は声をあげる。

「……悪い。俺もあのバカ達と同じだったようだ」

「お主は何をするのじゃ!？」

「黒須君!？ 何で秀吉の胸を触っているの!？ 美少女2人でそんなうらやましい事をしないで、僕も混ぜてよ!!」

伐は秀吉の言葉に事実を確認するために何の躊躇をするわけでも秀吉の胸に手を伸ばし、秀吉が男だと確認して謝ると明久は2人の様子に血涙を流しながら言う。

「……く、黒須。お前、男も行けるのか？」

「ん？ さっきも言っただろ。金さえ出せば俺は女にでも男にでも売ってやる」

雄二は伐と秀吉の様子に寒気を感じたようだが、伐は当たり前だと言つと、

「まあ、霧島は面倒そうだが、お前なら、少し値引きをしても良いぞ。ブツサイクなババアや加齢臭がするジジイと違って俺も楽しいめそうだしな」

「……………川の向こうは楽園」

「ムツツリーニ！？ ダメだ。そっちに行っちゃ行けない！？」

伐は妖艶な笑みを浮かべるとその顔を見て、康太は鼻血を吹き出し倒れ込むと、明久は自分も鼻血を流しながら康太を抱きかかえている。

「黒須くん、男の子なのに色っぱいです」

「な、なんなの？ 木下と言い、黒須と言い、ウチは女の子のはずなのに、男に勝てないの？」

瑞希と美波は伐の色香に完全に負けていると思っているように見える。

「く、黒須、お主は何を言い出すのじゃ？」

「ん？ ただの営業。この間の件があったから、大口は狙えないからな。小口で数を打とう思ってたな」

秀吉はこの混沌とした空気に伐に向かい言うが伐は気にする事なく言い切り、

「それでいつになったら話が始まるんだ？」

「……ここまで場を荒らしたお前が言うな」

雄二に聞き返すと雄二は疲れたようなため息を吐き、

「……お前、あんまり、学園でそっちの仕事をするなよ。鉄人に見つかつたら、ただじゃすまないぞ」

「ああ。気をつける。あいつはいろいろと面倒だからな」

伐に少し考えろと言うと伐は鉄人の名前に面倒くさそうに頭を掻く。

「お前も鉄人が苦手か？」

「別に、あいつは鉄拳制裁ありだからな。身体に傷が付くと痕を隠すのが面倒だしな。それに今のところ俺はお前と違ってそっちの性癖はねえよ」

雄二は伐の弱点を見つけたと思ったようでニヤリと笑うが伐は面倒そうにタバコの煙を吐き、

「いつまでもここに居ても仕方ないから、回復試験のためにチラッとでも復習してるから、後は任せるぞ」

「ああ。お前はある意味、姫路以上のカードだ。期待してるぞ」

「はいはい。金額分くらいは働くさ」

タバコの火を消すと立ち上がり、教室に向かい歩き出す。

## 第9問（後書き）

今回の伐のセリフはいろいろと引つかかる気がする作者です。

アクセス数が安定しましたが皆さんは伐をどう見てるんでしょうか？

好き？ 嫌い？

一言でも感想がいただけると嬉しいです。

また、できれば評価もお願いします。

## 第10問

（こんなもんかな？）

伐はDクラスとの試召喚戦争が始まると回復試験を受けるが時間を確認すると試験の途中で試験を終わらせる。

「えっ！？ 黒須くん、もう良いんですか？」

「ああ。Dクラス相手にAクラス並みの点数を取る必要もないだろ」

振り分け試験を途中退席した瑞希は伐の様子を見て驚きの声をあげるが、伐はそこまでやる必要がないと言う。

「それじゃあ、私も」

「いや、お前は時間ギリギリまで受けてろ。お前と俺じゃあ役割が違うからな」

伐の様子に瑞希も回復試験を終わらせようとするが伐は彼女に向かい言うつと、

「それじゃあ、頑張ってくれ」

「は、はい」

教室を出て行く。

（……ん。どこから行くかな？）

欠伸をしながら、どこに行くべきか考えていると、

「ん？ 黒須、お前は何をしているんだ？」

「どうも、西村先生こそ……補習ですか？」

「ああ」

戦死者になったであろうFクラスの生徒を2人抱えている西村教諭に出くわす。

「先生、戦争はどこでやってるんですか？」

「渡り廊下だな」

「渡り廊下ね……」

伐は西村教諭から戦争の状況を聞くと、

「それじゃあ、そっちの方に行ってみます」

「そうか。あまりおかしな手は使うなよ」

「まあ、状況しだいじゃないですか」

西村教諭と別れて試召喚戦争が始まっている渡り廊下に向かい歩き出す。

「総員退避と!!」

「この意気地なし!!」

「目がツ、目があッ!!」

伐が渡り廊下に向かい歩いていると明久が美波に目潰しをされて床の上をのたうちまわっている。

「……島田、ダーリン、お前らは何がしたいんだ？」

「黒須？ あんた、試験はどうしたのよ？」

「ボクの呼び方ははダーリンで決まり何だね」

伐は2人の様子に呆れたようなため息を吐くと美波は回復試験中の伐がいるのを見て怪訝そうな表情をし、明久は伐に『ダーリン』と言われている事に顔を赤らめている。

「それで、どういう状況だ？」

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ」

伐は明久の様子を気にする事なく美波に状況を聞いた時、前線部隊が後退しはじめたと連絡が入り、

「総員退避よ。吉井、黒須、問題ないわね？」

「よし逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね。ウチらは精一杯、努力したわ」



明久と美波は逃げ腰になる。

「……俺が言うのもなんだが、それで良いのか？」

「仕方ないだろ。誰だって、鉄人との補習はイヤなんだ」

「そうよ」

伐はため息を吐くと明久と美波は自分達は悪くないと言いたげに言うが、雄二から『逃げたらコロス』と言う伝令が届くと、

「全員、突撃！！」

明久の指示で逃げ出そうとした全員が突撃を始め、

「俺も行くか」

伐は頭をポリポリと掻きながら後をついて行く。

「ん？ 木下、回復試験か？」

「黒須か？ お主は何をしておるのじゃ？」

「……バカのテンションについて行けなくてな」

歩いていると途中で秀吉と会い、ついていけないと話すと秀吉は苦笑いを浮かべるが、

「お主の成績があれば前線はだいぶもつじやろう。明久達を頼むの

じゃ」

「ああ。面倒だけどな」

秀吉は真面目な表情をして言うと伐はため息を吐き、明久達の後を追いかけて行く。

（ん、戦況は悪そうだな）

伐は戦況を眺めながら頭をポリポリと掻いていると、

「黒須、あんた、見てないで協力しなさいよ」

「島田か。教科を見ると総合科目か化学だろ。俺は戦力にならないかも知れないぞ」

「あんたの得意科目って何なの？」

美波は乗り気ではない、伐を睨みつけて彼の得意科目を聞く。

「ん。日本史と保険体育の実技だ」

「……あんた、当たり前のようにおかしな事を言わないでよ」

美波は伐の解答にため息を吐くが、

「そうか？ 相手の戦力を減らせば良いなら……なあ、こんな勝負より、俺ともっと楽しい勝負をしないか？」

「はい。お願いします」

「ずるい。わたしもお願いします」

伐は目に映ったDクラスの女子生徒に向かいムダとも言えるくらいに極上の笑みを見せて言う。Dクラスの女子生徒のほとんどが伐を囲むように集まりだす。

「それじゃあ、後は任せる」

伐はそう言つと女子生徒を引き連れてこの場から放れようとする。

## 第11問

「あんたは何をやってるのよ？」

「まだ、やってないだろ。やるのはこれからだ。なんなら、島田、お前もくるか？ 少しはこいつの発育に協力してやるぞ」

美波は伐の様子に額に青筋を浮かべながら、伐の胸ぐらをつかむが伐が反省する気はなく、美波の少し寂しい胸に手を伸ばしながら彼女の耳元で艶のある声でささやくが、

「黒須！！ あんた、ウチをバカにしてるわね！！」

「別にバカになんてしてない。だいたい、女の胸は揉めばデカくなると言うのはアカシックレコードにも書いてある事だ」

「書いてないわよ！！」

「……島田、首を絞めるな」

美波は自分の胸を伐にバカにされていると受け取ったようで伐の胸ぐらをつかみ首を絞める。

「見る。Fクラスの島田が、美少女の首を絞めているぞ」

「自分がモテないから人気のある美少女の命を奪うつもりだな！！」

「許せねえ。彼女にしたくないランキングにのせてやる！！」

美波の様子にDクラスの男子生徒が声をあげると美波は少しだけ落ち込んだような表情をすると伐の首を絞めている手が緩む。

「へこむなら、少し考えて行動しろ。まあ、それもお前の魅力か」

「黒須？」

伐は落ち込んでいる美波の頭を優しくポンポンと叩き、美波は伐の行動に驚いて顔を上げた時、

「お姉さま、見つけましたわ。五十嵐先生、こっちにきてください」

「み、美春？」

美波の知り合いなの少女が美波を呼ぶとその少女を見て、顔をひきつらせる。

「島田、ご指名だぞ」

「ちよっ！？ 指名じゃないわよ。あの子はダメ。ウチの貞操が危険なのよ」

伐は美波が挑まれた勝負のため、美波に言っが、彼女は背中に冷たいものを感じているのか小さくなりながら、伐の背中後ろに隠れる。

「あなた、美春にお姉さまを渡しなさい」

「別に俺は構わないが……」

「ちょっと、黒須、ここはウチを守るところでしょ。あんた、男の子なんだし」

美波に美春と呼ばれた女子生徒は伐を指差し、美波を渡せと言うと伐は美波の首根っこをつかみ、自分の後ろから引つ張り出すと美波は伐に文句があるようでバタバタと手足を動かしている。

「いや、俺は誰かの盾になるような人間じゃねえし、そう言うのはダーリンの仕事だろ」

「えっ！？ 僕？」

伐はいかにも面倒だから、明久に押し付けようとした口調で言うといきなり名前と呼ばれた明久は首を傾げるが、

「よし。島田さん、ここは君に任せて、僕と黒須君は先を急ぐよ」

美波を助けない選択肢を選ぶ。

「ちよっ……！！ 普通逆じゃない！？ 『ここは僕に任せて先を急げ！！』 じゃないの！？」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない」

「確かにな。誰だって、自分の身がかわいい」

「このゲス野郎共！！」

美波は明久の言葉に声をあげるが明久は自分は悪くないと言い、伐は明久の言葉に頷く。

「お姉さま！！ 逃がしません！！」

「だよ。諦める。あいつの目標はお前だ。結果はどうなるうとお前が相手をした方が被害が少ない」

「……………わかったわよ」

美波は諦めたようで1歩前に進みでる。

## 第12問（前書き）

ユニークが2000人

PVが15000アクセス超えました。

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。



## 第12問

「試験召喚（サモン）」

美春は美波が前に出てきたのを確認するとこれからの事を考えているのか楽しそうな笑みを浮かべて自分の試験召喚獣を呼び出し、

「――試験召喚<sup>サモン</sup>」

応えるように美波も自分の召喚獣を呼び出す。

「デフォルメされた感じか？」

「あれ？ 黒須君って、召喚獣を見たことないの？」

「ああ。停学中だったり、大口のバイトがあったりでな。まだ、召喚獣自体呼び出した事がない」

「そうなんだ」

伐は目の前で始まった試験召喚戦争を特に興味もなさそうに見ていると明久は苦笑いを浮かべる。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

「ちょっと！！ いい加減、ウチの事は諦めてよ！！」

伐と明久が緩い空気で美波と美春の勝負を眺めようとした時、美春

から耳を疑うような言葉が聞こえてその場は凍り付く。

「……島田、お前も両方いけるタチか？」

「ち、違っわよ！？　ウチは普通に男が好きなの！！」

「嘘です！！　お姉さまは美春の事を愛してるはずですよ！！」

さすがの伐も美春の言葉に虚を突かれたようで引きつった笑みを浮かべながら、美波に聞くと彼女は全力で否定するが、美春は美波を自分の世界に巻き込みたいように見える。

「……なんだか、島田さんが遠い。そんな人だったんだね」

「まあ、イヤよイヤよも好きのうちと言うしな。1回、経験してみたらどうだ？　世界が変わるかも知れないぞ」

「吉井、黒須！？　ふざけた事を言っていないで助けてよ！！　ウチがこの娘と戦いたくないって言った理由わかったでしょ！！」

美波と美春の召喚獣の戦いは徐々に点数差が現れてきたようでDクラスの美春がFクラスの美波を押し始めている。

「島田さん！！　向こうの方が点数が高いんだから、真っ正面からぶつかったら不利だ！！」

「そんなこと言われなくてもわかってるけど、細かい動作はできないのよっ！！　……あっ！？」

「……他に気を取られるからだ」

美波の召喚獣は美春の召喚獣に押し切られ、武器であるサーベルを落としてしまい、伐は呆れたように言う。

「さっ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、嫌あつ！！ 補習室は嫌あつ！！」

美波の召喚獣は喉元に刀を突きつけられ、美波が取り乱すと、

「島田、今までの流れを考えると。お前がこれから行くのは保健室だ」

「え？」

伐はこれから美春が美波に何をしようか見当がついているようで美波に向かい言くと、彼女は一瞬、呆けた後、「ギギギギ」とまるで壊れた玩具が動くように顔をひきつらせて美春の方を向く。

「ふふつ。 お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

「よ、吉井、く、黒須、早くフォローを！！ なんだか今のウチは補習室より危険な状況にいる気がするの！！」

「そ、そうだろうね。僕から見てもそんな気がするよ」

「これは事実上の相打ちだな。 島田、点数がある相手に上出来だ」

美春はこれから美波にする事を考えているようで楽しそうに美波ににじりよって行き、美波は助けを求めるが明久は完全にひいており、伐は自分達より点数が上の美春が退場するため問題なしと思ってい

る。

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

「島田さん、君の事は忘れない!!」

美春の背中からは欲望の黒くまがましいものが溢れはじめ、明久はそれを見て完全に逃げ腰になる。

「ああっ!! 吉井!! なんで戦う前から別れの台詞を!!? く、黒須!?!」

「大丈夫だ。しっかりとお前の痴態は録画させてもらっ」

「……………（こくこく）」

美波は明久を諦め、伐に助けを求めると伐の隣にはなぜか康太がおり、デジカメの用意を始めている。

### 第13問

「あんだ達はうちの貞操をなんだと思ってるのよ!？」

「いや、男なら島田やそっちの女の絡みは興味あるだろ。2人とも美少女だしな」

「……………（こくこく）」

美波は伐と康太の様子に声をあげるが伐も康太も反省する気はなく、周りの男子生徒も大きく頷いている。

「お姉さまの裸を見ても良いのは美春だけです!! 余計な事をしないでください」

「やれやれ。仕方ない」

美春は伐の言葉が気に入らなかったようで黒くまがましいものをまといながら、伐を敵と認めたようで伐の方に向かってくると伐は面倒そうにため息を吐いた後、

「残念だが、島田の肢体は次に取っておくか。あの倒錯娘に男の良さを教えてやろう」

美春を獲物として美味しくいただく事を決めたようで妖艶な笑みを浮かべる。

「ウ、ウチは助かったの?」

「わ、わからないけど、いろいろと問題ありそうな（黒須君だけずるい。僕もお願いしたい）」

「……………問題などない」

伐の様子に美波はこれから美春に起きる事を考えたのか顔を少し赤らめながら言う。と明久の本音をだもらし、康太は鼻血の海に沈みかけている。

「この豚野郎が美春とお姉さまの邪魔をするなら殺します…………」

「…………豚野郎ね。まあ、お前はこれからその豚野郎に大切なものを奪われるんだがな」

美春の目は完全に殺意で染まっているが伐はその程度の殺意にはなれてるのか涼しげな笑みを浮かべる。

「…………ねえ。吉井。この会話って、もの凄く問題ない？」

「…………島田さん、少し黙っててよ」

美波は対峙する2人の様子に明久に同意を求めるが明久は今から目の前で行われるかも知れない行為に目を輝かせている。

「死になさい。豚野郎！！」

「…………悪いな。どちらかと言えば、俺はドSなんだ。押し倒されるよりは押し倒す方が良いんだ」

美春は召喚獣を使わずに伐の本体の息の根を止めようと伐に飛びか

かるが、伐は美春を交わすと1撃に全てをかけていた彼女との距離を縮め、美春に覆い被さるような形になる。

「……お前はどんなかわいい声で泣くんだろうな？」

「!？」

美春の耳元でささやくと彼女はすでに王手をかけられている自分の状況に表情を凍らせた時、

「黒須、清水、お前たちは何をしているんだ!!」

西村教諭の大声が響き、伐と美春を担ぎ上げる。

「……西村先生、俺もこいつも戦死してないですよ。俺の楽しみを邪魔しないでくれませんか？」

「た、助かった」

伐はこれから美春にやろうとしていた事を止められ、不服そうな表情をし、美春は自分の貞操が守られた事に安堵のため息を吐く。

「戦死など関係あるか!! お前たち2人は神聖な学びやで何をやる気だったんだ!! そんな常識のないお前たちは強制的に補習室に直行だ。おかしい事を考えないように趣味が勉強で尊敬するのは二宮金次郎といった理想的な生徒に仕上げてやろう」

「それは洗脳ですし、性欲は生き物にとって欠かす事のない欲求ですから、仮にそうなくても俺は止められないですよ」

「西村先生！？　お願いします！！　美春はこの豚野郎と一緒に補習室に行くのはイヤです！？」

西村教諭は2人の行動は生活指導に充分値すると言い、2人を補習室に連れて行こうとし、美春は自分が美波にやろうとしていた事を棚に上げて顔を真っ青にしながら逃げ出そうとするが西村教諭の手から逃げ出す事ができるわけもなく、

「ダーリン、島田、後は任せたぞ」

「う、うん。黒須君も補習、頑張ってね」

「ああ、さすがに保健体育の実技はできないだろうが頑張ってくる」

美春に恐怖を与えた伐はあまり補習を気にする事なく、西村教諭の肩の上からFクラスを応援し、その場はなんとも言えない空気になったまま、伐と美春は西村教諭に連れて行かれる。



## 第14問

「……黒須、結局、お前は何がやりたかったんだ？」

「何でしょうね？」

伐は補習室で美春と並んで西村教諭の鬼の補習を受けていると西村教諭は伐を見てため息を吐くが、伐は表情を変える事がない。

「しかし、あれですね。さっきから、戦死者がでる度に西村先生が出向くのはムダじゃないですか？」

「仕方ないだろ。お前のように補習を素直に受けるヤツらばかりではないのだからな」

伐は先ほどから、何度も補習室を出て行く西村教諭を見て呆れたように言くと、西村教諭はため息を吐く。

「別に素直に受けてるつもりはないですけど、あつちで試験召喚戦争なんてするよりはこっちの方が楽ですからね」

「すまん。また、戦死者のようだ。出てくるが逃げるなよ」

伐は西村教諭の様子に苦笑いを浮かべると、また、戦死者が出たように西村教諭はそう言い補習室にいるメンバーを睨みつける。

「別に逃げたって顔が割れてるんだし、ムダな事はしませんよ」

「お前はそうかも知れんが他は違うだろ」

伐のため息混じりの言葉に西村教諭はため息を吐いた後、補習室を出て行く。

(……さてと、やるか……ん?)

「……びくっ!?!」

伐は西村教諭が補習室を出て行ったのを見て、自分の補習用のプリントと使用化の教科書を開き、補習を終わらせようとする、西村教諭がいなくなった事で身の危険を感じたように美春が身体を震わせる。

(……ん。まあ、鉄人もいないし、少しからかうか?)

伐は美春の反応に何かを思いついたように楽しそうに笑うと、

「美春だったな。鉄人もいなくなったし、俺が特別に個人授業をしてやるよ」

「そ、そんなものはいりません!?!」

彼女の耳元で甘い声でささやいて見ると美春はびくつと身体を再度、震わせる。

「何、遠慮するな………良いか? ここはxに3を代入してやることで………」

「……………あ?」

伐は本当に美春が解けていない問題を教え始めると美春はハトが豆鉄砲を喰らったような顔をする。

「お前は何を想像したんだ？」

「み、美春は何も想像なんかしてません！？」

伐は美春の反応を見て楽しそうに笑うと彼女は慌てて言い返す。

「まあ、そう言う事にしてやる。それで、他にどこがわからないんだ？」

「な、何であなたが！？」

伐がわからない問題を見せると言つと美春は声を裏返しながら言う。

「別に1人でプリントをやってもつまらんしな。ほら」

「美春はDクラスですよ。Fクラスの……」

伐は美春の質問に簡単に答えると美春は伐を罵倒しようとするが伐の名前を聞いていないため、首を傾げる。

「ん？ 名乗ってないか。黒須 伐だ」

「美春は清水 美春です」

伐はその様子に苦笑いを浮かべると美春は戸惑いながらも自分の名前を名乗る。

「……」

「……何ですか？」

「いや、きちんと名乗ると思ってなかったからな」

伐は美春が自分にしっかりと名前を名乗ると思っていなかったため、苦笑いを浮かべたまま言う。

「そうですか。話を戻します。美春はFクラスの黒須くんに勉強を教わるほど落ちぶれてはいませんか」

「ん？ 清水、黒須に補習を見てもらっているのか。そいつは振り分け試験を受けていればAクラス悪くてBクラスだったからな。わからない問題があったらしっかりと教えて貰え。黒須、任せたぞ」

「へいへい」

美春はFクラスの伐に教わる事はないと言うがタイミングよく、西村教諭が戦死した男子生徒2名を抱えて戻ってきて、伐の成績を話し、

「……嘘」

「現実はいっかりと見ような」

美春は目の前の変態の優秀さに呆然とし、伐は彼女の反応を見て楽しそうに笑う。

## 第15問

「……なんだ？」

「べ、べつに何でもないわよ!？」

伐は美春の補習に付き合いながら、自分の補習プリントを埋めっていると美春がこちらを見ている事に気づく。

「なんだ？ わからない問題があるなら、早めに言え。俺はそろそろ終わるぞ」

「嘘!？」

伐はすでに最後のプリントに突入しているため、最後のプリントをヒラヒラとして美春に見せると彼女は予想外だったようで驚きの声をあげる。

「まあ、終わらせても試験召喚戦争に決着がつくか。下校時間になるまで帰れないんだけどな」

「まあ、そうですね」

伐がため息を吐くと美春は呆れたように頷く。

「それで、どこがわからないんだ？」

「ちょ、ちょっと!？ あまり、顔を近づけないでよ!？」

伐は美春のプリントを覗き込むと美春は慌てながら言う。

「……なんだ？ お前は倒錯娘だろ。男の俺が近づこうと関係ないだろ」

「そ、そう言う問題ではないのよ!!」

「ふーん……」

伐は美春が美波へ執着しているのを見ているため、『お前には関係ない』と言うが、美春は伐が予想している以上に慌てる。

「べつに、男嫌いつてわけでもないのか？」

「美春が好きなのはお姉さまですわ!!」

伐は美春の反応に何か違和感を覚えたようで彼女に向かい言つと美春は全力で否定しようとするが、

「ふーん……なら、どうして、顔を赤くしてるをだ？」

「!?!」

すでに美春は伐の手の内におり、伐は誰もが目を奪われるような笑顔でくすりと笑うと彼女の耳元でそうつぶやくと美春の顔は伐が言った通り、真っ赤に染まって行く。

「……やっぱり、保健体育の実技の個人授業も必要か？」

「そ、そんなものは必要ありませんわ!?!」

伐は美春の反応に満足そうな笑みを浮かべるとさらに攻撃の手を強めていくと美春はあたふたと慌てている。

「まあ、口より肢体に聞いてみるか？ お前はこっちの方が素直そうだな」

「な、何を言ってるんですか！？ 美春の初めてはお姉さまに捧げると決め……」

「黒須、清水、お前達は何度言えばわかるんだ？」

伐の言葉に美春は大声をあげた時、美春の後ろには怒りの表情の西村教諭が立っており、美春は「ぎぎぎ」と壊れた玩具のように振り返り、顔を青ざめているが、

「西村先生、プリント終わったんですけど、次は何をしたら良いですか？」

伐は悪びれる事なく、終わらせたプリントを西村教諭の前におく。

「……黒須、お前は どうして、そうマイペースなんだ？」

「それが俺だからですよ」

西村教諭は伐の様子に呆れたようにため息を吐くが伐は気にする事なく言い切ると、

「……お前への次の課題は清水におかしな事をせずに補習を終わらせる事だ」

「……なんの拷問ですか？ 普通に考えて、ここで押し倒さなかったら、こいつに失礼ですよ」

「ここは学園だ。何度も言わせるな！！」

西村教諭は単純な補習では伐が止まらなと判断したようで美春の補習に真面目に付き合うように言くと伐は文句を言うが西村教諭は一括する。

「に、西村先生、み、美春はこんな危険な豚野郎に……」

「お前が今まで島田にやってきた事を思い出してみろ。黒須に怯えながら、その行動を少しは反省しろ！！」

美春は伐が真面目に自分の補習を見る事はなく、また、先ほどのように自分に身の危険が迫っている事を実感しているため、声をあげるが西村教諭は伐の時と同様に彼女の意見を一括する。

「ですけど、美春とお姉さまの間には『愛』があります。この豚野郎とは……」

「愛なんて『快樂』の前では崩れ落ちる事を教えてやるっ」

「！？」

美春は自分が美波を襲いかけているのと伐の自分への行動は違うと言いつ切るが、伐は妖艶な笑みを浮かべて言うと美春は蛇に睨まれたカエルのように身体を硬直させる。



「黒須、いい加減にしろ」

「へいへい」

西村教諭は伐を怒鳴りつけると伐は形だけ返事をする。

## 第16問

「……おい。聞いてるのか？」

「は、はい!？」

伐は西村教諭から補習課題として出された美春の補習の手伝いをしているが美春の反応は悪い。

「……おい。俺は補習時間が終わったら帰るがお前は補習が時間内に終わらなければ提出になるんだろ。真面目にや……」

『連絡します。船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

伐はその様子にため息を吐いた時、なにやら楽しそうな校内放送が流れる。

「西村先生」

「却下だ」

「ちょっと、見学に行ってきます」

「……却下だと言っているだろうが!!」

伐は校内放送を聞くと手を上げて西村教諭に何かを聞こうとするが、西村教諭は伐の話を聞く事なく却下しようとするが伐は気にする事

なく普通に補習室を出て行き、西村教諭はしばらく呆気にとられた後、伐の後を追いかけて行く。

（面白い事になったな。意地でも吉井を船越の前に引きずりだそう。今はまだ、さっきの廊下か？ まっすぐ行くと鉄人に見つかるかなら、少し遠回りをして、後は屋上から……）

伐は西村教諭から逃げながら良からぬ事を考えていると、

「吉井、あんたって船越先生みたいのがタイプだったの？」

「ち、違うよ！？ 島田さんもおかしな事を言わないでよ！？」

目の前には明久と美波が率いている舞台があり、明久が美波に今の放送は間違いだと弁明しているが、

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！！」

「絶対に勝つぞ！！」

「隊長、行けますよ！！ この勢いで押し返しましょう！！」

伐は後ろから先ほどの放送での事を煽って見ると周りにいたFクラスメンバーは勢いづく。

「……す」

「す？」

「須川あああああっつ！！」

明久は先ほどの校内放送をかけたであろうクラスメートの名前を叫び。

「は、腹、いてえ」

「黒須、あんた、何してるのよ？」

伐は明久の様子がツボだったようで腹を押さえながら笑っていると美波は呆れたように言う。

「だいぶ、減ったな」

「そう言うなら、あんたもでたら」

「俺、一応、戦死扱いみたいだからな」

明久が指揮する部隊が18人から5人に減っているのを見て、伐が言うと美波は呆れたように言うが伐は戦う気はないようで自分を戦死扱いと言う。

「このままじゃ押し切られる。撤退しよう」

「明久、島田、あと少し持ちこたえろ！！」

明久は戦線を維持できないと判断したようで撤退の指示を出すが後方から雄二の檄が飛ぶ。

「援軍だ！！ 合流される前に吉井たちを全滅させろ！！ 面倒な事になるぞ！！」

Dクラス前線部隊指揮官の声が響き、Fクラスの戦力は削られて行く。

「吉井明久！！ その首級貰った！！」

「負けてたまるかあっ！！  
試<sup>サモン</sup>獣召喚」

ついに明久まで攻撃の手が伸びると明久は叫び、明久の足元に魔法陣が浮かび上がり、明久の召喚獣が現れるが、

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手をーあがあっ！！」

明久の召喚獣はDクラスの召喚獣にひかれ、明久は観察処分者特有のフィードバックを受け、顔をしかめる。

「あれが、フィードバックか？」

「黒須、あんた、何か企んでない？」

伐はフィードバックを受ける明久を見て舌を出し獲物を蹂躪するような笑みを浮かべると美波は顔をひきつらせる。

「別に、ただ、少しだけ遊んでみたいと思ったただけだ」

「ちょっと、あんた、さつき、戦死扱いつて！？」

「嘘に決まってるだろ」

伐はそう言つと明久の隣まで歩き出し、

「サモン  
試獣召喚」

邪悪な笑みを浮かべながら、自分の召喚獣を呼び出す言葉を発すると伐の目の前には魔法陣が現れ、伐をデフォルメされた伐の召喚獣が現れる。

## 第17問

「黒須君、手伝ってくれるの？」

「いや、ただ、俺の召喚獣でお前の召喚獣を攻撃したら、どうなるかと思っただけだ」

明久は伐の召喚獣を見て助かったと思ったようだが、伐は明久の期待を裏切りと、明久や美波を含めたFクラスやDクラス、教師陣は伐の言葉の意味がわからずに一瞬、時間が止まる。

（俺の武器ってなんだ？）

伐は初めて呼び出した自分の召喚獣を見るが武器らしきものは持っていないく、首を傾げながらも、

「布施先生、えーと、ひとまず、誰でも良いから……あ、あいつで良いや」

試験召喚戦争をやってみようと思ったようで、自分が使者に行った時に自分に突っかってきた男子生徒を指名する。

「黒須、さっきの仮返させてもら……」

「うざい」

伐に指名された男子生徒は召喚獣を伐の召喚獣に向け、長々と何かを言おうとするが伐はうざいと言つと伐の召喚獣の腕から数えられない数の武器が飛んで行く。

「暗器か？」

「め、めちゃくちゃね」

伐は自分の召喚獣から出た武器に首を傾げると美波は伐の召喚獣の武器に引きつった笑みを浮かべる。

「うーん。なるほど……まあ、俺らしいか」

「えっ！？ く、黒須君、どうして、僕の方を見るのかな？」

伐は自分の召喚獣の武器に何か考えついたようでニヤニヤと笑いながら明久を見ると明久は伐の笑顔に背中に冷たいものが伝うが、

「まあ、メインディッシュはもう少し後だな」

伐は明久は後だと言うと伐の召喚獣の攻撃を受けた召喚獣を見てニヤリと笑う。

「しかしながら、召喚獣の攻撃にこんなものがついているとはな。性格が破綻してる俺にはふさわしいな。400点オーバーを出したらどうなるんだ？」

伐の見ている相手の召喚獣には何か不備が生じたのか召喚者の指示に従おうとしているが体が動かないように見える。

「お前、何をした？」

「推測で言えば、さっきの俺の攻撃のなかには神経系にダメージを



与える武器も含まれているんだろ」

伐は楽しそうに笑った後、

「まあ、別にどうでも良いか」

その笑みは突然消え、すでに相手の事など見ていないようで冷たく言う。伐の召喚獣は動けない相手の召喚獣の後ろに移動して心臓にナイフらしき得物を突き立てる。

「な、なんであんなヤツがFクラスにいるんだ!？」

Dクラスの男子生徒を倒した時に伐の召喚獣の上に伐の物理の点数が表示されると自分達より点数が高い人間がFクラスにいる事に驚きの声があがっている。

「黒須、あんたって本当に頭良いのね」

「あ? こんなもん、ただの成績だろ。それにこれならCクラス上位程度だろ」

美波は伐の点数を見て戦況が変わると思ひ声をあげるが伐は興味がなさそうに言う。

「さてと、バツゲームの時間だ」

「ちょ、ちょっと!?! だから、どうして僕を見るんだよ!?!」

伐の興味はすでに観察処分者への攻撃に移っており、楽しそうに笑うと明久は伐から逃げるように後ろに1歩さがった時、

「戦死者は補習！！！！」

西村教諭の声が響き、伐が先ほど倒した男子生徒と伐を抱えあげる。

「ん？ また、ですか？」

「当たり前だ。補習を抜け出して試験召喚戦争をしている生徒など初めてだ」

伐は西村教諭の登場にため息を吐くが西村教諭は呆れたようにため息を吐き、伐と男子生徒を補習室に連行して行く。

「あ、あいつ、2回も何しにきたの？」

「わからないけど、ひとまずは回復試験を受けに戻ろう。そろそろ、回復試験を受けていたメンバーも前線に戻るだろうし」

「そうね」

明久と美波は伐の行動に驚きながらも回復試験を受けて戻ってきたメンバーと入れ替わり、教室に戻る。

## 第18問

「よし、今回の試験召喚戦争はFクラスの勝利で決着がついた」

（へえ、坂本の采配は当たったようだな。まあ、姫路がいれば負けないか）

放課後になり、しばらくしたところで西村教諭から今回の試験召喚戦争の結果が伝えられ、勝利を納めたFクラスの生徒は喜びの声をあげ、負けたDクラスの生徒の表情は暗い。

「補習を終わらせたものから下校するように」

西村教諭の言葉にこの地獄の補習から逃れられると安堵のため息が漏れるが補習自体が終わっていないようで誰も席から立ち上がらない。

「……おい。まだ、終わらないのか？」

「う、うるさい」

伐は2度目の補習プリントを終わらせた後、再度、美春の補習につきあわされているが、美春のプリントはまだ5枚ほど残っている。

「西村先生」

「却下だ」

伐は美春につきあう理由はないと判断したようで帰るために西村教

諭に許可を取ろうとするが脱走をした伐を簡単に帰すわけがない。

「……俺、バイトがあるんですけど」

「どうせ、ろくでもない事だろ」

「ろくでもない事でもこっちは生活がかかってるんで、学費も稼がないといけないですよ」

伐はバイトがあると言い逃げるように補習室を出て行こうとするがさすがに西村教諭に首根っこを捕まえられる。

「生活がかかっていようが、学生が夜の繁華街にいて良いわけがないだろ」

「……だけど、俺にはそれ以外に何も無いんですよ。西村先生」

西村教諭は生活指導をしているため、伐が夜中に繁華街でしているバイトに問題があると言うが、伐は言われ飽きたと言いたげにため息を吐いた後、西村教諭の腕からすり抜ける。

「じゃあね。西村先生　後は美春」

伐は西村教諭を挑発するように笑って補習室を出て行く。

「……まったく、あいつは」

「あ、あの、西村先生、あの男は」

西村教諭は伐の様子にため息を吐くと伐と西村教諭の話に何かを感じ

じたのか美春は伐の事を聞こうとする。

「ん？ 清水、あまり、人の家庭事情に首を突っ込むのは感心しないぞ」

「そ、そうですね！？」

西村教諭は美春の質問にため息を吐くと美春は自分でもどうして伐の事を聞いたかわからないように慌てて頷く。

「それより、清水、補習を早く終わらせるんだ。課題にしてほしくなければな」

「は、はい」

西村教諭は美春に向かい言うと召喚戦争の終わり間近に補習室送りになった生徒達のもとに歩き出し、美春は自分のプリントに目を移すと、

「あれ？ これは？」

プリントの上には数枚のルーズリーフがおいてあり、

「答えは書いてないけど……」

ルーズリーフには伐が気づいた美春の苦手な問題の解説がわかりやすく書かれている。

「な、なんで？」

美春は伐の行動に意味がわからないながらも伐がおいていった解説を参考にしてプリントを埋めて行く。

「西村先生、プリント終わりましたので帰ります」

「……ああ。気をつけて帰るんだぞ」

美春は西村教諭にプリントを提出すると伐がおいていった解説を手に補習室を出て行く。

（……何でこんなものがあつたのでしょうか？）

美春は伐の行動の意味がわからずにルーズリーフを眺めながら首を傾げて歩いていると、

（あれ？ ルーズリーフの最後に何か書いてある？）

最後の方は何も書かれていなかったため、無視をしていたのだが、白紙が続いたルーズリーフの最後に何か書いてあるのを見つけて覗き込む。

（……『これは貸しだ。俺が必要な時に返して貰う。回収は必ずするから、覚悟しておけ。伐』って何よ！？ これ？）

美春は伐の残した言葉に何をされるか想像したのか血の気が引いて行くのを感じる。

## 第19問（前書き）

ユニーク5000人並びにPV400000アクセス超えました。

ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

感想や評価をしていただけるとやる気になりますのでよろしければ  
願います。

## 第19問

(……Dクラスの設備になつてゐるはずだったよな?)

伐は昨日の試験召喚戦争に勝利したため、教室の設備が変更されていると思つていたのだが設備は変わっていない。

(……まあ、霧島に聞けば良いか。ん?)

「吉井っ!!」

「うぶあつ!!」

伐が雄二にこの状況を聞こうとした時、美波の拳が明久の顔面に吸い込まれて行く。

「あれは世界を狙えるんじゃないか？」

「あまり余計な事を言つとお主も的になつてしまつぞ」

伐は明久と美波の様子にぼそりと言つと秀吉は伐に気づいたようのため息を吐きながら伐に声をかける。

「ん。木下か。おはよう」

「ああ、おはようなのじゃ」

「それで、あいつらは……」



「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽きたらず、消火器のイタズラと窓を割った件の犯人にしたてあげたわね……!!」

伐は秀吉に挨拶をした後、秀吉に明久と美波が何をしているのかと聞くと美波は明久に文句があるようで明久につかみかかる。

「……おお、そういえば」

明久は美波に攻撃をされた事に心当たりがあったようで「ポン」と手を叩く。

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない!!」

「まだ上がる余地があった事が意外だ」

「吉井!!」

明久は美波が怒っている理由に気づく事なく更に美波の怒りの炎に大量の油を流し込む。

「待て、島田」

「何よ？ 黒須、アンタもそういえばウチを見捨てようとしたわね」

「ちょっと、島田さん！？ 締まってる！？ 締まってる!？」

「まあな。現状で言えば俺はお前をかばう理由がないからな」

伐は何か考えがあるのか美波に声をかけると美波は伐にも視線に殺

気を込めながら明久の首を絞めて言うが、伐は気にする事はない。

「くゝろゝすゝ」

「落ち着け。だいたい、彼女にたくない女子ランキングが上がったと言うが、良く考える。それはある意味、男どもから注目を受けるって事だ。お前は容姿が良いんだ。注目されてないよりは注目された方が評価も変えやすいぞ」

「そ、そうなの？」

「黒須の言う事も一理あると思うのじゃ」

伐はけだるそうに言うと言波は伐の言葉にキョトンとし、秀吉は伐の言葉に賛同すると美波は一先ず、明久をつかんでいる手を放す。

「黒須君、ありがとう。助かったよ」

「明久、これで鼻血を拭くのじゃ」

「ありがとう。秀吉」

明久は伐と秀吉に礼を言い、鼻血を拭いていると、

「おい。黒須、どうして、明久を助けたんだ？」

「ん？ 霧島か。簡単な事だ。1時間目の数学のテストは船越って聞いているからな。ダーリンを気絶させているよりは楽しそうだ」

「……船越先生？」

雄二が伐が明久を助けた意味がわからずに声をかけると伐は昨日の校内放送を思い出しているように楽しそうに笑うが伐の表情とは逆に明久の表情は凍りついて行く。

「それじゃあ。僕はこの辺で!!」

「まあ、待て。年上も経験しておいて損はないぞ」

明久は全力で教室から逃げ出そうとするが、伐は明久の首をつかむ。

「イヤだ!?! 僕は初めては好きな人とが良いんだ!?! 船越先生なんかより、秀吉や黒須君の方が良いよ」

「明久、何度も言っておるが、ワシは男じゃ」

「なら、どうして、顔を赤らめる?」

明久は動揺しているようで首を振りながら初めては伐や秀吉が良いと言つと秀吉はその言葉に顔を赤らめ、伐は秀吉の反応にため息を吐く。

「そ、そうだ!! 黒須君なら、船越先生でも行けるよね?」

「悪いな。俺の身体はあくまで『商品』だ。結婚が目的のばああの相手をする気はねえよ」

「僕だつてないよ!?!」

明久が声を上げた時、無情にも1時間目開始の鐘が鳴る。

「タイムアップだな」

「頑張つてね。吉井」

「うわあああっ!？」

教室には顔を少し赤らめた船越先生が入ってくると同時に明久の悲鳴が学園に響く。

## 第20問

「うあー……づがれだ!!」

明久が机に突っ伏す。

「うむ。疲れたのう」

「……ねむ」

秀吉は明久の言葉に頷き、伐は眠たいようであくびをすると瞳には涙が滲み出し、明久と康太は伐と秀吉の姿に目を奪われている。

「よし、昼飯食いに行くぞ!! 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「待て。霧島」

雄二が学食に行くために立ち上がると伐が雄二を呼び止める。

「なんだ？」

「昨日の試験召喚戦争に勝ったのに設備が変わっていない理由を教えてくれ」

「ああ。黒須には話してなかったな……後で良いか？」

「ああ、飯の後で良い」

伐は雄二に教室の設備が変わってない理由を聞こうとすると雄二は後回しだと言い、伐は雄二の頭が学食でいっぱいだと理解しているように頷く。

「うし。じゃあ、行ってくる」

「雄二、ワシも行くのじゃ。黒須はどうするのじゃ？」

雄二が教室を出て行こうとすると秀吉も学食に行くと行った後、伐に昼食をどうするか聞くと、

「気にするな。俺は俺で食う」

伐はけだるそうに言った後、鞆から固形の携帯食品を取り出す。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「……………（コクコク）」

雄二と秀吉に美波が声をかけると康太も一緒に学食に行くように美波の合流に頷くなか、

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません…………じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりをー」

「あ、あの。皆さん……」

美波はなぜか明久を睨みつけ、明久は美波の難癖を否定すると立ち上がり、雄二達と一緒に学食に行こうとした時、瑞希が明久達に声をかける。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

瑞希はもじもじとしながら明久を見ている。

「昨日、言ってた。弁当だろ」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

伐は興味なさそうに言つと瑞希は後ろに隠していたバッグを出す。

「迷惑なもんか！！ ね、雄二！！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ 良かったあ」

明久が嬉しそうな表情をすると瑞希は明久の顔を見て嬉しそうな笑顔を見せる。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

「島田、好意が殺意に変わってるぞ」

「な、なんの事よ!？」

美波は明久の喜ぶ顔に何かを考えているようで明久を睨みつけていると伐は美波の様子に呆れたように言い、美波は慌てて伐の言葉を否定する。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」

「そうだね」

秀吉は瑞希の弁当を屋上で食べようと提案すると明久は頷き、

「そうか。それならお前らは先に行ってくれ。黒須、話は屋上でするから、お前も一緒に行っててくれ」

「ああ」

雄二は何かあるのか先に屋上に行くように言う。

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日、頑張ってくれたお礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く!! 1人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃあ、頼む。お前ら、きちんと俺達の方も取って



おけよ」

雄二は財布を手に美波と一緒に教室を出て行き、

「僕らも行こうか？」

「そうですね」

明久は瑞希のバッグを受け取り、伐を含めた4人で屋上に向かう。

## 第21問

(……今、何があっただんだ?)

伐の目の前で瑞希の弁当をつまみ食いした康太が豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだし、

「……………」

「……………」

明久と秀吉は顔を見合わせている。

「わわっ、土屋君!?!」

「……………(グッ)」

瑞希が康太の様子に配ろうとしていた割り箸を落とすと康太は起き上がり、美波に向けて親指を立てる。

(康太、一応、気を使ってるようだが、足にきてるぞ。あそこまでのダメージを与える料理か? 元々、他人の作った料理は食えないが断って正解だったな)

伐は康太の様子を見て、瑞希の料理のまずさに気づいたようだが表情が変わる事はない。

「あ、お口に合いましたか? 良かったですつ。良かったらどんどん食べてくださいね」

瑞希は康太の言いたい事が伝わったようで笑顔を見せると明久と秀吉にもお弁当を進める。

「……秀吉。あれ、どう思う？」

「どう考えても演技には見えん」

明久と秀吉は康太の様子を見て『瑞希の料理の破壊力』に気づいているようで小さな声で話し合いを始め出すなか、

「黒須君もどうですか？ それだけじゃ身体に悪いでしょうし」

瑞希は昨日、伐には断られているため、恐る恐る伐にもお弁当を進める。

「いらん」

「そうですか……」

伐は瑞希のお弁当を一言で拒絶すると彼女は悲しそうな表情でうつむく。

「黒須君！！ どうして断るんだよ？ せつかくの姫路さんが気を使ってくれてるのに」

「さすがに酷いと思うのじゃ」

伐と瑞希の様子に明久は彼の性格なのか伐のキラいな正義感と言うものを出し、秀吉も同意するが、

「悪いな。安っぽい同情や正義感ってのは俺はキライなんだ。そこでいかに巨乳娘の弁当からに……」

「黒須君、いきなり何を言うんだよ」

伐は興味なさそうに懷からタバコを取り出し火を点けようとしながら瑞希の料理がまずいと言おうとすると明久は慌てて伐の口を塞ぐ。

「あつつ!?!」

伐は明久の手をライターであぶると明久はすぐに伐の口から手を放す。

「ダーリン、木下、嘘は使い方だぞ。今、お前らが吐こうとしてる嘘はただの詭弁だ。それがバレた時に逆に相手を傷つけるぞ」

「……………」

「……………」

伐は興味なさそうにタバコをくわえながら言う。明久と秀吉は顔を見合わせる。

「お前らは安っぽい正義感みたいなくだらないものが好きみたいだからな。事実を言わずに1人を守ったつもりかも知れないが、それは他の誰かを傷つけるだけだ」

伐は明久と秀吉に向かい言う。と携帯灰皿を取り出し、タバコの火を消すと、

「巨乳娘、お前の料理は食いもんじゃない。康太が気を使っただけだ。信じられないなら自分で食ってみろ。俺は康太を保健室まで連れて行く」

表情を変える事なく、瑞希の料理がまずいと事実を述べると気を失っている康太を抱きかかえ、屋上をおりて行こうとすると、

「……………」

瑞希は伐の言葉を聞いて自分のお弁当からエビフライを取り、口に運ぶ。

「姫路さん!？」

「ダメなのじゃ!？」

明久と秀吉は瑞希の行動に慌てて瑞希に駆け寄ると、

「……………」

瑞希は小刻みに震えている。

「ど、どうしよう? 秀吉!? この場合は人工呼吸? 心臓マッサージ?」

「お、落ち着くのじゃ、明久!! まだ、息もしておるし、脈もあるのじゃ!？」

明久と秀吉は瑞希の様子に慌てていると、

「……つたく、世話がやける。ダーリンは保健室からタオルをかつぱらってこい。後は水を汲んでこい。木下は霧島と島田のところに行ってお茶と牛乳を買ってなければ買ってこい。後は飯を食いっぱぐれなくなければ、パンでも買ってこい」

伐は康太をひとまず日陰に下ろすと明久と秀吉に指示を出し、

「……」

瑞希の口から『毒物』を吐き出させて応急処置をしていく。

## 第21問（後書き）

まさかの禁じ手をしました。作者です。

瑞希に彼女の料理を食わせるやりたかったです。怒らないでください。（苦笑）

瑞希が傷つかないためとは言っていますが少なからず、明久には彼女に嫌われないためってのもありますから、伐には関係ないんですよ。

お怒りの言葉は優しくお願いします。

## 第22問

「で、黒須。これはいったいどういう事だ？」

「良いから、お茶を飲ませた後、吐き出させて胃のなかを洗浄しろ。その後は牛乳を飲ませて胃の粘膜を保護だ」

「お、おう」

雄二と美波は目の前で日陰に移動させられ、伐に手当てをされている瑞希と康太を見て伐に聞くが、伐は理由を説明せずに処置の説明しかない。

「あのさ。瑞希も土屋もどうかしたの？」

2人の処置を終えると状況がわからない美波が顔をひきつらせて伐に聞くと、

「島田さんも姫路さんのお弁当を食べてみたらわかるよ」

「……おい。ダーリン、これ以上、被害者を増やすな」

「……姫路の実力か？」

「い、意外ね」

明久は美波に瑞希の弁当を差し出すが、伐は明久を止め、2人の様子に雄二と美波は顔をひきつらせたまま言う。



「……すまんのじゃ。スタートが遅れたからもう何もなかったのじや」

「昼飯抜きかよ」

「す、すいません」

「姫路さんが謝る事じゃないよ!？」

しばらくすると秀吉が購買から帰ってくるが購買では何も買えなかったように申し訳なさそうに言う。

「……つたく、世話が焼ける」

「くれるの?」

「霧島には腹の足しにもならないだろうがな。何も入れないより、マシだろ」

「エネルギーだ。カロリーだ」

伐は懐から固形の携帯食を取り出し、配ると美波は意外そうな表情をし、明久は手に入れた食料に目を輝かせている。

「……次の布石か」

「ああ、詳しく言つと」

「いや、何となくわかったから良い」

伐は雄二からDクラスとの設備を変えない理由を本当に簡単に聞くと何かを理解したようで頷き、

「なら、次はBクラスか？」

「ああ、黒須は理解が早くて助かる」

「え？ 相手はBクラスなの？ どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

伐は雄二に確認するように聞くと雄二は頷くが明久には伐と雄二が考えている事が理解できないようで首を傾げる。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

美波は雄二の言葉に目標が変更されたと思ったようだが雄二はあくまでも目標はAクラスだと言い、ニヤリと笑う。

「雄二、さっきと言ってる事が違うじゃないか」

「……クラス同士じゃ、どうしようもないから1対1にでも持ち込むんだろ。Bクラス戦はそのための布石だ」

「そう言う事だ。理解が速いやツがあると話が速いな」

明久の疑問に伐がタバコをふかせながら答えると雄二はニヤリと笑うが、

「……こいつらには理解できる頭はないみたいだぞ」

伐は自分以外、雄二の作戦に気づいていない事を呆れたように言う。

「待つんじゃ。何をどうやればBクラス戦がAクラス戦の布石になるのじゃ？」

「……今回、Dクラスと設備を変えなかったのと同じ理由だ。勝つたら、クラスの設備変更の代わりに何かやらせるんだろ」

秀吉が当然の疑問を口にとすると伐はけだるそうに答え、

「別にお前らが気にする必要はないだろ。道筋は霧島がたてるんだ。バカなお前らには理解する必要はない」

周りにいるメンバーをバカだと言い切る。

「ちょっと、黒須君、確かに僕や雄二はバカだけど」

「巨乳娘は違うと言うのか？」

明久は伐の言葉にくっつかかろうとするが、伐はふざけた事を言うなどと言いたげにため息を吐くと、

「確かに成績は良いかも知れないがな。成績の良さ＝頭の良さじゃないんだよ。世の中を知らない世間知らずは俺やBクラス代表の根本みたいな人間には力モでしかない。教えておいてやる。『無知は

罪』だ」

「黒須君、君は――！」

明久に向かいタバコの煙りを吹きかけると明久は伐の胸ぐらをつかもうとするが、

「黒須、その辺にしろ。明久もだ」

「だって、雄二」

雄二が明久を止める。

「まあ、黒須の言いたい事もわかるが今はBクラス戦だ。で、明久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告をしてこい」

「断る。雄二が行けば良い」

「また、黒須ではダメなのか？」

雄二は明久に向かい宣戦布告の使者になれと言うと明久は即答で断り、秀吉がDクラス戦の使者を勤めた、伐を推薦するが、

「……悪いな。今回はパスだ。俺はBクラス戦の前にやって起きたい事がある。ダーリン、お前が行ってこい」

「でもさ。下位クラスの使者はさあ」

「俺は大丈夫だったろ。学園内なんだ。暴力沙汰なんて簡単にならねえよ」

「そっだよね」

伐の言葉で明久は騙されたように素直に頷く。

## 第22問（後書き）

どうも、作者です。

書けば書くほど、原作沿いが向いてないと思いますね。

伐は原作に沿えてるんでしょうか？ 原作沿いなのにセリフ飛ばすし、伐は単独行動が多いしね。（苦笑）

そして、次も単独行動です。まあ、ノラ猫だから仕方ない。（苦笑）

ノラ猫（伐）の飼い主はいつ決まるんでしょう？  
書いてる本人にすらわかりません。

現在の候補は島田美波、清水美春にまさかの小山友香（爆笑）

## 第23問

「それじゃあ、Bクラスに行ってくるよ」

午後のテストが終わり、明久が宣戦布告をするためにBクラスに向かう。

（……俺も行くか）

「黒須、あんた、帰るの？ 吉井の帰りを待たないの？」

伐は立ち上がり教室を出て行こうとすると美波が伐を見つけて声をかけてくる。

「……いや、まだ帰らないが、少しやって起きたい事がある」

「何？ また変な事？」

「別に、霧島に任せておいても根本みたいな小物に負ける気はしないが、俺は生理的にあのクズが嫌いなんですね。今回は勝手に動かせて貰う」

伐は美波の言葉に気だるそうに答えると教室を出て行き、

「坂本、黒須はあんな事を言ってたけどほっというて良いの？」

「まあ、良いだろ。今回はDクラス戦と違いやる気を出してるみたいだな」

「そうなの？」

美波は伐の単独行動を雄二に報告すると雄二は気にするなと言うが美波は納得いかなさそうな表情をしている。

「……………大丈夫。雄二の言う通り、伐は今回は犯る気……………間違えた。殺る気」

「どっちにしても問題ある言葉じゃのう」

伐と付き合いの1番長い康太が伐の背中を見て言うと言秀吉は康太の言葉にため息を吐く。

「まあ、あいつは群れるより、1人で気ままに動いてくれた方が良さそうだしな」

「それだと、坂本君が作戦を立てられないんじゃないですか？」

「まあ、その分、相手も黒須の行動はつかみきれないだろ」

雄二は今回の作戦での自分のコマに伐を組み込んでいないようで苦笑いを浮かべると瑞希は首をかしげるが、雄二は特に気にしていない。

「黒須は猫みたいじゃのう」

「ホントよ。自分勝手にワガママで、他人の事なんて気にしないし」

「黒須は……………猫か？」



「猫よ。猫。それかわいげのないノラ猫」

秀吉は苦笑いを浮かべながら、伐を猫だと言うと伐の態度にあまり良い印象を持っていないのか、美波は伐への文句を言うが、

「……………ノラ猫はいつも温かい居場所を探し続けている」

康太は伐の過去を知っているようで美波の言葉を否定するようにはそりつつばやく。

「康太、どうかしたのか？」

「……………別に何でもない」

「ムツツリーニは黒須の過去を知っているようじゃのう」

雄二と秀吉は康太の様子に何かを気づいたようで康太に視線を集めるが、

「……………俺は何も知らない」

康太は何も言う気がないようで首を振る。

「まあ、あいつがやる気を出してくれてるんだ。任せようぜ。情報戦や心理戦は俺より黒須の方が強そうだ。どこかで根本の首をかっきる策略でも立ててるんだろ」

「詐術師と言ったかのう。そこまで、黒須は交渉に長けておるのか？ そのようには見えんのじゃが」

「ただ口が悪いだけでしょ。そこまで言うほどじゃないでしょ」

雄二は康太の様子に興味が薄れたようで苦笑いを浮かべながら言う  
と秀吉と美波は雄二の伐に対する評価にあまり納得がいてないよ  
うでそう言つと、

「考えて見る。下位勢力からの宣戦布告の使者をやつたのにケガ1  
つしないで帰ってきた上に、昨日、Dクラスの代表の平賀からはあ  
いつの使者は見事だったと言われた」

「……それはやはり宣戦布告の使者は酷い目に遭うと言つ事と受け  
止めて良いのかのう？」

「当たり前だ。だから、明久を使者にしたんだからな」

雄二は伐の評価を正当にしており、秀吉は明久が今、Bクラスで酷  
い目にあっている事を思い浮かべてため息を吐いた時、

「……言い訳を聞こうか？」

ボロボロになった明久が教室に戻ってくる。

「予想通りだ」

「くきいー!! 殺す!! 殺しきるー!!」

「落ち着け」

「ぐふあっ!!」

雄二はボロボロになった明久を心配する事なく、予想通りと言い切ると明久は雄二に襲いかかるが鳩尾を強打され撃退される。

## 第23問（後書き）

どうも。作者です。

最近、ヒロイン候補がいただけるようになり嬉しい限りです。

8巻を読んで玉野さんはありますか？と悩みましたが伐は女装するか？と考えると……すでにムツツリ商会に写真がありそうだな。とも思いました。

今回は伐への評価を話してもらったわけですが評価は変わって行くのでしょうか？

康太の知る伐の過去とは？

そして、伐はどこへ行っただんでしょう？

楽しみにしていただけると幸いです。

## 第24問

「……失礼。代表のクズな小物の彼女はいるか？」

伐はFクラスの教室を出るとその足でかなり失礼な事を良いながら今回の試験召喚戦争とは関係ないはずのCクラスの教室を訪れる。

「……私が代表の小山 友香だけとあなた、ケンカを売りに着たの？」

「いや、男の趣味が最悪な女つてのを見学にきたただけだ」

伐の挑発的な言葉にクラスの代表だと名のる『小山 友香』と言う女子生徒が額に青筋を浮かべながら伐の前に現れる。

「……お前があのかのクズの彼女か？ あれを選ぶなんてよっぽど男の趣味が悪いんだな。見た目は良い部類なのにもつたいない」

「あなたに言われる筋合いはないわ」

「そうか？ 俺はあんな髪型をしているヤツと比べられないといけないほど、ブサイクじゃないつもりだが」

伐は友香の前でも彼女の彼氏であり、Bクラス代表の『根本 恭二』をバカにすると彼女は伐を睨みつけるが、伐はその視線に臆する事なく、その中性的で誰もが目を奪われるような顔に妖艶な笑みを浮かべながら、彼女を挑発しつづける。

「……あなた、やっぱり、ケンカを売りに着たのね。あなたみたい

な下品な人間が使用者って事はFクラスの使者ね。Dクラスを倒したから、次は私達、Cクラスを狙ってきたの？」

「Fクラスではあるが、うちの次の目的はBクラスだ。クズな小物の彼女程度が率いているザコは戦う価値もねえよ。ただ、単純にお前みたいな男の趣味が悪い珍種の顔を見にきたただけだ」

「好きであんな小物の彼女になつてゐるわけないでしょ!!」

友香は伐の挑発にほぼ頭にきたのか伐を怒鳴りつけるが、その怒鳴り方は『彼氏の根本恭二がバカにされたからではなく、自分をバカにされたから』であり、伐は彼女の反応が彼の思った通りだったようでくすりと笑うと、

「……なるほど、あんたの本心は聞かせてもらった。どうやら、あんたも俺と同じであのクズを本当は嫌悪しているようだな」

「……なに、脅迫でもするつもり？」

伐の態度に友香は一瞬だけ、『しまった』と言う表情をするがすぐに表情を戻すとクラスメートに伐を囲ませて冷静を装いながら言う。

「いや、これで交渉する価値がでてきたなと思つてな」

「交渉？ あなた達Fクラスとする価値があると思つてるの？」

伐は囲まれた事などなんとも思つてないと言いたげに近くの席に座ると友香は高圧的な視線で伐に向かい言う。

「友香だったか？ お前、彼女だと言つてあのクズを油断させてお

いて、しばらくしたらBクラスを落とす気だろ？ そしたら、あのクズはその程度だったから、『はい。さよなら』だ」

「……」

「沈黙は肯定だとらせて貰う」

伐は友香の様子から、彼女の思考を推測したようで彼女が今、根本に好意を抱いていないことを言うと言いつつ彼女は何も言わないため、伐は話を続けようとする。

「あのクズは『自分を優秀だと勘違いしている』からな。お前が本当に自分を慕っていると思っっているぞ。後は健全な男子高校が考える事は……」

「……それ以上、言うて殺すわ」

「そこまで言うのは、あのクズに押し倒される自分を想像したからか？ それとも俺の予想に反してあのクズに本当に惚れているからか？」

伐の言葉に友香は嫌悪感を示すが、伐は依然として彼女を挑発しつづける。

「……あんたは何を言いたいわけ？」

「別に俺はあんた達Cクラスに1つの提案をしにきたただけだ。『Bクラスと共闘するな』とな。あのクズはお前を彼女だから、自分の手ゴマだと思っているがヤツは人を信用する気はない。知ってるか？ いつの時代も裏切り者は裏切られるんだぞ」

「それは私に恭二を裏切れと言うの？ それに対するメリットは？」

「簡単な事だ。俺達は結果はどうであろつとBクラスと試験召喚戦争を始める。俺達が負けてもBクラスの点数は減る」

「そうね。なら、あなた達が勝っても負けても私達はBクラスを狙う事にするわ」

「普通はな。だけど、俺達は勝ってもBクラスの施設を狙わない」

「……どういう事？」

伐がBクラスの設備を奪う気がないと言うと友香や伐を囲んでいる生徒は首を傾げる。

「俺達の目標はあくまでAクラスだからな。勝つたらいくつか条件をだしての。和平交渉で決着が付く。あんたらはその後、Bクラスに攻め込めば良い。俺達が勝っても負けてもあんたはあのクズから解放される悪い提案じゃないだろ？ まあ、その後、俺達ならAクラスと戦っても対したダメージは与えられないから、CクラスではAクラスにかなわないが、戦力が低下したBクラスなら、確実に勝てるだろ？」

「……確かにね」

友香は伐の提案に興味を引かれているのか頷くと、

「……俺の話はここまでだ」



伐は言う事は終わったと立ち上がり、教室を出て行こうとする。

「待ちなさい。あなた、答えを聞かない気？」

「必要あるか？ お前は賢い女だ。あのバカと落ちるつもりはない  
だろ？」

「……」

「沈黙は肯定だとらせて貰う。それに……俺はお前みたいな気の  
強い女は嫌いじゃない」

伐は友香の質問にくすりと笑った後、彼女の耳元でささやくと何も  
なかったかのようにCクラスの教室を出て行く。

## 第25問

(……まあ、悪くはないだろうが、腕輪が取れたかは微妙だな)

試験召還戦争のための戦力補給として昨日から受けていた回復試験最後の総合科目のテストが終わり伐はそれなりに手応えがあったようである。

「黒須、出ていくな。話がある……さて、皆、総合科目テストご苦労だった」

伐はテストが終わったため、教室を出て行こうとすると雄二が伐を引き止めた後、教壇の上に移動し、Fクラスの士気を上げるために演説を始める。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？ 今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。そのため、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んでこい！！」

「が、頑張ります」

見るからにノリについて行っていない瑞希の一言だが、Fクラス最強の戦力であり、数少ない女子生徒の下で戦うと言う事もあり、戦意は最高潮である。

「ここで、活躍すれば女子生徒の評価も上がるだろうな。FがBを倒すんだ。他のクラスの女子生徒の視線も変わるだろう」

「うおおおおおつつつ！！！！ やったるでえ！！！！」

伐は目の前の様子を見て、一言追加してみると最高潮に達していたと思われていたはずの戦意は一層あがる。

「単純だな」

「黒須、あんた、あおり過ぎじゃないの？」

「いや、まだ、あおり足りないな……霧島、俺からも1つ言わせて貰って良いか？」

「ん？ なんだ？」

伐はクラスメートの様子に呆れたようなため息を吐くと伐の様子を見て、美波は伐を睨みつけるが、伐は気にする事なく手をあげる。

「いくつか、耳に入れておいた方が良い情報を手に入れてな。保険だ」

「わかった。言ってみろ」

「まず、Bクラスの代表はあの卑怯な小物のクズの根本だ。各自、万が一のために消しゴムとシャープくらい持っている」

伐はBクラスが何かを仕掛けてくる可能性を示唆すると最高潮に達していた空気は一瞬、静まり、クラスメート達は伐の言う通り、制服に消しゴムとシャープを持つ。

「それだけか？」

「いや、こっちが本題だ」

雄二が伐に聞くと伐はクスリと笑うと、

「俺がつかんだ情報では、根本は彼女持ちだ」

「「「ぶち殺せ！！！！」」」

「皆さん、待ってください」

「そうよ。作戦だってあるのよ」

クラスメート達は伐の一言にBクラス代表の『根本 恭二』に向けた殺意を出し瑞希、美波、秀吉などある程度の常識がありそうな数名以外は怪しい覆面を被ると根本恭二に向けた嫉妬混じりの殺意を垂れ流しながら、廊下に出て行き、その後ろを瑞希と美波が追いかけて行く。

「……おい。黒須、あれは姫路の指示を聞くのか？」

「知らん……だが、殺意を向けられた人間は萎縮するし、あいつらの戦意はこれ以上あがらないだろ？」

「まあな」

雄二はため息を吐きながら伐に言うが伐はすでに興味などない。

「霧島、康太から監視用カメラと盗聴器を借りたから設置するのを

手伝ってくれ。木下は鉄人に頼んで教室に何かあった場合、どこか空き教室を借りれるように手配してくれ」

「……仕掛けてくるか？」

「さっきも言っただろ。これは保険だ」

伐の言葉に雄二は伐の考えている事に行き着いたようで伐に聞くと伐は興味なさそう言う。

「ワシが鉄人に頼むのか？　ワシより、雄二や黒須の方が適任ではないのかのう？」

「いや、俺や黒須だと鉄人に断られる可能性が高い。それに俺は監視されてる可能性もあるしな。秀吉、頼めるか？」

「わかったのじゃ」

秀吉が疑問を口にするが雄二の言葉を聞いて頷く。

「なら、悪いが今回の俺は個人行動にさせてもらう」

「邪魔するなよ」

「……忘れてなければな」

伐は眠いのか欠伸をしながら教室を出て行く。

## 第25問（後書き）

始まりました。Bクラス戦。

ノラ猫くんは単独行動。

煽られたFクラスは雄二の指示を聞くんでしょうか？

そして、伐がCクラスにした提案は？

小山友香はヒロイン候補になりえるのか？

作者にもわかりません。（爆笑）

## 第26問

(……さてと、どうやって忍び込むかな?)

伐はまるで何も考えていないような素振りをしながらも、何かを企んでいると、

「……ずいぶんとヒマそうね。そんな態度でBクラスに勝てるの?」

友香が伐を見つけて呆れたようなため息を吐く。

「……ん? ああ、何かようか?」

「昨日の返事を言いにね」

「必要ないって言っただろ」

友香は昨日の伐の提案の答えを言いにくたと言つが伐は興味なさげにあくびをする。

「まあ、聞きなさいよ。私は頭が良い男が好きなの。お勉強ができる人って意味じゃなくてね。だから、恭二と付き合つたのよ」

「……あいつは頭が良いか? 卑怯なだけの小物だ」

「でも、卑怯な手段って、勝つためには合理的で、有効だと思わない? 私はそう言つの、結構、好きなんだけど」

友香は伐を試そうとしているのか挑発的な笑みを浮かべるが、

「まあ、卑怯な手段が合理的なのは否定しないが……相手がそうくるなら、俺はそれ以上の手を使うそれだけだ」

伐は友香の挑発を鼻で笑う。

「昨日、あなたは『いつの時代も裏切り者は裏切られるんだぞ』とか言ってたけど、それはあなたにも言えるわよね？」

「その時はその時だ。と言うか、俺はあの小物と違うと言ってるだろ。あの小物は卑怯な手段を使っても勝ちだと言ってるが、負けても死ぬ場所にいた事がない甘えの上にいるんだ。最後は誰かが助けてくれるってな」

友香は意地になっっているのか引き続き、伐を挑発するが、伐はそんな友香をバカにするような笑みを浮かべると、

「俺は居場所もないノラ猫。どんな場所でも1人で生きていく。そこに何もなくても。自分に生きる価値などなくても。俺の居場所はいつも『それ』がそばにいる」

友香を挑発仕返すように冷たい笑みを浮かべる。

「誰も信じないから裏切られても何も感じない。感情を排除してそれを受け入れる。それがもっとも賢い生き方だ。自分が傷つこうがただ生きるだけに貪欲にな。どれだけ頭が良い人間が相手だろうが『それ』を知らない人間に負ける気はない」

伐の言葉は友香と同じ年の人間が言う言葉には感じられない重みがある。



「……今話を聞いて私があなたに協力できると思うの？」

「言っただろ。答えはいらない。お前が迷うなら、俺はその迷いに  
つけ込む。お前がBクラスに協力しようがすでに楔は打ち込まれて  
いる」

「……確かに、そうね」

友香は伐に協力する気にはなれないと言おうとするが、伐はそんな  
彼女にすでに友香は自分の謀略のなかにいると言つと友香は忌々し  
そうな表情で頷く。

「別に協力しろとは言つてない。何もするなと言つてるんだ。ヘタ  
にあがくとお前は沈むぞ」

「……それは私をバカにしてるわよね？」

「ただの忠告だ。ノラ猫は自分にかかわらない人間は目に映らない  
が敵と認識すればどんな手を使つても叩き潰す」

伐は冷たい笑みを浮かべた後、友香を気にする事なく歩き出そうと  
するが、

「待ちなさい。あなたは敵にまわらなければ裏切らないのよね？」

「少なくとも、俺に裏切る利点がなければな」

「そう……あなたの答えを聞いて決めたわ。Cクラスは今回はあな  
たにつくはその代わり、Bクラスの戦力を減らすのに全力を尽くし

なさい」

「……わかった」

友香は伐の提案を受ける代わりにBクラスの戦力を減らす事を約束させ、伐は振り返る事なく1人で歩きだそうとするが、

「……1つ、良い手を思いついた。協力しろ」

「……さっき、何もしなくて良いつて言わなかった？」

何か思いついたようで振り返り、友香に言っていると彼女はため息を吐く。

「……俺につくと言ったのは、お前だろ。今のお前は俺のものだ」

「……わ、わかったわ」

伐は友香の耳元でささやくと彼女は伐の言葉に逆らえずに頷く。

## 第26問（後書き）

どうも、作者です。

完全に単独行動に入ったノラ猫くんは身につけた色香で進んでいきます。（爆笑）

押しの強さがバカテスのキャラにあるのは女性陣だけなのでおかしい感じがします。（苦笑）

友香を隷従させ、伐は何をするんでしょうか？（悪笑）

伏兵？ 奇襲？ 傍観？ 敵兵の切り崩し？ …… 女装？（爆笑）

何をさせましょうか？

## 第27問

「……協力しといてなんだけど、本当にこれを着るの？」

「ああ」

伐は友香と一緒にCクラスに移動すると伐は友香に指示を出し、女子の制服を用意して貰う。

「……ねえ。あなた男の子でしょ？ 抵抗とかないわけ？」

「必要なら、どんな手段も使うと言っただろ。それにこんなものは着なれてる」

友香は特に気にせず女子の制服を着ていく伐の姿に少し恥ずかしくなったのか視線を逸らしながら言うが伐は気にする事はなく、

「お前ら、ただ見をするんじゃないよ。金取るぞ」

周りで伐の着替えの様子を男女ともにおかしな視線で見ているCクラスの生徒達に言う。

「……着なれてるって、あなたは何をしてるのよ」

「売り」

「売り？ ……！？」

友香はため息を吐きながら伐に聞くと伐は別に隠す気などないよう

であっさりと答える。

「なんだ？」

「あ、あなた、何をしてるのよ！？」

「慌てるほどの事か？ 結構、やってるヤツはいるだろ」

友香は伐に向かい言うが伐は表情を変える事なく着替えを続けている。

「まあ、こんなもんか？ さすがにこの格好でFクラスの教室に戻れないしな。もう少し、メイクとかもしたいところだったが」

「……私よりかわいい」

伐が着替えを終えると友香は似合いすぎている伐の女子の制服すがたに自信がなくなったように言うなか、Cクラスからは男女ともに伐に向かいおかしいな歓声があがる。

「……おい。そこで固まってないで、次に移るぞ」

「何をするつもりよ？」

伐は自信を失いかけている友香を気にかける事なく言うと友香は返事をするが声には力がない。

「根本の事だ。坂本を呼び出して何かするつもりだろ？」

「……何で知ってるのよ？」

「小物が考える事は単純だからな」

伐は友香が恭二から何かを聞いていると思ったようで友香に聞くと彼女はため息を吐くが、伐は表情を変える事なく言い切る。

「……『Fクラスに協定を結びたい』って、そっちの代表を呼び出すつもりよ」

「なるほど、その間に空き教室になったFクラスの教室に何かするんだな」

「……」

伐は完全に恭二の考えを読み切っており、友香はそんな伐を見て、伐を敵に回さなかった事は正解だと思ったようだが当たりすぎる伐の読みが怖くなってきたようで表情をひきつらせる。

「協定の内容はわかるか？」

「確か。『4時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』だったと思うわ」

「なるほど……それで、お前らが漁夫の利を狙っていると言う情報を流せば坂本はCクラスと協定を結ぼうとする。そこで待ち伏せて協定違反を訴えるわけか？ 卑怯な小物のくせに自分を正当化するなんて……考える事が面白くないな。やっぱり、小物だ」

伐は友香から協定の内容を聞いてつまらなさそうに言うと、

「坂本がくる時に俺も同席する。その後、Cクラスからの護衛だと言って俺と数名、根本のそばに送り込んでくれ」

「護衛？ 他のクラスの生徒は手を出せない決まりでしょ？」

「ああ、だけど、根本の周りに戦えなくても人がいればFクラスへの牽制になる。実際は新学期が始まったばかりだ。どこのクラスに誰がいるかなんてほとんど知れてない。うちのクラスの姫路が良い例だろ？」

「確かにそうね。バレなければ、恭二の周りの人間も試召戦争に回せる。その分、恭二の周りは手薄になる」

伐の作戦に友香は関心したようで頷く。

「そう言う事だ。理解が早いヤツがいると楽だな」

「でも、それって意味があるの？」

伐がくすりと笑うと友香は今更ながら伐の女装する意味を聞くが、

「ああ。俺が何もしないで根本の隣にいとバカどもは俺がFってバラすからな。バレない方がいろいろとやりやすい。お前とBクラスの戦力を削る事も約束したからな。あいつの首をかつ斬るだけじゃすませない」

伐は冷たく妖艶な笑みを浮かべて言い、

「き、期待してるわ」

友香は伐の笑みに背中に冷たいものを感じながら頷く。



## 第28問

「……だけど、放課後までまだ時間があるわよ。あなた、そのまま  
でいるつもり？」

「まあ、バレないようにしないといけないしな。お前らの行動を見  
させて貰って女の仕草でも覚えるさ」

友香は恭二が協定違反を狙っている時間までまだ時間があると言う  
と伐はそう良いながら教室内の女子生徒を妖艶な笑みを浮かべなが  
ら眺める。

「……あなた、あまり、おかしな事はしないでよ」

「……ああ。本来ならうまそうな生娘もいるからな。食事にしたい  
が……ん？」

友香が伐の様子にため息を吐くと伐は少しだけ、残念そうに言うと  
伐の携帯電話がなり、

「……誰だ？」

携帯電話のディスプレイには伐の知らない電話番号が表示されてい  
るため、伐は電話に出ると何者かを聞く。

「坂本雄二だ。康太から番号を教えて貰ってかけてる。黒須、今、  
お前はどこにいる？」

「悪いな。それを言うと霧島に甘えが出そうだから今は秘密だ」

電話の相手は雄二であり、雄二は伐の居所を聞くが伐は答えない。

「そうか。まあ、良い。お前がやる気なのは康太から聞いたしな」

「ああ。今回は個人的にあのクズな小物が気に入らないんでな」

「それに関しては同感だ」

「ちょっと、雄二。余計な事を話してないで黒須君にも判断を求めてよ」

伐は今回の対戦相手である恭二を本気で毛嫌いしているようで吐き捨てるように言う。雄二は伐と同じ意見のようで苦笑いを浮かべて頷くと電話の先から明久が何かを言っている。

「おお。そうだったな。黒須、教室なんだが、お前の予想通り狙われた」

「そうか。破損状況は？」

「まあ、卓袱台が壊されたのと何人被害にあってるかはつかみきれないが私物を盗まれたり、壊された人間もいるな」

雄二は教室が襲われた事と現状を伐に話すがその声に危機感はない。

「小物が単純だと楽だな」

「まったくだ」

「監視カメラと盗聴器はどうだった？」

「さすがに根本本人は襲撃犯に入ってなかったが、証拠としてはバツチリだ。窃盗だしな。俺達が騒げば学園側は警察を入れるのはためらうはずだから、実行犯は短くて2、3日の停学を喰らう事になる」

伐と雄二は恭二が仕掛けた嫌がらせを使いBクラスの戦力を削る事を考えている。

「証拠があるからな。鉄人に突き出すのも良いが、そいつらに裏切りをさせるってのも手だな」

「なるほど、不戦を決め込んで貰うのか？」

「ああ、他にはクズな小物はあいつらをかばう事はしないだろうかな。クラス間の不和を煽るために使うとかな」

伐と雄二の間でつかんだ証拠をどうするかを話し始めていると、

「ねえ。Bクラスの戦力を削いてくれるなら、停学が私達に取ってはベストなんだけど、あなたがBクラスに紛れ込むんだから、クラス間の不和を煽るのはあなたの仕事でしょ」

伐と雄二の会話に友香が割り込んでくる。

「黒須、今のは誰だ？」

「……ああ、聞こえたなら仕方ない。霧島、今のお前の周りには何人いる。そのなかで俺がBクラスに紛れ込んでても冷静に対処でき

るのは何人だ？」

「……俺と秀吉くらいだな」

伐は友香からの言葉で自分が考えている事を説明しないといけなくなり、ため息を吐くと雄二に向かい聞くと雄二は少し考えて自分と秀吉の名前を出す。

「……そうか。それなら、他のメンバーを会話の内容が聞こえないように外してくれ」

「わかった。秀吉、黒須から俺と秀吉だけに話して起きたい作戦があるらしい」

「ワシにか？」

「ああ、だから悪いが明久達は教室から出ていてくれるか？」

「わかったよ。補給試験の場所を前線に伝えて援護してくる」

明久達は素直に教室を出て行き、Fクラスの教室には雄二と秀吉だけが残る。

「それで、黒須。今はどういう状況なのじゃ？」

「ああ。今、俺はCクラスのなかにいる」

「本当か？ Cクラスをうちの味方に引き入れたって事だよな？」

「何？ それはすごい事ではないのか？ これで戦況はだいぶ良く

なつたのであろう」

伐がCクラスに紛れ込んでいると話すと雄二と秀吉は自分達Fクラスに優位な状況に気づき声を上げる。

## 第28問（後書き）

どうも作者です。

なんと言つか戦線に出ない主人公ってのは書いてて問題がないんでしょうか？

書いてる本人すら疑問です。（爆笑）

伐と雄二の最凶の頭脳派コンビは何をしでかすんでしょう？

それに巻き込まれる秀吉の運命はいかに？

そして、Cクラスの女子生徒の貞操は？（爆笑）

書いてる本人がノラ猫くんは最低だと思っています。（苦笑）

## 第29問

「ああ、まだ、代表の小山友香を美味しくいただいてないから、裏切られるかも知れないが」

「あなたは何を言っているのよ？」

伐はCクラスには裏切られる可能性もある事を告げると伐の言葉に友香は声を上げる。

「……あん？ 言っただろ。俺はお前みたいな女は嫌いじゃない。俺があのかつを潰すのはお前が形だけでもあいつのものなのが気に入らないからだ」

「ちょ、ちょっと！？ い、いきなり何を言っているのよ」

「何だ？ お前だって俺が欲しいんだろ。素直に言えば腕によりを込めて可愛がつてやる」

伐は友香の様子に妖艶な笑みを浮かべると彼女との距離を縮めて友香の耳元で彼女理性を削ぎ落とすような甘い声でささやく。

「何？ Cクラスの代表は根本の彼女なのか？」

「……ああ。実際は俺やお前と同じであのかつを毛嫌いしてるみたいけどな。メリットもあるから彼女になっている」

「それは信用できるのか？ 根本が自分の彼女を使って俺達をはめようとしてる可能性はないか？」

雄二は電話の先から聞こえる伐と友香の話に声を上げると伐は簡単に恭二と友香の関係を話すが雄二は友香を疑い始めたように声を上げる。

「俺は信用する価値があると考えているから、ここにいるんだ。どんな人間でも嘘を吐くと何かしら反応がある。今のところ協力をすると良いながらも俺とクズを天秤にかけているようだ。あの小物より俺や霧島の方が良い条件がだせるんだ。こいつはそれを見誤るほど愚かじゃない。と言うか、あのクズをそこまでして守る人間がいると思うか？」

「まあ、いるわけないな」

「……一応とは言え、小山は根本の現彼女なんじゃなかったのか？」  
伐が恭二より友香の方を評価しているような事を言うと友香は頬を少し赤らめ、雄二は伐の言葉を肯定するが秀吉はため息を吐く。

「ん。そうだ。霧島」

「なんだ？」

「一応、お前がBクラスの教室を奪う気はないと言うのを前提で協力を仰いでるんで代表のお墨付きを貰えるか？」

「ああ、なるほど、俺達が勝ったら、Bクラスへ宣戦布告させるわけな」

「それで晴れてこいつはフリーだ。なんなら、あの小物が勝手に自



分を彼女だと言い回って迷惑していたと付き合っていた事実さえなくしてやるう」

「ああ、それは良い考えだな。嫌がる小山を相手に根本がしつこくしてと言えばFFF団がなんとかしてくれるだろ」

伐の言いたい事を雄二はすぐに理解すると話はさらに友香に良い条件になっていく。

「えーと、条件出されてる私が言うのもなんだけど、良いの？」

「ああ、俺達の目的はAクラスだしな。変にBクラスの設備を手にして戦意を削がれるよりは良いし、問題ない。それに取る気もない設備でCクラスとの協定やあのいけすかねえクズを叩き潰せるんだ。俺達にとっても良い話だ」

伐と雄二の話聞いた友香は何か裏があるかを探るように聞くが雄二からの返事は本心であり、何の迷いもなく言い切る。

「それで、これだけの好条件だが、正式にクラスの代表同士で協定を結んでくれると俺は動きやすいんだが」

「……わかったわ。私達CクラスはFクラスと協定を正式に結ぶ。お願いできるかしら、Fクラス代表」

「ああ。こちらこそよろしく頼む」

「どうやら、上手く行ったようじゃのう」

電話での協定ではあるがFクラスとCクラスの間で正式な協定が結

ばれる。

「それで、霧島、しばらくしたら、『Cクラスが漁夫の利を狙っている』と言う噂が聞こえてくるはずだ」

「ああ、卑怯者の根本が考えそんな事だな。事前情報がなければ、Dクラスをふっかけると言って俺からCクラスに協定を結びに行くところだったな。それを協定違反だと言うつもりだったんだろうなでも、俺達はそれにのらない」

「いや、のれ」

雄二はもう恭二の作戦にはのらないと言うが、伐は雄二に騙されたふりをしると言う。

「はあ？ どうしてだ？」

「……なるほど、Cクラスがワシらの味方だとは根本は知らぬ。上手く、根本をはめて倒すつもりじゃな？」

雄二は疑問の声を上げるが秀吉は演技の事に関しては頭が回るのか雄二とは違う答えを出す。

「惜しいが違う。それだとまだスキがつかない。お前らはCクラスが上手く逃がしてくれるから、俺達の間で協定はないふりをして全力で逃げるんだ。俺はそのスキにBクラスに紛れ込む」

「……Bクラスに紛れ込むって言ってもバレたら終わりだろ？」

「そこは変装してCクラスだと言えばどうにかなるだろ」

「ああ、確かにいくら根本でも、まだ、他のクラスの顔と名前は一致しないか」

「そう言う事だ。後は、木下がいるなら……」

「……なるほど、それならCクラスが試召戦争の準備を始めてもBクラスを狙ってるとは思わないな」

伐と雄二の話し合いは戦闘が一時的に中断される4時近くまで行われた。

## 第29問（後書き）

どうも作者です。

伐の友香を気に入ってる発言は友香はどう受け取るんでしょう？

勘違いの元（伏線）は拾えるんでしょうか？

作者にもわかりません。（爆笑）

### 第30問

「友香はいるか？」

伐が雄二と打ち合わせを終わらせしばらくすると何も知らないBクラス代表の『根本 恭二』が彼の近衛兵にあたる生徒と数学の長谷川先生を連れて当然のようにCクラスに入ってくる。

（……長谷川か。文系クラスのクセに数学を持ってくるなんて。教師からの人望もないのか？ まあ、霧島に教科は教えておくか）

友香とCクラスの生徒が恭二を出迎えているのをCクラスの生徒に紛れ込むながらその様子を覗きながら、雄二にメールを送信する。

「ねえ。恭二、本当にFクラスの代表はCクラスに協定を持って結びにくるの？」

「当たり前だ。俺の予想が外れるわけないだろ。Fクラスのバカにここで俺達が待ち伏せしてるなんて思いつかないからな。絶対に引つかかる」

友香は恭二を裏切っている素振りも見せず恭二と話をしており、恭二は自分以上の策士などいらないと言いたげに下品な笑みを浮かべている。

（……あの笑い声を聞いてるとイライラしてくるな。教室から出るか）

伐は恭二の笑い声に嫌悪感しかなかったようで教室のドアを開けた

時、

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

雄二が明久、康太、美波、須川を連れてCクラスの教室にやってくる。

「……代表ですか？ 少し待ってください。小山さん、Fクラスの坂本くんが用があると」

伐は雄二の言葉に少し教室内を覗き込むような素振りをした後、友香に聞こえるように声を出し、

「ちょっと待ってくれる。すぐに行くわ」

友香は教室の奥から返事をするところらに向かって歩いてくる。

「……霧島、上手くやれよ」

「ちよっ！？ お前、黒須かよ！？」

「……反応するな」

伐は友香がくる間に雄二の健闘を祈ると雄二は目の前の少女が伐だと言う事に小さく声を上げて驚く。

「私が代表の小山友香よ。それで何か用かしら？」

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

雄二も友香もすでに打ち合わせされていた事を平然と不自然な素振りを見せずに行い、

（……こいつら、わりと演技派だな）

伐は筋書きを書いた人間のため、笑いをこらえながら2人のやりとりを見ていると、

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね。根本クン？」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？ 根本君！！ Bクラスの君がどうしてこんなところに！！」

友香は振り返り、奥で自分の予想通りに話が進み下品な笑みを浮かべているであろう恭二を呼ぶと恭二が取り巻きを連れてこちらに歩いてくる。

「酷いじゃないか。Fクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言ってるー」

「先に協定を破ったのはソッチだからな？ これはお互い様、だよな！！」

恭二が勝ち誇ったようにゲスな笑みを浮かべるとBクラスの取り巻きに隠されていた長谷川先生が引つ張り出され、Bクラスの生徒が雄二に向けて試召戦争を仕掛けるが須川がそれに割り込む。

「僕らは協定違反なんてしてない！！　これはCクラスとFクラスのー」

「無駄だ。明久！！　根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている！！」

「ま、そゆこと」

「屁理屈だ！！」

「屁理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久、無駄だ。逃げるぞ！！」

雄二は状況の悪さを悟ったと言う空気を出しながら振り返ると全力で逃げ出し、須川以外は撤退を始める。

「逃がすな。坂本を打ち取れ」

恭二はBクラスの生徒に指示を出すとBクラスの生徒はFクラスのメンバーを追いかけて行く。

「坂本くん逃げられたけど作戦は成功なのかしら？」

「当たり前だろ。すぐに坂本の首を取ったって知らせがくるさ」



友香は伐と雄二の作戦が上手く言っている事に笑いをこらえながら恭二に聞くと恭二は自分の作戦思い通りに行っていると思い込んでいるためいやらしい笑みを浮かべる。

（……後は霧島と手腕と姫路の火力しか？ ……いや、少し手伝うか）

伐は西村教諭に補習室に連れて行かれる須川の背中を見送りながら冷たい笑みを浮かべると、

「代表、もう、帰っても良いですか？ あたし、バイトがあるんです」

「あ！？ ええ、みんな、今日はこれで解散よ」

伐は友香に向かい言々と友香はCクラスに解散と言々と伐は女子生徒の制服をきたまま廊下に出て行く。

### 第31問

(……さてと、どうなってるかな?)

伐はCクラスの教室を出た後、空き教室で着替えると雄二達が逃げて行く予定のルートを進んで行く。

(いたけど……どうして、ダーリンと島田はいつもひとまとめなんだ? あいつらは揉めずにはいられないのか?)

伐はBクラスの攻撃を交わしながらも揉めている明久と美波を見つけてため息を吐くと、

「……何だ?」

「黒須、今はどこだ?」

マナーモードになっていた携帯電話がなり、通話ボタンを押すと雄二が伐の居場所を聞いてくる。

「……バカ2人が揉めているところのそばだ。一応、Bクラスのヤツらには気づかれていない」

「なら、少し待機しててくれ。俺達は今から、明久と島田と戦っているヤツらを狙う。後ろに逃げようとしたヤツをやってくれ」

「ああ。了解」

雄二は明久と美波が時間を稼いでいた間に次の手に移ったようで楽

しそつに言つと、伐は雄二が何をするのか理解しているようですぐに頷く。

「それじゃあ、頼ん……」

雄二は伐に最後に何か言おうとするが、伐は最後まで聞かずに電話を切ると、

（さてと、狩りの時間か）

「今度の休み。駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな」

「おのれ！！ 僕が塩水で生活していると言つのになんという贅沢をーああつ！！ おごります！！ おごらせていただきますから置いていかないで美波様！！」

明久が美波におごることを約束した時、

「吉井くん、美波ちゃん無事ですか？」

「瑞希？」

「姫路さん？」

明久と美波の後ろの人だかりが真ん中から別れ、瑞希を中心にしたFクラスの全戦力が現れ、

「長谷川先生、姫路 瑞希以下Fクラス15名が、Bクラスの皆さんに数学勝負をかけます。試獣召喚<sup>サモン</sup>」

瑞希の腕輪の力でBクラスの戦力は一気に削られ、生き残ったメンバーは瑞希の火力に押され気味になっていき、Fクラスの残りのメンバーに次々と首を取られて行く。

「くっ！？ 待ち伏せとはFクラスにも少しは頭が回るヤツがいたみたいだな。撤退だ。代表に状況を知らせるぞ」

何とかFクラスの攻撃から逃れたBクラスの生徒はそう言うその後ろを向き撤退を始めるが、

「……Fクラス、黒須 伐が逃げようとしている卑怯者の手下に数学勝負を挑む。試験召喚<sup>サモン</sup>」

「後ろにも敵だと！？」

逃げてきたBクラスの生徒は伐の登場に更なる動揺を見せると、

「あれは腕輪だ！？ 黒須君、すごいよ」

「ん？ 数学はあまり得意じゃないんだけどな。今回は確かにヤマがあつたからできたと思つたがここまで行つたか」

伐はBクラスの生徒を見て邪悪な笑みを浮かべていると明久が伐の召喚獣に腕輪がついている事に気づき、伐はその言葉を聞き、冷たい笑みを浮かべる。

「どちらか倒さないと助からないんだ。姫路さんには勝てるわけがないし、あいつは1人だ。行くぞ！！」

Bクラスの1人がそう叫び、Bクラス全員が伐に向かい突撃してく

ると、

「さて、俺の腕輪の力は何かな？」

伐は口元を小さくゆるませると、

「なに！？」

伐に向かってきたBクラスの生徒の召喚獣の何体かがなぜか同士討ちを始め出す。

「な、なにがあつたの？」

「ウチにもわからないけど」

「そこで呆けてないでさっさと動け。明日の事を考えると逃がすわけにはいかないんだからな」

明久達、Fクラスの生徒も突如として起きた同士討ちに同様するが、伐は冷静に指示を出し、Bクラスの生徒全員を討ち取り、Bクラスの生徒は全員が西村教諭に補習室に連れて行かれる。

「黒須、あんた、数学できたの？」

「今回はヤマが当たったのとうちのテストは上限が無いんだ。わかる問題や時間がかかる文章問題を捨てた結果だ」

「そんな事ができるんですか？」

「効率の問題だ。巨乳娘は全部、埋めてくタイプだろ。違うやり方

をすると調子崩すから止めておけ」

伐は自分の点数の事など興味がなさそうに言うと、

「黒須の腕輪の能力は『魅了』ってところか？」

「まあ、そんな感じだな。相手を魅了するのは何点差があればできるか。具体的な事がわからんが、まあ、俺らしい。それより、霧島は出てきて良いのか？」

「一応はBクラスも根本から指示されてないヤツはもう下校してるしな。指示があったヤツらは全員補習室送りだ」

雄二は今日の戦果が予想以上で楽しそうに笑う。

「そうか……」

「黒須君、帰るの？」

「ああ。俺の今日の役目は終わったしな。明日も頑張れよ」

伐は群れる気は無いようで1人で下校を始める。

### 第31問（後書き）

どうも。作者です。

伐の腕輪の能力は『魅了』でいつて見ました。

腕輪って教科ごとに能力って違うのかな？

原作で書いてないから、変えても良いのかな？と思ってます。

まあ、伐のテストはヤマをかけるタイプなのでAクラスやBクラスの生徒より変動は大きそうです。

だから、他の教科でも400オーバーも召喚獣を出したら平均以下とか色々やってみたい。

教科で変えて良いなら、他に考えているのは『偽物』、『生成』など、いろいろと試してみたいです。

どう思いますか？

ご意見を聞かせていただけると幸いです。

### 第32問

「……あなた、まさかその格好で登校してきたの？」

翌日になり、伐が女子の制服をきてCクラスの教室に現れたのを見て友香はため息を吐きながら伐に言うが、

「そんなわけないだろ。空き教室で着替えてきたんだよ。昨日、変な視線を向けてたヤツもいるしな。ただみをさせるほど安くねえよ」

伐はくだらない事を言うなと言うと当然のようにイスに腰をかけ、

「それで、俺はBクラスに潜入できそうか？」

「ええ。昨日の放課後にBクラスの生徒が全滅したのを聞いて、流石に焦ってるみたいよ。私から提案する前にブラフでも良いから人が欲しいから、何人が貸してくれと言われたわ」

伐は友香に作戦は上手く行きそうかと確認すると友香は伐と雄二が立てた計画通りに進みすぎているせいか、少し戸惑った様子で答える。

「まあ、小物は最終的には保身に走るからな。なりふり構ってられなくなっただんだろ。哀れだね。退き際も自分の器もわからないヤツは」

伐は恭二のようなタイプに何かあるのか吐き捨てるように言った時、

「静かになさい。この薄汚い豚ども!!」



なぜか、秀吉が女子の制服をきてCクラスに罵声を浴びせながら教室に入ってくる。

「おっ。きたな」

「……作戦とは聞いてるけど、流石にここまで言われないといけないのかしら？」

秀吉の乱入は伐と雄二の作戦のため、伐は楽しそうに笑い、友香はため息を吐く。

「木下、それがお前の姉の本質か？」

「……黒須、お主はそんな格好をしてどうしたのじゃ？」

「その言葉をそっくり返そう」

伐は秀吉が双子の姉の真似をしていると知っているため、クスリと笑い言っと、秀吉は伐の服装に驚くが伐は秀吉に言い返す。

「確かに、そうじゃが、ワシだって好きで女子の制服を着てるわけじゃないのじゃ」

「その言葉もそっくり返そう」

秀吉は文句があるのか口を尖らせると伐は苦笑いを浮かべ、

「演劇部なんだろう？ 迫真の演技つてのを見せてくれよ。周りがCクラスがAクラスに攻め込む準備があるって勘違いするほどのな。」

期待してるぞ」

「そこまで言われると役者冥利に尽きるのう」

秀吉の役者魂を煽ると秀吉は真剣な表情になり、

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達に相應しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから!!」

Cクラスの教室を出て行く。

「木下さんって、あれが本質なのかしら？」

「さあな。でも、弟が真似をしてCクラスを挑発するように言っていてあそこまでするんだ。学園じゃ、猫をかぶってるんだろ」

友香は秀吉の背中を見送りながら、苦笑いを浮かべると伐は興味なさそうに言い、

「次はお前らの番だぞ。木下が迫真の演技を見せたんだ。無駄にするなよ」

「わかってるわよ……」

友香に何かをしろと言うと彼女はため息を吐いた後、大きく深呼吸をすると、

「Fクラスなんて相手にしてなれないわ!! Aクラス戦の準備を

始めるわよ!!」

「おおおっ!!!!」

友香が叫ぶと事前に打ち合わせをしていたCクラスの生徒は大声をあげる。

「これで良いかしら?」

「木下の後だから、多少、わざとらしいが上出来だ」

友香は伐に聞くと伐は彼なりの言葉で彼女を誉め、

「それで、いつ頃から、俺はクズの近くにいけるんだ?」

「さあね。恭二は後で指示を出すって言ってたから、もうすぐくるんじゃない」

恭二の指示を待つ事になり、顔をしかめると、

「あなたにも苦手なものがあるのね。なら、恭二のそばは誰かを送れば良いでしょ?」

「仕方ないだろ。木下は演技でクズに取り入れられるかも知れないがあいつじゃクズには勝てないしな。作戦の意味を理解していないなら、理解できるものがこの役目をする。できるとしたら、俺か霧島だけだ。霧島は代表だ。出すわけにはいかないだろ」

友香は伐をからかうように言うと伐は消去法で自分以外にはできない役だと言い切り、しばらくすると恭二が昨日とは違うBクラスの

生徒を引き連れて教室に入ってくる。

### 第33問

「友香、これは何の騒ぎだ？」

恭二は教室に入ってくるなり、Aクラスとの開戦準備が聞こえたため、友香に声をかけると、

「聞こえたんでしょ。私達はAクラスに試召戦争を仕掛けるのよ。木下優子……許せないわ。よりもよって私達の居場所はこのFクラスって言ったのよ」

友香は伐と雄二から言われた指示通り、Aクラスと試召戦争を始める準備と言う名目でFクラス対Bクラスの決着がついた時にBクラスを攻めるために演技を続けている。

「熱くなりすぎだ。少し落ち着け」

「これが落ち着いていられるもんですか！！ 恭二、悪いわね。あなたから頼まれていた。人員の貸し出しは無理よ。こっちはAクラス戦に全力で当たりたいから、そんな事してるヒマはないわ」

「ちょっと待て。友香、それは困る！？」

恭二は友香の性格を知っているようにため息を吐きながら、彼女をいさめようとするが、演技のため彼女の怒りは治まるわけがなく、昨日、恭二と約束をした人員の貸し出しを拒否すると恭二は慌てる。

「恭二、あなた達の相手は所詮、Fクラスでしょ。私達が相手にするAクラスとは違うの。それに付き合う時に約束したわよね。私は

頭の良い人が好きなの。Fクラス程度に負けるような事をしないで  
よね!!」

「そ、それは当然だ。だからこそ、人員を貸してくれ」

「だから、そんな余裕は無くなったの!! わからないの?」

友香は怒鳴り散らしながら、恭二に向かい言うと恭二は慌てて頷く  
がこのままではFクラスに負ける可能性を払拭させるために人員の  
貸し出しを再度、友香に頼むが、彼女は当然、断る。

(……クズのあの情けない顔、笑えるね。まあ、このままやってク  
ズに人員の貸し出しを諦められても困るから、そろそろ行くか?)

伐は友香に怒鳴り散らされてたじたじの恭二を携帯で映していたが  
次の行動に移ると決めたように携帯を閉じると、

「……代表、あの1つ提案があるんですけど」

「何よ!! えーと、ごめんなさい。まだ、名前を覚えてなくて」

「黒須 ミサです」

伐は友香に声をかけるとあまりまだ友香と面識がない女子生徒を演  
じ始める。

「それで提案って何?」

「えーとですね。私はCクラスに入れたんですけど、振り分け試験  
はたまたまヤマが当たっただけで、恥ずかしいんですけど、そんな

に頭つて良く無いんですよ。だから、Aクラス戦の前に頭の良い人に勉強を教えて貰えたら良いなあって」

「どういう事？」

「ですから、Aクラスは木下優子さんが言っただみたいに完全に私達Cクラスをなめてると思うんですよ。私達はAクラスと戦うために少しでも戦力を上げないといけない。それで、せっかくだし、Bクラスの男の子に勉強教えて貰いたいなあって」

伐の演技も相当なもので照れくさそうに頬を染め、小さく舌を出して言つと恭二の後ろについてきていた男子生徒達は色めき立つ。

（……1段階、突破か？）

「……確かに、Bクラスは文系中心のクラスだし、戦闘教科を文系に絞れば勝てる確率は上がるかも知れないわね」

伐は男子生徒達の反応に腹のなかでほくそ笑むと友香は伐の提案にはCクラスにとっても利があるように考える素振りをする、

「そうだ。開戦中にBクラスで勉強を見てやる。それなら、1人やCクラス連中でやるよりは効率が良い」

（……あのクズ、さらつとCクラスもバカにしたな。気づいたヤツもいるな）

恭二はのせられてるとは考えてもいないようで伐の意見に賛成するがその言葉にはCクラスをバカにしている節があり、それに気づいたCクラスの数名が恭二を睨みつけているが、彼は気づく事はなく。

「……そうね。文系が苦手な人、5、6人で良いかな？ 黒須さんのところに集まって。黒須さん、しっかりとお願いね」

「はい」

友香はBクラスへ行くメンバーの中心を伐に指名すると伐は頷き、5人のCクラスの生徒を連れて、

「皆さん、お願いします。後は放課後に個人授業がある事を期待しても良いんですね？」

男子生徒のなかにいた、Fクラスの教室襲撃犯に的を絞り誘惑するように言う。

「さてと、そろそろ、バカどもと戦争を再開する時間だ。行くぞ」

恭二は人員を借りたためか強気になっているようでBクラスの生徒と伐を入れたCクラスの生徒を従えて、Bクラスに戻って行き、

「上手くやってよ。黒須」

友香は閉まった教室のドアを眺めながら心配そうにつぶやく。



### 第33問（後書き）

どうも作者です。

Bクラスに潜入を果たしたノラ猫くん。

ばれずにいけるんでしょうか？

Bクラス戦も終盤に入ってきました。

どう根本恭二をいたぶるか？

オリ主の伐が決着をつけるのか？ 原作通り康太が決めるのかはた

また第3の選択か？

どうしよう？

### 第34問

「えーと、9時から、試召戦争の再開でしたよね？」

「そうだよ」

伐はBクラスの教室に入ると教室のなかを見渡し、恭二が座る席を確認する。

「戦争って、どんな感じ何ですか？ 私達、まだ、試召戦争を始めてないから、いろいろと教えて欲しいなあ」

「教室の前まで攻められてるけど」

伐は現在の状況を確認するために、甘えるような声で昨日のFクラス襲撃犯の1人にすり寄ると、今の状況を教えてくれる。

「教室の前まで？ 代表の根本くんが閉じ込められてるのはマズいんじゃないですか？ 昨日、帰る時にFクラスの姫路さんの召喚獣の攻撃を見ましたけど、逃げ場のない教室に彼女が入ってきたら、いくら、姫路さんが消耗しているとは言え……」

「大丈夫。大丈夫。彼女を無力化する方法も考えているから、なあ、代表」

「ああ。俺の作戦に間違いはない。姫路はすぐに戦えなくなる」

伐は心配そうな表情をするが、瑞希は敵ではないと恭二を中心にしたBクラスの生徒達は笑う。

(……その卑怯な笑み。俺が凍り付かせてやる)

伐はその様子に表情に出す事なく、冷たい笑みを浮かべると、

「クズはいるか？」

「お前、坂本！？ いきなり、何だ？ 再開にはまだ10分予定があるぞ」

雄二がBクラスを訪れ、Bクラスの生徒は驚きの声をあげる。

「なんだい？ Fクラスじゃ、俺達、Bクラスに勝てないとわかって降参でもしに着たのか？ 坂本」

「いや、昨日は汚い手を使われたからな。今日はこっちの番だと言いに着たのと昨日決めた再開時間を確認しにきただけだ。昨日みたいに卑怯な手を使われたら、たまったもんじゃないからな」

恭二は雄二の登場に彼を挑発するように言うが、やはり、雄二の方が恭二より上手であり、彼の安い挑発にのる事なく、恭二を挑発仕返ししながらも、Bクラスに潜入した伐の位置を確認する。

「卑怯な手？ 使ったのはそっちだろ。協定違反は立派に卑怯な手だと思うぜ」

「かもな。だけど、学園の備品を壊すのも窃盗も十分な犯罪だと思うぜ」

「ああ。噂でFクラスが回復試験を受けられなくなつたと聞いたな。

勘違いするなよ。俺達はそれに関わっていない」

「まあ、そう言うとは思ったよ。けどな。俺達は試召戦争の勝ち負けも大事だがな。人の大切なものに手を出したヤツらは絶対に許さない。勝負に関係なく、犯人を捕まえて鉄人に引き渡す。学園が簡単な処分で済ませようとしても窃盗は犯罪だからな。警察を介入させて退学まで絶対に追い込んでやる」

雄二はFクラス襲撃犯がこのなかにいる事を監視カメラの映像を確認して知っているため、犯人の目星はついていると言いたげに恭二に向かい宣言した後、襲撃犯の顔を眺めて行くと犯人達は監視カメラで証拠を取られている事は知らないが罰が悪そうに表情をしかめる。

「俺の話はここまでだ。見下した人間達に敗れる姿。楽しみにしてるぜ」

「残念だけど、負けるのはおたくらだぜ」

雄二は恭二に向かい言つと恭二は雄二を小バカにするように笑うが雄二はそれを気にする事なく、教室を後にする。

「代表」

「はったりだ。坂本はカマをかけてきたただけだ。こちらを動揺させるためにな」

襲撃犯の1人が伐とCクラスの生徒に聞こえないように恭二に声をかけると恭二はFクラスは何も証拠などつかんでないと根拠もなく言い切ると、

「開戦の準備を始めろ。Cクラスは俺の周りに集まれ。おい。こいつらの勉強を誰か見てやれ」

偉そうに指示を出し始め、

（さてと、それじゃあ、俺は襲撃犯達の懐柔に移りますか？）

伐は近寄ってきた襲撃犯達に『Fクラスは教室を襲撃した犯人を全員知っている。退学になりたくなかったら、大人しく自分の指示に従うように』と言う脅しとともに犯人達しか知らない情報を耳打ちして行き、恭二の周りにいた襲撃犯達をすべて傘下に納めるが恭二はそれに気づく事はなく、

「ドアと壁を上手く使っくんじゃ！！ 戦線を拡大させるではないぞ！！」

試召戦争は再開され、秀吉の指示が廊下から響く。

### 第34問（後書き）

どうも作者です。

ついに行動に動き出したノラ猫くん。

すでにネズミ（根本）は罠にはまりネズミの喉元にはノラ猫の爪が食い込んでますが、ネズミは気づく事はありません。

後はどれだけネズミをいたぶるかです。（悪笑）

なんかめちゃくちゃ楽しみになってます。

話は変わって宣伝です？

バカテスで新作を始めました。

『僕と歪んだ愛情表現？』と言う作品です。  
興味がありましたら読んでみてください。

### 第35問

(……巨乳娘の反応が悪いな。これはクズが何かを仕掛けてるな。

ダーリン、木下が上手くフォローしてるがこのままじゃ、まずいな)

伐は試召戦争の状況を分析していると瑞希の調子が悪いのだろうか、FクラスはBクラスに押し返され始めている。

(……俺がでるか？ いや、まだダメだ。この状況じゃ、やられるだけだ。ん？ 原因はあれか？)

伐は戦況を回復させるために、何かを探そうとすると恭二はニヤニヤと下品な笑みを浮かべながら、可愛い封筒を瑞希に見えるように振っている。

「っ!!」

(……ダーリンも気づいたようだな。あれが巨乳娘を無力化してるものか？)

明久も恭二が仕掛けているものに気づいたようで恭二を睨みつけるが恭二はニヤニヤと下品な笑みを浮かべ続けている。

「……あれはなんだ？」

「中身はわからない。代表があれば姫路さんを無力化できるって」

「そうか……」

伐は先ほど懐柔した男子生徒に聞くが誰も封筒の中身は聞かされていないようで首を振ると、

「姫路さん、具合が悪そうだから、あまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ………！！」

明久には恭二が持っている封筒に心当たりがあるようで恭二を睨みつけると瑞希に下がるように言い、戦線を離脱する。

（……ダーリンは何か気づいたようだな。霧島にあいつに協力するようにメールを出すか）

伐は明久の様子に彼をフォローするように雄二宛てで素早くメールを打つと、雄二からは『わかった』とすぐに返信がある。

（……姫路が無力化されてるなら、どうやってスキを作る？ 康太が入ってくるまでまだ時間があるし、その間にどうにかしないと……ん？ 何だ？ この音は？）

伐は次の手を考え始めると隣のDクラスの教室から壁を叩きつけるような音が響き出す。



（……ダーリン、お前、巨乳娘のために頑張るな。舞台は俺が整えてやる）

伐はその音に何が起きてるか理解したようで小さく笑みを浮かべる。

「お前らしい加減諦めるよな。昨日から教室の出入りに人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

瑞希が戦力にならないためか、雄二が本体を連れてきて直接指示を出し始め、恭二と挑発しあっているが、

（……そろそろ時間だな）

（ああ、明久のフォローを頼むぞ）

（ああ、今回は協力してやる）

雄二と伐はお互いに何を言っているかわかるのか視線だけで会話をすると、

「……態勢を立て直す！！ 一旦下がるぞ！！」

「どうした？ 散々ふかしておきながら逃げるのか！！」

雄二は悔しそうな表情をして、退却を始めだし、恭二はその姿に高笑いを浮かべて追撃の指示を出した時、豪快な音を立ててBクラスの壁が崩れ落ち、

「くたばれ、根本恭二いっつ!!」

明久と美波を中心とした奇襲隊が現れるが、教室にわずかに残っていた近衛部隊が恭二への攻撃をふさぎ、

「は、ははっ!! 驚かせやがって!! 残念だったな!! お前らの奇襲は失敗だ」

恭二は明久達をバカにするように笑うが、

「……知ってるか？ 奇襲は2回続ける事で初めて効果を発揮するんだ」

伐は窓を明けると康太と保健体育の教師が現れ、

「……Fクラス、土屋 康太」

「俺が受ける!!」

康太が恭二に勝負を挑もうとした時、1人の男子生徒が割り込み。康太に一撃で葬り去られる間に恭二は逃げ出し始めているが、

「……言っただろ。奇襲は2回続ける事で初めて効果を発揮すると……Fクラス、黒須 伐があのかズに保健体育勝負を挑む。試獣召喚<sup>ン</sup>」

伐が召喚獣を呼び出すと伐の召喚獣はわずかに400点をオーバーしており、腕輪の能力が発動する。

「……魅了じゃないのか？」

「お、驚かせやがって何も起きないじゃないか!!」

伐は昨日、使用した腕輪の能力が起きずに怪訝そうな表情をすると  
恭二は強気を保ちたいのか高笑いを浮かべるが、

「だ、代表!! 点数が!？」

「あれ、根本の点数下がって行つてない？」

「本当だ!？」

恭二の召喚獣の頭の上に表情されている保健体育の点数が凄い勢いで減っている。

「毒か？ まあ、今回の最後を決めるには良いかもな」

伐は妖艶な笑みを浮かべると、

「ダーリン。最後はお前の仕事だ」

「僕？」

「ああ……お前はお姫さまを助けに来たんだろ？ なら、最後の敵はお前が殺れ」

伐は明久の肩に手を置くと恭二にトドメを刺せと言つ。

「わかったよ。Fクラス、吉井 明久がBクラス、根本 恭二に保健体育勝負を挑む!!」

「ちょっと待て！！　よりもよってこのバカに！！」

「……お前にとっては1番の屈辱だろ」

明久の召喚獣の木刀が恭二の召喚獣を叩きつけると恭二の点数は0になり、Fクラス対Bクラスの試召戦争に終止符が打たれる。

### 第35問（後書き）

どうも作者です。

明久に決着をつけさせて見ました。

観察処分者の明久に負ける事は根本にとって最大の屈辱だと思ったからです。

次は楽しい戦後処理

ノラ猫くんはどうするんでしょう？

明久での決着に文句がある方は優しくお願いします。

### 第36問

「……康太、悪かったな」

「……………謝る必要はない。伐の判断は間違ってない」

伐は明久が恭二を倒したのを見た後、明久に恭二の首を取らせた事を康太に謝ると康太も今日のヒーローが明久だと思っているようで小さく首を振る。

「……………それより、伐が明久のために動いた事が俺は嬉しい」

「……………ただのノラ猫の気まぐれだ」

康太は伐が明久のためにした気づかいに小さく頬を弛ませると伐はめんどくさそうに頭を掻く。

「明久、ずいぶんと思い切った行動に出たのう」

「ホント。明久、お前はバカだよな」

伐と康太が話している間に雄二と秀吉が合流し、明久の様子を見て2人が苦笑いを浮かべていると、

「うう……………。痛いよう、痛いよう……………」

「……………当たり前だ。素手で壁を壊すバカがどこにいる」

「……………少なくともここに1人いる」

明久は恭二を倒した事で気が抜けたのか、手の痛みに涙をためているのを見て、伐と康太は苦笑いを浮かべる。

「……おい。誰か保健室から薬をパクってこい」

「ウチが言ってくるわ」

伐はけだるそうに言うのと美波は教室を出て行く。

「明久を保健室に連れて行かなくて良いのか？」

「……どうせ、このバカは戦後処理が終わるまで動かねえよ」

秀吉は伐の指示に疑問を感じたようで伐に向かい聞くが伐はくだらない事を言うなと言うと懷に手を入れるが、

「……タバコ、忘れた」

目的のものは着替える前の自分の制服のなかである。

「そう言えば、なんで黒須君はそんな格好してるの？」

「似合うだろ？」

「いや、確かに似合うんだけど……ムツツリーニ、その写真ちょうだい！！」

その時、明久は初めて伐が女子の制服をきている事に気づいたようで伐に聞くと伐は小悪魔のような笑みを浮かべて、スカートの裾を

あげると明久の視線は伐の太ももに釘付けになり、康太は写真を写している。

「……康太、モデル料な」

「……………わかってる」

伐は康太の行動を責めるわけでもなく、康太に言つと康太は頷く。

「黒須、持ってきたわよ」

「……ああ。ダーリン、手を出せ」

美波が救急箱を持ってくると伐は美波から救急箱を受け取ると中身を確認して明久に言う。

「えっ！？ 黒須君がやってくれるの？」

「この中で、まともな手当てをできそうなヤツが他にいるか？」

「……確かに、美波に頼むと傷が増えそうだね」

「アキ、お望みなら、本当に増やしてあげるわよ」

伐の言葉に明久は周りを見回した後、美波にケンカを売るように言う  
と美波は額に青筋を浮かべる。

「……騒ぐな。島田、ツンデレも流行りかも知れないがケガ人を増やす気なら、お前を保健室から出てこれなくするぞ」



「……なんか、お前が言つと別の意味に聞こえるな」

「そつちの意味で言つてるからな。それより、霧島、お前は戦後処理に移らなくて良いのか？」

伐は明久の周りで声をあげている美波が邪魔なようですつと雄二は伐の言葉に苦笑いを浮かべるが伐は表情を変える事なく、いつまでも戦後処理を始めない雄二に聞く。

「今回はあのクズに言いたい事があるのは俺だけじゃないからな。それに明久に負けたのがそれなりにショックみたいだぜ」

「だろうな。ご自慢の作戦も崩され。よりにもよつて、文月学園の汚点のダーリンに負けたんだからな。俺なら、自殺を考える」

「まっただくだな」

伐と雄二、Fクラスが誇る性悪が楽しそうに笑うなか、

「これつて、黒須君と雄二に誉められてる？」

「……いや、確実にバカにされておるのじゃ」

明久はどこで誉められてると思つたのかわからないがそう言つと秀吉はため息を吐く。

「何だと2人とも表出る！！」

「……黙れ。ダーリン、ネジ切りたいのか？」

「う、ごめんなさい!？」

明久は秀吉の言葉に伐と雄二を怒鳴りつけるが、伐がドスをきかせて言う。明久は慌てて謝る。

### 第37問

「……」

明久が謝る様子など伐は関係ないのか手当を続けているが、不意に何かを思い出したのか、

「……そうだ。戦後処理まで、時間がまだあるみたいだし、あのクズを死なないでいどにいたぶれ」

伐がそう言うのと伐の言葉を待っていたかのようにBクラスの教室には巨大な十字架が建てられ、恭二は貼り付けにされて行く。

「……お主、敗者にそこまでやる必要はなかるうに」

「あるんだよ。あのクズを見てるとイラつくんだ。小物のくせに自分を過大評価して他人の足を引っ張る事しかないクズ。できれば俺の手でネジ切りたいくらいだ」

秀吉は伐に対する恭二の扱いにため息を吐くと伐は不機嫌そうに言う。

「俺も黒須に賛成だ。明久もそうだろ？」

「うん。根本はやっちゃいけない事をしたからね」

「やっちゃいけない事？」

雄二も伐の意見に賛成なようであれため息を吐きながら明久に話をふる

と明久は恭二が瑞希に使った手が許せないように表情をしかめると美波は意味がわからないように首を傾げる。

「簡単な事だ。あのクズは女を泣かせたそれだけだ」

「……お前、実はフェミニストなのか？」

伐は詳しくは恭二が瑞希にやった事はわからないが確信はついていると言うと雄二は意外そうな表情で聞き返すと、

「……そんなもんになったつもりはないがな。昔、世話になった人の教えなんだ。『女を泣かせるのはベッドの中だけにしろ』ってな」

伐は表情を変える事なく答え、その言葉に空気は一瞬、凍りつくが、伐が気にするわけがなく、

「……終わったぞ。ダーリン、包帯がキツイとかあるか？」

「あ、ありがとう。大丈夫だよ」

「……そうか」

明久の治療を終えると立ち上がる。

「ん？ どこか行くのか？」

「……まだ、戦後処理には時間がかかるだろ。着替えといっぱくしてくる。……ん？ 忘れてた。ダーリン」

「何？」

「さつき、クズを倒した時に抜き取っておいたから、巨乳娘に返しておけ」

雄二は伐が立ち上がるのを見て聞くと伐はめんどくさそうに答えた後、恭二を倒した後に恭二から『瑞希の封筒』を取り返していたように明久に渡す。

「どうして？ 黒須君が取り返してくれたなら、黒須君が姫路さんに返せば良いじゃないか」

「……ダーリン、お前、バカか？ ……悪いな。バカの代名詞だったよな」

明久は伐から瑞希の封筒を預かった意味がわからないため首を傾げると伐はため息を吐く。

「明久だぞ。言ってもムダだ」

「……………確かに」

「ちょっと、雄二もムツツリー二もここはフォローするところだね！？」

雄二と康太は伐の言葉に激しく同意なようで大きく頷くと明久は大声をあげる。

「……ダーリン、お前はお姫さまの大切なものを取り戻すために壁までぶち破ったんだ。その正当な報酬ってとこだ」

「報酬？」

伐なりに明久を評価しているようだが、当の本人は意味を気づく事なく、首を傾げる。

「……めんどくせえな。さっさと返してこい。俺はいつぶくしたいんだ。時間をとらせるな」

「わ、わかったよ」

伐は不機嫌そうに明久を睨みつけると明久は慌てて教室を出て行く。

「……霧島、いつぶくしてくるから、戦後処理は少し待っててくれ。着替えといっぱくだから、10分くらいで帰ってくるから」

「ああ。今回の功労賞は間違いなく明久だが、次はお前だしな。戦後処理にお前の言い分も取り入れたいしな。どんなひどい罰を与えてくれるか、楽しみにしてるぞ」

「ああ」

伐はけだるそうに教室を出て行く。

### 第37問（後書き）

どうも作者です。

戦後処理……なかなか進みませんね。

次はオリジナル予定です。

美春と友香、どっちで遊ぼう？

### 第38問

「……あなた、そんな格好で何をしているのですか？」

「ん？ 美春だったか？」

伐は着替えに行く途中で、Dクラスとの試召戦争で知り合った『清水 美春』に声をかけられる。

「あなたはやつぱり、変態だったんですね」

「これか？ 勘違いするな好き好んでこんなものを着る趣味はねえよ」

美春は伐を汚物を見るような目で見るが、伐はその視線を気にする事なく言うつと、

「俺はどちらかと言えば、こついつのを脱がすのが趣味なんだ」

美春との距離を縮めると彼女の制服から、ネクタイを抜き取り、彼女を壁に押し付けるような体勢で美春の耳元でささやく。

「美春はあなたなんかに脱がされる趣味はありませんわ！！ 美春はお姉さまと……」

「なら、何で、顔を赤くしてるんだ？ 俺にわかるように説明してくれないか？」

美春は伐の行動に驚きながらも伐をはねのけようとするが、伐は彼



女の腕をつかみ体勢は変わらないまま彼女の耳元でささやくと彼女の顔はさらに赤みを帯びて行く。

「そう言えば、貸しがあつたな。作戦とは言え、こんな格好してたせいか、ストレスが溜まってきてるしな。いつぶくしておさめようとも思つたが、お前の肢体で解消するのも良いな」

「な、何を言うのですか！？ み、美春の初めてはお姉さまに捧げると決めて……」

「初物と言われて引くと思うか？」

伐は妖艶な笑みを浮かべて美春を舐めまわすように見ると彼女は全力で拒もつとすると伐は美春の首筋に口づけをする。

「な、な、な!？」

「お姉さまが良いと言つてたが、このままの格好ならお前も充分に楽しめるだろ？ まあ、始めれば格好なんて関係なくなるんだけどな」

「ちがつ!？ 美春は女子の制服が好きなのではないです。美春はお姉さまを愛しているんです!！」

「だから、言つただろ。愛も快樂の前じゃ意味がなさないと。わからないようだから、肢体に直接教えてやるよ。まあ、廊下でやる趣味はないしな。屋上でも行くか？」

伐はすでに自分のペースに巻き込まれてわけがわからなくなっている美春の手を引っ張り歩き出す。

「ちょっと、待ちなさい！！ 美春は美春は」

「……何を焦ってるんだ？ 冗談に決まってるだろ。今はお前で遊ぶより、もっと楽しいお仕置きタイムの前だからな。お前の初めてはもう少し預けておいてやる」

美春は本当に伐に食べられると思っているようで強気な彼女にしては有り得ないくらいに狼狽し始めると、伐はその様子にため息を吐くと冗談だと言つと、

「ホ、ホント？」

美春は解放されたのに安心したのか安堵のため息を吐くが、

「……まあ、今日は貸しを返して貰う日じゃなかった。ただそれだけだ。時がきたら必ず貰うさ」

「あ、あん」

伐は再度、美春の首筋に口づけをすると美春の口からは彼女の意志に反して甘い声が漏れる。

「……これは俺の所有物の証だ。後で可愛がってやるよ」

「……」

伐はそう言つと美春を置いて歩き出し、彼女は腰が抜けたのかその場にへたり込む。



### 第38問（後書き）

どうも。作者です。

美春で遊びましたが、この小説はそのうち18禁になるかも知れません。（爆笑）

美春はこんなキャラじゃないと思う方のために言い訳を。

伐の目指しているところに最高捕食者があります。

食物連鎖で例えると

伐 美春 美波 明久の順です。

美波を食べようとする美春を食べようとする大型の肉食獣ですね。

（苦笑）

まあ、実際は美春を清涼祭に引っ張り出す伏線だったりします。彼女は清涼祭にどうかかわってくるんでしょう？（悪笑）

いつもの事ですが批判は優しくお願いします。

### 第39問

「……おい。俺は『殺さない程度に殺れ』と言わなかったか？」

伐が着替えを終えて、Bクラスの教室に戻ると怪しい覆面を被ったFクラスの生徒達の攻撃に恭二は虫の息である。

「ん？ 帰ってきたか？」

「……黒須、お主、殺れと言ったり、殺すなと言ったり、どちらなのじゃ？」

伐の声に雄二と秀吉が気づき声をかけると、

「んなもん決まってるだろ。俺が殺るんだ。おい。そのクズをおろせ。後は俺が殺る」

伐は当たり前だと言い切るとクラスメート達に指示を出し、

「寝たふりしてないで起きろよ。ゴミクズ」

「うほっ!？」

倒れ込んでいる恭二の腹を躊躇なく蹴り上げると恭二の表情は歪み、気を失いかけていた意識が引つ張り戻される。

「よう。気分はどうだ？」

「見ればわかるだろ。最悪だ」

伐は相変わらず、恭二を汚物を見るような視線で彼の髪を引っ張り、顔を上げさせると、恭二は苦虫を噛み潰したような表情をしながら、伐を睨みつける。

「そりゃあ、良かったな。最悪な粗悪品のクズにはふさわしい」

「くっ」

伐は恭二の様子に口元をゆるませると恭二は伐から視線を逸らす。

「おい。黒須、そこまでにしろ。そいつが死んだら、後が面倒だ」

「大丈夫だ。知ってるか？ 1日に出る行方不明者って結構いるんだ。上手く処理してくれるヤツらにも心当たりがあるしな」

伐の行動に雄二がため息を吐きながら、止めに入るが伐はただ冷たい笑みを浮かべて言う。

「それでもだ。だいたい、根本に死なれると、俺が立てた計画から外れちまう。殺るなら、それが終わってからにしろ」

「……そうだな。殺るより、生きて生き恥を晒し続ける方がこいつには屈辱的だしな」

「ああ。すでに明久にやられた時点でこいつの安いプライドはズタズタだけだな」

雄二は伐をいさめるとニヤリと笑い、

「さて、それじゃあ役者もそろったし、嬉し恥ずかし戦後対談とい  
くか。な、負け組代表？」

「……くっ」

雄二は恭二の前に用意された椅子に座ると恭二は唇を噛み締める。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らにはズタズタにされて  
不備しかない素敵な卓球台をプレゼントするところだが、特別に免  
除してやらんでもない」

「ちよつと、坂本、どういう事よ」

雄二がニヤリと笑い、設備交換免除と言う言葉を出すと美波が声を  
あげ、雄二の言葉にFクラスの生徒だけではなく、Bクラスの生徒  
もざわざわと騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここ  
がゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放  
してやるうかと思う」

雄二の言葉でFクラスは納得したような表情になるが、恭二と伐に  
脅されている生徒はこれから突きつけられるであろう難題に表情を  
歪めると、

「……条件はなんだ？」

恭二は力なく言う。

「条件？ それはお前だよ。負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直、去年から目障りだったんだよな」

雄二は恭二を睨みつけるが恭二を誰もフォローする事はなく、恭二自身もそれを理解しているようで何も言わない。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて試験戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば今回は設備については見逃してやつても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……………それだけで良いのか？」

恭二は雄二の言葉に疑うような視線を送るが、

「ああ。Bクラスの代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら、俺は見逃そう。後は黒須しだいだ」

雄二は楽しそうに笑いながら、先ほど秀吉が着ていた女子の制服を取り出す。



### 第39問（後書き）

どうも、作者です。

ようやく始まった戦後対談。

明久は今は瑞希のところにいますが制服は取り上げます。  
なんとなくです。

さあ、雄二から根本の処理を任された伐は何をするんでしょうか？  
（悪笑）

## 第40問

「ば、馬鹿なことを言うな！！ この俺がそんなふざけたことを…  
…！！」

恭二は慌てふためくが、

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！！』

『任せて！！ 必ずやらせるから！！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！！』

Bクラスの生徒全員が雄二の決定に頷く。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！！ よ、寄るな！！」

雄二は楽しそうに笑うと恭二は当然、拒否をするが、Bクラスの生徒達は力づくで恭二を黙らせようとする。

「まあ、待て。俺からもそのクズに言う事がある」

「なんだ？」

「一応は和平交渉での決着だけだな。そのクズが後で仕返しをしてくる可能性が拭えないからな。一応な。俺達がAクラスとの対決を終えるまでBクラスの回復試験は中止だ。これが守れなかった場合

は、俺が個人的につかんでいるお前らが知られたくない情報を公表させてもらう」

なぜか、伐がBクラスの生徒達を止め、恭二が安堵のため息を吐いているなか、雄二が首を傾げると伐は友香との約束が上手く行くように条件を出すと恭二の指示を受けてFクラスの教室を襲撃した生徒以外にも恭二の下でそれなりに甘い汁をすすっていた人間もいるようで悔しそうに頷く。

「後、霧島。その制服はすでにムツツリ商会に予約が入り、今もオークションで値段がつり上がっている。そのクズのために価値を下げるわけにはいかない」

「……そうか。それはすまなかったな」

「……確かに、受け取った」

伐の言葉に雄二は苦笑いを浮かべた後、康太に『秀吉が着た制服』を渡す。

「……お主達、今の会話はなんじゃ？」

「だから、さっき俺が着た制服で」

「……それはすでに買い手がついてる」

秀吉は今までの会話に当然の疑問を持つが伐と康太が気にするわけもなく、

「なら、どうする？　すでに女装は必須だろ？」

「……ああ、康太、すまない。不本意だろうが頼めるか？」

「……………仕方ない」

雄二は恭二に女装させる事はもう外せなくなっているため、伐に聞くと、伐は康太に何かを頼むと康太はものすごいスピードで『チャイナ服』を作り上げる。

「このスリットがキモいだろうな」

「全くだな」

伐と雄二は康太が作り上げたチャイナ服を見て頷くと、

『なら、それを着せれば良いんだな』

「く、くるな!？」

Bクラスの生徒達は康太からチャイナ服を受け取り、恭二が叫ぶと、

「待て。まだ、話は終わってない。悪いが、誰か、DクラスとCクラスに行つて生徒達を呼んできてくれるか？ そうだな。Bクラスの協定を結んでいたCクラスは全員呼べ。俺達にケンカを売る意味を教え込んでやる。後は……………そうだ。島田、お前がDクラスに行つて、倒錯娘を連れてこい」

「美春を？ いやよ。ウチの身が危険だし」

伐は楽しそうな笑みを浮かべて恭二の痴態をFクラスとすでに協定

を結んでいるDクラスとCクラスに見せると言うが、美波は美春と関わる事を全力で拒否する。

「お前は鬼か！？　こんな姿を友香に見られたら、俺は！！」

「何を言ってる？　お前に拒否権などあるわけないだろ。お前は卑怯な手を使ったんだ。オイタをしたヤツには罰が与えられるのは当然だろ？」

恭二は未だに友香が自分を裏切っていたとは思っていないようで伐に向かい叫ぶが、伐は表情を変える事なく言い切り、

「島田、Dクラスにいかないなら、隠れている。せつかくのイベントなんだ。俺は優しいから、みんなで楽しまないといけないだろ？　お前ら始めて良いぞ。土台が腐ってるから、ムリだと思いがかわいくしてやってくれ」

『ムリだよ。黒須くんも言ってたでしょ。土台が腐ってるんだから、ミサちゃんみたいにはムリだって』

美波に隠れるように言い、楽しそうに笑うとBクラスの女子生徒が先ほどまでしていた伐の女装姿を思い出しながら、顔を赤く染める。

「……………せつかくだから、伐と秀吉の分も作った」

「いや、ただみさせるつもりはねえよ。木下、サービスカットは任せると言うか汚物をみた後の目の保養に着てくれ」

「……………ムツツリー二、黒須、どうしてお主達はワシに女装させようとするのじゃ？　ワシは男じゃ！！」

康太は恭二の衣装を作った後に伐と秀吉の分のチャイナ服を作っており、2人に渡すと秀吉はさすがに怒っているように声をあげるが、

「さてと、ショータイムだな」

「ぐほっ!？」

伐は秀吉を無視して恭二の腹を殴りつけて、彼を強制的に眠らせると、

「康太、せっかくのクズの晴れ舞台だ。しっかりと記録に残すぞ」

「……………わかっている」

多くの生徒で溢れかえるBクラスの教室にシャッター音が響き渡り、Fクラス対Bクラスの試召戦争にピリオドが打たれる。

## 第40問（後書き）

どうも、作者です。

ひとまず、Bクラス戦の終了です。

根本に対する罰が物足りないと言う方も多いでしょうが、すいませ  
ん。

書いてる途中でAクラス戦でのノラ猫対優子を思いつき、早くAク  
ラス戦を書きたくなっています。（爆笑）

これは今までない対決だと思うし、誰かが殺……犯……やる前にや  
りたいなあ。（苦笑）

次からはAクラス戦導入部。すでに1問できています。

そして、次も『禁じ手』を使います。伐ならではの禁じ手です。

感想次第で今日中に更新します。

感想いただけると頑張りますのでよろしく願います。

## 第41問

「……眠い」

伐はBクラス戦を終えた後の2日後の朝、バイトを明け方までしていたせいか、あくびをしながら、すでに授業が始まっている時間に教室に向かい廊下を歩いていると、

「総員、狙ええっ!!」

「なっ!?! なぜ、明久の号令で皆が急に上履きを構える!?!」

「黙れ、男の敵!! Aクラスの前にキサマを殺す!!」

Fクラスの教室から物騒な声が聞こえる。

「……今度はなんだ?」

「黒須、遅いわよ」

伐はその騒ぎを気にする事なく、教室に入ると前の席の美波に聞くが美波は伐の質問に答えずに伐の遅刻を非難する。

「……別にお前に迷惑をかけてるわけじゃないんだ。それより、あれはどうしたんだ?」

「坂本がAクラス代表の霧島さんと幼なじみだって話になって……あれ? そう言えば、あんた、坂本を霧島って」



「ああ。バレただけか」

美波は伐が雄二を霧島と呼んでいた事の意味を気づいたようで驚いたような表情をしているが、伐は興味なさそうに言うと、

「お前ら、ちなみにその2人は幼なじみだけじゃない。霧島入り婿はツンデレだから、霧島嫁に冷たくしてるが間違いなく、両想いだ」

熱くなっているところに大量の油を流し込む。

『『『ぶっ殺せ!!』『』』』

「てめえ、黒須!! いきなり、何を言っただ!?」

「事実だろ」

伐の言葉に雄二が声を上げるが伐は興味なさそうに言うなか、雄二は教室内に立てられた十字架に張り付けられる。

「よし。準備は整った!! 総員、靴下を手にしろ。異端者の口の中に押し込むんだ!!」

『了解です。吉井隊長!!』

明久の指示で伐と秀吉、被害者の雄二以外の男子生徒が手に靴下を手にしたところで、

「待て!? 黒須が言ってる事はデタラメだ!? それに俺が異端者なら、黒須はどうなる?」

雄二は自分の身を守るために伐に矛先を向けようとする、

「黒須君は秀吉と一緒に第3の性別だから、問題ない！！ 何より、黒須君と美少女の絡みは僕達もみたい！！」

『吉井隊長の言う通りだ！！』

物凄くおかしい発言が教室を飛び交う。

「……黒須、ワシらは今の発言に怒っても良いのじゃよな？」

「好きにすれば良いだろ。それより、期待されてるみたいだし……」

秀吉は自分と伐を同性扱いしない友人達にため息を吐きながら、伐に同意を求めると伐は興味なさそうに言った後、秀吉を引き寄せ、畳の上に押し倒す。

「黒須！？ いきなり、何をするのじゃ？」

「いや、あいつらがお前に欲情するのもわかる気がするな。キレイな肌だ。どれどれ」

「お主、どこに手を入れておるのじゃ！？」

伐は流れるような手つきで秀吉のベルトを緩めると手を秀吉のズボンの中に滑り込ませる。

「ん？ 確認だ。一応は『性同一性障害』と言うのも考えられるかな……へえ、顔に似合わず、なかなかの」

「……や、止めぬか！？ ワシにはそっちの趣味はないのじゃ！？」

伐と秀吉の絡みに雄二以外の男子生徒達は大量の鼻血を吹き出し、教室は真紅に染まり、

「……やりすぎたか？」

「……だろうな」

伐は教室の惨劇を見て言うど雄二は顔をひきつらせて頷く。

「まあ、観客はいないが続けるか？」

「何を言っておるのじゃ！？ ワシは男色ではないのじゃ！！」

伐はこの状態に本気で欲情したのか続きを始めたそうとすると、当然、秀吉は抵抗するが、

「大丈夫だ。何事も経験だ。そのうち、こついう役もあるかも知れないぞ。実戦は何よりの経験だ。演技の幅も広がるぞ」

「そ、そうかのう……演技のためなら、黒須、ワシは初めてじゃから、できれば優しくして欲しいのじゃ」

伐に演技のためと言われて演技のためならと納得してしまい頬を赤く染める。

「待て！？ 黒須！！ それ以上はまずい！！ 秀吉、お前も流されるな！！」

「そうですよ!!」

「黒須も木下も教室でなんて止めなさい!!」

さすがに、雄二、瑞希、美波の3人が止めに入る。

#### 第41問（後書き）

どうも、作者です。

まず、最初にまさかの秀吉を押し倒すと言う禁じ手を使った事の謝罪を……

すいません。伐は確かめずにいらなかったんです。と言うか、伐の容姿が男の娘と決めた時から『やるしかない』と。

例のごとく、苦情、その他、中傷は優しくお願いします。

## 第42問

「それじゃあ、宣戦布告に行くか。明久」

「イヤだ」

クラスメート達が回復した後、雄二からAクラスとの対決は以前、伐が話していたものだと言われ、雄二は宣戦布告のために明久の名前を呼ぶがBクラス戦で痛い目にあっている明久はすぐに拒絶する。

「今回はお前に何か頼まん。お前に頼んでせつかくの作戦がつぶされてたまるか」

「まっただな」

雄二は今回の宣戦布告はバカの明久ではムリだとため息を吐くと伐はあくびをしながら頷く。

「何だと!!」

「……黙って話を聞け」

「はい!?!」

明久は伐と雄二の言葉に声を上げるが伐が睨みつけると今までの伐とのやりとりに明久は伐に苦手意識を持っているようで返事をする。と秀吉の後ろに隠れる。

「一応、宣戦布告は俺がやるが、今回は考えがあつてな。明久、康太、秀吉、黒須、姫路、島田の7人にもついてきて貰いたい」

「……勝手に行け」

「島田」

「行くわよ。黒須」

雄二は7人についてくるように言うが伐はめんどくさそうに言う  
と卓袱台の上に突つ伏すが美波が伐の制服をつかみ伐を引っ張って歩き出す。

「……ったく」

「タバコはお預けよ!!」

「……何すんだよ？」

伐はAクラスに向かう途中でめんどくさそうに懷からタバコを取り出すと美波は伐からタバコを取り上げると伐は不機嫌そうな表情をする。

「さすがに廊下はマズいだろ。宣戦布告が終わったらにしろ」

「……仕方ない。これでガマンしとくか？」

雄二は伐の様子にため息を吐くと伐は納得いかなさそうに頷くと美波の形に手を回し、彼女の少しでも寂しい胸を揉む。

「黒須！？ あんた、何するのよ！？」

「……まあ、サイズの割りにはなかなかの張りも良いし、良い胸だ」  
美波は伐に向かい右ストレートを放つが伐は当たり前のように交わす。

「……黒須、お主は何がしたいのじゃ？」

「そうだな。ナニがしたい。さっき木下相手のは邪魔されたからな」  
秀吉がため息を吐きながら言つと伐は表情を変える事なく、美波の攻撃を交わしながら答える。

「……それくらいにしておけ。着いたしな」

「ん？ なら行くか。島田、さっきのを忘れるのとさっきのを忘れなくさせられるのどっちが良い？ 選ばせてやる」

「忘れるわ！？」

雄二はAクラスの教室の前まで着くと伐と美波に向かい言つと伐は美波の腕をつかみ、彼女の耳元でささやくと美波は自分を守るために伐から離れる。

「そりゃ、残念だ。そのうち、あの倒錯娘と一緒に可愛がってやろうと思つてたんだがな」

「……黒須、そこまでにしろ。行くぞ」



伐は美波の反応に楽しそうに笑うと雄二はため息を吐いた後、気合を入れるとAクラスの教室のドアを開ける。

（……あれが木下の姉か？ まあ、確かに似てるな）

雄二はAクラス代表に交渉を求めたがなぜか秀吉の双子の姉の『木下 優子』が雄二との交渉を受けている。

（……まあ、木下がこの間、真似してたのを考えるとあれは優等生を演じてるだけだろうな。なら、交渉が上手くいかなくてもあいつを倒すのは簡単だ）

伐は優子の顔を見ながら、表情を変える事なく何かを企んでいると、  
「その提案受けるよ。その代わり、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね。お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方が勝ち。って言うなら受けても良いよ」

（……なるほど、少しは頭が回るようだ。巨乳娘を警戒しているな。それでも、策士としてはクズ以下だ。まあ、変なプライドでもあるから、最下層のFクラスには負けれないと思ってるんだろうな）

優子は雄二の提案に条件をつける。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ。これは競争じゃなくて、戦争だからね」

「……そうか」

優子は笑顔だがこれ以上は引く気はないと言うと雄二は少し考えるが、

「その条件を呑む代わりに、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

(……霧島は何か考えているから、1勝もしくは引き分け。姫路は安パイ、康太は保健体育。教科を決めれるなら、木下姉が相手なら俺も勝てそうだな)

雄二の提案に伐が状況を分析していると優子は雄二からの条件に判断しかねているようで考え込む。

### 第43問

「……雄二の提案を受けても良い」

優子が悩んでいると気配すら感じさせずにAクラスの代表である『霧島 翔子』の声が聞こえる。

「あれ？ 代表。良いの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

翔子は条件があると雄二を見て言い放つと瑞希を値踏みするかのようじつくりと見ると、

「……負けた方は何でも1つ言うことを聞く」

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！！ と言うか負ける気満々じゃないかー！！」

翔子には百合の噂があるため、康太はカメラを用意しはじめ、明久はその噂を期待するように言う。

「……康太、ダーリン。変な期待をするな。坂本嫁」

「……何？」

「つて、おい！？ 黒須、わけのわからない呼び方をするな！？ 翔子も返事をするんじゃないやねえ！？」

伐は明久と康太をいさめると交渉相手が2人になったためか、自分も交渉の席に座ると、

「言うことを聞くとか、めんどくなやりとりは良いだろ。お前らの夫婦のやりとりに巻き込まれるほど、俺達もAクラスもヒマじゃない。勝った方が夜の主導権を握るで問題ないな」

「……それで良い」

伐は翔子の出した条件の内容を固定すると翔子はすぐに返事をする。

「良いわけあるか！？」

「……ダーリン、康太、うるさいから十字架に貼り付けておけ」

しかし、雄二は納得がいかないと叫び、伐はすでに雄二に向けて嫉妬の炎を燃やし始めている明久と康太に指示を出すとAクラスの教室にわらわらと怪しい覆面を被った生徒達が現れ、雄二を十字架に貼り付ける。

「……あのさ」

「気にするな。この戦争自体、ただの夫婦喧嘩の延長だ。それより、こっちはそっちの代表の条件を呑んだ。これで良いか？」

「……そうね」

雄二を交渉から外し、翔子を条件を固定した事で、交渉は伐と優子で取り決められる形になり、伐は優子に確認をすると彼女は少し考  
え、

「じゃ、こうしよう？ 勝負内容は5つの内、3つをそっちに決  
ませてあげる。2つはうちで決めさせて？」

「ああ。それで良い」

「あれ？ ずいぶん簡単に頷くのね？」

優子は条件を追加すると伐はすぐに返事をし、優子は意外そうな表  
情をする。

「まあな。どちらかと言えば、俺は坂本旦那の作戦を信じちゃいな  
いが3つこちらに決めさせて貰えるなら、確実に勝てる。F相手だ  
から、余裕だと思ってる世間知らずに灸を据えるには良いところだ  
ろ。ああ、そうだ。木下姉、ちなみにお前はどこで出てくる？」

「……何？ その言い方、あたしになら簡単に勝てると言うのかな  
？」

伐は優子を挑発するように言うと彼女は口調と表情こそ変わらない  
が伐の挑発にのりかけている。

「まあな。今日の交渉を見させて貰って、あんたとやれば俺は確実  
に勝てる」

「……Fクラスが」

伐は優子を挑発するように言い切ると優子は周りに聞こえないように舌打ちをすると、

「……舌打ちなんて、Aクラスの才女がする事じゃないな。メツキが剥げてきたんじゃないか？」

「く、黒須、お主、止めた方が良いのではないのか？」

伐は当然、優子の行動を見逃すわけではなく、鼻で笑うと優子の怒りを実の弟の秀吉は肌で感じているようで伐を止めようとするが、

「俺は事実を言っているんだ。誰だって見ればメツキが本物かすぐにわかるだろ。木下、お前が本物で姉はメツキだ。告白されてる数を見れば明らかだろ。男が男に告白されるのも問題はあるが、それだけの容姿を持っているのに全部、弟にそれが行ってるんだ。外でどれだけ取り繕ってもメツキはメツキだ」

伐が優子を挑発するのを止めるわけもなく、

「……あたしは先方で出てやるわ。あたしをバカにしたこと後悔させてやるわ！！」

「ほらな。メツキが剥がれた」

優子は限界が来たようで伐に向かい勝負を挑むと伐はくすりと笑う。

「うるさいわ。誰だってここまで言われれば怒るわよ！！」

「ヒステリックに騒ぐなよ。だから、弟の方がモテる……悪いな。肌もあっちの方がキレイだな。お前、ズボラだろ？」

優子は伐を指差し叫ぶが伐は飄々と優子を挑発し続けると、

「そうだな。教科はどうする？ 初戦だし、そっちが決めるか？」

「あんたに決めさせてあげるわよ。あんたの得意教科で良いわ！！」

「まあ、ありがたくその条件は受けるが、それで恥をかかせるか？ お前、小物だな」

「……許さないわ。あんたをあたしの前にひざまづかせてやる」

「ひざまづかせるか？ 別に負けたら土下座でも何でもしてやる……そうだな。さっきの坂本夫婦と同じように俺とお前。負けた方が勝った方の言うことを聞くって条件も付けるか？」

「ええ。受けてたつわー！！」

優子は伐の手のひらで踊っているが頭に血が上りきった彼女は気づく事はなく、

「決まりだな。勝負はクラスに報告……」

「黒須、全員、そろってるみたいよ」

伐は決定した事をクラスメートへ伝えに行こうと立ち上がると美波から、雄二を貼り付けるために全員が揃っていると聞かされ、

「……このまま、開始か？ 締まらないな」

呆れたようなため息を吐く。



### 第43問（後書き）

どうも、作者です。

ついに始まるAクラス戦。

結果はどうなるんでしょうか？

実際、Fクラス勝利って反対されるのかな？

まあ、原作に沿わせるなら、負けですね。（苦笑）

さあ、ノラ猫対優子はどうなるんでしょうか？

## 第44問

「それでは1人目の方、どうぞ」

(……)

Aクラスの担任であり、今回の試召戦争の立会人でもある『高橋洋子』教諭が伐と優子を呼ぶと優子は敵意の視線を伐に向けながら前に出るが、

「黒須君、呼んでるよ」

「……黙ってる。俺はメール中だ」

伐は友香にFクラス対Aクラスの試召戦争が始まった事を知らせている。

「……黒須、早くせぬと姉上が」

「待たせておけよ。何時間も待たせるわけじゃないんだ。これで腹立てるなら、お前の姉の器はどれだけちっちゃいんだよ」

秀吉は目に映る姉の様子に怯えているようで伐に早くしろと言つが、伐は慌てる事なく、優子への挑発を続けると、

「Fクラス、先方は前へ」

「……………伐」

「わかったよ」

高橋教諭から催促がかかり、康太が伐の背中を押し、伐はため息を吐きながら携帯電話を閉じると優子の前までゆっくりと歩く。

「Aクラス、木下 優子」

「Fクラス、黒須 伐だ。別に覚えなくて良い」

優子は伐を睨みつけたまま、名乗りをあげると伐も続く。

「それでは、黒須君、選択教科をお願いします」

「……ん、そうですね。得意教科は日本史と保健体育の実技なんだけど……俺の得意教科で本当に良かったのか？ お・ね・い・ちゃん」

「……っ!？」

高橋教諭の言葉に伐はワザとらしく少し悩む素振りをする。優子との距離を縮めて彼女の耳元でささやくと優子は伐を睨みつけ、

「その2教科なのね。日本史か保健体育、さっさと決めなさいよ」

「おいおい。俺は保健体育は実践派だ。まあ、知識もそれなりに持ち合わせてるけどな」

伐に向かい言うが、伐は優子の様子など気にする事なく、挑発を続ける。

「黒須君、それなら、日本史で良いですね？」

「待ってください。俺もさすがに俺の得意教科では『卑怯』だと思うんで、日本史勝負は止めますよ」

高橋教諭は始まらない勝負を淡々とした口調で始めようとするが伐は何か考えがあるようで得意教科では戦わないと言う。

「それでは選択教科をお願いします」

「そうですね」

伐は高橋教諭の言葉に口元をゆるませ小さな笑みを浮かべると、

「選択教科は音楽。テスト内容は『歌唱力テスト』をお願いします」

「！？」

伐は優子を挑発するような笑みを浮かべ、優子は伐の選んだテストが予想外だったのか驚いたような表情をする。

「ちょっと、黒須君、そんなのありなの？」

「そ、そうよ。選択教科が音楽で歌唱力テスト？ そんなの認められるわけがないでしょ 他の教科にきなさいよ」

伐の思いがけない選択に明久は驚きの声をあげ、対戦相手である優子は何かあるのか口調を強くして教科を変えろと言う。

「おいおい。選択教科の決定は俺にあるんだ。それにテストと名の

つくものの勝負だ。高橋先生、問題はないはずですよね？」

「……そうですね。ルールのには問題ありません。しかし、準備に時間がかかりますがよろしいですか？」

伐の言葉に高橋教諭は試験召喚戦争のルールを読み返しながら問題ないと言う。

「ルールのに問題ないんだ問題なんてないよな？　それとも、何か問題があるのか？　お・ね・い・ちゃん」

「……」

伐は罨にかかったネズミを痛めつけるように優子に聞くと、優子はこの勝負は都合が悪いようで顔には焦りが見えるがルールのに問題ないせいか何も言えないようで苦虫を噛み潰したような表情をしている。

「ねえ。木下、お姉さんの様子、おかしくない？」

「……姉上はあまり、歌は得意じゃないのじゃ」

美波は目の前で行われているやりとりを見て、秀吉に聞くと秀吉はなぜ、伐が優子の弱点を知っているのかわからないのと家に帰ってから、確実に行われる優子からの八つ当たりに表情をひきつらせる。

「どうして、黒須君は木下さんが歌を苦手って、知ってるんですかね？」

「……………情報収集は戦争の基本」

瑞希は苦笑いを浮かべながら、首を傾げると康太は当然のように答える。

#### 第44問（後書き）

どうも、作者です。

始まりました。Aクラス戦。

伐と優子の勝負はまさかの『歌唱力テスト』。

相変わらずの禁じ手の投入です。

Aクラスに勝つ気なら相手の土俵に乗らなければ良いと伐は言うだろうしね。（苦笑）

弱点をつくのも戦争ですしね。（悪笑）

例のごとく、批判は優しい言葉でお願いします。

## 第45問

「これってさ。カラオケ？」

「みたいじゃのう」

伐と優子の対決のためにAクラスの教室のなかにはカラオケで良く使われる機材が運ばれてくる。

「なんで、こんなものが学園にあるんだ？」

「前にAクラスの設備に娯楽用として設置するか議論になった時に購入しました。現在は学園長室に設置されています」

雄二がこの機材がある理由を疑問に思い言つと高橋教諭が淡々とした口調で経緯を説明する。

「……それは学園長が欲しかっただけじゃないのか？」

「だろうな」

雄二は呆れたようなため息を吐くと伐は以前から、この機材が学園長室にある事を知っていたのか興味なさそうに言つと、

「準備ができたな。どうする？ 1発勝負で行くか？ 1度、練習でもするか？」

挑発するように優子に言つ。



「れ、練習なんかしなくても良いわよ。やりたいなら、あなた1人がやれば良いでしょ」

「高橋先生、1曲だけ、練習しても良いですか？」

優子は慌てた様子で伐に言うと、伐は優子の様子など気にせず高橋教諭に聞くと、

「そうですね。発声練習は必要かも知れませんが。許可しましょう」

高橋教諭から許可が出る。

「それじゃあ……おっ、新譜も入ってるな。あの妖怪、完全に趣味に使ってるな」

「……伐、それは難しくないか？」

「個人的に演歌が好きなんだが……」

「さすがに選曲は考えろよ」

伐が練習曲を選ぼうとするとわらわらとFクラスの生徒が集まってきた、完全にカラオケボックス内の緩い空気になっている。

「黒須君、オレンジジュースと烏龍茶。どっちが良い？」

「ダーリン、悪いな。歌の前だし、温かいものにしてくれ」

「温かいもの？」

「冷たい飲み物より、温かい飲み物の方が喉に良いらしいのじゃ」

「……雄二、一緒に歌いたい」

「おっ。デュエットか？ たまには良いか」

気がつくとも翔子まで雄二の隣に座っている。

「代表まで、何をしていますか！？」

「うるさいぞ。木下姉、俺の練習曲を選んでもらうんだ。黙ってるよ」

優子はすでに完全に伐の挑発にのっているが、伐は気にする事なく、時間をかけていると、ついにはAクラスの生徒まで混ざり、カラオケ大会になりかけている。

「黒須、そろそろ、お前も歌えよ」

「そうだな」

雄二が伐にマイクを向けると伐はマイクを受け取り、練習曲を入れて歌い始める。

「……上手いうえにふりつき？」

「黒須君、すごいです」

伐はマイクを握ると最近、流行りの歌を歌い始めると伐の歌声に瑞希と美波は目を輝かせる。

「……………伐はバイトで良く歌っているから、練習量が違う」

「あいつは何をしてるんだろうな」

「全くじゃのう」

康太が伐が歌の上手い事を言うと雄二と秀吉は苦笑いを浮かべるなか、

「……………」

優子の表情はこの場の盛り上がりの後に自分がさらけ出す醜態を思い浮かべ、青ざめて行く。

「……………まあ、こんなもんか？」

「96点？ 100点が取れても良かったと思うのに」

「カラオケの点数はどれだけ外れないかだからな。機械が判断するのと人が判断するのは違うんだよ」

伐が歌い終わると点数が表示され、明久は表示されている点数に文句を言うなか、伐は興味なさそうに言うと、

「先行は俺か？ お前か？」

優子に向かいマイクを差し出しながら聞く。

「……………棄権するわ」

「あん？ 聞こえなかったんだが、まさか、Aクラスの才女様が舞台上上がる事なく、負けを認めるわけないよな。早く歌えよ。それに棄権するなら、するなりの態度つてものがあるよな？」

優子は悔しそうに伐に棄権すると言うが伐が聞き入れるわけもなく、楽しそうに笑いながら言っていると、

「……お願いします。あたしの負けです」

「勝者Fクラス。黒須 伐」

優子は悔しそうに伐に負けだと言つと高橋教諭から伐の勝利が伝えられる。

#### 第45問（後書き）

どうも、作者です。

優子の棄権と言う半端な決着です。

伐に練習を下手に歌わせてから、優子を叩き潰すとも考えたんですが、優子は歌わないと思ったので圧倒的な差での伐の勝利と言う形にさせていただきました。

さあ、伐と優子の間で交わされた約束は？優子はどうなってしまったのでしょうか？（悪笑）

## 第46問

「よし、1勝目だ」

「若干、卑怯だけどね」

伐の勝ち名乗りを聞いて雄二はニヤリと笑うと美波はこの結果にため息を吐く。

「まあ、卑怯でも勝ちも勝ちだ。これは戦争だと言ったのはそつちだしな。相手の弱点を狙うのも戦争の基本だ」

伐はクスリと笑うと、

「さてと、お待ちかねのバツゲームの時間だ」

優子を舐めまわすような視線で見る。

「な、何をする気よ?」

「……うーん。何をしたら良いかな。容姿は悪くないしな」

伐の様子で『保健体育の実技が得意』と言う言葉を思い出したようで、優子は顔をひきつらせると伐は彼女の耳元でささやく。

「まあ、ひとまずはナニをするかは後で考えるとするか」

「ちょ、ちよつと、それは何よ!?」

「決まってるだろ。今からお前は『俺のペット』なんだ。飼い主に首輪をつけられるのは当たり前だろ」

伐は妖艶な笑みを浮かべると懐から首輪を取り出し、優子はこのままでは伐に食べられてしまうと逃げ出そうとするが、伐が彼女を逃すわけがなく、伐は手に持っていた首輪を優子の首につけると彼女をFクラス側に引っ張ってくる。

「く、黒須、お主は姉上に何をするつもりなのじゃ？」

「ナニと言われれば、さっきは霧島と巨乳娘、島田の3人に止められた事だ」

「な、何！？ な、何なのよ！？」

秀吉は優子のピンチに伐に言う雄二と秀吉を抜かしたFクラスの男子生徒達は先ほどの伐と秀吉の絡みを思い出したようで赤い噴水があがる。

「あいつら、異端審問だ。なんだと言う割には免疫無いよな。本番、どうするつもりなんだ？」

「……そこまで、言えるお前に問題があるんだよ」

伐は目の前の惨劇にため息を吐くと雄二は苦笑いを浮かべる。

「まあ、お前は嫁と毎晩、燃え上がっているだろうから、免疫があるだろうが」

「……雄二、今日も待ってる」

「黒須、翔子！？ わけのわからんことを言うな！！」

伐は表情を変える事なく言うと翔子は顔を赤らめ、雄二は2人を怒鳴りつける。

「……代表、進んでるんだ」

「まあ、お前もすぐに経験する事になるんだけどな」

優子は翔子の反応に2人のなかはだいぶ進んでいると思ったようで顔を赤らめると伐は平然と『優子を美味しくいただく』と言うと優子は壊れた玩具のように顔をひきつらせて伐の顔を見る。

「何でも1つ言うことを聞くんだよな？」

「く、黒須、姉上は女の子なのじゃ。止めて欲しいのじゃ」

伐は獲物を品定めするような視線で優子を見ると秀吉は伐に優子を解放するように言うと、

「別に解放しても良いが、その代わりはお前がやってくれるのか？  
俺は別にかまわんぞ」

「な、何を言っておるのじゃ！？ ワ、ワシはもう流されんのじゃ」

伐は秀吉の耳元でささやくと秀吉は先ほどの伐に押し倒された事を思い出したようで顔を赤らめる。

「ひ、秀吉、まさか、あんた……」



「ち、違うのじゃ。姉上、ワシはそっちの気はないのじゃ。姉上が読みあさっておるような薄い本と……姉上、ワシの関節はそっちはそっちには曲がらんのだ！」

伐と秀吉の様子に優子は実の弟をジト目で見ると秀吉は慌てて否定しようとするが、その言葉は優子の逆鱗に触れ、関節技をかけられる。

「なるほど、弟は演劇バカで姉は腐女子か、なかなか、クセのある姉弟だ」

「お前、楽しそうだな」

伐は優子の反応と秀吉の言葉で優子を腐女子だと判断して、楽しそうに笑うと雄二は呆れ顔で言うが、

「まあな。上手く犯れば、木下姉弟をどんぶりで食べそうだしな」

「「ゑ!?!」」

「……またか」

伐は優子だけではなく秀吉も美味しくいただけこうと思っているようでそう言うと、秀吉と優子の動きが止まり、今度はFクラスの生徒だけではなく、Aクラスの生徒からもいくつかの赤い噴水があがる。

「……あっちにもいるんだな」

「そつみたいだな」

伐はAクラスから上がった赤い噴水を見て言うと雄二は顔をひきつらせて頷く。

#### 第46問（後書き）

どうも、作者です。

書きながら思うんですが伐の制服には何が入っているんでしょうか？

現在、確認されてるのはナイフ、携帯固形食、タバコ、ライター…

………首輪？

………伐は本当に大丈夫なんでしょうか？（苦笑）

## 第47問

「で、次は誰だ？」

「……黒須、あんた、何がしたいの？」

鼻血の清掃などでしばらく時間が空いた後、伐は両脇に優子と秀吉を待たせながら言う。美波はため息を吐く。

「いや、何となく必要な絵かなと思ってな」

「……なぜ、ワシまで」

伐は別に意味などないと言う。隣の秀吉はため息を吐く。

「まあ、良い。次は明久、お前だ」

「僕？」

「ああ、お前なら、やれると信じてるぜ」

「ふつ、それは僕に本気を出せと言っているんだね」

雄二がFクラス2人目に明久を選ぶと明久は本気を出すと言って歩き出し、中央まで歩く。

「ねえ。吉井くんって、凄いの？」

「ああ。凄いバカだ」

優子は雄二と明久のやりとりに息を吞んで伐に聞くと伐は表情を変え、事なく答え、

「勝者。Aクラス、佐藤 美穂」

Aクラスの生徒の勝ち名乗りが上がる。

「……何よ。これ」

「基本的なFクラスの実力だ。うちは個性が強いのが集まってるからな」

優子は簡単に決着のついた2回戦にため息を吐くと伐はつまらなさそうに言うが、

（……やっぱり、この戦力じゃ、仮に勝っても維持はできないだろうな。まあ、坂本の結果次第で手を変えさせて貰おう）

頭のなかでは良からぬ事を計算している。

「では、3人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

康太が立ち上がるのを見て、Aクラスからは女子生徒が立ち上がり、

「1年の終わりに転入してきた『工藤 愛子』です。よろしくね」

「……………保険体育」

康太に向かい名乗りを上げるが、康太は挨拶を返すわけでもなく、彼が誇る最強の矛を惜しげもなく構える。

「土屋君だっけ？ 随分と保険体育が得意みたいだね？ でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、『実技』で、ね」

「……………あいつ、やるな。康太を戦争前に戦力外にするつもりだ」

愛子の一言で妄想に火が点いたようで、康太を含めた数名の男子生徒が鼻血を吹き出して倒れ込み、伐はその光景に舌打ちをする。

「どつという事なのじゃ？」

「……………簡単な事だ。康太は朝から鼻血を吹き出しすぎて。常人なら失血死するくらいに」

「……………あなた達はいつたい朝から何をしてるのよ」

伐の舌打ちに秀吉が聞くと伐は苦虫を噛み潰したように吐き捨てるが優子はあまりのくだらなさのため息を吐く。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保険体育で良かったら、ボクが教えてあげようか？ もちろん実技でね」

「フツ。望むところだ」

愛子は康太を倒したと思い込んだようで、明久に魔の手を伸ばすと愛子の『実技』と言う言葉に倒れた康太から溢れ出た赤い液体は更なる広がりを見せて行き、

「アキには永遠にそんな機会なんてこないから、保険体育の勉強なんて要らないよ!!」

「そうです!! 永遠に必要ありません!!」

明久がふらふらと愛子に向かうなか、瑞希と美波が明久の肩をつかむ。

「……康太、これ以上は無理だ。下がれ」

「……姉上、どうして目を輝かせておるのじゃ」

「な、何を言ってるのよ。そんなわけないでしょ」

伐は明久達のやりとりを気にする事なく、康太を限界だと判断して彼を抱き上げて保健室に運ぼうとすると優子を中心としたAクラスの女子生徒から黄色い歓声があがる。

「あれ? 土屋君を下げちゃうの? それなら、黒須君だっけ?

君が代わりにボクと勝負してくれるのかな? もちろん、選択教科は保険体育の実技だね」

「……俺はすでに戦っている身だ。認められないだろ」

愛子は伐を挑発するように言うが、伐は鼻血を垂れ流したままの康太を抱きかかえながら冷静に返すと、

「あれ？ のつてこないんだ？ 君もさっき、保険体育の実技が得意って言うってたのに、まさか、口だけ？」

愛子は伐を挑発するように笑う。



## 第47問（後書き）

どうも、作者です。

ようやく、ヒロイン候補最後の1人の愛子の登場です。

伐と愛子の実技対決はありえるのか？

そろそろ、本気でヒロインを決めないといけないなあ……と。（苦笑）

書いている人間から考えると現在の本命馬は美春、対抗馬、愛子、友香、美波……康太？、明久？と続きます。

秀吉、優子の木下姉弟はいじられキャラ街道まっしぐらです。

Aクラス戦、終わるくらいにはヒロイン決めたいなあ……（苦笑）

ご意見お待ちしてます。

## 第48問

「悪いな。そんな安い挑発にのるほど、バカじゃない」

伐は愛子の挑発を鼻で笑うと、

「それに口だけなのはお前だろ」

確信があるのか愛子の耳元でささやく。

「!?!」

「やっぱりな。背伸びなんかするんじゃないよ。そんな事を言つてると、そのうち犯されるぞ」

伐の言葉に愛子は小さく体をびくつかせると伐はその安い挑発を止めると言つと、

「キミはボクを挑発仕返してるつもりだろうけど、ボクにはそんな安い挑発は効かないよ」

「……そうか。まあ、世間知らずのお子ちゃまにアドバイスだ。意地になるのは勝手だけどな。そのせいで周りも巻き込まれる事があるって事は覚えておきな」

愛子は伐の言葉にプライドが傷ついたのか伐に向かい言つが、伐は相手をする気はなく、Fクラスの陣地に戻ると康太に応急手当てを始め、

「ちょっと、待ってよ」

「待てと言われて待つヤツはバカだ。お前が保険体育の実技で挑みたいなら、その態度を改めたらいつでも受けてやるよ。まあ、負ける気はしないがな」

中心に残された愛子は伐を引き止めようとするが、伐は愛子を鼻で笑う。

「黒須、お前にしては珍しい反応だな」

「ん？ まあな。経験豊富を語る処女こそ。やるのに面倒な事はないしな。それよりも今は康太だ」

雄二は伐の意外な対応に首を傾げると伐と愛子の話をすぐそばで聞いていたせい、伐がしている応急手当てでは間に合わず、未だに出血が止まらない。

「……お主は少し言葉を選べんのかのう？」

「と言うか、それは確信なのか？」

秀吉は伐の言葉にため息を吐くと雄二は苦笑いを浮かべながら聞く。

「あいつが処女かどうか？ ああ、間違いない。匂いでわかるとからな。あいつは男を知った雌の匂いはしない……と言うか今、ここにいる女は……」

「……ぽっ」

「おい。黒須、お前、何で俺の肩を叩くんだ？　そして、翔子、顔を赤らめるな！？　ま、待て！？　これは黒須が俺をはめようとしてるだけだ！？」

伐は何か思いついたようで言葉の途中で意味ありげに翔子に視線を送った雄二の肩を叩くと雄二はFクラスの男子生徒に十字架に張り付けられる。

「何を言ってる霧島、はめてるのはお前だろ」

「……雄二、昨日はすごかった。今日も待ってる」

「黒須、翔子！！　お前ら、何のつもりだ！！」

伐は雄二の反応が面白いようでさらに雄二を追い詰めて行くと翔子はなぜか顔を赤らめ、雄二の張り付いている十字架の下には今にも火炙りをするようなものが準備されていく。

「……異端者には死の鉄槌を！！」

「ダーリン、火事になるから、火は止めとけ」

「黒須君、止めるな。この異端者はここで息の根を止めるべきだ！！」

明久を中心にクラスメート達は雄二に火を点けようとする、伐が明久を止めるが明久は止まりそうにない。

「……黒須、あんたのせいなんだから、どうにかしなさい」

「……そうだな。お前ら、霧島と霧島嫁がくつついている利点って考えないのか？」

美波がため息を吐きながら伐に言うと、伐はため息を吐きながら、Fクラスの生徒に聞く。

「黒須、利点とはなんじゃ？」

「雄二が死ねば霧島さんがフリーになるよ。こっちの方が良いに決まってる！！」

「てめえ、明久。ここから下りたら覚えておけよ！！」

伐の言う利点の意味がわからずに秀吉は首を傾げるが明久は伐の言う利点など考えずに感情で動こうとする。

「考えてもみる。代表同士が付き合ってるんだ。自然にクラス間の交流が増える。という事は……」

「『Aクラスの女子と関わりが増える』」

伐の言葉にFクラスの生徒は吠える。

「……バカじゃない。そんな単純に行くわけないでしょ」

「良いんだよ。バカは単純だから、そう思わせとけば」

優子はFクラスの生徒の様子に呆れたようにため息を吐くと伐は興味がないように優子の言葉に返事をした後、

「霧島嫁、FクラスはAクラスとの停戦協定を結びたい」

真面目な表情をして翔子に向かい、いきなり『停戦協定』を持ちかける。

#### 第48問（後書き）

どうも、作者です。

まず、最初に謝罪をあれだけ、AとFどちらに勝たせるか考えているような素振りを見せながらの『停戦協定』、本当にすいません。実は『最初から決めてました』。（爆笑）

戦争ですからね。退き際を見極める冷静な人間が必要だろうし、伐は雄二をそこまで信用してないでしょうしね。（苦笑）

さあ、停戦協定は結ばれるのか、読み返して見れば停戦協定の伏線は見つかるはず。（悪笑）

ヒロインについて、今回の作品では優子は外しています。理由は『サドで〜』とかぶるからです。

今回の停戦協定と優子をヒロインから除外した事への批判は例のごとく優しく願います。

## 第49問

「黒須、いきなり、何を言っておるのじゃ。勝負はまだ2戦も残っておるのじゃ」

「……康太がこれだ。巨乳娘で勝ち拾えるかも知れないが学年次席とじゃ、勝てると言う確証はない。仮に巨乳娘でイーブンに戻しても霧島が嫁に勝てるわけがない」

秀吉が伐の言葉に慌てて言うが、伐はこのままやっても勝てるわけがないと言い切る。

「でも、坂本くんは秘策があると……」

「そうよ。諦めるにはまだ早いわ」

「……お前らはそれで本当に『確実』に勝てると思うか？」

瑞希と美波が伐に考えを改めさせようとすると伐は2人を含めたクラスメート全員に聞き返す。

「勝てます」

「お前、俺の言葉を聞いてたか、俺は確実と言ったんだ。本来ならはったりでも俺が勝った時点で2戦目に巨乳娘を投入してこっちが有利に見えるようにしないとイケなかったんだ。それなのにこのバカはダーリンを投入した。5対5の勝負だ。代表なら、勝てるコマはないし、せめて戦えるコマを用意しないといけない。それをこいつは怠った。現状でAクラスと戦えるコマは巨乳娘、康太の保険体育



ただだ。こいつは自分で1勝は確実だと言っていたんだろ。それなら、俺が勝った時点で先に3勝を狙いに行かないといけないんだよ。戦争なんだろ。スキを見せれば首をかつ切られるのにこいつは遊びに走った。そんなヤツのせいでクラスの設備を落とされるのはごめんだ。なんか、反論あるか？」

「そ、それは……」

瑞希は雄二の作戦を信じるというが、何の確証もないため、伐が聞き入れるはずがなく、伐の言葉にFクラスの生徒は黙り込む。

「黒須君、そんな事をAクラスの前で言っただけで停戦協定なんて結べると思えるのかな？」

「そうだね」

伐のFクラスは負けると言う言葉に先ほど、伐に相手にもされなかった愛子と学年次席の『久保 利光』が伐の言う停戦協定は結べないと言つと、

「まあ、話だけでも聞けよ。こちらから停戦協定の条件は和平交渉でこの勝負は無効とする事だけだ」

「……それをこちらが呑むと思うのかい？」

伐の手に優子がいるせいか、利光が伐との交渉に対応する。

「ああ。停戦協定を結ぶ代わりにこちらからは『木下優子の返還』、『坂本雄二の霧島翔子への譲渡』、『3ヶ月間のAクラスへの宣戦布告禁止』を条件に出す」

「て、てめえ、黒須、どう言う事だ!!」

伐の提案に雄二は十字架に張り付けられたまま、後ろから叫ぶが、

「黙れ。お前はクラスを敗戦に導こうとしたんだ。その責は受けるべきだろ」

伐は雄二を切り捨てるのは当然だと言う。

「……こちらに悪い条件はなさそうだけど、このまま、続けさせて貰ってもこちらとしては」

「なるほど、こいつを見捨てるわけか？」

「えっ!？ ちょっと!？ 黒須くん、どこに手を回してるのよ!？ ……っ」

利光は停戦協定を受ける理由はないと言おうとすると伐は優子を引き寄せて、彼女の制服のなかに手を滑り込ませると優子の顔は赤く染まり、抑えようとはしているが甘い声が漏れる。

「まあ、個人的にはこいつが俺のものになるんだ。教室の設備を落とされるくらい、俺は何ともないんだけどな。一応、うちのクラスには体の弱いヤツもいるみたいでな。元々、それを改善したいと言いつつ出したバカが始めた戦争だ。さすがにこれ以上、設備が悪くなつて死なれても困るからな。停戦協定を受けてくれると助かるんだが」

「……ここで負けると元々の目的から外れると言う事だね？」

「ああ。受けてくれるなら、個人的な贈り物になって悪いが、これもつけよう」

伐は懷から封筒を取り出し、利光の前に出す。

「……こ、これは!？」

「……このまま、勝負を続けても、Fクラスに木下優子が捕虜になったと言う噂が広がれば、Bクラスは召喚戦争の準備があると言いにきてるんだ。仕掛けてくるぞ。後、CクラスもAクラスに挑むと言っていたな。連戦が続くと下位のクラスも狙ってくるぞ。元々、Aクラスは試召戦争に勝ってもメリットはないんだ悪い提案じゃないだろ？」

伐は口元をゆるませながら言うと、

「……Fクラスからの停戦協定を受けます」

「代表」

「……優子を見捨てるわけにはいかない」

翔子が停戦協定を受けると言う。

「なら、交渉成立だ」

「て、てめえ。黒須、何をしゃがる!？」

伐は優子から首輪を外すとその首輪を雄二につけ、

「霧島嫁、これで良いな。後、これはプレゼントだ」

「……黒須は良い人。雄二、さっそく、これでデート」

雄二を翔子に引き渡すついでに映画のペアチケットを翔子に渡すと翔子は雄二を引きずって歩き出す。

「霧島嫁、今日は好きにして良いが、明日は1度、返してくれ。召喚戦争は代表がいないとできないからな」

「……わかった」

その姿を見送るわけでもなく、伐はポケットから携帯電話を取り出して画面を確認してニヤリと笑う。

「ねえ。坂本がいないとってどういう事？」

「お主、また召喚戦争をしかけるつもりか？」

伐の言葉に秀吉と美波が驚きの声を上げると、

「Aの設備は無理でも設備は向上させた方が良いんだろ。ダーリン」

「それはそうだけど、Eクラスくらいじゃ」

伐の言葉に明久は残念そうに言うが、

「Eクラス？ そんなと狙うわけないだろ。狙うのは『クズの首』だ。ついてこい」

伐にとっては恭二へのお仕置きは終わっていなかったようで冷たい  
笑みを浮かべ、Aクラスの教室を出て行く。

#### 第49問（後書き）

どうも、アクセス数が安定しているのに評価があがらなく、若干、落ち込み気味の作者です。

相変わらず、ノラ猫くんは我が道を進みます。

停戦協定にBクラスとの再戦

伐の目的は本当に施設を奪うだけなんでしょうか？

翔子に譲渡された雄二は無事に返ってくるのか？

次からはオリジナルの展開？です。

さあ、どうなるんでしょうか？

## 第50問

「黒須君、待つてよ。根本君のクビってどう言う事？」

「そのままだ」

伐の後を明久、秀吉、瑞希、美波の4人がついて行くと伐はAクラスと廊下を挟んだBクラスの教室のドアを開ける。

「決着はついたみたいだな」

「ええ。おかげさまでね。内容はメールで出した通りよ」

「黒須に吉井？　なんでお前達、Fクラスが？」

伐は当たり前のようにBクラスの教室に入って行くとFクラス対Aクラスの裏で行われたBクラス対CクラスはCクラスの勝利で幕を閉じ、恭二は友香の前で膝をついている。

「なんで、小山さんが根本君を？　2人は付き合ってるはずじゃ？」

「それはクズの妄想らしいぞ。このクズもうちのバカども一緒に妄想癖があるみたいだ」

「えっ！？　そうなの？　ダメだよ。妄想は頭の中で広げるものだよ。周りに出すと人に迷惑をかけるから」

明久はBクラス対Cクラス戦の経緯を知らなかったため、首を傾げると伐は2人が付き合っているのは『恭二の妄想』だと言い切り、明久

は恭二を生暖かい目で見て言う。

「お前らと一緒にするな！！ 俺と友香は！！」

「付き合ってるなんて言わないでね。少なくとも、私は女装癖の変態と付き合ってたなんて汚点でしかないから……それにね」

恭二は明久に同類にするなと叫ぶが、友香は恭二の言葉を拒絶するとクスリと笑い、

「前に、恭二と付き合っても良いって言ったのは私が頭の良い人が好きだからでしょ。Fクラスに2回も負けるバカがあたしの彼氏なわけないわよね？」

「2回？ ……まさか！？」

「……今回のBクラス対Cクラスは全て黒須の手のひらの上と言う事じゃ」

恭二はこの戦争が伐の策略だったと気づくと全てを伐がCクラスを味方につけていた事を知っている秀吉はため息を吐く。

「い、いつからだ？」

「宣戦布告とほぼ同時だ。小物の考える事は単純だったからな。特に何もしなくて良かったけどな」

恭二は伐につかみかかるように言うと、伐は恭二の手を払い言う。

「Fクラスの補給妨害に協定違反を逆手にとっての奇襲。まあ、小



物だから、この程度だし、それに返し技も用意しないんだからな。世間知らずのバカを騙すのは簡単だったぞ」

「……くっ」

伐は恭二をバカにするように笑うと恭二は唇を噛む。

「ねえ。黒須くん、私も1つ言わせて貰って良いかしら？」

「まあ、好きなだけ言ってやれ」

友香は恭二の様子にすでに彼には何の興味もない様子で言い、伐は頷く。

「恭二、最後に言っておくわ。私はCクラスの代表なのよ。少なくとも、協力を頼みにきたくせに協力を頼む人間をバカにするような人間と本気で協定を結べるわけないでしょ」

「そ、それは」

「お前はこいつやCクラスを自分のコマくらいにしか考えてなかっただろ？ それも自分にしか利はない条件だったはずだ。それは代表としてはどうなんだ？ 代表や参謀は自分が『毒』を喰らう覚悟を持ってないと誰もついてこない。そんな人間が上にいて下が動くかよ」

友香の言葉に恭二は反論をしようとするが、伐がその言葉を遮る。

「それじゃあ、私の話はここまでね。設備の交換は今からね。迅速にしてね」

「今からか？ 明日でも……」

「今からよ」

友香はもう恭二には何も言う事はないと言うと代表として設備の交換を負け組にやれと言う。

「Bクラスも大変だな。代表に人望がないせいか放課後から設備移動なんてな」

「……お前ら、バカに言われたくねえよ！！ お前らはAクラスに負けたんだろ！！ 今度の設備はなんだ？ みかん箱か？」

伐は恭二を笑うとその言葉に恭二は言い返すが、

「そうそう。言い忘れた。俺達、FクラスはBクラスに試召戦争を申し込む。戦争は明日の朝からだ」

伐は恭二をバカにするように笑う。

「何だって？ お前らはAクラスに……」

「Aクラスとは停戦協定を結びました」

恭二は顔をひきつらせると瑞希は苦笑いを浮かべて言い、

「知ってるか？ 戦争の基本には敗者を2度と這い上がれないように徹底的に潰す事も必要なんだ。じゃあ、明日はよろしくな」

伐は恭二を見て、冷たい笑みを浮かべてBクラスの教室を出て行く。

## 第50問（後書き）

どうも、作者です。

Bクラスへの再戦決定です。

買ったら設備はCクラスなみ、まあ、今より良いでしょうし、伐はどんな作戦をとるんでしょうか？（悪笑）

ヒロイン候補は美春と愛子に絞られてきてますね。しばらくは様子を見ようと思います。（苦笑）

## 第51問

「さてと、帰るかな」

「待つんじゃない。黒須」

Bクラスの教室を出て、伐は体を1度伸ばした後、帰ろうとすると秀吉が伐を引き止める。

「何だ？ 木下、俺に食われたいのか？」

「ち、違っのじゃ！？」

「なら、何で、顔を赤くするんだ？」

伐は秀吉を壁に押し付け覆い被さるようにして聞くと秀吉は顔を赤らめる。

「そんな事はないのじゃ。明日の試召戦争の事を聞きたいのじゃ！」

「そうね。ウチはAクラスとの停戦協定も完全に納得してないし、詳しく聞きたいわ」

秀吉は伐を押し、伐との距離を保ってBクラスとの再戦の事を聞くと美波はまだ伐の言うAクラスとの停戦が納得できていないようである。

「……めんどうだな」

「まあ、説明してよ。黒須君の言い分もあるけど、僕らは雄二の作戦に納得していたんだから」

「そうですね」

伐がため息を吐くと明久と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「……とりあえずは廊下の真ん中で話す事じゃないな。教室で良いか」

「そうね……って、ちょっと待ちなさいよ!？」

伐はこの場の空気に説明しないと帰して貰えないと判断するとFクラスの教室に1人で歩き出し、明久、秀吉、瑞希、美波の4人は伐の後を追いかける。

「それじゃあ、まずはAクラスとの停戦について詳しく話して」

「わかったから、睨むな」

教室に着くと教室の隅に移動するなり、美波が伐を睨みつけ、伐はあまり興味がなさそうにため息を吐く。

「その前に、霧島が確実に勝てると言った方法を教えてくれ」

「お主、聞いておらんかったのか？」

「ああ、全く興味がなかったからな」

「それなのに停戦を提案したんですか？」

伐は雄二が翔子とやるはずだった内容を聞いていなかったようで聞くと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「ああ、普通に考えろ。幼なじみで弱点をつけたとしても、学園きつての才女な嫁に嫁の稼ぎを食いつぶすしかできないバカな夫が勝てると思うか？」

「……例えがわかりにくいが冷静になると雄二が勝てるとは思えんのじゃ」

「確かに」

伐の言葉に明久と秀吉はため息を吐く。

「それだけ、霧島の言葉はお前らを惹きつける言葉だったんだろうが確実性がないからな。それで内容は」

「はい。日本史の小学生レベルの問題で上限あります」

「坂本が昔、霧島さんに『大化の改新』の年を間違っただけで、霧島さんは必ず間違えるって」

「それが出なければ、出るまでサドンデス方式と言っておったのじゃ」

「……お前ら、よくそれで勝てると思ったな」

伐は雄二の立てていた作戦を聞いて、改めて、停戦協定を結んで良

かったと思う。

「どうして、そんな顔をしてるの？」

「……なあ、坂本の作戦で……いや、良い。巨乳娘」

「何ですか？」

明久は伐に様子に首を傾げると伐は瑞希に何か質問しようとする。

「俺は日本史は得意何だが小学生レベルの問題でも満点取れる自信はない。お前はどうか？」

「えっ！？ そうなの。黒須君、日本史得意じゃないじゃないか」

伐の言葉に明久は笑うと、

「当たり前だ。日本史は暗記物なんだ。ど忘れがあれば書き間違いだってある。増してや日本史は数年で新しい説ができたからと言って俺らが習った時とは違ってるものだってあるんだぞ。教科書の改訂だとかで知らない問題が出る場合もな」

伐は呆れたようにと4人は伐に言われて初めて気づいたような顔をする。

「……おい。巨乳娘、お前もか」

「えへ」

伐は成績の良い、瑞希も驚いた事にため息を吐くと瑞希はごまかそ



うと笑顔を見せる。

「……それじゃあ、ウチらはあのまま戦ってたら負けてたの？」

「ああ、确实だろうな。まあ、俺が最初に木下の姉とやらなければ他にやりようもあっただけだな」

「どついう事なのじゃ？」

「……いや、康太の棄権って半分以上、俺のせいだしな」

伐の言葉に4人は康太が鼻血を吹き出していたシーンを思い出す。

「そうよ。あんたがおかしな事しなければ、土屋は棄権せずにすんだじゃない!!」

「……だから、そう言ってるだろ」

美波は伐につかみかかる勢いで言っが伐はめんどくさそうに美波の手を払う。

## 第51問（後書き）

どうも、作者です。

再戦が決まり、帰ろうとしたなかで捕まるノラ猫？

今までのノラ猫じゃない？（爆笑）

それなりに自分のせいだと自覚しているための停戦協定だったりもするわけです。（苦笑）

呆れ顔の伐は何を言うんでしょうか？（苦笑）

## 第52問

「美波も落ち着きなよ」

「まったくなのじゃ」

「だけど」

美波が伐に軽くあしらわれるのを見て、明久と秀吉は苦笑いを浮かべると、美波は納得がいかなさそうに伐を睨みつける。

「それで戻って良いのか？」

「はい。お願いします」

伐はめんどくさそうに言っていると瑞希は頷き、伐に続きを説明するように言う。

「俺は先に1勝目を取れば有利に進むと思ったから、木下の姉を挑発したわけだが」

「それだよ。どうして、木下さんと戦ったの？ それも歌唱力テストで黒須君は日本史が得意何でしょ？ 教科選択も出来たなら」

「さっきと同じ理由だ。得意と言っても元々の頭のできは木下の姉には勝てない」

「そうなの？」

伐が日本史で優子と戦うのは分が悪いと思い避けたのだが、美波は首を傾げる。

「ああ。さっきも言った通り、日本史は暗記物だし、うちのテストでの得意教科は上限がないから、コンスタントに点数を取れる教科と考えた方が良い」

「なるほどのう」

「俺は元々、ヤマをはるタイプだからな。日本史や保健体育以外の教科は点数の変動が多いから、ヤマが当たったものや『試召戦争用』に力を入れたものは後の事を考えれば使いたくなかったしな。だから、1番挑発に乗りやすそうな木下の姉を相手に選んだ」

「木下さん、怒ってましたね」

「……後が怖いのじゃ」

伐にはまだ考えがあるようで冷たい笑みを浮かべると秀吉と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それで1勝目は取ったのよね。2戦目はアキで負けちゃったけど」

「ああ、2戦目にダーリンを出したから、俺は霧島の手じゃ勝てないと思ったから停戦協定を提案した」

「そこじゃ。さっきの説明で雄二は勝てないと踏んでいたようじゃが」

「今回の試召戦争は前もってメンバー確認はしてないだろ。俺は勝

手に1戦目に出て、ダーリンは次にいきなり選手だと言われた」

「うん。前もっては言われてないけど、ムッツリー二と姫路さんがいたんだから、2勝は固かったでしょ？」

明久は雄二の立てた作戦は最後の勝負さえ決まっていれば問題なかったと言いたげに首を傾げる。

「言っただろ。メンバーが決まってるんだ。Aクラスの出方を見てから、2戦目に巨乳娘を持って行くのがベストなんだよ」

「どうして？」

「今回のAクラスの戦力は霧島嫁、木下姉、佐藤、工藤、そして、学年次席の久保。久保以外は女ばかりだ」

「それがどうかしたの？」

伐はAクラスの戦力を上げると美波は意味が分からないため、首を傾げる。

「相手が女なら、康太に頼めば得意教科、苦手教科くらいは調べられたはずだしな」

「確かに女の子の情報ならムッツリー二なら簡単に集めそうだね」

「ああ。Aクラスはプライドもあるから順番を入れ替えるような事はない。2戦目に出てきた佐藤と比べると巨乳娘の方が点数が高い」

「ですけど、Aクラス相手ですから、勝てるとは」

「そのために、DやBと戦ったんだろ。点数が近いなら、後は操作の良し悪しだ」

「確かに、アキは点数が低いけど操作は上手いわ」

「それが霧島がDやBに仕掛けた理由だ。実際は霧島を嫁に引き渡すと言う条件を最初からちらつかせればAクラスとは最初からやれた」

伐は平然と雄二を生贄に出来たと言う。

「姫路さんで2勝でムツツリー二で勝利にも出来たわけだね」

「ああ、霧島の作戦が本当に勝てるものだったら康太で負けても良かったしな。で、4戦目は久保だろ。そこにダーリンを持つてくのがベストだったんだ。ダーリン対久保なら、弱点つけばを分は悪いが勝てない事もない」

「僕が久保君に？　どうやって？」

「……気にするな。世の中には知らない方が幸せって事もあるからな」

伐は明久を生暖かい目で見て言うと、

「……なぜだろう。良くわからないけど嫌な予感がする」

「そうなの」

伐の視線に明久は聞くのを諦める。

「で、停戦協定のタイミングは4戦目で巨乳娘で負けたら意味がないからな。あのタイミングで提案しただけだ……明日の作戦は朝で良いか？ バイトの時間になる」

「そうなの？」

「ああ。……巨乳娘」

「何ですか？」

「これで小学生の日本史の問題集を買つといてくれ。霧島を納得させないで試召戦争をやるとあいつ自分から負けそうだからな」

「わかりました」

伐は財布から1000円札を取り出し、瑞希に渡すと教室を出て行く。

## 第52問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの解説で1話を使いました。

伐なりの考えなのでツッコミは控えてください。（苦笑）

バイトに行ったノラ猫くんにラブイベントはあるのか？（爆笑）

美春と愛子、どっちで遊ぼう（悪笑）



### 第53問

(……ったく、なんだ?)

伐は明久達と別れてバイトに向かう途中で、先ほど、Aクラスと行った試召戦争で関わった工藤愛子に見つかり、愛子は何かあるのか、伐と一定の距離を取りながら後をつけてくる。

(……別にバイト先を知られるのは構わないが、監視されてるのは気分が悪いな)

「あれ?」

伐は愛子の監視から逃れるために脇道に入ると、愛子は伐の後を追いかけて脇道に入るがその先は行き止まりであり、愛子は首を傾げると、

「……行き止まりを見て、何かあったか?」

「何で、後ろから!?!」

伐はわざとらしく愛子の背後から、彼女に声をかける。

「……どうでも良いだろ。それで、人の後をつけて何のようだ? 口先だけは止めて、俺に保健体育の実技を教えて欲しかったのか?」

「ちよつと!?! いきなり、何をする気!?!」

伐は愛子を行き止まりの壁に押し付ける形で彼女の耳元でささやくと、保健体育の実技が得意と言うわりには愛子は伐の行動に慌てる。

「……背伸びするなよ。お子ちゃま」

「ボクはお子ちゃまじゃないよ!？」

伐は愛子の反応にくすりと笑うと彼女の頭を乱暴に撫で、元の道を戻ろうとすると愛子は文句がありそうに伐の手を引っ張る。

「……何だよ。俺はこれから、バイトなんだ。処女の相手をしてるほどヒマじゃないんだ」

「処女だ。お子ちゃまだ。じゃないよ。ボクには工藤愛子って言う名前があるんだから」

「……用はそれだけなのか？」

伐は愛子の相手をする気はないと言うと、愛子は伐の自分への態度が気に入らないようであり、文句を言うと言うと伐はため息を吐く。

「人の名前をてきとうに呼ぶのは失礼だって話してるんだよ。そんな事をしてると他の人から嫌われるよ」

「知るか。だいたい、馴れ合いをするつもりなんてない」

愛子は伐の態度が気に入らないのか、伐を睨みつけるが、伐は気にする事なく、愛子の手から自分の手を抜くと先を歩き出す。

「ちょっと、待ってよ」

「……ついてくるな。ここから、先はお前みたいな処女がくるところじゃない」

「だから……」

愛子は伐の後を追いかけて歩くが伐がスピードを緩める事はなく、愛子が再び、伐の手をつかむと伐はこの場を指差し、愛子は伐の指差した先を見て、顔を赤くする。

「そんな反応するなら、保健体育の実技が得意とか言っなよ。それで、まだついてくる気か？ まだ、時間が早いから店は空いてるぞ。まあ、金額はそれなりに行くだろうけどな」

「行くわけないでしょ!？」

伐は愛子の反応にため息を吐き、彼女をからかうように言うと、愛子は伐を怒鳴りつける。

「なら、帰れ。暗くなってくるとお前みたいな処女は襲われる……」

伐は愛子を追い払うように言うと伐の携帯電話が鳴る。

「……はい。そうですか。わかりました。それじゃあ、今日はゆっくりしてください」

伐は愛子を後回しにして携帯電話に出ると、電話の相手は伐のバイト先の店長のようなものである。

「どうかしたの?」

「……店長が風邪だと、バイトが休みになった」

愛子は伐が電話を切るのを見て、伐に聞くと伐はバイトが休みになったと言った。

「俺は帰るぞ。お前はどっするんだ？」

「ボクも帰るけどさ……」

「そうか」

「ちょっと待ってよ！？　こんなところに女の子1人を置いて行かないでよ！？」

伐は愛子をこの場に置いて1人で歩き出すと、愛子は慌て、伐の隣に並ぶ。

「経験豊富な女を語ってるんだ。1人で問題ないだろ」

「待ってってば……す、すみません！？」

伐は愛子の事など気にせずに先を進んでいくと愛子はチンピラとぶつかる。

「いてえな。お嬢ちゃん、腕が折れちゃったみたいだな。ちょっと、慰謝料とか治療費の話とかしたいから、事務所まで来てくれるか？」

チンピラはいやらしい笑みを浮かべると愛子の手をつかみ、彼女を連れて行くこうすると、

「一般人におかしな事をするんじゃないよ」

伐がチンピラの腕をつかむ。

「……ノラ猫。お前のツレか？」

「そんなんじゃないよ。ぶつかっただのはお互いの不注意だろ。それに折れてはないだろ。望むなら、関節を1つ増やしてやるがな」

チンピラは伐の顔を見て舌打ちをすると伐はチンピラを睨みつけながら、チンピラの腕をつかんでいる手に力を込める。

「……わかったよ。今、ノラ猫を敵に回すほど、俺はバカじゃない。お嬢ちゃん、ノラ猫に感謝するんだな。お礼はきちんとするんだぞ」

「きゃっ!？」

チンピラは愛子を諦めると伐に約束すると伐は手を放すと、チンピラは愛子に耳打ちをした後、彼女のお尻を撫でて歩き出し、愛子は可愛い悲鳴をあげる。

「帰るぞ。ここから、出るまでは送ってやる」

「う、うん。お願い」

伐はめんどくさそうに言つと愛子は伐の忠告を真面目に受け止めたかった事を後悔しながら、伐の制服の袖をつかんで伐に付いて歩く。

### 第53問（後書き）

どうも、作者です。

改めて、愛子は難しいなあ…と。

彼女は康太をからかっているイメージしかないから、攻め込まれているのは不自然だなあ…と。

愛子がぶつかったチンピラは伐をノラ猫と呼びました。

伐はそこそ顔が知れているようです。

伐の活動範囲にチンピラ、伐のバイト先、ノラ猫はどこに進むんでしょうか？（苦笑）

## 第54問

「……ねえ」

「……」

愛子は暗くなり始め、先ほどのチンピラのような人達が増えてきた街中を歩くのが不安になってきたようで伐に話しかけるが伐は愛子の言葉に振り返る事なく、歩いて行く。

「ねえ。ボクの話聞いてる？」

「……お前の話をどうして俺が聞かないといけないんだ？」

愛子は伐の反応に頬を膨らませるが伐はくだらないと言う。

「女の子が不安がつてるんだよ。男の子なら……」

「悪いな。俺は女を悦ばせる方法はベッドの上の事しか知らない。それで良いなら構わないぞ」

「!？」

愛子は不安な気持ちを振り払いたいようで伐に言うが、伐は表情を変える事なく言うと、愛子は顔を赤くする。

「どうした？ 経験豊富なお子ちゃまは何を想像したんだ？」

「……もう、良いよ。認めるよ。背伸びしてました。だから……街

中であんまり言わないでよ。やっぱり、ボクも女の子だから、恥ずかしいし」

伐はそんな愛子の様子に彼女をからかうように言うと、愛子は自分の非を認める。

「それで良い。それで何だ？ ……俺に保健体育の実技を教えて欲しいのか？」

「ちが、違う！？」

愛子が非を認めるのを見て、伐は彼女の頭を乱暴に撫でた後、ムダな色香を出して甘い声で愛子の耳元でささやくと愛子は顔を赤くしたまま、否定すると、

「えーとね。さっきはボクのせいで黒須君に迷惑かけちゃったみたいだから」

「肢体で返したいわけだな」

「違う！？ って、どうして、さっきまではボクの事なんて興味なさそうだったのに」

チンピラから助けて貰った事の礼を言うと伐はムダな色香を出したまま、愛子に言うとな彼女は全力で否定する。

「言っただろ。経験有りを語る処女は面倒くさいと、けどな。処女は好物だ。あのまま、連れて行かれて乱暴にまわされるより、ずっと良いぞ。あっちは最悪、薬漬けになって、外国に売り飛ばされるんだからな」



「まわされる？ ……！？」

「何だ？ わかってなかったのか？」

伐は愛子がチンピラに連れて行かれた時に彼女が何をされるかを言  
うと愛子の顔は青ざめて行き、伐の制服の袖をつかんでいた手は震  
えて行き、

「……ったく」

伐はそんな愛子の様子にため息を吐くと彼女の頭を乱暴に撫でる。

「……黒須君、助けてくれてありがとう」

「……ったく」

愛子は伐に頭を撫でられた事に不安になっていた心が癒されたのか  
ボロボロと大粒の涙を流しながら、伐に礼を言うが、伐は女の子が  
泣いてるのにあまりなれていないようで、困っているのか顔をしか  
める。

「……ったく、確かにあの人の教えは正しいな。本当にめんどくせ  
え」

伐は以前、恩人に言われた『女を泣かせるのはベッドの上だけにし  
る』と言っ言葉の意味を再認識すると、

「泣くな。弱みを見せるとやられるぞ」

「う、うん」

無愛想に言つと愛子の手をつかみ歩き出す。

「……ビール。ってわけにもいかないか。ほら、これでも飲んで落ち着け」

「あ、ありがとう」

伐は愛子を近くの小さな公園まで連れて行くとポケットから小銭を取り出して自販機からブラックの缶コーヒーを2本買つと、1本を愛子に渡して言う。

「……苦い」

「何だ？ 文句でもあるのか？」

「無いけど、おごつてくれるなら、もう少し、ボクの好みも聞いて欲しかったかな」

愛子は伐から受け取ったコーヒーに口をつけると少し顔をしかめた後、彼女はすでに手遅れにも見えるが伐に弱みを見られたくないように作り笑顔で笑う。

「……そりゃ、悪かったな」

「えーと、今日は本当にごめんなさい。ボクのせいで黒須君には迷惑をかけちゃった」

「気にするな。これは貸しだからな。そのうち返して貰うしな」

愛子は改めて、伐に頭を下げると伐は興味なさそうに言うと、

「余計な事に首を突っ込もうとするなよ。それが安全に生きるために必要な事だ。ここから先はノラ猫（俺）の領域だ。ガキが興味本位で近づくな」

夜の街を下品に照らすネオンを背後に言い、

「そっちの道は大通りだ。後は自分で帰れ」

愛子の返事を待つ事なく、歩き出す。

## 第54問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの愛子との絡み2問続けました。

愛子はヒロインに見えてるんでしょうか？

愛子の泣き顔に戸惑う伐は自分で書いてるのに少し意外でした。

距離をとろうとするノラ猫は1人でどこに向かうんでしょうか？  
苦笑）

## 第55問

「……ねむ」

「死にやがれ!!」

伐はあくびをしながら、教室のドアを開けると雄二が伐の登校を待ち望んでいたようで、伐の顔面に向かい殴りかかるが、

「……朝からうるせえよ」

「……ぐはっ!? て、てめえ、黒須。ここは反則だろ。きたねえぞ」

伐は当たり前のように雄二の拳を交わすと何のためらいもなく、雄二の男の子共通の弱点を蹴り上げ、雄二は体を走る激痛に膝をついて伐を睨みつけるが、

「不意打ちも充分、キタねえよ」

「ぐはっ!?!」

伐は当たり前のように睨みつけている雄二の目に目潰しをする。

「あ、あの。黒須君、少しやりすぎだと」

「巨乳娘、やりすぎも何も俺は正当防衛だから問題ない。それより、頼んだものは?」

「はい。これで良いんですよね」

悶絶している雄二の様子に瑞希は顔をひきつらせて伐に声をかけると、伐は自分は悪くないと言い、瑞希に頼んだ日本史の問題集を出せと言うと瑞希は伐に日本史の問題集を手渡す。

「……そうだな。このページと後はこれくらいかな」

伐は受け取った問題集に目を通すと、

「おい。霧島、あのまま勝負を続けた時の結果を教えてやる。はしやいでないで、担任がくるまえにこれを終わらせろ」

「今の状況でお前が言うな!？」

雄二の卓袱台の上に問題集を置くが雄二は目を押さえて畳の上をのたうちまわっている。

「……明久、雄二は昔、悪鬼羅刹とか言われておったのではなかったのか？」

「そのはず、何だけど」

秀吉は一方的に伐にやられている雄二の姿に表情をひきつらせて明久に言うとも明久は苦笑いを浮かべる。

……  
……

……

…

「と言う事で、この後、Bクラスと再戦するわけだが……」

「お前ら、そんな目で俺を見るな！！　ここまで恥をかかせるなら、いつそ殺せ！！」

担任が簡単なHRを終えて、教室を出て行った後、伐は雄二をFF F団から借りた十字架に縛り付けて、彼の額には先ほどやらせた問題集の採点をして『53点』と書かれた紙を額に貼り付けている。

「黒須君、今日の作戦って何？　この前みたいに奇襲？」

「てめえ、明久、今笑ったよな！！　黒須、明久、お前らこれを抜けたら覚えておけよ！！」

「……うるさいな。Aクラスに移動するか、嫁にきても……」

「黙るから止めろ！！」

明久は雄二を見ながらニヤニヤと笑い伐に今日の作戦を聞くと雄二は叫ぶが、伐の翔子と呼ぶと言う一言に負けを認める。

「作戦か？　別にない。今回は数学をフィールドにした力押しだ」

「なんじゃと！？　昨日の話なら、何か作戦があるのではないのか？」

伐は雄二が黙ったのを見て、今日のBクラスとの対決方法を言うと秀吉の言葉を皮切りに教室がざわざわとし始める。

「あの、黒須君、本当に作戦は無いんですか？」

「ああ、作戦はないが意味はある。まあ、わかるのは坂本くらいか」

瑞希はそれでも伐が何か企んでいると思ったようで聞くと伐はニヤリと笑い、雄二に話をふる。

「……昨日、一昨日と黒須は謀略で根本を倒したから、今日は単純な攻撃力で倒してBクラスが俺達Fクラスに逆らえないように牙を折る。そのために姫路の点数を減らさないためにあそこで停戦協定か」

「さすが、代表様。勉強以外は頭が回る」

「……うるせえ」

雄二は伐の考えがわかるため、ため息を吐くと伐は雄二を誉めるが雄二は誉められてる気がするわけがなかったため息を吐くと、

「黒須、下ろせ。前線はお前が指揮を取るんだろ。俺は補給部隊をまとめる」

「割り切れるってのは才能だな」

「……この状況で文句を言っても仕方ないだろ」

雄二は伐の作戦にのると言う。



「まあ、霧島も納得したしな。主教科は数学。島田、俺と一緒に前線をまとめる。康太、悪いが今回は裏工作はなしだ。保健体育を使つて霧島の警護を任せる」

「……………了解」

「うち、瑞希じゃないの？」

伐の指示に康太は頷くが美波は瑞希が前線にいない事に首を傾げる。

「巨乳娘はクズの首を取って貰う。やっぱり、仕返しは本人がやるのが1番だしな」

「……………確かにな。姫路は最強の駒だが、根本に付け入れやすい。ここでかなわない事を身を持って教えるわけか？」

「そういう事だ。巨乳娘。前にお前のために頑張ったバカのためにも負けられないぞ」

「はい。わかってます」

伐の考えに雄二は頷き、瑞希は前回の明久の頑張りを無駄にできないと気合いを入れる。

「なら、行くぞ。Aクラスの設備まではいかないが……………」

「ここで戦意をそぐなよ」

「Bクラスに勝つたらCクラスと一緒に打ち上げをする事になって

る」

伐の言葉にFクラス男子の戦意は上がり、

「……単純だな」

「嫁がいる奴にはわからんだろ」

雄二がため息を吐き、伐は表情を変える事なく言う。

## 第55問（後書き）

どうも、作者です。

あれだけ溜めておいて、力押し。（苦笑）

伐の思うとおりに事は進むんでしょうか？（悪笑）

そして、指示が出なかった明久と秀吉の出番は？（苦笑）

## 第56問

「黒須君、凄いよ。僕らBクラスに負けてないよ」

「当たり前だ。Bクラスは前回の試召戦争で補習送りになってる上に、回復試験の申請をする前にCクラスとも数学で戦って、Fクラスと再戦だからな」

「回復してるヒマが無いわけね」

明久は伐の召喚獣が今回も数学で腕輪を持っているため、Bクラスが同士討ちを始めているのを見ながら、伐に言う。伐はCクラスにも数学で試召戦争を仕掛けさせていたようでBクラスの数学の点数は低い。

「……そう言えば、黒須、お主、Bクラスに回復試験の保留も持ちかけておったのう」

「ああ、回復試験は申請をしないとイケないからな。回復試験は中途半端、途中退席したとしても、数学で巨乳娘と島田を相手にするのは分が悪い上に、昨日の決着後に設備移動をさせたんだ。試召戦争と設備移動で体力を使ったヤツらが召喚獣を使いこなしたり、回復試験に集中できないだろ。それに頭脳労働派を語るヤツらが多いBクラスは今日は体にガタもきてるだろ」

「なるほど、筋肉痛だね」

「ちょっと、黒須、あんたはいつからこの戦いを考えてたのよ？」

秀吉は伐の言葉に伐が最初のBクラス戦で約束させたFクラス対Aクラスが終了まで回復試験を中止しろと言っていた事を思い出し、伐に言くと、伐はすでにこの作戦の結果などどうでも良いようで興味なさそうに言くと、美波は伐の様子に呆れたような表情でため息を吐く。

「霧島が次はBクラスをやると言った時からだ。あのクズは戦争の内容しだいで俺達がAと戦った後、必ず、漁夫の利を狙ってくると思っただけだな」

「でも、試召戦争に負けたら3カ月間は試召戦争は禁止だよな？」

「宣戦布告した方はな。だから、仮に俺達がAに勝っても、他のクラスに攻め込まれば終わりだ。仮にB対CがBの勝利だとしても疲弊したクラスと5対5でしか戦ってないFと回復試験が受けられないBなら、悪い賭じゃない」

「なるほどのう」

「さてと、無駄話はこれくらいにするぞ。回復試験を終える前にクズの前まで突き進むぞ」

伐の言葉にFクラスの生徒は頷くとCの設備に移った恭二の本に向かう。

「お前達、卑怯だぞ！！」

「卑怯？ 誉め言葉だね。だいたい、俺達が和平交渉に出した条件には何の問題もないだろ。『俺達は設備の交換をしない代わりに根本に女装させてAクラスに行かせる。』それだけだろ」

和平交渉を結んだはずのFクラスに攻められるとは思っていなかったBクラスの生徒は伐を睨みつけるが伐は当然、鼻で笑う。

「まあ、それにあんな条件を出された時に簡単に代表を売ったお前らに卑怯者扱いされる意味がわからないけどな」

「ぐっ」

伐は倒したBクラスの生徒達を見下しながら先を進んで行くが、

「黒須君って、完全に悪役だよね？」

「代表を売ったと言っておるが、あ奴も雄二を霧島に売ってなかったかのう」

伐の様子を見て、明久と秀吉は苦笑いを浮かべる。

「俺は良いんだよ。最初からなれ合うつもりもない。今回はあくまで康太からの依頼の延長上だ。Aの設備にできなかったけどな」

伐は興味なさそうに言うと、

「クズ、試召戦争で3連敗する最弱の代表ってどんな気分だ？」

「ぐっ」

教室のドアを蹴破り、教室の隅にいる恭二に向かい言う。

「黒須、貴様だけは許さない。Fのくせにこの俺をバカにしやがっ

て」

「おいおい。『どんな卑怯な手を使っても勝つ』ってのはお前も言  
つてた事だろ。それに戦争での調略は基本だろ。弱みを見せたお前  
が悪いんだろ」

恭二はすでに自分が代表と認められていないため、原因を作った伐  
を睨みつけるが、伐は恭二の言葉を鼻で笑い、

「他人をコマとしか思えない人間の結末ってのはこんなもんだ。姫  
路」

「はい。Fクラス、姫路 瑞希がBクラス代表根本 恭二くん<sup>サモン</sup>に数  
学勝負を挑みます。試獣召喚」

伐は後は任せると瑞希に言つと結果を見る事なく、教室を出て行く。

## 第56問（後書き）

どうも、作者です。

山もなく決着です。

伐はどうして、根本をあそこまで嫌うんでしょうか？

チンピラにノラ猫の元の飼い主と何かがつながるかも知れません。  
1人で教室を出て行ったノラ猫は1人でどこへ行くんでしょう？  
（悪笑）



## 第57問

「黒須、どこに行くんだ？ 戦後処理に立ち会わないのか？」

伐が教室から出ると瑞希が恭二を倒したと聞き、戦後処理をするために来た雄二が伐に声をかける。

「……ああ。今回は設備交換だけだろ。俺には関係ない」

「そうか？ お前の事だから、根本に言う事でもあると思ったんだがな」

伐は戦後処理には興味がないと言うと雄二は今までの伐の様子からは考えられないと言いたげな表情をする。

「……別に、何もない。ここから先は代表の仕事だろ。あいつらが納得する処理をしてやれ」

「ああ。……って言っても、お前の言った通り、今回は設備交換だけだ……って、いねえし！？」

伐は面倒くさいのか雄二に戦後処理を押し付けるとタバコを吸うために1人で屋上に向かう。

……

……

……

…

（……つたく、俺は何がやりたいんだ？）

伐は屋上に着くと、日陰になっているところに座り、1本目のタバコに火を点け、本来なら、Aクラスとの決着が付いた時点で契約は切れたはずなのに手に入れた優子を手放してクラス設備の向上に協力したと言っ自分らしくない行動にため息を吐く。

（……あいつに似たクズをぶちのめせば気が晴れるかとも思ったが……晴れないって事はただの八つ当たりか？ ……俺もガキだな）

伐は何かを思い出しているようで自虐的な笑みを浮かべると、

「こら、ここをどこだと思っている。タバコだと、お前、何年何組だ！―！」

「……生娘、何が楽しいんだ？」

愛子は屋上に上がる伐の姿を見かけて後を付けてきたのか、伐のタバコを咎める教師のフリを言うが、伐が動じるはずもなく、愛子に興味なさそうにタバコを吹かす。

「ちょっと、だから、ボクには工藤愛子って名前があるって言うてるでしょ！―！」

「……うるせえな」

愛子は動じない伐が相変わらず、自分の名前を呼ばない事に頬を膨

らませるが、伐は相手をするのも面倒だと言いたげな表情をすると、

「……何のようだ。何もないなら、消えろよ」

「ねえ。タバコって美味しいの？」

愛子を追い払うように言うが、彼女は伐の隣に座る。

「……別に」

「美味しくないのに吸ってるの？ 体に悪いんだし、やめたら」

「……」

「ちょっと、どこに行くんだよ!？」

愛子は苦笑いを浮かべながら言うが、伐はうつとうしいと言いたげにタバコの火を消し、屋上を後にしようとするが、愛子は慌てて伐の腕をつかむ。

「……何だよ？」

「話くらいしてくれても良いでしょ？」

「お前の暇つぶしに付き合うほど暇じゃない」

「こんなところでタバコ吸ってたのに？ 暇なんでしょ？」

伐は愛子の手を振り払おうとするが、愛子は手に力を込め伐を逃がさないと言う。

「……何なんだよ」

「良いでしょ。暇人通し、楽しくやろうよ」

「……お前はＡクラスだろ。真面目に授業でも受けてろよ」

伐はめんどくさそうに言うが、愛子は伐の言葉など受け入れるつもりはないと笑顔で言う。

「……」

「……ねえ」

「……」

「……ねえ。つてば、何か話してよ」

伐は逃げられないと判断するともう１度、座るが何も話す事はなく、愛子は反応のない伐を見て、頬を膨らませる。

「……何で、俺が話さないといけない。お前が引き止めたんだ。お前が話せば良いだろ」

「……ねえ。せっかく、女の子と一緒になんだよ。楽しくお話したいとか……ふえっ!？」

「……俺は女を楽しませるのは１つしか知らないと言わなかったか？」

愛子は文句を言おうとすると伐は愛子を自分に引き寄せて、彼女の耳元で囁くと愛子の顔はみるみるうちに真っ赤に染まる。

「それで良いなら、いくらでも付き合ってやる」

「そ、そ、そっちは遠慮するよ!？」

「……そりゃ、残念だ」

表情を変える事のない伐とは対照的に愛子は同様なながら、伐から離れると伐は立ち上がり、

「……じゃあな。俺は戻るから、お前も戻りな」

愛子を残したまま、屋上を後にする。

## 第57問（後書き）

どうも、作者です。

少しだけ、漏れたノラ猫の心情に。

遊ばれる愛子。

相変わらず、攻められてる愛子は不自然だ。（苦笑）

さて、Cクラスの設定になったけど、どうやって鉄人を担任にしよう？  
……まあ、このままでも良いか？（苦笑）

## 第58問

(……)

伐は設備交換が終了し、盛り上がっている教室に入ると騒ぎに混じる事なく、空いている席に突っ伏し、眠りにつこうとするが、

「あつ！？ 黒須、帰ってきたなら、声をかけなさいよ」

「そうなのじゃ。設備を入れ替える事ができたのはお主の活躍があったからなのじゃ」

美波と秀吉が伐を見て、声をかけてくる。

「……別に俺は何もしてない。それに俺の仕事はここまでだ。後はお前らでやれ」

「後？」

伐は2人の相手をするのは面倒だと2人を追い払うように言うと、美波は伐の言葉の意味がわからずに首を傾げる。

「俺達がCの設備を取れたのは謀略や策略だ。単純な成績勝負じゃ勝てないって事だろ」

「でも、僕達は勝ったんだよ」

「そうですよ」

「……巨乳娘、お前、ダーリンに引つ張られすぎだ。もう少し頭を使え」

伐、秀吉、美波の様子を見て、雄二が伐が考えている事を代弁すると明久と瑞希は首を傾げると伐はFクラス最強の瑞希の様子にため息を吐く。

「は、はい!？」

「でもさ、せつかく、試召戦争に勝ったんだよ。少しくらいハメを外したってさ」

瑞希は伐の言葉に慌てて返事をするが、明久は今は喜ぶ時だと言いたげに言う。

「俺は設備がどうなろうと知った事じゃないが、俺達は最後にどうやって勝った？」

「正面から、力押しだ」

伐はすでに面倒くさくなっているが、伐の話を聞くためにクラスメート達が伐を囲んでいるため、伐は何も考えていないクラスメートの様子を見てため息を吐きながら言うなか、雄二は面倒でも逃げられない伐の姿を見て楽しそうに笑って言う。

「霧島、お前はわかってるんだろう。お前が説明しろ。それが代表の仕事だろ」

「いやな。俺の頭はそんなに早く回らないんだ。説明してくれ」



「……ちっ」

伐は雄二に押し付けようとするが、雄二は受けなかったため、伐は舌打ちをすると、

「俺達は連戦で弱っている相手から、設備を奪い取ったんだ。今回の戦争で数学はだいぶ点を削られている。そんな時に攻められたら、今度は俺達が負け組だ。今の状況でAやCは正面からじゃ倒せないがFなら簡単に倒せる。と思うヤツはいるだろうな」

「でも、Dクラスとは協定を結んでるわよね」

「室外機は壊したから、もう無効だな」

伐の言葉に美波はDクラスとの協定を口に出すと美波の言葉に多くのクラスメートが頷くが、協定を持ちかけた雄二本人がすでに意味のない協定だと言う。

「なら、Dクラスが攻めてくるの？」

「いや、Dクラスの代表の平賀は慎重だ。それに黒須にやる気はないがDクラスは姫路と黒須がいる事で警戒して、すぐにはこないだろう」

「それなら、Eクラスですか？」

「まあ、確率で言えばな」

説明は雄二に戻り、伐は興味なさそうにあくびをすると、

「俺の役目は終わったからな。さつきも言っただがここから先は俺は知らん。気を抜いて元の設備に戻るかはお前らしだいだ」

そう言い、眠りにつこうとするが、

「そんな事を言いながらも助けてくれるよね？」

「助けねえよ。今回はあくまで、康太からの依頼だ。ただで助けるだ？ ふざけるなよ。人はどれだけきれい事を並べても1人なんだよ。メリットもなしに動くわけねえだろ」

明久は口では冷たく言いながらも今まで伐が助けてくれたため、笑いながら伐に言うが、その言葉は伐の神経を逆なでする言葉であり、伐は怒鳴るわけでもなく、冷たく言い放つ。

「……………伐」

「……………ちっ」

康太は伐の様子に何か危ういものを感じたようで伐の名前を呼ぶと伐は舌打ちをすると席から立ち上がる。

「黒須、どこに行くのじゃ！？」

「帰るんだよ……………ああ、甘いことしか言えない世間知らずに教えておいてやる。巨乳娘と同じように体の弱いヤツがBにもいたかも知れないな。ダーリン、お前はそいつがああ設備で体を壊したら、お前はどうするんだ？ 知らねえヤツだからって見捨てるのか？」

「そ、それは……………」

「自分勝手な理由で周りを巻き込むって事を少しでも考えな」

伐は明久の瑞希の体調を心配した理由は本当に正しい事かと投げかけるとクラスメート達を押し付け、教室を出て行く。

## 第58問（後書き）

どうも作者です。

何も考えていないクラスメイトにイラつくノラ猫。

空気は読みません。

伐の最後の言葉にクラスメイトは何かを考えるんでしょうか？

## 第59問

(……)

伐は教室から出るとイラついているようで本当に帰ろうとするが、

「黒須、お前、どこに行くつもりだ？」

西村教諭に見つかり、首をつかまれる。

「帰るんだよ。離せ」

「……黒須、お前、何をイラついている？」

伐は普段は教員への態度は上手く使い分けているのだが、明久達、Fクラスとのやりとりが伐の神経を逆なでしているようで西村教諭の手を振り払おうとするが、伐では振り払う事が出来ず、西村教諭はふだん、あまり見る事のない伐の様子に首を傾げると、

「まあ、まだ、下校時間ではないから、帰すわけにはいかん。それでも、帰ると言うなら俺に付き合え」

「てめえ、離せよ!!」

西村教諭は伐の今の様子に危うさを感じたのか伐を引きずり、生徒指導室に向かい歩き出す。

「……ちっ」

「もう少し、静かに座れんのか？」

「うるせえよ」

生徒指導室に着くと伐は逃げられないと判断して不機嫌な表情をしたまま、椅子に腰掛けると西村教諭はため息を吐くが伐が態度を改める事はない。

「……まったく、何があつたんだ？　せつかく、この設備に上がれたんだ。真面目に授業でも受けたらどうだ？」

「必要ないな。だいたい、高校で受ける授業が生きるのに何の役にたつ？　少なくとも、俺には必要ない。それにあのバカどもは授業を受ける気なんてないぞ。さつきも浮かれてバカ騒ぎしてたぞ」

西村教諭はため息を吐きながら伐に言うが伐はその言葉を鼻で笑いながら言うつと、

「ふむ。やはり、そうか。このままだと、すぐに元の設備に戻りそうだな」

西村教諭は真面目な表情をして言い、

「よし。黒須、行くぞ」

「どこにだよ？」

再び、伐の首をつかみ生徒指導室を出て行き、伐はすでに諦めに入ってきたように西村教諭に引きずられて行く。

「お前ら、いつまで騒いでいるんだ!!」

「……あんまり、力入れるなよ。ドアが壊れる」

「げっ!? 鉄人」

西村教諭は伐を引きずったまま、Fクラスの新しい教室に着くと勢い良くドアを開けると伐は西村教諭のパワーにため息を吐き、2人の登場に教室内は静まり返る。

「黒須、席に着け」

「……わかってるよ」

「黒須、あんた、何で引きずられて帰ってきたの?」

「……知るか」

西村教諭は伐に席に戻れと言うと伐は不機嫌そうに席に座り、近くの席にいた美波は伐に西村教諭と一緒に戻ってきたわけを聞くが伐はめんどくさそうに答える。

「そろっているな。まあ、いきなり、説教から始めるのも何だしな。まずは試召戦争の勝利おめでとう。まさか、お前達がここまでやるとは思っていなかった」

西村教諭は全員が席に座つたのを確認した後、Fクラスの勝利を誉める。

「鉄人、まさか、僕達を誉めにきたの?」

「待て。明久、あの鉄人が俺達を純粹に誉めに来るなんてありえない。これは何か裏がある」

明久は西村教諭の言葉に聞き返すと雄二は何か裏があると言い、

「良くわかったな。職員会議でな。先日からのお前達の試召戦争が問題になっていてな。この俺に担任になってくれないか？　と言う話になっていてな」

「ふざけるな！？　僕達は試召戦争に勝ったんだ！！　何も因縁をつけられる事はない！！」

「そうだ！！」

西村教諭はため息を吐きながら、他の教員からFクラスの担任になって欲しいと言われている事を伝えると明久と雄二の言葉を皮きりに教室内から西村教諭に向けた文句があがるが、

「黙れ！！　お前らは試召戦争とは言え、他のクラスへの脅迫や設備の破壊。お前ら問題児をそのままにするわけにはいかん！！」

西村教諭は文句を言う生徒を一喝すると教室は静まり返る。

「……なるほどね」

「黒須、何かわかったの？」

西村教諭の言葉に伐は何か理解したようでつぶやくと美波が伐に声をかけるが、



「……自分で考えろよ」

伐は美波の相手をする気はなく、ため息を吐く。

こうして、Fクラスの担任が西村教諭に変更になった。

## 第59問（後書き）

どうも、作者です。

鉄人に捕まり、教室に連れ戻されたノラ猫に無事に担任におさまった鉄人。

オリジナルを混ぜながらと言いつつ。第1巻部分は強制終了です。

次は清涼祭編？

瑞希の転校は薄いが召喚大会はどうなるんでしょう？

そして、単独行動の多いノラ猫は清涼祭に参加するんでしょうか？

（爆笑）

## 第60問

「……ふう。増税か、世の中、世知辛いな。禁煙は無理でも少し減らすか？」

「また、こんなところでサボってるの？」

文月学園、最初の学園行事の清涼祭の準備に生徒が忙しく動き回っているなか、伐は清涼祭に参加する気もないようで、屋上でタバコを吹かしていると愛子が伐の姿を見つけて声をかけてくる。

「……何のようだ？」

「別に、黒須くんはこんなところでサボってて良いのかな？ と思っ  
つてさ」

愛子は笑顔を浮かべながら、伐の隣に座る。

「清涼祭？ 興味ないね。何の得にもならないし、俺は当日もサボるしな」

「また、そんな事を言う。せつかくの行事だよ。楽しもうとか思わないの？」

「ただのガキの遊びだろ。興味ない」

愛子は伐の言葉にため息を吐きながら言うが伐は考えを改める気はない。

「それなら、これじゃない？」

「これは何だ？」

「ボクたち、Ａクラスはメイド喫茶をやるんだよ。それのお食事券だよ。この前、助けて貰った時のお礼としてなかったから」

「……いらねえ」

愛子は伐に自分のクラス出し物での食事券を渡すが伐はいらないと断る。

「本当に？ みんな、メイド服を着るんだよ。スカートも短いよ。黒須くん、好きでしょ」

「……俺は外見に興味ない。あるのは中身だ」

愛子はニヤニヤと笑いながら言うが伐は本当に興味がなさそうに言う。

「でもさ。ただでご飯も食べれるし、お得でしょ？」

「食べねえものを貰っても仕方ない」

「食べないもの？ メニューは選べるよ」

伐は愛子に言うとな愛子は伐の言葉の意味がわからずに首を傾げる。

「……いろいろ有ってな。俺の体は味に関わらず、自分以外の人間が作った料理を拒絶するんだ。それ以外だと、ファーストフードや

コンビニの機械的に作られたものしか食えない。だから、貰っても無駄だ」

「また、冗談を言って……本当なの？」

伐は面倒そうに言う。と愛子はまた、伐が冗談を言っていると笑うが、伐の表情を見て彼が嘘をついていないと理解する。

「……ああ。それに礼なら、こっちの方が良いな」

「ちょ、ちょっと！？　どうして、ボクの胸に手を伸ばそうとするの！？」

「揉みたいからだ。たまに少しさびしいのも美味いかなと思ってな。最近タレかけたムダな巨乳のばあの相手が多かったから、貧相でも張りがあるのが食いたい」

伐は表情を変える事なく言う。と愛子は飛び退き、

「清涼祭で頑張って、女にしてくれる男でも探しな。男と出会っ良い機会だろ」

「ちょっと、黒須くん！？」

伐は愛子のように苦笑いを浮かべるとタバコを携帯灰皿に押し付け、屋上を後にする。

「……ひとまず、鞆もあるし、教室に戻るか？」

清涼祭の準備になり、あわただしい廊下を進んでいると、

「黒須君、いた」

「黒須、良いところにいた。協力してくれ」

「断る」

明久と雄二が伐を見つけ、何か頼み事があるようで声をかけるが、伐は内容も聞かずに断る。

「……責めて、わけくらい聞け」

「一大事何だよ。教室に戻って」

「……何なんだよ」

明久と雄二は伐の両腕をつかむと伐を教室に引きずって行く。

「……それで、何のようだ？」

「姫路さんが転校するかも知れないんだ」

「だから」

教室に着くと明久と雄二以外に秀吉と美波が待ち構えており、伐は面倒そうに聞くと明久から瑞希の転校の話を聞かされるが伐は当然、興味がない。

「そんな事を言わないでよ。黒須君のせいでもあるんだから」

「そうよ。あんたが評判悪いから、瑞希のお父さんがあんたみたいなのがいる学園に瑞希をおけないって言うのよ」

「……知らねえよ。って言うか、それは俺だけじゃなく、うちのクラス全部の事だろ。俺のせいにするな」

伐の態度が悪いせいで瑞希を心配した彼女の両親が瑞希を心配していると聞かされるが伐は関係ない上に自分だけのせいにするなと言う。

## 第60問（後書き）

どうも、作者です。

清涼祭編スタートです。

ノラ猫はクラスの出し物に参加するのか？

策略、謀略でクラスを奪い取ったFクラスの保護者への評判は悪い  
です。それが原因の瑞希の転校騒ぎ。

伐は興味なさそうですが、周りはそうはいきません。

ノラ猫はどうするのでしょうか？

そして、なんか愛子と良い雰囲気？

美春とも絡ませないといけないし、どうなるでしょう？

まあ、未だに愛子と美春。どちらにするか決めかねています。何か  
決定打が欲しいなあ。（苦笑）



## 第61問

「まあ、確かに俺達、Fクラスの評判も良くはない」

「そうなの？」

雄二は確かに伐だけのせいではないと言うと明久はクビを傾げる。

「鉄人が言ってただろ。学園の周りを怪しげな覆面を被った連中が彷徨いてるって」

「……確かにワシらのクラスメートじゃのう」

雄二は学園にきている苦情にFクラスの生徒が関わっていると言うと秀吉は苦笑いを浮かべる。

「俺だけじゃないだろ。それだけなら、俺には関係ないな」

「待て。黒須、確かにお前だけのせいじゃないが、間違いなくお前が関係してるんだ」

「俺は巨乳娘の父親なんて知らない」

伐は関係ないと立ち上がると雄二が伐を引き止めるが、伐は関係ないと言う。

「そうでもないのよ。瑞希がCクラスの設備に上がった時にあなたの名前を出したらいいのよ。その時から、何だって。本当に瑞希の父親に心当たりないの？」

「ねえよ。だいたい、巨乳娘の父親は俺が関係するような。仕事してんのか？俺は基本的に一般人には手を出さねえよ」

「心当たりはないのじゃな」

美波は伐の名前に瑞希の父親が嫌悪感を示していると言うが、伐は関係ないと言い、秀吉は確認するように聞き返す。

「直接はな」

「直接はな。ってどう言う事？」

「まあ、俺も坂本と同じで悪名の1つや2つあるからな」

「……確かにな」

伐は直接は関係なくとも自分についている悪名のせいだろうと言うと同じように中学時代にこの変に悪名をとどろかせていた雄二が気まずそうに頷く。

「なるほどのう。心当たりはあるわけじゃな」

「確証はないけどな」

伐はめんどくさそうに言うと、

「と言う事だから、黒須、お前も協力し……」

「断る。俺には関係ない」

雄二は伐に協力しろと言うが伐は雄二の言葉の途中で断るが、

「良いのか？ ベッドの上以外で女を泣かせて。姫路は文月学園を退学する事になったら、間違いなく泣くぜ」

「……」

雄二は試召戦争で垣間見た伐の甘さにつけ込む。

「そうだよ。せっかく、姫路さんと仲良くなれたんだよ。黒須君だって、友達や仲間と離れ離れはいやだろ？」

「……関係ないな。だいたい、俺にはそんなものはいない」

明久はまるで自分は伐の友達だと言わんばかりに言う。伐の表情は小さく歪む。

「どうしてよ？」

「なら、逆に聞くがお前らは仮に巨乳娘が転校した時に巨乳娘と縁を切るつもりか？」

美波は伐の表情が歪む事に気づく事なく、伐を睨みつけて言うと伐は挑発的な口調で美波に聞き返す。

「そんなわけないでしょ！！ 瑞希はウチの友達よ。そんな事で」

「まあ、口では何とでも言えるな……でも、島田。お前は今の言葉を心から言ってるねえよ。お前はどこかで巨乳娘を邪魔だと思ってい

る」

美波は伐を怒鳴りつけるが伐は何かに気づいているようで、その言葉を鼻で笑い、

「前にも言っただろ。俺が欲しいなら、報酬を用意しな。そうだな。今回の報酬はお前で良いぞ」

「ちょっと、何を言ってるのよ!？」

美波の耳元で囁くと美波は慌てて伐から離れる。

「何だ？ 巨乳娘のために何でも協力するように言っただけには、自分の大切なものは失いたくないって事か？ まあ、そんなもんだよね。勝手にやれよ。俺には巨乳娘がいなくなるうと関係ない」

伐は美波の様子を見て、わざとらしくがっかりだと言つと、あくまでも、瑞希の転校は自分には関係ないと言つ。

「……じゃあな。後は勝手にやれ」

「待つのだじゃ。黒須」

伐は自分の鞆を持って教室を出て行くと、慌てて秀吉は伐を追いかけ、

「まあ、簡単に説得できるとは思わなかったけどな」

「雄二、大丈夫なの？ 黒須君は手伝ってくれなさそうだよ」

「まあ、説得は続けるぞ。あいつは口では人を突き放すがなんだかんだで甘い」

雄二は伐を味方に引き入れる方法を考えついているようで企んだような笑みを浮かべる。

## 第62問

「黒須、待つんじゃない!」

伐は教室を出ると清涼祭の準備でこつた返している廊下を誰とぶつかるわけでもなく、進んで行くが秀吉は伐の用にはいかず、他の生徒にぶつかりながら、伐の後を必死に追いかけてくる。

「……ちっ」

伐は後ろから聞こえる秀吉の声にイライラしているようで舌打ちをした時、

「黒須、鞆を持ってどこに行く気だ? まだ、下校時間には早いぞ」

準備時間の見回りに歩いていた西村教諭に見つかる。

「……気分が悪いので帰ります」

「嘘を吐くな」

伐は西村教諭の顔を見て、早退すると言ったが西村教諭が信じるはずもなく、嘘だと言いついた時、

「……やっと追いついたのじゃ」

秀吉が伐に追いついてくるが、小柄な彼は何度か人波に押し流されたよう疲れしている。

「……しつけない」

「黒須、話は終わってないのじゃ。教室に戻るのじゃ」

伐は秀吉の様子に舌打ちをするが秀吉は諦める気がないのか、伐の手をつかむ。

「ん？ 木下は黒須を連れ戻しにきたようだな。黒須、教室に戻るんだ。お前にも担当の仕事があるだろ」

「……知るかよ。だいたい、俺は当日、清涼祭に来る気もないんだからな」

西村教諭は秀吉の様子を見て、伐に向かい言うが、伐は関係ないと言い、秀吉の手を振り払い歩き出そうとするが、

「木下、こいつは何の担当だ。担任としてクラスの様子も確認しないとイケないからな。そこまで、連れてってやろっ」

西村教諭は伐の首をつかむと秀吉に言い、伐を教室まで引きずって行く。

「黒須、サボるんじゃないぞ。さぼったら、鬼の補習室に連行だ」

「……ちっ」

伐は西村教諭に教室に連れ戻されると西村教諭はそう言い、教室を後にし、伐は不機嫌そうな表情で自分の席に座り、舌打ちをする。

「ずいぶんと早く帰ってきたな」

「鉄人が捕まえてくれたのじゃ」

明久と美波は教室以外で作業をしているようで、雄二が戻ってきた伐を見てニヤニヤと笑うと秀吉は疲れたように肩で息をしている。

「……うるせえよ」

「そんなに睨むな。お前は条件を聞いていなかっただろ。俺だって、お前の性格上、ただで手伝えなんて言わないさ」

伐は雄二を睨みつけるが、雄二は考えがあるようで伐を挑発するような笑みを浮かべと、

「姫路の転校でネツクになっているのは、俺達Fクラスの素行の悪さだ。姫路の父親は当日、清涼祭にくるはずだ。そこでFクラスが真面目にクラスの出し物をやっているところを見せれば、少しでも印象は変わるだろ」

「……それこそ、俺がない方が良いだろ」

伐に自分の考えを話し出すが、伐は雄二の話に自分がいる利点はないと言い切る。

「まあな。世間一般的に考えれば、そうんだけどな。あの話には続きがあるんだよ」

「続き？ ワシはそんな事は聞いておらんのじゃ」

雄二はため息を吐くと瑞希に直接聞いたのか明久と美波が知らない



事があると言い、秀吉も知らないように驚いたような表情をする。

「姫路の父親がお前の名前に嫌悪感を表したのは良いな？」

「ああ」

「姫路が生きる事を計算して他人の顔色をうかがうようなヤツなら、俺もここまで世話を焼かなかったんだ」

雄二自身も本来なら、ここまで世話をしなかったと苦笑いを浮かべた後、

「姫路はお前や俺達Fクラスを父親にバカにされて、父親とマジゲンカしたらしい。Fクラスは悪い人達じゃない。黒須は自分の体を心配して試召戦争を勝たせてくれたってな」

真っ直ぐと伐を見据えて言う。

「それはずいぶんとバカな事を言ったな」

「まったく、同感だ。俺も他のヤツらも明久ほどじゃないが、クズなんだけどな」

伐は雄二から、聞かされた話を鼻で笑うと雄二も同じ意見なようにため息を吐く。

「巨乳娘に言っておけ、俺はそんなに優しくないってな」

「悪いな。すでに言わせて貰ったが、それでも、姫路のお前に対する評価は変わらなかった。あいつはどうやら、超が付くほどの頑固

者らしい。それでな。姫路の転校もあるし、お前の説得をクラスに持ちかけて見たんだ」

伐は瑞希をバカだと言い切ると雄二はニヤリと笑い、

「頑固者でバカなのはクラスの色みたいだぜ。お前に対する依頼料は俺達Fクラスの出し物の諸経費を引いた売上の全部だ。下手にバイトを入れるより、実入りも良いだろ」

伐への依頼料を提示する。

### 第63問

「……お前ら、バカだろ」

「今更だ。それにさっき言っただろ。『バカはFクラスの色だ』ってな。納得しないヤツも最初いたけどな。しつこいヤツがいてな。最後には折れてたぜ」

雄二の伐への依頼に伐は呆れ顔でため息を吐くが、雄二はそんな伐の様子を見て楽しそうに笑っている。

「……確かに売上しだいじゃ、清涼祭をサボってバイトを入れるよりは実入りは良さそうだ」

「黒須、協力してくれるのじゃな!!」

伐は雄二の笑い顔に不機嫌そうだが、依頼としては悪くないと言うと秀吉は嬉しそうに言うが、

「まだ、受けるとは言ってない。それで、俺に何をさせるつもりだ？」

伐はまだ聞く事があると雄二に言う。

「簡単には領かないよな。まあ、対した事じゃない。俺達がやらなといけない事は、Fクラスの喫茶店の成功と召喚大会での上位入賞だ。もちろん、お前は姫路の父親に警戒されてるからな。謀略、策略はなしだ」

「……召喚大会にまででないといけないのかよ」

雄二は伐に召喚大会に出ると言うた伐はため息を吐く。

「今のところ、Fクラスからは姫路と島田、俺と明久が出る」

「俺の相棒は？」

「まだ決まってるない」

「……そうか」

雄二から、聞かされた召喚大会への出場メンバーに伐は少し考えるような素振りをする、

「お前らに任せると不安だから、俺は自分でパートナーを探す」

「それは依頼を受けると言う事で良いんだな」

「ああ」

自分でパートナーを探すと言い、教室を出て行くとするが、返事をした後、振り返り、

「霧島、知ってるか？ 召喚大会の優勝ペアには『白金の腕輪』ってのと『如月ハイランドのプレミアムチケット』、準優勝にも『プレミアムチケット』が与えられるらしいぞ」

「な、何！？ 待て、黒須、俺は明久とのペアを解消する。だから、俺とペアを組んでくれ！！」

雄二に向かい言っと、雄二の顔は血の気が引いていき真っ青な顔で  
伐にペアを組んでくれと言うが、

「優勝を狙うなら、霧島嫁にでも持ちかけて見るか？ 俺はチケツ  
トはいらないから霧島嫁にやれば良いしな。学年主席と組めば優勝  
も狙えるしな」

「待て！？ 翔子は危険だ！！」

伐はそれなりに雄二にはめられたのが面白くないようで雄二をから  
かうように言った後、雄二の話など聞かずに教室を出て行く。

「ちくしょう！！ 明久なんかをペアに選ばなければ良かった！！」

「雄二、落ち着くのじゃ！！」

伐は教室から聞こえる雄二の声など気にする事なく、召喚大会のパ  
ートナーを探しに行く。

（……さてと、仮にFクラスから選ぶとしたら、どれも似たり寄つ  
たりだしな。俺が頼めるとしたら友香くらいか？ 後は美春と処女  
に貸しを返して貰うか？）

伐はパートナーをどうするか考えながら歩いていると、

「君、その君、止まりなさい」

メガネのしたに鋭い目つきを隠した男性が伐を呼び止める。

(……教頭の竹原だったか？ 何でこいつが俺を呼び止めるんだ？)

伐を呼び止めたのは文月学園の教頭の『竹原』であり、伐は怪訝に思いながらも、

「教頭先生？ 俺に何かようですか？」

「君は黒須 伐君だね」

「はい。そうです」

不自然に見えない作り笑顔を浮かべると竹原教頭は伐に名前を確認する。

「……そうか。こいつが噂に聞くノラ猫か。まあ、捨てゴマにはちようど良い」

(……聞こえてるよ。じじい、俺を捨てゴマに？ ずいぶん面白事を言ってくれるじゃねえか)

竹原教頭は伐をなめるように見回した後、ばれていないつもりなのかぶつぶつと小さな声で何かをつぶやいており、伐はわずかに聞こえてくる声に竹原教頭が自分を利用しようとしている事を理解するとノラ猫は冷たい笑みを浮かべて静かにその爪を自分を毟にかけようとしているネズミに食い込ませるがネズミは気づく事はない。

### 第63問（後書き）

どうも、作者です。

先日、初めて1日のユニーク数が1000人を超えました。

応援していただきありがとうございます。

またも禁じ手です。（苦笑）

依頼を受ける事にしたノラ猫とノラ猫に近づく教頭。

ノラ猫の機嫌を損ねていても、教頭は気づきません。（苦笑）

伐のパートナーは誰にしよう？

愛子、美春、友香？他の誰か？（爆笑）

誰にしよう？（悪笑）

## 第64問

「君に頼みたい事があるんだ。少し付き合ってくれるかい」

「わかりました」

竹原は伐についてくるように言うと言はなぜ、教頭である竹原が自分に声をかけたか気づいていないようなふりをして竹原の後を歩いて行く。

（……確か、こいつは他の私立に出入りしてるとか言う話だったよな。大方、ばばあの失脚か、金のために何かやらせようって腹だろうな。まあ、自分のために他者をはめるつもりだろうけどな。選んだ人間が悪かったな）

伐は竹原の後ろを歩きながらこれから、伐が聞かされる言葉を推測していると、

「入ってくれ」

「失礼します」

教頭室の前に付き、竹原は伐に入るように言う。

「まあ、座ってくれ」

「はい」

竹原に薦められて伐はソファに腰をかけると、



「すまないね。私は面倒な事は嫌いなんですね。単刀直入に言わせて貰おう。私の下に付け」

伐を見下したように言う。

「意味がわかりません。と言うか……」

伐は竹原の言葉にため息を吐くと冷たい笑みを浮かべ、

「あんたは俺を知ってるんだろ。なら、面倒な御託は良い。金に見合った仕事はしてやるよ」

偽善者ぶるわけでもなく、高圧的に竹原が『ノラ猫』を知っているなら、こちらの条件を飲めと言う。

「噂通りのようだ」

「どんな噂かは知らねえがな」

竹原は伐を金に汚いだけの人間だと思ったように伐を見下すように言うが、伐が興味なさそうに言う、

「まあ、その方がこちらとしても都合が良い」

竹原は何かあった時は伐を切り捨てるつもりのため、頷くと、

「君は召喚大会の賞品について何か知っているかい？」

「『白金の腕輪の不具合』か？ それともウェディング体験か？」

伐が何か知っているか探りを入れてくると伐は白金の腕輪については何も知らないが竹原の反応から推測して、まるで自分が何かを知っているかのように聞き返すと竹原の口元は小さく緩む。

「そうかい。君みたいな人間も知っているなら、現実味が出てきたな。これであいつも終わりだ」

（……だから、本音が漏れてるよ。3流）

伐の仕掛けた罠にはまり竹原は楽しそうに笑い、伐はその様子を冷めた目で見ている。

「……………それで用件はそれだけか？ 俺はあんたにつきあってるほど暇じゃないんだ」

「悪かったね。じゃあ、こちらからの条件を言わせて貰おう。君は本来ならAクラスの成績らしいね」

「興味ないな。成績なんて生きるのには必要ない」

竹原は伐に何をさせるかは決まっていると言いたげに企んだような笑みを浮かべて伐の成績を確認するが、伐は興味などないと言っ。

「それで良い。私は君に召喚大会に出場して優勝をして欲しい。君なら手段など選ばないから、簡単に優勝できるだろ」

「ほう……………」

竹原の言葉に伐は少しだけ考えるような仕草をすると、

「俺への報酬はなんだ？ 不具合があるものを取れと言っんだ。安くはないぞ」

当然、ふっかけるが、

「わかってるよ。そうだな。来年、進学するさいに推薦を約束しよう。今の時代、大学くらい行かないといけないからね」

竹原は状況を理解していない。

「悪いな。そんなものに興味はない。俺を使おうと思うなら、金を用意しろ。それ以外には興味はない。だいたい、大学を出ようが学園の評判を落として自分の利しか考えないような人間もいるんだしな」

伐は竹原の言葉を鼻で笑い、竹原を挑発する。

「交渉は決裂みたいだな。さて、お互い、良い情報も手に入れたようだしな」

伐は席を立とうとするが、

「待て。いくら欲しいんだ」

竹原は伐が他に今日の話を言う可能性もあるため、伐を引き止める。

「10万だ。あんたはお得意様になってくれそうだから、最初だから安くしておいてやる」

「成功報酬で良いな」

「ああ」

伐は竹原に言うのとだけは伐以外にも同じ話をしているようで金は直ぐに払う気はないと言う。

「それで良いが……約束は守って貰う。守れない場合は」

伐は自分を軽く見ている竹原を威圧するつもりのようにで懷からボイスレコーダーを取り出し、今までの内容は全て控えているからなと脅しをかけると、

「じゃあな」

伐は竹原の返事を聞かずに教頭室を出て行く。

## 第64問（後書き）

どうも、作者です。

教頭との腹のさぐり合いで1話使いました。（苦笑）

パートナーは決まりません。誰を選ぼうかな？（悪笑）

## 第65問

(……とりあえずは誰かが付けてる気配はないな。まあ、あの後、教頭室にはセンスのないモヒカンとハゲが入って行ったしな。周りを見ないで堂々と行動するんだ。程度が低いな)

伐は教頭室を出た後、しばらくは警戒をしていたようだが、自分を付けている気配もしいたため、警戒を解くことなく呆れたようなため息を吐く。

(……さてと、とりあえずは不具合の事もあるしな。確認はしないといけないよな)

伐は雄二からの依頼もあるためかめんどくさそうに頭を掻いた後、

「ばばあ、いるか？」

なぜか、当然のように学園長室に入っていく。

「……伐、あんたには礼儀ってものは無いのかい？」

伐が学園長室に入るとこの学園の最高権力者の『藤堂 カヲル』が伐の顔を見てため息を吐く。

「うるせーよ。礼儀なんて知ってたって腹の足しにならないんだ。無駄な事なんかしてられるか」

「……まったく」

伐は学園長の言葉など聞く気はないと言うと学園長はため息を吐き、  
「それで何のようだい？ あんたがここにくるんだ。何か有ったんだろ？」

伐が学園長を訪れた理由を聞く。

「白金の腕輪の不具合ってのはなんだ？」

「……あんたはそれをどこで聞いたんだい？」

伐はドストレートで学園長に聞くと学園長はため息を吐く。

「教頭があんたを蹴落とすためにいろいろやってるみたいだぞ。俺には疑似餌を見せて働けとふざけた事を言ってきたからな」

「……まったく、あんたは少し静かに生きようとは思わないのかい？」

伐は竹原のうかつさを鼻で笑うと学園長は伐に生活態度を改めろと言いが、

「思わないね。俺は生きるなら太く短く生きる」

伐は生活態度を改める気はなく、

「で、どんな不具合だ？」

学園長に向かい『白金の腕輪の不具合』について聞く。

「……まったく、一応は学園の恥になるから言いたくはないんだけどね」

「もったいぶらずに言え、あのひとの約束だ。俺はあんたを裏切らねえ」

「やれやれ。あのじゃりもずいぶんと厄介なヤツを残して行ったね」

学園長は伐と共通の知り合いがいるようで、伐は学園長を裏切らないと言うと学園長は伐の言葉に小さく顔をほころばせる。

「まあ、簡単に言うと一定の点数で暴走するようになってるんだ」

「ずいぶんと簡単に言うな。それで大会までに直る見込みは？」

「まったくないね。得点が低くて優勝が狙えるようなヤツらがいれば良いんだけどね」

学園長はバカが優勝するのは難しいと思っているようでため息を吐くと、

「……優勝を狙えるバカ2人ね。居るぞ。うちのクラスに取っておきのバカが」

「……あんたのクラスで、吉井と坂本かい。だけど、あの2人は召喚大会に出るようなヤツじゃないだろ」

伐は白金の腕輪を明久と雄二に取らせれば良いと言うが、学園長は噂に聞く2人は召喚大会には興味など示さないと言う。



「いや、今回にいたってはやる気だ」

「あんたが言うんだから、間違いはないんだね。しかし、どうやって話を持ちかけるかね？」

伐は瑞希の転校を阻止するために動いている2人は必ず協力すると確信しているようで言い切ると学園長は伐の様子に使える手段と判断するが、2人と接触する手段を持ち合わせていない。

「簡単だ。ここに呼べば良い」

伐はそう言い、携帯電話を取り出すと、

「霧島、今からダーリンと康太を連れて学園長室まで来い。巨乳娘の転校の件で話しておきたい事がある」

わけを話さずにただ学園長室まで来いと雄二に言い、電話を切る。

「……あたしはもう少し穏便にやろうと思ってたんだけどね」

「気にするな。バカ2人が大手を振って暴れていれば目はそっちに向く。俺はその間にあのクズを潰す」

学園長は伐の行動にため息を吐くが伐は気にする事なく、竹原を『敵』と決めているようで冷たい笑みを浮かべる。

## 第65問（後書き）

どうも、作者です。

学園長との密談です。

ノラ猫と学園長をつなぐ『あいつ』とは？（悪笑）

パートナー探しは一向に進まない。（苦笑）

## 第66問

「……ねえ。雄二、どうして、学園長室なのかな？」

「わからん。とりあえずは行っ て見ればわかるだろ」

「そうだね…… いたっ!？」

「遅い。いつまで待たせる気だ」

明久、雄二、康太の3人は伐に呼び出された学園長室の前に着き、明久がドアを開こうとした時、内側から勢いよくドアが開き、明久を吹っ飛ばす。

「悪かったな。なかなか、康太が捕まらなくてな」

「ったく、康太、携帯くらい持てよ。連絡、取りずらいたら、ありやしねえ」

「…………… 急に鳴ると支障をきたす」

雄二は明久が吹っ飛ばされた事を気にする事なく、伐に遅くなった理由を話すと伐はため息を吐く。

「ねえ。ちよっと!？ 何で、僕の事を無視するんだよ!？ ヘタしたら大ケガだよ!！」

「あれくらい避けるよ。自分が鈍いのを人のせいにするんじゃない。それより、さっさと入れ。話が進まん」

「そうだな」

明久は自分を吹っ飛ばした伐に向かい文句を言うが、伐が謝るわけもなく、3人に学園長室に入れと言うと雄二と康太は伐の言葉に従い、明久はしぶしぶ、後を追いかけて学園長室に入る。

「良くきたね。あたしが学園長の……」

「ばばあ。いくらこいつらがバカだと言っても自分の学校の学園長の名前くらい知ってる。時間の無駄だ」

「やれやれ、雰囲気ってヤツもあるだろ」

学園長は3人を見て自己紹介をしようとするが、伐は無駄だと言い、伐の言葉に学園長はため息を吐く。

「こっちはバカクラスの代表、学園1のバカ、学園1のムツツリだ」

「坂本、吉井、土屋だね」

伐は学園長に向かい3人には失礼な紹介をすると、学園長は頷き、

「ちょっと待て!! 俺達、名乗ってないだろ!!」

「そうだ!! この僕が学園1のバカなはずがないだろ!!」

「……………心外」

3人は当然、声をあげるが、

「事実を言われて叫ぶな。それより、早く座れ。話が始めれない」

伐は気にする事なく、応接用のソファーに腰を下ろす。

「……それで、いきなり、こんなところに呼び出して何のようだ？  
姫路の転校の件だって言ってたよな」

「今更、受けないとか言わないよね？」

3人は文句はありそうだが、伐に言っても仕方ないと判断するとソファーに腰を下ろし、伐が自分達を呼び出した理由を聞く。

「1度、請け負ったなら、裏切らねえよ。2つ、話があるんだが良い話と悪い話。どちらから聞きたい？」

「……なぜだ。両方ともあまり良い話な気がしないんだが」

「そう？ 黒須君、良い話からお願い」

伐は話は2つあると言うと雄二は直感が働いたようで両方不吉だと言うが、明久は何も考えずに良い話に飛びつく。

「良い話だな。霧島には話したが、召喚大会の優勝、準優勝ペアには如月ハイランドのプレミアムペアチケットが渡されるんだが、これにはもう1つ特典が付いていてな」

伐の言葉に雄二は何かを察したようで、雄二の体は小刻みに震え始める。

「へえ。どんな特典なの？」

「ああ。そのチケットにはウェディング体験つてのが付いててな。如月ハイランドは如月ハイランドにきたカップルは幸せになれるってジンクスを作りたいらしくてな。訪れたカップルは如月ハイランドの力を使って無理やり結婚。表向きは幸せな家庭をプロデュースしてくれる」

「どこが良い話だ！！」

伐の説明に雄二は翔子との結婚式を思い浮かべたようで伐に向かい叫ぶが、

「良い話だろ。優勝か準優勝で幸せな未来が待ってるんだ。だいたい、嫁に何が不満なんだ。顔も頭も家柄も本来なら、お前みたいなバカを相手にしてくれないぞ」

伐は雄二の反応に楽しそうに笑い言つと、

「そつだよな。霧島さんに雄二が好かれてるなんておかしいよね」

「……………殺したいほど妬ましい」

明久と康太からは雄二に向かい殺意が向けられる。

## 第67問

「ダーリン、康太、殺すのは後にしろ。姫路の転校を防ぐには霧島は必要なコマだ」

「……ちつ。雄二、命拾いしたね」

「………楽しみは後に取っておく」

「お前ら、ふざけんな!!」

伐は雄二を殺るのに反対はしないが今は殺るなと言うと雄二の命より、瑞希の転校阻止の方が重要事項のため、明久と康太は舌打ちをしながら踏みとどまるが雄二が納得するはずもない。

「騒ぐな。話が進まないだろ。霧島、お前が今から俺の言う条件を飲まないなら、今の話をお前の嫁にする」

「黒須、そんな事してみる。翔子は絶対に出場してくるぞ。そんな事になったら、俺の人生は終わりだ。条件を飲むから、それだけは絶対にあいつに言うな!!」

伐は雄二の一生などどうでも良いと言いたげに言うと雄二はすでに伐の手のひらで踊っている。

「まず、1人」

「……もう少し、学生らしくできないのかね」

伐は雄二の反応にニヤリと笑うと学園長は頭を押さえてため息を吐く。

「まあ、霧島が条件を飲むと言ったしな。これからが本題だ」

「それって悪い話が本題って事？」

「ああ。霧島、如月ハイランドのペアチケットの他に優勝ペアには何が与えられると言った？」

「……確か、『白金の腕輪』とか言ったものだろ」

伐は真面目な表情になると雄二に優勝ペアに与えられる賞品を聞くと、雄二は伐がこんな事を聞く意味がわからないのか怪訝そうな表情をする。

「ああ。優勝ペアに与えられる白金の腕輪は2つ。1つは点数が半分になるが、召喚獣を2体呼び出せる。もう1つは自分は召喚獣を呼び出せないが教科選択はランダムだけど召喚フィールドを展開できる」

「へえ。凄い賞品だね」

「……………優勝賞品にふさわしい」

「……………黒須、その腕輪。本当に大丈夫なのか？」

伐は白金の腕輪の事を説明すると明久と康太は関心したように言うが、雄二だけは伐の話に白金の腕輪に何があったかを理解したように眉間にシワを寄せると、伐に聞き返す。



「霧島は理解が早くて助かるな。ぶっちゃけ、そいつに不備があった」

「伐、あんた!？」

伐は雄二の言葉にくすりと笑うと隠す事なく言い、学園長は声を上げる。

「うるせえな。今回に至っては隠す意味がないカードだ。交渉する上でこれを切らない事にはどうしようもないんだよ」

「……交渉？ 脅迫の間違いだろ」

伐は先に手を見せる必要があると言うと雄二はため息を吐き、

「大方、新技術としてスポンサーに宣伝してるから、賞品として取り下げるわけにもいかない。黒須が俺達に話を持ってきたって事は点数が高くなると不具合が出るって事か？」

「そついう事だ」

伐の話に白金の腕輪の不具合の発生条件を理解したようで険しい表情で言う。伐は頷く。

「……黒須、お前、俺と明久に優勝しろって事だろ。いくら何でも無謀だぞ」

「お前らなら、どうにかなるだろ」

「……ちよつと待てよ。なあ、参加者が決まったらトーナメントの配置と教科選択を俺にやらせてくれるか？」

「ばばあ、どうだ？」

「ああ。それくらいなら、あたしがどうにかするよ」

雄二は伐が出した条件に少し考えると何か思いついたようで伐と学園長に聞き、学園長はそれくらいなら大丈夫だと言う。

「わかった。やれるだけはやる。黒須、俺と明久は決勝まで必ず上がる決勝はお前とだろ。翔子にチケットを渡すわけにはいかねえんだ。それくらいはやれよ」

「わかってる」

雄二は伐を自分と明久とは反対側のブロックに配置する予定のよう  
で伐に言う  
と伐は当たり前前の事を言う  
なと言う。

「ねえ。雄二、話を聞い  
といて  
なんだけど、僕達が引き受ける意味  
つてあるの？」

「当たり前だ。優勝ペアは新技術の御披露目をするはずだ。その時に腕輪が暴走してみろ。そんなものを姫路の父親に見せたら、今まではクラスの印象が悪かったただけなのに学園の印象が悪くなる。俺達が姫路の父親に良いところを見せてもそれでペアになる可能性もある」

「そついう事だな」

明久は伐の提案を受ける意味がわからずに雄二に聞くと雄二は伐が自分と明久に話を持ってきた理由を理解しており、伐は頷く。

「それは大変じゃないか!？」

「だから、そう言ってるだろ。黒須、康太をここに呼んだって事はお前のパートナーは康太にする気か？」

「いや、康太には教頭室を盗聴して欲しい。いろいろと目障りな動きをしてるみたいだから。嫌がらせも前もって知っておけば簡単に対処できるだろ？」

「……………頼まれた」

「俺はパートナー探しに行ってくるから、後はばああと打ち合わせしてくれ」

伐は康太に教頭室の盗聴を頼むと1人で学園長室を出て行く。

## 第67問（後書き）

どうもです。

ノラ猫はまた単独行動に移ります。

ノラ猫のパートナーは誰になるんでしょうか？

直ぐに決まるのか揉めるのか？（苦笑）

## 第68問

(……さてと、腕輪の暴走を考えれば友香や処女には頼めないかなら、あいつか)

伐は学園長室から出るとしばらくふらふらと学内を歩いた後、美春に召喚大会のパートナーに選び、Dクラスに向かう。

「ん？ 平賀、美春はいる……」

「ミサちゃんだ」

伐はDクラスの教室を覗き、代表の『平賀 源二』に声をかけようとする。すると1人の女生徒が伐を見るなり、伐が女装した時の『ミサ』と言う名前を叫び伐に抱きつくこうとするが、

「……平賀、こいつは何だ？」

伐は女生徒の突撃を交わしながら、源二に聞く。

「この娘は玉野美紀さんだよ。玉野さん、落ち着きなよ」

「ミサちゃん、ミサちゃん、ミサちゃん!! そんなものを着てないで、これにこれに着替えて……!!」

源二は苦笑いを浮かべながら、『玉野 美紀』を伐に紹介すると美紀を止めるが美紀はよほど興奮しているのかどこからか、女生徒の制服を取り出し、伐に着替えさせようとスキを狙っている。

「別に着替えても良いが安くないぜ……盲目的にはなるみたいだな」

「なら、これに着替えてこのカツラを」

「ああ。その代わり、貰うものは貰うぞ。まずは前払いで処女膜。それが終わったらお前の好みみたいだな。これに着替えた後に可愛がってやる」

伐は美紀の様子にくすりと笑うと女生徒を美味しくいただく気になったように美紀の理性を剥ぎ落とすように耳元でささやくと、

「……ミサちゃんの乱れる姿？ ミサちゃんの匂い？……ぶほっ！？」

美紀はいろいろと想像したように満足そうな笑みを浮かべ、鼻血を吹き出し流しながら前のめりに倒れ込みそうになるが、

「場所はどこが良いかな。まあ、とりあえずは良い場所を探すか？」

伐は美紀を抱きかかえると直ぐに美紀を美味しくいただく気であり、Dクラスを後にしようとする。

「……黒須君、玉野さんをどうするつもりだい？」

「聞いてなかったか？ ちょっと、美味しくいただいてくる」

「……クラス代表としてそれは止めないといけないかな」

「こいつは同意してるぞ」

「ミサちゃん……かわいいよ。ミサちゃんのおんな姿やこんな姿が」

源二は伐の態度にため息を吐くが伐は美紀が納得済みだと言うと教室を後にしようとするが、

「他に何か用が有ったんじゃないのかい？」

「ん？ 忘れてたな。良いものを手に入れたから、忘れるところだった。美春はいるか？」

源二は美紀が目覚まし、冷静になるのを待とうと考えたようで伐を引き止めると伐は目的を思い出したようで美紀の胸の感触を楽しみながら言う。

「清水さん？ 君と清水さんに何かあるのかい？ ……ん。教室にはいないみたいだ」

「いや。隠れただけだ。平賀、ちょっと、こいつを頼む」

源二は教室の見渡すが美春の姿は見えず、伐に言うが伐は美春の気配に気づいているようで美紀を源二に預けると教室の中に我が物顔で入り込み。

「美春、こんなところで何をしてるんだ？」

「な、何で気づくんですか！？」

美春は伐がさつき美紀を美味しくいただくと言っていたため、身の危険を感じ、とっさに教卓の下に隠れたが伐に見つかり顔をひきつ

らせる。

「まあ、細かい事は気にするな。借りを返して貰いにきただけだ」

「借り？ ……」

「逃げるな」

「イヤです！？ 美春は美春は初めてはお姉さまに捧げるとあなたみたいな豚……最低な人間に無理やり奪われるのはイヤです！！」

伐は美春に召喚大会のパートナーを頼もうとするが、美春は伐が自分を美味しくいただきにきたと思っっているため、全力で逃げだそうとするが伐は美春の首をつかむ。

「誰もお前を食いにきたとは言っていないだろ。清涼祭でやる事ができたからな。協力しろ。上手く行ったら、如月ハイランドのペアチケットをやるから島田でも誘え。借りを返して貰うのに成功報酬も出すんだ。悪い話じゃないだろ。条件と内容は……」

「お姉さまと如月ハイランドでデート？ その話乗りますわ」

伐は美春に餌を見せると美春は伐からの条件を最後まで聞かずに飛びつく。

「契約成立だな。清涼祭、2日間は俺の指示に従え。失敗した場合はわかるな？」

「ひいつ！？ ま、待つて。今の契約待つて！？」



伐は失敗した場合はどうなるかわかるよなと美春の耳元でささやくと美春は伐の言葉をすぐに理解し、血の気が引いて行き、取り消そうとするが、

「契約破棄は認めない。契約破棄をした場合は俺が楽しんだ後、ひんむいて夜の繁華街の裏道に捨ててやる」

伐は契約破棄は許さないと言うと、

「平賀、気分じゃなくなっただから、そいつが起きたら欲しくなったら、俺のところにこいと伝えておけ」

美春や源二の返事など聞かずに教室を出て行く。

## 第68問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの玉野さんの暴走（爆笑）

やりたかったんです。これがやりたかったからの伐の女装だったりします。

美春をパートナーにしての召喚大会？

……ひどく不安ですがどうなるでしょう？

……美春と美波のデートは？（爆笑）

## 第69問

「……まあ、こんなものか？ 基が良いと楽だな。最後は巨乳娘だ。早くしろ」

「……チャイナ服は着ないって言ったはずなのに」

「……何でワシまで」

「えーと、美波ちゃんも木下くんも似合ってますよ。それより、黒須くんはどうしてお化粧をできるんですか？」

清涼祭1日目、伐は売上が依頼料に直結するため、朝からクラスの出し物である中華喫茶『ヨーロピアン』にくるとどこから持ってきたかわからないチャイナ服を瑞希、美波、秀吉に渡すと3人に着るように言い、美波、秀吉、瑞希の順に化粧をして行く。

「……動くな」

「あつ。すみません」

「別に対した理由じゃねえよ。バイトしてたら、自然に覚えただけだ」

瑞希は伐が化粧をできる事に首を傾げるが伐は興味なさそうに言う。

「そう言えば、最初のBクラス戦の時もおったのう」

「流石に俺の場合は酒やタバコで肌が荒れてるからな。少し隠さな

いといけないだろ」

「……あんたに言うのは諦めたけど、そんな事を言うなら、お酒もタバコも止めたら良いじゃない」

「島田、良いことを教えてやる。人間は墮落する生き物だから、体に悪いものほど美味しいんだ」

秀吉が伐の女装を思い出して言うのと伐は女装には抵抗はあまりないため、肌の状態のせいだと言うと美波はため息を吐く。

「ただいま……！？　こ、ここはどここの楽園！？」

「明久、戻ってきたようじゃの」

明久が教室に戻ってくるとチャイナ服に着替えている3人の姿に興奮気味に言うところ3人は恥ずかしそうに伐の後ろに隠れる。

「……巨乳娘や島田はわかるが、木下、お前は隠れるな」

「いやじゃ。なぜ、ワシだけ男子でチャイナ服に着替えんといけないのじゃ。不公平なのじゃ」

「決まってるだろ。似合うからだ。ちなみにお前ら、恥ずかしいから着替えると言った場合は俺がどんな手を使ってでも脱がすからな。その後は本番に移行する。自分の大切なものを奪われなくては清涼祭中はそれを着ている」

秀吉は男子で自分1人はイヤだと言うと伐は脱げるものなら脱げと脅す。

「秀吉、それなら大丈夫だよ。黒須くんも着るから!!」

明久は伐のチャイナ服姿もみたいため、そう叫ぶとクラスメート達も同じ意見のようで歓声があがるが、

「別にかまわんが俺が着た時点で、オーダーミスや店内でもめ事を起こしたヤツらは似合う、似合わない別としてチャイナ服だからな」  
伐の一言にクラスメートは静まり返る。

「ム、ムツツリーニ、須川くん、飲茶の方はどう?」

「……………今は忙しい」

明久は伐の言葉を聞かなかった事にして厨房担当の康太と須川に聞くが康太は一心不乱に瑞希、美波、秀吉のチャイナ服姿をカメラに納めている。

「ムツツリーニ、その写真、僕にもちょうだい……………まったく、ムツツリーニなら、あっ!?! ここにあるじゃないか。美味しそうなゴマ団子が」

明久は試食用らしきゴマ団子を見つけて手を伸ばすと1口つけるが、

「…………ふむふむ。ふむふむ。表面さゴリゴリながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎずる味わいがとっても…………んゴパツ!?!」

どうやら、瑞希が作ったものだったようで意識を持っていかれそうになる。

「……おい。巨乳娘、前に言わなかったか？ お前の料理は食い物じゃないと」

「そんな事ありません。あれから私は料理のお勉強をたくさんしました。だから、美味しく出来上がっているはずですよ」

伐は明久の様子に以前、瑞希に言った事を確認すると彼女からは憶測的な回答が帰ってくる。

「はずですよ。じゃねえよ。そう言うなら、味見くらいしろ。と言うのか、あんな反応が出るんだ。根本的な何かが間違ってるんだよ」

「間違ってるんじゃないです。ちゃんとレシピにそってお料理しましたし、少しだけ隠し味を入れましたけど」

「……そのレシピ。隠し味も書いて持ってこい」

瑞希は隠し味を入れたと言うので伐は彼女にレシピを出すように言う。

「えーと、これです」

瑞希のレシピには料理のばすなのに猛毒である『王水』の科学式が書いてあり、

「巨乳娘。料理に薬品は使わない。お前は調理場に近づくな。近づいた時点で俺はお前をイスに亀甲縛りで縛り付けて、見せ物にしてやる」

伐はため息を吐きながらも問題発言をする。

## 第69問（後書き）

どうも、作者です。

ついに始まった清涼祭。

召喚大会もですが、伐は瑞希の転校を阻止する気がない発言ばかり。（爆笑）

瑞希の転校狙ってみる？（爆笑）



## 第70問

「……………亀甲縛り？」

「ム、ムツツリーニ!？」

「相変わらずの無駄な想像力だな」

伐の問題発言に康太は想像したようで鼻血を吹き出し倒れると明久は康太を抱きかかえて康太の心配をしているが、原因の伐はめんどくさそうにタバコを取り出し、口に加えると、

「黒須、止めなさいよ!! 清涼祭中は学園内で吸わない約束ですよ!!!」

「……………わかってる。だから、流行りの電子タバコにしてんだよ。味気ねえし、何で俺がこんな事をしねえといけないんだよ」

美波は伐がタバコを吸うのを止めようとするが、伐はタバコは吸っていないと言う。

「そう言う問題じゃ無いのよ。高校生がタバコや電子タバコを持ってるのが問題なの」

「……………ったく、口うるせえ女だな」

しかし、美波が納得するわけもなく、伐から電子タバコを取り上げると伐は鬱陶しそうに言いながら、携帯電話を取り出し、

「……おい。良いものを見せてやるから、直ぐにこい。これは命令だ」

「黒須くん、どなたに電話をかけたんですか？」

「……直ぐにわかる」

誰かに電話をかけると、瑞希は伐に聞くが、伐はあまり興味なさそうに言う。

「……黒須く！？ お姉さま」

「み、美春！？ く、黒須、あんた、まさか？」

伐の電話は美春につながっていたようで美春は伐に何をされるかわからないため、慎重に教室のドアを開けるが美波のチャイナ服姿に伐の事など吹っ飛んだようで目を輝かせると、美波はこれが伐の仕業だと理解し、伐を睨みつけようとするが、

「そんな格好までして、美春を待っていてくれたのですね お姉さま」

「ちよつと、美春！？ 抱きつかないで、ウチはそんな趣味無いって言ってるでしょ！！」

「そんな事はありません！！ お姉さまは美春を愛してくれてるはずです！！」

「いやあ！！！！ ウチはウチは男が好きなの」

美春の目はすでに獲物を狙う狩人の目になっており、美波に飛びつくが美波はそれをギリギリで交わしている。

「巨乳娘、お前の料理は生命、美春は島田の貞操。奪われるものは違うが、『はずです』は危険だってわかったか？」

「……はい。反省します」

伐は美春の行動を瑞希の料理と照らし合わせて言うと、瑞希は何となく意味を理解したように頷く。

「黒須、あんた！！ 美春をどうにかしなさいよ！！ このままじゃ、ウチのウチの」

「……コロシマス。オネエサマトミハルノナカヲジャマスルニンゲンハコロシマス」

美春は背中からまがましいものを出しながら言い、周りのクラスメート達は美春の様子に1歩下がるなか、

「………すまない。伐、俺の代わりにこれを」

「康太、映像にしないか？」

康太は鼻血の海に沈みながらも伐にデジカメを手渡している。

「黒須、土屋！？ あんた達はウチの貞操を何だと思ってるのよ！？」

「大丈夫だ。初めての映像はしっかりとおさめてやるから、後で俺

がそれを交えての実技指導をしてやるから」

美波は伐と康太の様子に声を荒げるが伐が気にするわけもない。

「……コロシマス。ミハルトオネエサマノセカイヲジャマスルニン  
ゲンハコロシマス」

「黒須君！？ 清水さんが逃げた方が良いよ！！」

「やれやれ。島田と美春の絡みはまたお預けか」

美春は美波が伐に助けを求めるのを見て、伐を敵と認識しはじめた  
ように殺意を込めた視線を伐に送りつけると明久は伐に逃げるよう  
に言うが伐は危機感などなくめんどくさそうに言った時、

「コロシマス。コロシマス」

美春は伐に襲いかかるが、

「お主、余裕そうじゃな」

「まあ、基本的にあれくらいの殺意にはなれた。と言うか殺意が表  
に出る分、受ける方としてはやりやすい」

伐は無駄な動作もせずに美春の腕をつかむとその様子に秀吉は引き  
つった笑みを浮かべる。

## 第70問（後書き）

どうも、作者です。

周りのバカテスの二次創作を見ていて自分はずくづく原作に沿えないと思います。週間アクセスが上がってきてますが、評価は上がらないし、上は強いですね。届く気すらしません。（苦笑）  
優しい方は評価をしてくれると嬉しいです。

美春の乱入にあれる教室。

しかし、伐はのりくらりと交わします。

伐に捕まった美春はどうなるんでしょうか？（爆笑）

## 第71問

「そうなのかな？」

「ダーリン、お前だって、クラスのヤツらにカッターを投げられそうになったら逃げるだろ？ 危険を察知できれば対処は割と楽だ」

「確かに」

明久は伐の言葉に苦笑いを浮かべると伐は美春の後ろに周り込み彼女を羽交い締めにしながら言うと言明久は納得したように頷く。

「1番、質が悪いのは、殺気も見せずに、サクッとやるヤツだ。場所によっては死ぬからな」

「……いや、そうかも知れないけど、そんな事はめったにないから」

「ないと思って警戒しなければ死ぬぞ。現に悪意のないもので毒殺されそうになっただろ？」

「……」

明久は伐が特殊だと言おうとするが、伐は明久に瑞希の料理で死にかけただと聞くと先ほどの明久の様子を見ていたクラスメート達は黙り込むなか、

「コロシマス。コロシマス……」

相変わらず、美春は周囲に殺意を漏らしていると、

「……おい。黒須、このカオスは何だ？」

「あ、雄二。おかえり」

「どうして、俺が原因だと決めつける？」

雄二が教室に戻ってきて明久が声をかけると伐は言いがかりだと言いたげに言う。

「お前がそいつを捕まえてるからだ」

「霧島、美春の殺意開放と姫路のゴマ団子。選ぶならどっちだ？」

「悪いな。遠慮する」

呆れ顔の雄二に伐は2択を突きつけるが、雄二はため息を吐くと、

「黒須、召喚大会の組合せだけど、本当にこの3年ペアと準決勝でやるのか？ 翔子と秀吉の姉をぶつけた方が良かったんじゃないか？」

今まで学園長と打合せをしていたようで、伐は雄二に任せながらもいくつか希望は出していたようで雄二は伐の希望の意味がわからないため、納得がいかなさそうに首を傾げる。

「ああ。そいつらは教頭のコマだからな。俺が倒した方が良さんだよ。俺をコマ扱った三下には思い知らせてやらないといけないだろ？」

「今回はお前が味方で良かったのか。わからんな」

伐はもう1組の参加ペアである瑞希と美波に聞こえないように雄二に言つと雄二はため息を吐き、

「それで、喫茶店はどうなってるんだ？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

話を切り替えようとクラスの代表らしく聞くと教室からは準備完了との声上がるが、

「待て。巨乳娘が作った毒物はこれだけか？ あるなら、早めに出せ。食中毒騒ぎはごめんだ」

「ひ、姫路、お前」

伐は冷静に瑞希の料理が混入していないかと聞くと雄二は1歩引く。

「大丈夫です。黒須くんに言われて片付けました」

「そうか。なら、後は黒須。そいつはどうするんだ？」

瑞希は伐に言われた事でそれなりに落ち込んでいるようでしゅんとした様子で言つと雄二は安心したように頷いた後、伐が捕らえている美春の処遇を聞く。

「オネエサマ。オネエサマ」



「黒須、美春を早く教室から追い出さない」

美春は伐の腕の中で美波を探しているようで美波を呼ぶが、彼女の想い人は瑞希の後ろに隠れながら伐に美春を教室から追い出せと言う。

「いや。こいつを追い出すのはもったいないだろ。こうならなければ見た目は言いし、真性のドMにはこいつはたまらないだろうからな」

「……黒須君が言つと学園祭の出し物じゃなさそうだね」

しかし、伐は美春を追い出すのはもったいないと言つと、

「おい。それ以上、暴れるなら、押さえつけてムリヤリ奪うぞ」

「!？」

伐は美春の耳元でささやくと彼女は壊れた玩具のように固まる。

「清涼祭中は俺の指示に従う約束だよな？　良いか？　今から清涼祭中に島田に襲いかかったら、わかるな？」

「……」

伐の言葉に美春は声も出ないのかこくこくと頷くと、

「これに着替える。平賀と玉野からはお前をうちのウェイトレスで使う許可を貰っている。逃げたら、即、契約破棄と見なすからな」

美春にチャイナ服を手渡すと美春は伐の指示に従ったため、チャイナ服を持って着替えるために教室を出て行く。

## 第71問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの美春のウェイトレス参戦！？……不安だ。（爆笑）

美春は伐との契約を破って美味しく頂かれてしまうのか？

実際はうちのノラ猫くんと美春は皆さんの目にはどのように映っているのでしょうか？

賛成？反対？

## 第72問

「黒須、あんた、何て事をするのよ!!」

「……うるせえな。ガタガタ騒ぐなよ」

美波は美春が教室にいと自分の身に危険が及ぶため、伐につかみかかるが伐は鬱陶しそくに美波の手を払う。

「黒須、俺もクラスの代表として聞いて起きたい」

「……めんどくせえからパス」

「ダメだ。答える。あんな爆弾を置いておけばどうなるかわからな  
いか？」

「……つたく、めんどくせえ」

雄二も伐に説明を求めるが伐は乗り気ではない。

「単純に女っ気がないからだ。巨乳娘や島田、木下は平均より大幅  
に上だ。それでも3人じゃどうしようもないしな」

「それは人手不足って事？」

「いや、客を呼べるかって事だ」

伐の言葉に明久は首を傾げながら言つと伐は興味なさそうに言つ。

「客を呼ぶなら、土屋や須川の飲茶があるじゃない」

「考えろよ。誰も食わなければ味は伝わらねえんだ。ただ飯を食いたいなら屋台で買えば良い。だけど、喫茶店に入るって事は目的があるんだよ」

美波は伐を睨みつけたまま言うが伐はため息を吐き、

「学祭の喫茶店に入るヤツらの目的には少なからずナンパとかが目的にあるんだよ。さっきも言ったが巨乳娘、島田、木下はレベルが高い」

「……ワシは男じゃ」

伐は女性陣を誉めると秀吉は誉められてると女の子扱いされていく間で複雑な表情をする。

「それに対して、男は最悪だ。頭も悪いし、取り柄もないヤツら、足の引つ張り合いしかない。これじゃあ、女性客はこない」

伐がため息を吐きながら、Fクラスの男子生徒では女性客が集まらないと言うとその言葉に教室内からは言い訳が聞こえるが、

「人が舞台を整えたのに失敗した奴らが騒ぐな。みつともねえ」

伐はCクラスとの打ち上げで誰も上手いかなかったのはお前らの問題だと言うと教室は静まり返る。

「あいつも見た目は悪くないしな。客寄せには良いだろ。客がくれば味が問題ないなら噂になって客が増える。そのための餌だ。安定

すれば問題起こす前に解放すれば良い」

「だけどさ」

伐は喫茶店が軌道にのるまでだと言うが明久は美春の殺気が怖いようで嫌だと言おうとすると、

「なら、多数決にするか？」

「そうね。美春が手伝う事に賛成の人」

伐は美春の手伝いをクラスメートに任せると言うと言先ほどの殺気を見たため、美波はクラスメート達は反対すると思い聞くと誰も手を上げようとしなが、

「あいつは盲目的だから印象を変えれば今の島田のようにアタックされるかもな」

伐がそうつぶやくと一気に手があがる。

「何でよ!?!」

「欲望に忠実つてのはある意味才能だな」

美波はクラスメート達の行動に声をあげるが伐は呆れたように言う。

「あの。黒須くん」

「何だ？」

「清水さんって、黒須くんの彼女じゃないんですか？」

瑞希は伐に声をかけるとぶっ飛んだ事を聞く。

「違うな」

「姫路さん、どうして、そんな答えに行き着いたの？」

瑞希のぶっ飛んだ質問に伐は表情も変えずに否定し、明久は苦笑いを浮かべて瑞希に聞き返す。

「えーと、清水さんは黒須くんの言う事なら聞いてくれますし、黒須くんも清水さんを気にかけてるような気がしたんで」

「あいつが俺の言う事を聞いているのは俺があいつの弱みを握ってるからだ。それ以上もそれ以下もない。だいたい。恋愛とかめんどくせえものやってるヒマはねえよ。まあ、あいつは後がめんどうだから、肢体もいらん」

瑞希は伐が美春を気にかけていると言うが伐はその言葉を鼻で笑う。

「発言に問題があるのはおいといて珍しいな。お前なら、やる事はやる気がしたんだけどな」

「まあ、やるだけならやるがあいつの場合、1度、美味しくいただけいたらサクッと刺されるか島田みたいに追い回されるかだからな。俺は若くして死ぬなら腹上死と決めてるからパスだ」

雄二は呆れたように言うが伐は美春は面倒だと言い切る。

「まあ、あいつが暴走しないように頼む。明久、そろそろ時間だ」

「そうだね。それじゃあ、みんな、喫茶店よろしくね」

明久と雄二は伐の言葉に苦笑いを浮かべながらも召喚大会の1回戦の時間が近くなってきたため、教室を出て行くと、

「ほら、遊んでないで開店の準備だ。島田、お前が実行委員なんだから。さっさと仕切れ」

「わかったわよ」

美波の指示で喫茶店の準備は進んで行く。



## 第72問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希からのズレた一言に呆れた伐に美春と言う餌にやる気になった  
クラスメート。

……………不安だ。（爆笑）

教頭の嫌がらせには伐はどう対応するんでしょうか？（悪笑）

### 第73問

「……ったく、めんどくせえな」

「そんな事を言っただけで何とかしなさいよ」

喫茶店の営業が始まりしばらくすると坊主頭とモヒカン頭の男子生徒が飲茶が不味いと店の真ん中でわめきちらしているのを見て、美波が伐に何とかしろと言うなか、伐は携帯電話でどこかにメールを打っている。

「……木下、霧島とダーリンを呼んでこい」

「しかし、雄二も明久も召喚大会の途中じゃ」

「もう決着つくだろ。何が目的かは知らないけどな。ああいうバカは徹底的につぶすに限る」

伐は秀吉に雄二と明久が揃ってから、痛めつけると言い、邪悪な笑みを浮かべているが、

「放しなさい！！ この豚野郎！！ 汚らしいですー！！」

美春が騒いでいる2人組と揉め始める。

「黒須、あんたの出番よ」

「……ったく、めんどくせえな」

美波は伐に向かい言々と伐はため息を吐き、

「木下、早めに頼む」

「わかったのじゃ」

秀吉を見送り、

「ちょっと、行ってくる」

「はい。お願いします」

メールを送信すると美春が揉めているところに向かう。

「お客様、何かありましたか？」

「何か？ 最悪だよ。食いもんは不味いし、ウェイトレスの教育はなあってねえ」

伐は柔和な笑みを浮かべながら声をかけると文句を浴びせかけてくるが、

「そうですか？ 顔と一緒に味覚もおかしいみたいです」

伐は柔和な笑みを浮かべたまま、毒を吐く。

「てめえ、客に向かつてなんだその口の聞き方は！！」

「しゃべんな。口がくさい。異臭騒ぎが起きたらどうしてくれるんだ？ だいたい、クレーマーは客と見なさねえんだよ」

「何だとてもえ!!」

「……」

伐はめんどくさそうに言う。男子生徒は伐の胸倉をつかむと、伐の口元は小さく緩んでいる。

「てめえ、何を笑ってるんだよ!!」

「何って、何の目的があるかは知りませんが、下級生のクラスに営業妨害にきて教育指導されるバカの哀れさかな? 大変ですね。下級生いびりなんかしたら、内申書に響くでしょうね」

男子生徒は伐を怒鳴りつけるが伐は男子生徒を鼻で笑っていると、

「夏川、常村、お前たちはこんなところで何をしているんだ!!」

西村教諭が教室に入ってきて騒ぎを起こしていた男子生徒の名前を呼ぶ。

「げっ!? 鉄人!？」

「何でこんなところに?」

男子生徒2人は西村教諭の登場に顔を歪めると、

「西村先生、この先輩2人がうちの飲茶は不味いとクレームをつけたきた上に、俺の胸倉をつかみ暴力を振るおうとしました」

伐はつかまれた胸倉が赤くなってきたのを見せ、

「不味いっていわれたんですけど、西村先生、味見して貰っても良いですか？」

「……………味見用」

西村教諭に不味いか確かめてくれと言うと康太が味見用のゴマ団子を差し出す。

「どれ……美味しいじゃないか。夏川、常村、何のためにこんな事をしたか聞かせて貰おうか？」

「そ、それは」

「逃げるぞ」

西村教諭はゴマ団子の味と伐の証言に男子生徒2人に詰め寄ると2人は逃げ出そうとするが、

「あんたらが営業妨害しにきたヤツらか？」

タイミング良く雄二と明久が秀吉に連れられて帰ってきて、道を塞ぐ。

「2人とも、話を聞かせて貰おうか？」

「ひいひい!？」

「イヤだあ!!!!!!」

西村教諭は男子生徒2人の首をつかむと2人を引きずって教室を出て行くと、

「お客様、失礼しました。このクラスの代表の坂本雄二です。ごらんのように私達のお店には非はございませんがお客様に不快な思いをさせてしまったため、お詫びとしてお食事中的ものは半額とさせていただきます」

雄二が教室内の客に向かい言うつと教室内からは「ラッキー」と言う言葉が混じるなか、雄二の対応を誉める声が聞こえる。

「……これで良いな。美春」

「!？」

伐は美春の名前を呼ぶと美春は切れかけたため、伐に何なされると体を硬直させるが、

「バカ相手に疲れただろ。余ったから、食っとけ」

「は、はい」

伐は味見用のゴマ団子を美春に差し出して仕事に戻ろうとする。

「ねえ。問題起こしたら、チャイナ服だったわよね？ 言った本人が守らないとね」

「……めんどくせえ」

美波は伐の肩をつかむと楽しそうに伐にチャイナ服を渡す。

### 第73問（後書き）

どうも、作者です。

常夏コンビ、まさかの鉄人送り（爆笑）

店で揉める得ってないですしね。

伐は使えるものは使う。

また、同じ事をやらないと言う約束で常夏コンビは出てくると思いますがまた伐にはめられるでしょう。（爆笑）



## 第74問

「……康太、写真取ってないで働け。島田、巨乳娘、泣くな。鬱陶しい」

伐がカツラを被り、チャイナ服に着替えてくると康太はシャッターが擦り切れる勢いで写真を撮り、伐のチャイナ服姿に瑞希と美波はいろいろとシヨックだったようでさめざめと声を殺して泣いている。

「……黒須、何でわざわざ胸に詰め物までするんだ？」

「……仕方ねえだろ。俺は木下に比べると身長も肩幅もあるし、入れねえとバランスが悪い。まあ、本音を言えば『巨乳は男のロマン』だからだ」

雄二が呆れ顔で言うとなんか伐は平然と言い切るとクラスメイトだけではなく、男性客からも伐を賞賛する声が聞こえる。

「黒須、あんたはウチの敵よ。何で、何でよ!!」

「泣きながら揉むな。ズレるだろ」

美波は血涙を流しながら、伐に文句を言うが伐の反応は冷たいが、

「美少女同士の絡み!? ムツツリーニ!!」

「……………任せろ」

2人の様子にクラスメイトと男性客から歓喜の声上がるなか、

「……オネエサマ、ソナツクリモノデハナク、ミハルノナライク  
ラデモ」

美春からは黒い殺意が漏れ始める。

「島田、それくらいにするのじゃ」

「そ、そうね」

美春の変化に秀吉は美波を止めた時、

「うわぁ　噂通り盛況だね」

「本当ね」

「……雄二はどこ？」

愛子、翔子、優子の3人が教室に入ってくる。

「げっ！？　翔子。黒須、俺は厨房に隠れるから任せるぞ」

「ああ。美春、遊んでないで働け」

「わ、わかってますわ」

雄二は翔子から隠れるように厨房に移動すると伐は美春に声をかけた後、メニューを持ち、

「いらっしゃいませ。こちらがメニューになります」

「……黒須、雄二は？」

愛子達の座ったテーブルに移動するなり、翔子は伐に雄二の居場所を聞く。

「代表、何を言ってるんですか？ どう考えても女の子」

「……この匂いは間違いなく、黒須」

優子が翔子に言うが翔子は表情を変えずに言うと、

「……匂いでわかるなら、旦那の居場所も探したらどうだ？」

「嘘！？ 本当に黒須くん……何で、こんな事にあたしへの当てつけ！？」

「……揉むな。島田と言い、お前と言い何なんだよ」

伐は翔子の言葉にため息を吐くと優子は伐の姿をもう1度、しっかりと見た後、美波と同様に血涙を流しながら、詰め物の伐の胸を揉む。

「あはは。黒須くんはそんな格好で何してるの？」

「見りゃわかるだろ。接客だ」

「その格好する意味はあるの？」

「あるんだろ」

優子が伐の姿に苦笑いを浮かべながら聞くと伐はスリットから足を見せると男性客の視線が集まる。

「……何か自信なくなりそう」

「知るか。それより、さっさと決めろ」

優子は目の前の美少女な伐の様子に肩を落とすが伐は早く注目しろと言っ。

「そうだね。このオススメ3つで良いよね？ 代表、優子、他に何か頼む？」

「……あたしはないわ」

「……雄二」

「オススメ3つと霧島旦那ですね。ダーリン、康太。霧島旦那を先に運んでおけ」

「てめえ、黒須！？ 裏切りやがったな」

伐はメニューを確認すると明久と康太に雄二を捕まえるように言つと2人は雄二を引きずってくる。

「裏切るも何も注文だ。しばらく、相手をしてやれば良いだろ。ちなみに騒ぎを起こしたら……島田」

「わかってるわ。これよね」

文句を言う雄二を伐は鼻で笑うと今の自分の状況への腹いせなのか、問題起こしたらチャイナ服だと言うと美波は楽しそうにチャイナ服を雄二に見せると、

「……雄二のチャイナ服は妻である私が選ぶ」

「ちょ、ちょっと待て！？ 翔子、お前、何をするつもりだ！！」

「……黒須、私は雄二に着せるならこの色が良い」

翔子は雄二にチャイナ服を着せるつもりなのか、美波が持っているチャイナ服ではないものが良いと言う。

「いや、旦那は身長あるだろ。これはサイズが合わないだろ」

「……大丈夫。雄二なら、きっと似合う」

「止める！！ 俺にはそんな趣味はない！！」

翔子の言葉に雄二が叫んだ時、

「雄二、アウトだね」

明久は楽しそうに雄二の肩を叩く。

## 第74問（後書き）

どうも、作者です。

チャイナ服2人目の犠牲者は雄二（爆笑）

3人目は誰でしょうか？

## 第75問

「……雄二、素敵」

「……霧島、いろいろと悪かったな」

「……謝るなら、最初から着させるな」

雄二がチャイナ服にムリヤリ着替えさせられると翔子はチャイナ服姿の雄二をうつとりとした表情で見ているがあまりの汚さに伐はさすがに雄二に謝る。

「これはちよつと酷いね」

「………目が腐る」

愛子は苦笑いを浮かべている隣で康太は文句を良いながらもしつかりと雄二の醜態をカメラにおさめており、

「ムツツリー二、ムダな事をしないで、そんなものを写すより、黒須くんや秀吉を写してよ！！」

明久は雄二なんかを写すなと叫ぶとクラスメートと男性客は大きく頷く。

「……これ以上は無理だ。脱いでくる」

「まあ、待て。お前が脱ぐと言うなら、俺が脱がさないといけないんだ」

「……雄二、浮気は絶対に許さない」

雄二は自分に向けられる視線に耐えられなくなり、着替えに戻ろうとすると伐は雄二を止め、その言葉が翔子に火をつける。

「翔子、ちょっと待て！？ 黒須、今の状況で何をわけのわからん事を言ってるんだ！！」

「いや、ルールだしな。なんなら、嫁を含めて……」

「さすがにそれ以上はマズいかな」

雄二は伐に向かい声を荒げて言うなか、伐が何かを言おうとしたところで愛子は苦笑いを浮かべながら伐の口をふさぐ。

「……坂本さんと黒須くんの絡み？ 受けは黒須くん？ でも、黒須くんは完全に攻めよね？」

「木下姉、俺は需要しだいでどっちも行けるぞ。まあ、基本的には攻めだけだな」

優子は彼女の好きな薄い本のなかの登場人物と伐と雄二を重ね合わせて何か考え出すと伐は表情も変える事なく言う。

「俺達のミサちゃんと霧島さんに攻められるだー！！」

「坂本、お前は万死に値する罪を犯した」

「ちょっと待て！？ お前ら何を言ってるんだ！？」



伐の言葉にクラスメートと男性客から雄二に対しての嫉妬の聲が上  
がるとそれは一気に教室の外まで拡大しはじめる。

「雄二、大変だよ」

「明久、すまない。俺は逃げる。後は……おい。明久、どうして、  
俺の手をつかむ？」

明久はあたかも雄二を心配するように雄二に近づくがその背後には  
黒い殺意がはみ出しており、雄二の腕をがっちりつかむ。

「決まってるだろ。貴様を逃がさないためだ！！ 須川くん、まだ  
靴下は早い。まずはこの異端者を貼り付けて逃がさない事が先決だ  
！！」

「吉井隊長、了解しました！！」

明久はいつもでは有り得ないくらいに的確な指示を出し、雄二を定  
番の十字架に貼り付けると、

「雄二、覚悟は良いね？」

「てめえ、明久、裏切りやがったな！！」

「裏切ったのは雄二、貴様だ！！」

十字架に貼り付けられた雄二と明久の間で罵り合いが始まり出し、

「やれやれ。島田、これはどこまでアウトだ？」

「全員かな？」

伐はクラスメート達の様子にため息を吐きながら、チャイナ服の判断を美波に訪ねると美波は苦笑いを浮かべる。

「「「ゑ？」」」

「まあ、そういう事だ。ダーリン、まずはお前からだ」

「な、何を言ってるんだよ。黒須くん、悪いのは全部、雄二だよ！  
！ 僕達が着る意味がないはずだ！！ 姫路さん、僕達は着る必要  
ないよね」

美波の全員アウトと言う言葉にクラスメート達は固まり、伐は明久の肩を叩くと明久は瑞希に助けを求めるが、

「はい。吉井くんなら絶対に似合うと思います！！」

瑞希は明久のチャイナ服姿を見たいようで明久が着るチャイナ服を手を笑顔で言い切り、

「お店、完全に変わってきてるよね？」

「まあ、笑いに走るのも学園祭の基本だろ。それより、霧島嫁」

「……何？」

愛子は苦笑いを浮かべながら言っていると伐はこれも学園祭だと言った後、翔子を呼ぶと、

「旦那と一緒にチャイナ服」

「……着る。黒須はやっぱり、良い人」

伐は雄二とお揃いの色のチャイナ服を翔子に見せると翔子はそれを受け取る。

「ちょっと代表！？ それは完全に騙されてますから！？」

「えーと、木下さんもアウトかな？」

優子は翔子の様子を見て声を上げると美波は苦笑いを浮かべながら優子にチャイナ服を渡す。

「あたしは着ないわよー！！」

「まあまあ、優子。せっかくだし、着ようよ。島田さん、ボクにもチャイナ服貸して」

「良いの？」

「良いの　良いの」

優子は声を上げるが愛子は楽しそうだと言つと愛子はチャイナ服を選び出す。

「……さてと、美春。そろそろ時間だな。行くぞ」

「ちょっと待ちなさい！？ この格好のままですか？」

「当然だ」

伐は召喚大会の時間が近づいてきたため、美春に声をかけると彼女を待つ事なく、教室を出て行く。

## 第75問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの中華喫茶（大爆笑）

店員全てがチャイナ服。（注 店員のほとんどが男性です）

伐が大量のチャイナ服をどこから借りてきたかとかはこのさいおい  
といて、葉月や瑞希の父親に見せて大丈夫なのか？とか思いながら  
も召喚大会です。

バトルが苦手なので次回は1回戦の決着がついてるかも知れませんが  
（苦笑）

## 第76問

「勝ったのか？」

「当然ですわ」

伐と美春は召喚大会1回戦を勝ち、教室に戻る途中で2回戦に向かう明久と雄二と出会う。

「店はどんな感じだ？」

「今のところ問題はないよ。霧島さんや秀吉のお姉さん、工藤さんがチャイナ服に着替えたから、お客さんがこつた返してきて……僕達は笑われたけど」

「……ああ。あれは屈辱だった」

伐は自分達が召喚大会に出てる間に何もなかったかと聞くと明久と雄二は店にきたお客さんにチャイナ服姿を見られた事が恥ずかしかったように表情をしかめる。

「まあ、良いだろ。霧島はともかく、ダーリンは似合っていない事もないんだからな」

「良くないよ！！　こんな格好をしたんだよ。もう、お嫁に行けないじゃないか！！」

伐は明久のチャイナ服姿は似合っていると言うと明久は血涙を流しながら、嬉しくないと言う。

「……ダーリン、お前はどこの嫁に行くつもりだ？　と言うか、嫁に行きたいなら俺のところにくるか？」

「えっ！？　黒須君のところ？」

伐は明久の様子に真顔で冗談を言うと明久は何故か頬を赤く染めて、伐から視線を逸らす。

「……明久、間違えるな。黒須は生物学上、間違いなく男だからな」

「何を言ってるんだ雄二！！　見てみる。ミサちゃんは誰がどう見たって可愛い女の子じゃないか！！」

明久の様子に雄二はため息を吐きながら言うが、明久の中では伐とミサは別人になっているようで雄二を怒鳴りつけると、

「ミサちゃん、こんな僕で良かったら、お嫁さんにしてください」

伐に向かい頭を下げる。

「……ああ。わかった。今日から可愛がってやるよ」

「……見た目は百合なんだが、実際は薔薇なんだよな」

伐は明久との距離を縮めながら言う雄二は自分は知らないと言いたげにため息を吐くと、

「2人とも廊下の真ん中で何をおかしな事をしているんですか！！  
豚野郎、早く召喚大会に行きなさい。行かないなら、美春がお姉

さまに群がる害虫としてこの場で処理しますわ」

美春が伐と明久の間に割って入る。

「そうだぞ。明久、そろそろ行くぞ」

「う、うん」

雄二は美春の今までとは違う反応に少し驚いたような表情をした後、明久に声をかけると明久は我に返り、頷くと、

「それじゃあ、俺達は行ってくるから、店を頼んだぞ」

「……ああ。負けるなよ」

「わかってる」

明久と雄二は召喚大会の会場に向かい、

「さてと戻るか」

「早くしますわよ」

伐と美春は教室に戻る。

「あつ！？ お帰り、黒須くんに清水さん、勝ったの？」

「ああ」

伐と美春が教室に戻ると翔子と優子は自分のクラスに戻ったのか教



室にはいないが愛子は何故か喫茶店を手伝っている。

「工藤さん、どうして手伝っているのですか？ まさかあなたもこの鬼畜な外道に弱みを握られているのですね？」

「……お前はバカか、仮にもAクラスのお子ちゃまがお前と一緒に弱みを握られるか」

「弱みは握られてないよ」

美春は愛子が手伝っているのは伐が自分と同じように愛子を脅迫しているからだと決めつけて、伐を睨みつけるが、伐はくだらない事を言うなど言い仕事に戻り、愛子本人も否定する。

「それなら、どうしてですか？」

「うーん。この間、助けて貰ってね。変な要求をされる前に返済しとこうと思って」

美春は怪訝そうな表情で愛子に聞くと彼女は苦笑いを浮かべて答える。

「ですけど、あの卑怯者はそれを自分は頼んでないから無効だとか言っ、て、また、脅迫してきますわ！！ 騙されてはいけません！！」

「そうかな？ 黒須くんはそんな事しないと思うよ。口はかなり悪いけど、根っこの部分は優しい人だよ。きっと、清水さんだって本当はわかってるくせに」

美春は愛子の言葉を全力で否定するが愛子は伐が助けてくれた時の

事を思い出しているのか優しい笑みを浮かべて美春を挑発する。

「そんな事無いですわ！！　いたっ！？」

「叩かなくても良いでしょ」

「……………遊んでないで働け」

美春は伐の優しいところなど知らないと声を上げた時、伐はメニューで2人の頭を軽く叩くと直ぐに仕事に戻って行く。

## 第76問（後書き）

どうも、作者です。

伐と明久の薔薇シーン挿入です。（爆笑）

美春と愛子の静かなる戦い勃発です。

まあ、伐は知らんぷり。（爆笑）

## 第77問

(……おかしいな。まあ、うちは飲茶中心の店だから、飯物に客が移っているだけか?)

伐は店の状況を見ているとお客の入りが増少しはじめている。

「黒須くん、どうかしましたか?」

「さっきと比べると客が一気に減ってきてるのが気になってな。昼も近くなっているから飯物に客が流れてるなら良いが……」

客の入りを見て考え込む伐に瑞希が声をかけると伐は険しい表情で言う。

「こんなもんじゃないの。お昼も近いし、学園祭なんだから他のお店も回るでしょ」

「ああ。それなら良いんだ」

美波はさっきまでの忙しさが異常だったと言うが伐には何かが引っかかっているようである。

「何か気になる事がありそうじゃな」

「まあ、朝の嫌がらせの件もあるからな。似たような事がないとは言えないだろ」

「確かにのう」

伐の様子に秀吉が言つと伐は他のところで嫌がらせが起きているかも知れないと言つ。

「朝もですが、嫌がらせをしてどうするつもりですか？ 別に学園祭の出し物なのに嫌がらせをする意味が美春にはわかりませんわ」

「まあな……」

美春は伐の思い過ごしたと言つと伐は嫌がらせを受ける理由には心当たりがあるため、眉間にシワを寄せながら頷く。

「あれ。ずいぶんと空いてるね」

「吉井くん、お帰りなさい」

「アキ、どうだったの？」

そんな中、召喚大会を終えた明久が戻ってきて瑞希と美波は明久に結果を聞く。

「勝ったよ。それより、お客さんは？」

「わからないのじゃ。少し前からこんな感じなのじゃ」

明久はお客が少しずつ減っている様子に首を傾げると秀吉は首を傾げる。

「まあ、この客入りなら、少し人数を減らしても良いだろ。今のうちに飯に行く順番を決めて交代で休憩にするか？」

「そうね。ウチらも働きっぱなしだし、せつかくの学園祭なんだから、いろいろと見て回りたいしね」

伐は客の減少に何かを感じながらも休憩を提案すると休憩のなかったクラスメートからは賛成の声上がる。

「ある程度、バランスを見ないといけないから、俺と霧島は別れるとして……ダーリン、霧島はどうした？ 嫁に捕まったか？」

「雄二ならトイレに行くって」

伐は休憩組と人数を分けようとした時、初めて雄二がいない事に気づき、明久に聞くと明久は雄二がトイレに行ったと言う。

「そうか。とりあえず、ダーリン、巨乳娘、島田に霧島……」

「美春はお姉さまと一緒にが良いですわ」

伐は休憩組を分け始めると美春は美波と一緒にが良いと言っが、

「ダメだ。お前まで行くと女っ気がなくなる。木下だけじゃ人手が足りない」

「……ワシは男じゃ」

伐は美春の意見を当然、却下する。

「どうしてですか……！」

「お前と島田を組ませると島田の身が危険だ。まあ、襲うなら襲うで俺は別に問題ないが俺はやると思った事は必ずやるからな」

「……お姉さまと一緒にいく事ができない美春を許してください」

「え、ええ。美春、お店の方をよろしくね」

伐は平然と美春を脅すと美春は涙を流しながら美波に謝るが美波は安心したようであめ息を吐く。

「それじゃあ。雄二が戻ってきたら行こうか？」

「そうですね」

「ウチも良いわよ」

明久は雄二が戻ってくるのを待つと言った時、

「お兄さん、すみませんです」

「いや、気にするな。チビッ子」

「チビッ子じゃないです。葉月です」

雄二が小さな女の子を連れて戻ってきたようで廊下から声が聞こえる。

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

女の子は誰かを探しているようで雄二がドアを開けるなり、女の子

に聞くが女の子を見てクラスメートは興味を示し、女の子を囲みだす。

「……あいつらは性別が女なら問題ないのか？」

「みたいね。って、黒須は行かないの？」

「俺は幼女は趣味じゃねえよ。金持っていないからな」

伐はクラスメート達の様子に呆れたように言う。



## 第78問

「それはお金さえ持つてれば良いって事？ それって、寂しくない？」

「悪いな。愛だ。恋だ。とかくだらねえもんには興味もねえ。そんなもん持ってたって生きてけねえからな」

美波は伐の反応に少しかわいそうなものを見るように言うが、伐は美波を鼻で笑うと、

『『『吉井だな』』』

女の子の探している人間は明久だったようだが明久は心当たりがないと言うと女の子は泣き出してしまう。

「でもでも、バカなお兄ちゃんは葉月と結婚の約束もしたのにー」

「……ダーリン、口か」

「これだから、豚野郎はみさかいがありませんわ」

女の子は明久に思い出して貰おうと明久と会った時の話を始めだが、その話は爆弾発言であり、伐はため息を吐き、美春は言葉に殺意を込めるなか、

「瑞希！！」

「美波ちゃん！！」

「「殺るわよ!!」」

瑞希と美波は明久への直接攻撃に移る。

「……黒須、どうにかならんかのう。このままでは今いる客も帰ってしまうのじゃ」

「そうだな。巨乳娘、島田。そこまでにしろ。霧島、笑ってないでまとめろ。お前が代表だろ」

瑞希と美波が明久をいたぶるのを秀吉が伐に止めるように言つと伐は2人に声をかけると雄二に丸投げをすると、

「あ、お姉ちゃん、遊びにきたよっ」

女の子は美波を『お姉ちゃん』と呼ぶ。

「……島田、お前、妹の声に気づかないのか？」

「し、仕方ないでしょ。すぐ囲まれちゃったし」

伐は美波の様子にため息を吐くと美波は慌てて言い訳をすると、

「葉月、みんなに挨拶をしなさい」

「はい。葉月は島田葉月です。いつもお姉ちゃんがお世話になりますです」

妹に挨拶をするように言い、葉月は頭を下げて自己紹介をする。

「島田、妹がきたなら、さっさと休憩に入れ。ダーリン、巨乳娘、霧島もだ」

「ん？ 休憩に入って良いのか？」

伐は休憩組に言つと話を聞いていなかった雄二は首を傾げる。

「今はこんな感じだしな。飯休憩だ」

「ああ。そういう事か。なら、さっさと済ませてくるか」

「そうだ。お前ら、仮に今の状況が嫌がらせか何かだったら対処は任せるぞ。見つけたら……これでも食わせる」

雄二が納得すると休憩組が教室を出て行くとした時、伐は嫌がらせを見つけたら対処しろと言いながら、『瑞希のゴマ団子』を渡す。

「……死人がでるぞ」

「……」

「姫路さん、落ち込まないで！！ 黒須君、これは酷いよ！！」

雄二は渡されたゴマ団子に顔をひきつらせると瑞希は落ち込み、明久は瑞希を励まそうとするが瑞希の料理の破壊力を体験しているせいか、大量の冷や汗が流れている。

「ダーリン、お前も言ってる事は変わらねえよ。まあ、これは『冗談』だけだな。嫌がらせを見つけたら、対処は任せる。どうにもならな

かつたら作戦をねるから早めに帰ってこい」

「ああ。お前も客で何か知ってる人間がいなか聞いといてくれ」

「ああ」

休憩組は教室を出て行き、

「それじゃあ、俺達は俺達で働くか」

「そうじゃのう。しかし、最初に比べるとずいぶんとお客が減ってしまったのう」

「そうですね」

居残り組の伐、秀吉、美春はガラガラに空いている教室を見ていると、

「黒須君、いる？」

友香が教室のドアを開ける。

「ん？ 友香か。どうかしたか？」

「……ガラガラね。あの影響かな」

「小山、お主、何か知っておるのか？」

友香は何か知っているようで教室の状況を見てため息を吐く。

「さつき、うちのクラスに3年生の2人組が来て、中華喫茶の料理はマズいとか店員の態度が悪いとか大騒ぎして行ったのよ。部活の先輩にも聞いたんだけど、他のクラスでも同じように言ってるみたいなのよね」

「そうか。まあ、予想の範囲内か」

友香は嫌がらせをされていると言うが、伐は驚く事なく言う。

## 第79問

「あれ？ 驚かないのね」

「まあ、予想の範疇だしな。それにちょうど飯の時間だし休憩には良いだろ」

友香は伐の反応に少し驚いたように言うが伐は休憩にはちょうど良いと言う。

「黒須、お主はなぜにそんな風に落ち着いておるのじゃ。直ぐにでもそやつらを抑まえに行くべきではないのかのう」

秀吉は伐の態度に納得がいかないのか、嫌がらせをしている2人を捕まえに行こうと言うと居残り組のクラスメート達は賛同の声をあげだし、

「これだから、頭にすぐ血が上る豚野郎は嫌いなのですわ」

嫌がらせをしている人間の事で頭に血が上り騒ぎ始めているクラスメートをよそに美波と明久がいなくなったため、美春は冷静なように文句を言いながらも真面目に接客を続けている。

「おい。ぶつぶつ言うなら、はっきり言え」

「騒ぐよりも先にやる事があるのではないですか？」

伐は美春の文句を聞き逃さずに美春に言うと、美春は接客をしろと言う。

「しかし」

「木下、俺も美春の意見に賛成だ。休憩組にも何かわかれれば対処しろと言つてあるしな。今いる客を蔑ろにしてまで行く事じゃない」

「……そうじゃのう」

伐は嫌がらせは明久達に任せると言つとクラスメート達は怒りはおさまっていないようだ、仕事に戻り始める。

「へえ。今回は真面目にやってるのね」

「一応、依頼なんぞでな。ただで学祭なんて面倒なものに出てくるか。それで、友香、さっきの話なんだが、嫌がらせは1組だけか？ そいつらの特徴ってわかるか？」

友香は雄二がいない中、クラスメートをまとめる伐を見てクスクスと笑つと伐は面倒くさそうに言いながらも友香に嫌がらせ犯の特徴を聞く。

「ただつて言わないわよね？」

「ああ。情報料代わりにうちの店でなら奢つてやる」

友香は伐に見返りを求めると伐は素直に頷く。

「珍しいわね」

「出し渋りをするほど今はカードを持つてねえからな。今回は別件

があるから、学祭程度で嫌がらせするような人間的に矮小なヤツを調べるほどヒマじゃねえんだよ」

素直に頷く伐を見て友香は驚いたような表情をするが伐はくだらない事を言うなと言いつ切る。

「まあ、奢ってくれるなら良いけど、私達のクラスと先輩のクラスに着たのは3年の夏川と常村って男子生徒。名前はその2人と同じクラスの先輩に聞いたから間違いないわ。えーと、特徴としては」

「ハゲとモヒカンですわね？」

「そうよ。知ってるの？」

友香は嫌がらせ犯の事を話し出すと朝にきて西村教諭に連れていかれた2人組と名前が合致し、美春が声をあげる。

「ああ。午前中にも着たからな。その時は我らが最強の類人猿に拉致して貰ったんだけどな。出てきて、また同じ事をやってるようだ。ヒマなヤツらだな」

「午前中にも？ 黒須君、あなたまたおかしな事をして恨みとか買ってるんじゃないの？」

「それですわ！！ あなたのような邪悪な人間が同類のバ力と呼ぶんですわ！！」

伐は表情を変える事なく2人組には罰を与えたと言うと美春と友香からは伐が悪いんじゃないかと言う。



「まあ、否定はしないが、今のところ、あんな顔面がわいせつなヤツらに関わるほどヒマじゃねえよ。あんなバカ2人の相手をするなら、根本のクズの相手をしてる方がマシだ」

「……黒須君、どうして恭二の名前を出すのかしら？」

「ん？ 意味はねえよ。あいつはクズだけだな。それなりに考えを持ってやってるだろ」

伐は2人組の相手をするなら、恭二の相手をすると言うと恭二と付き合っていた事が汚点である友香は額に青筋が浮かび始めるが伐が気にする事はない。

「考え？」

「何を不機嫌そうにしてる？ 別れたんだろ？ それともまだつきまとわれてでもいるのか？」

友香は恭二の話に不機嫌そうな表情をすると伐は友香に恭二とまだ付き合いがあるのかと聞いた時、

「友香、俺の話を聞いてくれ！！……黒須？ しまった！？」

「しつこいわよ。あなたとは終わったって言ってるでしょ！！」

恭二が友香を探していたようで教室のドアを勢い良く開け、伐の顔を見て顔をひきつらせるなか、友香は恭二を怒鳴りつける。

第79問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの根本再登場（爆笑）

自分でやって言うのも何ですが先が見えません。（爆笑）

伐と根本で教室は荒れるのか？

## 第80問

「……えーと、島田がないから、木下、アウトか？」

「……黒須、お主は状況を理解しておるのか？」

恭二と友香の様子に伐は表情を変えずにチャイナ服の判断を秀吉に聞くと秀吉はさすがに呆れたようなため息を吐く。

「いや、なんかお約束になってるみたいだからな。と言う事で、友香、根本、2人ともこれに着替える」

「何だよ!？」

「そんな事できるわけないだろ!？」

伐の中では誰であろうとこの教室で騒ぎを起こせばチャイナ服だと言つと恭二と友香にチャイナ服を渡すが当然、2人は声をあげる。

「俺はお前みたいな女装趣味の変態とは違つんだ。誰がそんなものを着るか!！」

「何度も言わせるな。需要があるから着てるだけだ」

恭二は伐を罵倒するが、伐は表情を変える事なく言つと、

「着替えないなら、俺が手伝つてやるよ」

友香との距離を縮めると彼女の制服からネクタイを抜き取る。

「ちょ、ちよつと！？ 黒須君！？」

「黒須、お前、友香に何をするつもりだ！？」

伐の行動に友香は慌てて後ろに飛び退き、恭二は声をあげる。

「根本、正直に言え。友香のチャイナ服姿をみたいだろ？」

「ぐっ！？」

伐は恭二の様子を見て楽しそうに笑い、

「友香、どうする？ 無理やり脱がせられるのと自分から着替えるのどっちが良い？」

「……私が着替えないって選択はないわけね」

「当然だ。それに一生で3回しかない高校の学祭だ。たまにはハメを外しても良いだろ。お前は代表だしな。出し物の仕切りとかで忙しかったんだろ。代表が険しい表情をしているとクラスのヤツらが心配するしな。少し力を抜け」

伐は友香が学園祭の準備で疲れが溜まってるのを理解しているようで彼女の頭を優しく撫でると、

「木下、オススメ2つ。友香とBクラスの代表に」

「お主にしては珍しい対応じゃな」

秀吉に2人に飲茶を運べと言う。

「普通の人間は人をまとめるのは疲れんだよ。うちの代表くらいだろ。人を手ゴマにして楽しんでるのは」

「やれやれ。素直じゃないのう」

伐は雄二がおかしいと言うと秀吉は苦笑いを浮かべる。

「……黒須、お前、俺はこんなもので懐柔されないぞ」

「別にするつもりはねえよ。お前はお前なりのやり方でクラスを守ろうとした。たまたま、俺とは立場が違ったから、叩き潰したただけだ。もし、俺がBクラスにいたらお前の策にもものつたかも知れないし、越えてはいけないラインを踏みとどませたかも知れない」

恭二は伐の行動に疑いの視線を向けるが伐は興味なさそうに言う。

「……ちつ。仕方ねえな。そこまで言うなら、食ってやるよ」

「素直じゃないわね」

恭二は文句を良いながらもイスに座り、友香は伐と恭二の様子に苦笑いを浮かべる。

「友香、お前はどこに座るんだ？」

「まあ、1人も何だからね。相席するわ。一応はしつこくされるのも何だからはつきり断るためにね」

「……小山、根本に聞こえておるぞ」

「まあ、聞こえるように言ってるしね」

友香は恭二との事を終わらせると言つと恭二が座っている向かいの席に座る。

「黒須」

「男と女の問題に他人が関わるな。面倒な事になるだけだ」

秀吉は2人を一緒に座らせて良いのかと伐に聞くが伐は興味なさそうに言う。

「……」

「おい。遊んでないで働け」

「……美春は少なくとも無駄話をしていた黒須君よりは働いています」

美春は別れ話をしている恭二と友香の様子に何か感じるものがあるのか2人に視線を送っていると伐がメニューで彼女の頭を軽く小突く。

「……本気で島田に惚れてるなら、相手の話を聞くぐらいの余裕を持て。ただ闇雲に突っ込んだら逃げられるだけだ」

「う、うるさいですわ!! 美春とお姉さまは愛し合っているんですから、あんな風にはなりません!!」

「そうか。まあ、俺もお前の恋愛に首を突っ込むほど暇じゃないしな。周りに迷惑をかけない程度に頑張れ」

「わ、わかってますわ」

伐は美春の様子に苦笑いを浮かべると美春は伐から視線を逸らす。

## 第80問（後書き）

どうも、作者です。

目の前で恋愛が終わるところに美春は何を思っただろうか？

伐と根本の会話は皆さんにどう見えたでしょう？

作者は別に根本が嫌いではないですし、代表としては卑怯な手を使ってもクラスを守ろうとしていたとも考えられるわけです。

敗軍の将は非難されるのは常ですが、仮にBクラスが勝っていたら、根本のクラスでの評価は落ちなかったでしょうしね。（苦笑）



## 第81問

「……ね、根本君、前の女装で目覚めたの？」

「……そんなわけあるか」

明久達が昼食を終えて教室に戻つてくるとなぜか恭二と友香がチャイナ服に着替えて手伝いをしている。

「黒須、こいつらが帰ってきたんだ。俺は上がるぞ」

「ああ、忙しくなったら、また頼む。恭子ちゃん」

「誰が恭子ちゃんだ！！ 2度と手伝うか！！」

恭二は伐を怒鳴りつけると教室を出て行く。

「黒須、客足が増えてるみたいだけど、どうやったんだ？」

「ん？ 友香のチャイナ服見たさと根本のチャイナ服を笑いにきた人間がごった返しただけだ」

「……そうか」

喫茶店は一番混んでいた時とまでは行かないが客足は戻ってきている。

「それで、嫌がらせをしてたハゲとモヒカンは見つかったか？」

「ああ、懲らしめてはきたが、お前、犯人わかってたのか？」

「ああ、お前らが行った後、すぐに友香が知らせてくれた」

「こんなものを着せられるなら知らせにこなきゃ良かったわ」

雄二は伐が嫌がらせの犯人を知っていた事に驚くと友香はため息を吐く。

「まあ、めったに着れるものじゃないんだ。楽しんでおけ」

「……見せ物にされてるとしか思えないわよ。さっきからクラスの男の子達が何か話してるし」

「それは似合ってるからだろ」

「へえ、坂本君もお世辞って言うんだ」

友香はため息を吐きながら言うと雄二は友香を誉め、友香は誉められた事が嬉しいようで笑顔を見せる。

「まあ、もとの方がいいんだ。大抵のものは似合うだろ」

「あ、ありがとう」

「俺が誉めるより、黒須の方が良いみたいだな」

伐が雄二の言葉に続くと友香は驚き、雄二は友香をからかうように言う。

「そ、そんなわけないじゃない!？」

「何を慌ててるんだ。霧島、お前もあまりからかうな。嫁が殺氣立つから」

「……黒須、冗談だよな?」

友香は雄二の言葉に慌てると伐はくだらないと良いながら、翔子がきていると言う。

「振り返ればわかるんじゃないか?」

「い、いや。振り返ると命が危ない気がするんだ」

伐は雄二に振り返れば良いと言うが雄二は後ろから感じる気配に大量の脂汗をかきはじめる。

「……雄二、浮気は絶対に許さない」

「しょ、翔子、浮気も何も俺とお前は……」

「相思相愛だ」

「……黒須、よくわかってる」

翔子は背後に黒いものをはみ出しながら雄二との距離を縮めてくると雄二は翔子とは付き合っていないと言おうとするが、伐は翔子側の発言をする。

「て、てめえ、黒須!？ どういうつもりだ!？」

「Aクラスとの和平交渉の時に前前の処遇は決まったんだ。諦めろと言っか、素直に惚れてると言え、めんどくせえから」

雄二は伐を怒鳴りつけるが伐が気にするわけもなく、

「美春、木下、霧島達が帰ってきたし、俺達の休憩時間だ」

「やっと休憩……」

「疲れたのじゃ」

休憩に入ると言つと美春と秀吉は朝から働きっぱなしだったため、疲れたと言つ。

「黒須、お主、昼はどうするのじゃ。何ならワシと一緒に行かんか？」

「いや、俺の飯はこれだからな」

秀吉は明久達が先に飯休憩に入つたためか伐を昼食に誘うが伐は懐からいつもの携帯固形食を取り出して断る。

「あなた、いつも、そんなものを食べているんですか？」

「ああ」

美春は伐の昼食を見て呆れたようなため息を吐くが伐はどうでも良さそうに頷く。

「こんなものばかりじゃ、体を壊しますわよ」

「そうね。せつかくの学園祭なんだから、お昼くらい何か違うものを食べたなら良いんじゃない？」

「壊れたら壊れただ。お前らに関係はないだろ」

美春と友香は伐にまともなものを食べと言うが伐は自分の健康などどうでも良いと言うが、

「黒須君、いる？」

「……なんだ？」

「はい。これあげる。それしか食べられないって言っても、野菜ジュースくらい飲めるよね。じゃあ、ボクはこれからクラスのシフト入ってるから行くね」

愛子が教室を覗き込み、伐に野菜ジュースを渡して出て行く。

「……ったく」

「黒須君、それしか食べられないってどういう事？」

「……お前には関係ない」

愛子の言葉に明久が伐に声をかけるが伐は関係ないと言うと1人で教室を出て行く。

## 第81問（後書き）

どうも、作者です。

伐はまた単独行動に移ります。

伐の食生活を知っている愛子は1歩有利なのかなあ？

友香もヒロイン候補に戻すべきなのか悩むところです。

## 第82問

(……タバコは吸えないか)

伐は昼休みに入るとやはり一日中、タバコを吸えないのはきつかったようで屋上に向かうが屋上は休憩をしにきた生徒達でこった返しており、伐はタバコを懐にしまい直して屋上を後にする。

(……どうするかな？　ばばあのところなら吸えるか)

伐は校舎に戻り、行く宛を探していると、

(ん？　ハゲとモヒカン？　何であのハゲは頭に女物の下着を付けてるんだ？)

Fクラスの喫茶店の邪魔をしていた3年の夏川と常村を見つける。

「……吉井と坂本の野郎、覚えてろよ」

「畜生、どんな接着剤を使っただよ。取れねえぞ」

2人は自分達の行動を棚に上げながら、明久と雄二に向けて恨み言を吐きながら、頭に付いた下着を外そうとしているがなかなか良い接着剤を使っているようで下着が取れる様子はない。

「おい。早くしないと召喚大会が始まっちゃうぞ。急げよ」

「いてえな！？　無理に引つ張るんじゃないよー!!」

(……ダーリンと霧島もなかなかえげつないね)

2人の様子に伐は楽しそうに笑うと、

「大声を出して何かしたんで!? へ、変態!! 誰かきてください!! 頭に下着を被って喜んでいる変態がいます!!」

声を変えながら、2人を心配するように声をかけると2人に近づいた後、わざとらしく大声をあげる。

『ミサちゃんの悲鳴だ!!』

『どこだ。その変態は!!』

伐の声を聞いたFクラスを中心に、ムツツリ商会で『ミサ』の写真を買っているであろう男子生徒達が2人に敵意の視線を向ける。

「な、なんだ!？」

「誰か、助けて!! 変態に襲われる!!」

「ちょっと待て!?! 俺達は何もしてない!!」

「夏川、その女を黙らせろ」

「お、おう」

伐は迫真の演技で変態2人組に襲われかけている女の子を演じ始めると2人は伐を黙らせようとするが、



「触らないでください!？」

「ゑ!？」

伐は流れるように近づいてきた夏川を投げ飛ばす。

「あいつ、俺達のミサちゃんに手をあげやがった」

「許せないな」

「ああ。生きて返すな」

伐の味方をしにきた男子生徒達は夏川と常村を殺意を込めた視線を送る。

「ちょっと待て!？ 投げられたのは俺だぞ!？」

「……あの変態がわたしの胸を触ろうとしました」

「!？」

夏川は自分は悪くないと言おうとするが、伐は瞳を湿らせながら自分は被害者だと言つと伐の手のひらで遊ばれている男子生徒達は無条件で伐の味方をするため、

「殺せええ!!!」

「あの変態を許すな!!!!」

男子生徒達からは背後からまがまがしい殺意が溢れ出し、叫び始め

る。

「おい。夏川、ヤバいぞ」

「い、言われなくてもわかってる。に、逃げるぞ」

『『逃がすか！！！！！』』』

夏川と常村は殺気立った男子生徒達を見て伐に背中を見せると全力で逃げ出す。男子生徒達は2人を追いかけて行く。

「まあ、少しは気が晴れたかな？」

「あ、あなた、何をしていたのですか？」

「ミ、ミサちゅわああん」

伐は夏川と常村が全力で逃げる様子を見て楽しそうに笑っていると、美春と美紀が伐を見つけると美紀は伐の女装姿に理性が吹っ飛んだように伐に抱きつき、

「……玉野、抱きつくな」

「ミサちゃん ミサちゃん ミサちゃん ミサちゃんの匂い

ミサちゃんの肌触り すごい すごいよ」

伐はため息を吐くが美紀が離れる事はない。

「あなた、美春や小山さん、工藤さんだけでは飽きたらず、美紀ちゃんにまで？ 美紀ちゃんから離れなさい。この家畜野郎！！」

「……あのなあ。今の状況で言えば襲われてるのは俺だ。だいたい、まだ、お前を含めてあの面子には手をつけてねえよ」

「ミサちゃん！？ 美春ちゃん、ミサちゃんがミサちゃん成分が足りないの！？ もつとミサちゃんを！！」

美春は伐から美紀を引き離すと伐を汚物を見るように言うが伐は面倒くさそうに言い、美春の腕の中の美紀はお預け状態のため、美春の腕のなかで暴れる。

### 第83問

「それなら、美紀ちゃんはどうして？」

「……知らねえよ。だいたい、この間、お前に用が有ってDクラスに行った時からこうだろ」

美春は伐の言葉に疑いの視線を向けながら伐に聞くが、伐は興味なさそうに答える。

「俺は行くからな。しばらく、玉野を押さえておけ。俺が居なくなれば発作はおさまるだろ」

「ええ」

伐は美春に美紀を押さえておけと言うと美春は疑いの視線を向けたまま頷く。

「……そうだ。美春、お前は今のそいつをどう思う？」

「どう言う意味ですか？」

「今の玉野と島田を追いかけているお前は一緒だって事だ。周りの事も相手の事も考えない。相手の気持ちを考えない恋愛ってのはお前の言う『愛』ってヤツなのか？ まあ、俺には関係ないがな」

伐は美紀の今の姿を美春の暴走時と一緒にと言うと美春の反論なども聞かずに歩き出す。

「……あなたに言われる筋合いはありませんわ」

美春は伐の言葉に何か引つかかるが、伐を引き止めるわけでもなく、つぶやく。

（……玉野を食つとけば良かったな。タバコ吸える場所がまったくねえしな。やっぱり、ばばあのところにも行くか？）

伐はいつも行っている喫煙場所に行くが学園祭と言う事も有ってかどこも人混みで溢れかえっており、伐は顔のきく学園長室に向かうとしたところ、

「……ら、Ｃクラスの……を取ったとは言え、Ｆクラスの……が優勝する……てありえない……」

「そんな……っても、現に……上がって……ではないですか？」

（ん？ 何か聞こえるな？）

人目を避けて話しているような声が聞こえる。

「……伐」

「……康太？ お前が声をかけてくるって事はあれは竹原か？」

伐が様子をうかがおうとすると康太が音もなく、伐に近づき声をかける。

「……伐の言っていた通り、教頭は次の手を打ってきたみたいだ。３年では俺達の相手にならないと思ったように」

「……チンピラを抱え込んだわけだな。小物は次に考える手も姑息だな」

康太は竹原が話している相手が今までの学生とは違うと言うと伐はあまりの竹原の小物っぷりにため息を吐く。

「……………状況としてはマズい学生間の揉め事なら、俺達の正当性はそれなりに確保されるが外部との問題になると」

「大丈夫だ。ある程度、強力な兵を揃えたって、将が間抜けなら、それは隊として機能しない。兵を理解している将が居るんだ。簡単には負けねえよ」

康太は状況が悪いと言うが、伐は雄二を高く評価しているようで心配ないと言う。

「悪いな。ある程度したら、これで連絡をくれ。割と笑えない問題になってきてるんだ。女の尻を追っかけるついででも良いから何かあったら頼む」

「……………わかった」

伐は康太に携帯電話を渡すと康太は素直に頷く。

「……………一応、この状況をばあにも伝えてくる。竹原がそこにいるから、速いうちに済ませてくる」

「……………ああ。学園長も何か掴んでないか確認しておいて欲しい」

伐はタバコのついでに学園長のところに行くと言つと康太から状況を確認してくるよう言われる。

「……ああ。チンピラが問題起こすだなんだつてなると学園の評判としては最悪だからな。やるなら、教頭だけじゃなく、教頭を操つてるヤツらまで引つ張り出さないと同じ事が起きるからな」

「……………任せる」

「……そっちもな。狙ってくるのは俺や霧島、ダーリンがいない時だろうからな。巨乳娘や島田、木下が狙われるだろうから、気をつけて置いてくれ」

「……………チャイナ服はそのためか？」

伐はチンピラが女性陣をさらう事を危惧すると、康太は全員がチャイナ服になった意味に気づく。

「まあ、ダーリンもそうだけだな。キチンとメイクすれば女に見えるヤツもいるからな。あの3人意外ならある程度どうにかできるだろ」

「……………ああ」

「それじゃあ、俺は行くからな」

伐はめんどくさそうに言つと学園長室に向かい歩き出す。

### 第83問（後書き）

どうも、作者です。

意味のあった全員チャイナ

あ、後付けじゃありませんよ。（苦笑）

まあ、伐が策を張ってもあの3人＋はさらわれますが。（爆笑）

書く度に教頭は小物になって行く。

教頭室にチンピラが入る姿もマズいけど裏で会うなら学園の外で会えって感じです。まあ、そこはご都合と言う事で見逃してください。（苦笑）



## 第84問

「ばばあ、いるか？」

「……伐、あんたはもう少し礼儀つてものを覚えな」

伐はノックもせず学園長室のドアを開けると学園長は伐の行動にため息を吐く。

「そんなもんは必要ねえよ」

「……当たり前のようにタバコを出すんじゃないよ。あんたは高校生でここは学園長室なんだよ」

伐は学園長相手に礼儀など必要ないと言うとタバコに火を点け、学園長は言うだけ無駄と思いながらもタバコを吸うなと言うが、

「ふう……」

伐は関係ないと言いたげにタバコを吹かす。

「……伐、あんたね」

「……情報を持ってきたから見逃せよ。こっちはタバコが吸えなくてイライラしながらも働いているんだ」

学園長は伐の様子にため息を吐くが伐は気にするわけもなく、

「竹原は3年じゃ、俺達の相手にならないと気づいて、チンピラを

学内に連れ込んだぞ」

竹原がなりふり構っていないと言う。

「……そうかい。それなら、教師の見回りを増やすかい？」

「無駄だろ。チンピラ相手にまともに相手をできるのは西村と大島くらいだ。他が関わるとケガ人を増やすだけだ」

学園長は安易に教師の見回りを増やすと言うが、伐は無駄な事を止めろと言う。

「……だけどねえ。さすがにあんた達はいつでも良いとして他の生徒に何かあつたらねえ」

「……一応、うちのクラスにもまともな人間はいるからな」

学園長はFクラスの事はどうでも良いと言うと伐はため息を吐く。

「人目を気にしないでくるなら、ある程度、正当防衛も通用するだろうしな。相手の出方もあるだろうけど、なるべく、西村と大島をうちのクラス近くで見回りさせといてくれ。狙ってくる時間は試合間隔が短くなる準決勝くらいだろうしな。ある程度は俺と霧島で何とかする」

「……悪鬼羅刹に2代目黒猫かい。厄介な生徒が紛れ込んだもんだね」

伐は自分達の身はそれなりに守ると言う学園長は苦笑いを浮かべると伐を『2代目黒猫』と言う。

「……ばばあ。俺はノラ猫だ」

「ノラ猫？ これくらいの挑発にのるんなら、あのくそじやりに比べればただの子猫だろ」

『2代目黒猫』と言う言葉に伐は視線を鋭くするが学園長は伐を『子猫』だと笑う。

「……何百年も生きてる妖怪ばあに比べれば黒猫もノラ猫も子猫だろうな」

「ただの負け惜しみにしか聞こえないねえ」

伐は学園長に向かい悪態を吐くが学園長は鼻で笑うと、

「……あんたがどう生きようがあたしには関係ないし、知ったこっちゃないしね。ただどね。あのくそじやりの背中を追いかけるんじゃないよ。あんな生き方をしたって残るものなんて何もない」

何かを思い出しているようで寂しさや悲しさなどを込めたような複雑な笑みを浮かべて言う。

「……別に何かを残すつもりなんてないね。ノラ猫の死に場所なんてそんなもんだろ」

しかし、伐の表情は自分の死など興味などないと言い、

「話がそれたな。それで、ばばあ、お前の方は何か進んでるのか？ 出来ればベストは決勝までに腕輪の修理が終わるのがベスト何だ

けどな」

「残念だけど無理だね。坂本とあんたが決めた通り順調に進むと準決勝はバカ2人とAクラス代表の霧島翔子、木下優子」

「もう一試合は俺達と竹原の犬のAクラスの変態ペア。霧島の作戦が失敗すれば、嫁と木下が優勝だ」

「そうだね。最悪はその2人の優勝だね。バカ2人が優勝すれば問題なし、教頭の手ゴマは腕輪が暴発しても自業自得。あんた達は上手くやるだろうしね」

話を元に戻すと学園長は召喚大会の結果を心配するように言う。

「まあ、俺達が決勝まで上がればどうにでもなる。点数が高くて暴走するなら決勝と御披露目教科以外を0点にすれば御披露目の時には暴走はしない。後は直るまで腕輪を使わなければ問題ないしな。霧島が教科選択を条件に出したのはこれも考えてだろ」

「……あんた達は本当に勉強以外は頭が回るね」

伐は雄二と明久が決勝に上がってこれなかった時の抜け道があると言つと学園長はため息を吐く。

「まあ、腕輪は改善の余地なしと言う事だな。俺は召喚大会の時間だから行くぞ」

「ああ、頑張つてきな。くそじゃり」

伐は話は終わりだと言つとタバコを携帯灰皿に押し当て学園長室を

出て行く。

## 第84問（後書き）

どうも、作者です。

少しだけ見えたノラ猫の過去。

黒猫とノラ猫、ノラ猫と妖怪ばあとの関係は？

ふと、Fクラスで騒ぎを起こした鉄人がチャイナ？

……………凄く書きたい。（爆笑）

## 第85問

「……騒がしいですわ」

「そうだな」

伐と美春が召喚大会の準々決勝を勝利して教室に戻ろうとすると教室の前に人だかりができています。

「……美春、お前はここで待ってろ」

「どうして？」

「……揉め事だったら、面倒だろ」

伐は美春を置いて教室に向かうと、

「止めるのじゃ！？　なぜ、そんな事をするのじゃ！？」

「うるせえな。こんなもんを客に出すんじゃないよ」

教室の中ではチンピラ3人が暴れており、秀吉とクラスメート達がチンピラを止めようとするが、チンピラは高笑いを上げて暴れている。

（……霧島、ダーリン、巨乳娘、島田は召喚大会だから狙われたか？　……ん？）

伐は教室のなかを覗いてため息を吐くと教室のなかに何かを見つけ、

「……騒ぐな。チンピラ」

教室のなかに入ると暴力騒ぎなど関係ないとチンピラの1人の腕をねじ上げる。

「黒須!？」

「……てめえ、何するんだよ？」

「……飲食店だからな。ゴミがあると困るんだよ」

チンピラは伐を睨みつけるが伐はチンピラをゴミだと言い切る。

「おい。学生くんがこんなところで騒ぎを起こして良いのか？ 停学になっちまうぞ」

「ふーん。まるで、俺達は何もしないと思っているのか？」

チンピラは伐を鼻で笑うが伐はチンピラをバカにすると、

「竹原教頭先生、この場合、正当防衛は適用されますか？」

チンピラをけしかけて、この状況を見にきていたであろう竹原に声をかける。

「……い、いや、暴力は」

「なら、教頭先生がどうにかしてくださいよ。俺達、学生を守るのが教員の仕事ですよね？」



竹原は伐にいきなり声をかけられて慌てると伐はそれが仕事だと言うと、

「まあ、この状況ですし、停学くらいで勘弁してください。木下、お前ら弁護をよろしく」

教頭の言葉に冷たい笑みを浮かべるとチンピラをぶちのめすと言い、伐の言葉にチンピラの行動が頭にきていた野次馬達は歓声を上げる。

「……最初に言っておく。何のためにこんなくだらない事をしたかは知らないが、お前らみたいなクズが学園祭で暴れるって事は裏が居るんだろ。もちろん、吐いて貰うぞ」

伐はチンピラの1人の鳩尾に拳をねじ込むと楽しそうな笑みを浮かべて、竹原に聞こえるように言う。

「黒須！？ 危ないのじゃ！？」

「……騒ぐなよ」

チンピラが伐に殴りかかると秀吉は声を上げるが伐は慌てる事なく、その攻撃を交わしてチンピラの腹を蹴り上げる。

「く、黒須君、君は学園でそんな事をして良いと思って」

「……すみませんね。世話になった人の教えなんですよ。ケンカを売られたなら、2度と逆らえないようにぶちのめせてね。それが例え誰だろうとな。それがノラ猫の流儀だ」

「……ノラ猫？」

竹原は伐にチンピラの裏を探らたくないため、伐に止めるように言うが、伐は止まるわけはなく、残っているチンピラを殴り飛ばすと、

「お前達、何だ。この騒ぎは……！」

西村教諭が教室を怒鳴り込んでくる。

「西村先生、チンピラを捕まえました。警察と俺の知り合い。どっちに引き渡した方が良いと思います？」

「……状況を言え」

伐は平然とチンピラを縛り付けながら言う。西村教諭は頭を押さえながら言う。

「状況ですか？ それは生徒がチンピラに暴力をふるわれていたのにチンピラを止める事なく、傍観していた竹原教頭に聞いてください」

「……竹原教頭、どういう事ですか？ 我々、教師は生徒を守り、導くのが仕事のはずです」

「それは」

伐は全てを見ていた竹原に聞けと言う。西村教諭は竹原に詰め寄る。

「西村先生、一応、暴力事件になるんで、俺は停学ですか？」

「今回はお前が止めなければ多くの生徒がケガしたはずだ。お前の行動は間違ってる。今回は俺の判断で停学はなしだ。学園長にも俺から伝えておく」

「さすが、話がわかる」

伐は西村教諭からお墨付きを貰うと、

「なあ。お前ら、どこの三下だ？ ノラ猫に関わるルールって知ってるよな？」

楽しそうにチンピラをいびり始める。

「……黒須、これ以上、問題を起こすな」

「いやあ。世の中には原因と対策ってのがありますから、こうなった原因を探さないといけないですからね。原因がわかれば原因から叩き潰すのが1番ですから」

西村教諭は伐の行動にため息を吐くが伐は黒幕まで行くと云うと、

「警察よりはやっぱり、その筋だよな……お世話になってます。ノラ猫です。ちょっと預かって欲しいチンピラが3人……」

「黒須、止めると言ってるだろ！！」

どこかに電話をかけると西村教諭は伐から携帯電話を取り上げる。

「時報じゃな？」

「さすがにチンピラ以上の人間を学園に入れるわけには行かないだろ。それより、西村先生」

秀吉は伐の電話から聞こえる声にため息を吐くと伐は自分を怒鳴りつけた西村教諭にチャイナ服を見せる。

「お主、何をするつもりじゃ？」

「いや、この教室のルールだし、このクラスの担任様がルールに従わないのは興ざめだろ」

秀吉は表情をひきつらせるが伐は平然と言う。

## 第85問（後書き）

どうも、作者です。

鉄人にチャイナ服を進める伐。

……いや、着ないだろ。

と言っか、クラスメートに止められる。

## 第86問

「……ったく、ノリが悪い」

「当然じゃ、鉄人がチャイナ服を着るわけないのじゃ」

西村教諭は伐を怒鳴りつけるとチンピラ3人を引きずりながら教室を出て行く。

「絶対に集客率が上がるのにな」

「……上がるとしてもその後が大変なのじゃ」

伐は西村教諭のチャイナ服姿に商品価値を持っていたようだが、秀吉を始めとしたクラスメート達は大きく首を振る。

「さてと、店を戻すぞ。ケガしてるヤツがいたら治療してこい。イヤな思いした客にも何かしてやりたいけど、霧島がいないなかでやるわけにもいかないしな」

「ケガ人はいないようじゃ」

伐は店の修復を始めだすと、

「黒須、秀吉、無事か？」

雄二が慌てて教室に入ってくる。

「ん？ ずいぶん早く帰ってきたな。ダーリン達はどうした？」

「清水が召喚大会の会場まで着てくれてな。試合が終わって直ぐに知らせてくれたんだ。明久は姫路と島田について貰ってる」

「べ、別にあなたのためにしたわけじゃありません」

雄二は美春から聞いて慌てて帰ってきたようであり、美春は伐のためじゃないと言う。

「そうか。まあ、こっちは見ての通りだ。ケガ人がいないのが救いだな」

「どうする？ このままだと、姫路の父親がこの状況を見たら」

「……姫路は転校してしまうのじゃ」

喫茶店の荒れ具合に雄二は眉間にシワを寄せると秀吉の表情は暗くなってしまう。

「やるしかねえだろ。俺達が巨乳娘の父親に見せないといけないのは、真面目でひたむきな姿だろ」

「……お前が言つと嘘臭いな」

伐はめんどくさそうに言つと雄二は苦笑いを浮かべると、

「よし。壊れた物は裏に移動して修理。須川、飲茶は土産用にはできないか？」

「……持ち帰りか？ そうだな。やってみるから、容器を揃えてく

れ」

「ああ」

雄二はテキパキと指示を出して行く。

「木下、美春、お前たちは接客だ。愛想よくやれよ」

「愛想はあなたが一番気にしないといけないんじゃないですか」

「まったくじゃのう」

伐は店の全体は雄二に任せるとウェイトレス組をまとめる。

「黒須、秀吉、清水、値段はさっきと同じようにしばらく半額に戻すぞ。忙しくなると思うがよろしく」

「しばらくすれば、ダーリン達も帰ってくるだろ……待てよ」

雄二は伐に頑張れと言うと伐は何かを企んだようでニヤリと笑うと、

「……嫁、旦那が困ってるぞ」

「……すぐに行く」

どこで手に入れたかわからないが翔子に電話をかけると翔子はすぐに駆けつけると言い、電話を切る。

「く、黒須、お前!？」



「店の信頼回復が最重要事項だ。諦める。だいたい、お前が素直に自分の気持ちを嫁に言ってやれば簡単に落ち着くだろ。逃げるから追いかけるんだ」

雄二は表情をひきつらせるが伐は雄二が悪いと言う。

「……雄二、待った？」

「代表！？ あたし達のクラスの出し物だってあるんですから」

「優子、坂本くんが困ってるんだから、代表に何を言ってもムダだよ」

翔子が勢いよく教室のドアを開けると愛子、優子が翔子に付いてくる。

「……うわぁ。ひどいね」

「何があつたのよ？」

翔子は雄二に抱きついていて隣で愛子と優子は店の荒れ具合に心配そうに言つと、

「実はのう……」

秀吉は2人にこんな状況になった理由を説明する。

「へえ。黒須くん、大活躍だ。ボクも見えたかったな。優子の弟くん、黒須くんはかつこよかった？」

「愛子、そんな場合じゃないわよ」

「……………1枚、100円」

「……康太、見ていたなら、手伝えよ」

愛子は伐の活躍を見たかったと言うと優子は呆れたようにため息を吐くが、康太は伐の写真を愛子に見せる。

「うーん。チャイナは締まらないね」

「……………そうでもない。さっき、2ダース売れた」

愛子は苦笑いを浮かべるがすでに写真は大量に売れていると言うと康太の言葉に美春が小さく反応する。

「……へえ。誰が買ったんだろうね。清水さん」

「し、知りませんわ!？」

愛子は美春の反応を見逃さずにニヤニヤと笑いながら美春に聞くと美春は大声をあげる。

「ふーん。ムツツリーニくん……………清水さんが買ったヤツ以外に何かない?」

「……………値段が上がるがこんなのは?」

「それもらっつ」

愛子は美春に聞こえるように康太から写真を買う。

## 第87問

「……それじゃあ、行くか？」

「負けんなよ」

伐と美春は召喚大会の準決勝の時間が近づき、教室を出て行こうとすると雄二が伐に声をかける。

「お前もな。と言うか、お前らが負けると全部ばあだ。死んでも勝て」

「ああ。ここを勝たないと俺の一生は終わりだからな。何としても勝つ」

伐は自分達の心配をしると言うと雄二は翔子に如月ハイランドのペアチケットを渡すわけには行かないため真剣な表情で言う。

「黒須くん、坂本くん、2人でこそそと何を話してるの？ また悪巧み？」

「……別に何もしてねえよ」

伐と雄二の話しているのを見て、愛子がニヤリと笑いながら声をかけてくる。

「そうなの？ Fクラスが3人も準決勝進出でしょ。また、黒須くんが裏で何かしてるんじゃないかな？ とか思ったんだけど」

「そんな事はねえよ。なあ、黒須」

「……いや。お前らが優勝する事に賭けてるから、負けられると困るんだ。嫁と木下姉に優勝されると俺は大損だ」

愛子は伐と雄二の様子に不信感を抱いているのか疑いの視線を向けて言うと雄二は表情を変える事なく否定するが、伐は別に隠す気もないのか召喚大会で賭けを行っていると言う。

「……おい。黒須、今回は真面目にやると言う約束だよな？」

「お前らからの依頼は召喚大会出場と店の手伝い、禁煙だけだ。お前らの優勝は俺の1人勝ちだからな。良い儲けだ」

雄二は頭を押さえながら伐に言うが、伐は悪いと思ってはいない。

「……えーと、バレたら停学で済むのかな？」

「……いや。一発アウトだろ」

伐の言葉に雄二と愛子は顔をひきつらせるが、

「バレなきゃ、問題ない。お前らがバラしたいなら、止めないけどな」

「黒須くん、いつまでムダ話をしているつもりですか？」

「……わかってる。俺達が行ってくるからな」

「ああ。俺と明久ももう少ししたら行く」

美春が伐を呼ぶと伐は美春と2人で教室を出て行く。

「……」

「工藤、黒須と召喚大会に出たかったのか？」

「えっ！？ な、何を言い出すのさ。いきなり」

愛子は伐と美春の背中を見つめていると雄二が愛子に声をかけ、愛子はその言葉に慌てる。

「黒須はモテるからのう。大変じゃぞ」

「ちょっと、優子の弟くんも何を言ってるの!？」

「凶星か」

秀吉が愛子の様子を見て言うと愛子の顔は赤くなって行き、雄二はニヤリと笑う。

「そ、そんな事は」

「まあ、俺達が口をはさむ事じゃないからな。でも、あいつは大変そうだぞ」

「だから違っって」

雄二は今までの愛子とは違う反応にニヤニヤと笑っていると、

「……雄二、浮気は許さない」

翔子の長くしなやかな指が雄二の頭をがっちりつかむ。

「……代表、坂本くんも遊んでないでそろそろ行きましょう」

「雄二、早く行くよ。そんな風に仲の良いところを見せつけられた。僕らに限界がくる前に」

雄二と翔子の様子に優子はため息を吐きながら、翔子を止めに入り、秀吉を抜かした明久を中心としたFクラス男子全員が雄二を殺すか殺さないかの間で葛藤している。

「……お前ら、今の状況でまだ追い討ちを……や、止める！？ 翔子！？ 割れ、割れるううう！？」

「……代表、坂本くんは浮気してないから、それくらいにしてあげなよ。だいたい、僕は代表から坂本くんを奪える自信はないよ」

「……愛子じゃないと言う事は浮気相手は黒須？」

雄二の頭が翔子に締め付けられる様子に愛子は苦笑いを浮かべるが翔子の発言はズレており、

「お前ら、あの異端者を許すな！！ 霧島さんだけでは飽きたらず、僕らのミサちゃんにまで手を出したあいつの首を取れ！！」

「だから、黒須は男だ！！」

Fクラスの嫉妬の叫びに翔子の手が少し緩むと雄二は叫びながら逃

げ出し、

「えーと、坂本さんと吉井くんは召喚大会に間に合うのかな？」

「……あたしは知らないわよ」

雄二が逃げる様子に愛子は苦笑いを浮かべ、優子はため息を吐く。



## 第88問

「……ちくしょう。今日は厄日だ」

「……言っな」

伐と美春の前に対戦相手であり、先ほどから、Fクラスに嫌がらせをするがことごとく返り討ちにあっている3年生の夏川、常村ペアが紹介されている。

「もう1組は2年D組、清水 美春と2年F組の黒須 伐ペア。すでにお馴染みになった2年F組の喫茶店の制服であるチャイナ服で登場です」

伐と美春が壇上にあがると『ミサ』を応援する野太い声が聞こえる。

「……何だ？」

「……あんな声援を受けて気持ち悪く無いんですか？」

伐への声援に美春は不愉快そうに伐に言うと、

「別に、あの声より、顔面ゴミクズの汚物の前に立っている方が気分が悪い」

「そうですね」

伐は今から戦う3年ペアの顔を見て言い、美春も同意する。

「おい。てめえら、2年の分際で何を言ってるんだ？」

「あんまり、調子にのるんじゃない」

夏川と常村は伐と美春の言葉に額に青筋を浮かべて高圧的に言うが、

「しゃべんな。息がくせえ」

「うるさいですわ。この豚野郎共」

伐と美春に効果があるわけではない。

「てめえ、年下が生意気言ってるじゃねえ……お前、さっきの女！  
？」

「顔が産業廃棄物なうえに目まで節穴か？」

「救いようがないですわ」

夏川は伐を睨みつけると伐が先ほど男子生徒に追いかけられる原因を作った本人だと気づくが伐は今更かよとため息を吐く。

「女装趣味の変態が、良くも俺達をはめやがったな」

「勘違いするなよ。ハゲ。需要があるから着てるんだ。お前ら顔面産業廃棄物と違って、俺は見た目が極上だからな」

夏川は伐に向かい女装趣味の変態と言うが、伐は2人と違って似合うから問題ないと言うと会場の『ミサファン』から歓声があがる。

「……自分で言うのもどうかと思いますけど」

「事実だろ」

美春は伐の言葉にジト目で言うが伐は表情を変える事なく言い切る。

「それで、さつきまで、女性物の下着を被って喜んでいた真性の変態な先輩達。さつたと始めましょうか？ Aクラスなのにこんな見せ物な大会に出るって事はただの目立ちがり屋のザコを相手にして…… ああ、あれか？ 顔面産業廃棄物だから、女にモテないし、とうとう男に走ったわけだな。美春、あいつら、男2人で如月ハイランドに行くみたいだ」

「止めてください！？ そんな気持ちの悪い事を言わないでください！！」

伐は試合を始めようと言う割には夏川と常村を罵倒し続けている。

「そんなわけあるか！？」

「なら、チケットを餌に女を釣るつもりか？ 止めるよ。お前らに話しかけられたら、その有害な口臭の臭いが染み着いちまうだろ」

伐はそう言う和美春を後ろに下げる。

「黒須くん？」

「必要ないから、下がってるよ。お前も女だしな。召喚獣でもあんな汚物に触れたくないだろ。それにこんなところに出てくる3年の落ちこぼれは俺だけで十分だからな」

美春は伐の行動に首を傾げると伐は美春は戦わなくて良いとまで言う。

「てめえ、なめやがつて、良いこと教えてやるよ。俺達は理数系が得意なんだよ。そして今回は数学勝負。バカなFクラスが勝てるわけないだろ」

夏川と常村は伐の行動にはらわたが煮えくり返っているようで叫ぶように召喚獣を呼び出すと2人の召喚獣は300点台を叩き出している。

「黒須くん、美春も召喚した方が良くないですか？」

「必要ねえよ。先生、俺が1人でやる。俺が負けたら、終わりにしてくれ」

美春は自分も召喚すると言うが伐は必要ないと言うと、

「……………サモン試獣召喚」

自分の召喚獣を呼び出す。

「く、黒須くん、その点数は何なんですか？」

「見たとおりだ。今回はお子ちゃまと巨乳娘から聞いたヤマが大当たりだったからな」

伐の召喚獣の点数は400点を超えており、腕輪を装備している。

「すみませんね。俺、Fクラスなんでこれくらいしか点数取れませんでした。3年のAクラスで理数系が得意何だから……あれ。ずいぶん点数が低いな。ご自慢の頭もたいした事はないな」

伐は夏川と常村の点数を鼻で笑うと、

「それじゃあ、始めましょう」

挑発的な笑みを浮かべる。

「ふざけるな!!」

夏川と常村は2対1と言う有利さを持つて伐に攻撃を仕掛けるが、

「な、何？ 夏川、お前、何をするんだ!？」

「し、知らねえよ。召喚獣が言うことを聞かねえんだ」

伐の召喚獣の腕輪が光り、伐の数学での腕輪の能力である『魅了』が発動して2人の召喚獣は同士討ちを始め出す。

「おいおい。俺達より、1年多く、召喚獣を扱ってるのにまともに操作もできねえのかよ」

伐は2人をバカにするようにため息を吐き、

「見苦しいから、さっさと消えろ」

伐は同士討ちをしている2体の召喚獣の心臓に深々とナイフを突き刺すと、

「試合終了。勝者、清水美春、黒須伐」

伐と美春の勝利が宣言される。

## 第88問（後書き）

どうも、作者です。

対常夏コンビ戦。

罵倒のみ。（爆笑）

ミサちゃん大人気だな。

そして、難なく常夏コンビを撃破。

……戦闘描写はなし。

苦手何です。誰か教えてください。（苦笑）

## 第89問

「……何だ？」

「腕輪持っていたんですか？」

舞台からおりると美春は伐の召喚獣が腕輪持ちだと言う事が意外だったようで伐に聞く。

「まあな。破壊力はない能力だけど、それなりに使える」

「……本当に頭が良かったんだ」

「何だ？ 屈辱か？」

美春がぶつぶつとつぶやいているのを見て、伐は美春をからかうように言う。

「……別にそう言うわけじゃありませんわ」

「そうか。さてと、俺は霧島とダーリンの試合を見てくけど、お前はどうする？」

美春は伐から視線を逸らしながら言うと、伐はそれ以上は何も言わずに自分はもう1つの準決勝を見ていくと言う。

「ここまで来たら優勝したいですから、美春も見ていきますわ」

「そうか」



「ちょっと待ちなさい。1人で行かないでください!？」

美春は伐と一緒にいると言うと伐は歩き出し、美春は慌てて伐の後を追いかける。

「勝ったみたいだね」

「当然だ。あの変態コンビと俺じゃ、格が違うんだよ」

舞台から客席に移動しようとすると思久と雄二が立っており、思久は伐の勝利を確認すると伐はくだらない事を聞くなと言う。

「なら、次は俺達の番だな」

「しくじるなよ。嫁にチケットを渡すわけには行かないんだろ」

「ああ。翔子にチケットを渡すわけにはいかねえんだ。俺の未来のために……ウエディング体験なんか行かされたら、体験なんかじゃなく、本番にされちまう。それだけは絶対に阻止しないと……」

雄二は試合前に気合いを入れているように見えるが見るからに翔子の影に怯えており、途中から伐の事などどうでも良くなったようぶつぶつとつぶやき始める。

「雄二は大丈夫かな? あんな調子で霧島さんと木下さんに勝てるのかな?」

「心配か?」

「だってさ。雄二、霧島さんが関わってくると何か失敗が多くなるだろ」

明久は雄二の様子に苦笑いを浮かべると、

「それをカバーするのがダーリンだろ」

「豚野郎がいくらやってもAクラスの2人に勝てるわけ無いじゃないですか。無様に負けてしまいなさい」

伐は興味なさそうに言い、美春は明久などゴミクズのように負けてしまえと言う。

「あはは。やっぱり、僕は清水さんに嫌われてるんだ」

「当たり前です。お姉さまに近づく豚野郎は全て美春のテキデス。ブタヤロウガミハルニキヤスクコエヲカケルナ」

「怖っ！？ 黒須君、清水さんが怖いよ！！」

明久は苦笑いを浮かべながら美春に言う。美春は明久と話している途中で明久を美波に近づく害虫と再認識したようで背後からまがまがしい殺意がはみ出してくる。

「……騒ぎを起こすな」

「……っ！？」

明久に襲いかかろうとしている美春を伐は表情を変える事なく抱き寄せると耳元でささやくと美春からはみ出していた殺意は四散する。

「行くぞ。ダーリン、霧島の作戦に何かあったら頼むぞ」

「うん。やれるだけやるよ」

伐は明久に言うのと美春を連れて歩いて行く。

「しかし、黒須は完全に清水を飼い慣らしてるな」

「そうだね。黒須君がいれば、僕は命を狙われる危険が少なくなるから助かるよ」

明久と雄二は伐に引きずられて行く美春を見て言うと、

「気をつけるよ。明久、今は島田だけに反応するけどな。そのうち、清水は黒須相手でも殺気を出すようになるからな」

「どついう事？」

「間違つても、黒須のところに嫁に行くとか言ったって事だ」

雄二は美春の伐への想いが恋愛になりかけている事を危惧するが、明久はまったく気づく様子はない。

「明久、時間だ。行くぞ」

「うん」

雄二は明久が首を傾げている姿にため息を吐くと司会者から名前を呼ばれ、2人は舞台にあがる。



## 第90問

「……あいつらは何がやりたかったんだ？」

「美春には想像もつきません」

明久達の準決勝が始まるとすぐに秀吉が舞台のしたで縛られており、康太はシャッターが擦り切れるくらいの勢いで秀吉の写真を写している。

「……木下と姉を入れ替える作戦？ 無理に決まってるだろ」

「バカですわ」

舞台から聞こえる明久と雄二の作戦に伐はため息を吐き、美春が完全に呆れる。

「決勝の相手が決まりましたね」

「いや、そう思うのは速いな」

美春はこの試合は見る価値がないと立ち上がるが、伐はそのまま試合を見るつもりである。

「なぜですか？ 作戦が破れた今あの豚野郎どもが勝てる相手ではないと思いますけど」

「頭の良し悪しってのは成績じゃねえんだよ。状況に応じて対応できるヤツが賢いって言うんだ。あの2人はその力に長けてる」

美春は伐の行動がわからないと首を傾げると伐は雄二だけではなく、明久の事も高く評価しているようで冷静に言う。

「意味がわかりませんわ」

「別にわかる必要はねえよ。お前が言う頭の良し悪しと俺の言う頭の良し悪しは別のものだ。ただ、あいつらと戦う気になったら頭の片隅にでも置いとけ。バカ相手と舐めてかかると恥をかく。どっかの小物みたいにな」

伐は自分や明久達を舐めている竹原（小物）の顔を思い浮かべて楽しそうに笑うと、

「まあ、見る気がないなら、店の手伝いでもしてろよ」

美春に喫茶店に帰るように言う。

「そこまで言うなら、見ます。ですけど、美春にはあの豚野郎どもが勝てるとは思えません」

「なら、賭けるか？ 俺はあのバカ2人の勝利、お前は霧島嫁と木下姉の勝利。負けた方が、勝った方の言う事を聞く。お前が勝てば晴れて自由の身だ」

美春は伐の言葉通りにはならないと言うと伐の隣に座り直し、伐はそんな美春を見て挑発する。

「良いでしょう。その賭けのりますわ。あなたに受けた屈辱の数々をはらさせて貰います」

「ああ。負けたら、何でも言う事を聞いてやるよ」

美春は性格なのか、伐の挑発にあっさり引っかかり、伐は興味なさそうに言うと、

「ダーリン、次はどんな手だ？」

舞台の上の明久に視線を送る。

「雄二、今から僕が言う言葉を霧島さんに向かって言って欲しい」

「何か思いついたのか？」

「うん」

明久は雄二に何か耳打ちをすると雄二は翔子に向かいプロポーズらしき言葉を言いかけるが、

「てめえ、あきつ！？」

言葉の意味に気づき明久を怒鳴りつけようとした時、明久の拳が雄二の鳩尾に吸い込まれていき、雄二は気を失うと、

「……秀吉、お願い」

「……わかったのじゃ」

明久は舞台下の秀吉に何かを頼むと秀吉は雄二の声色を真似て翔子にプロポーズをすると翔子は無条件で負けを認める。

「ちょっと、代表！？ 何を言ってるの」

「木下さん、後は君だけだよ」

優子は翔子のように声をあげると明久は優子に向き合う。

「吉井くん、いくら代表を無力化したとは言え。吉井くんがあたしに勝てるわけ……！？」

「……………加速」

優子は明久にバカにするなどと言いかけた時、一陣の風が吹き、優子の召喚獣が消える。

「なるほど、そのための保健体育か」

「何？ 何があっただんですか？」

伐は舞台の上にした事には検討がついたようで頬を緩ませるが、美春は何が起きたのかわからない。

「ちょっと、吉井くん。今のは土……」

「霧島さん、僕達の勝ちで良いよね？」

「……………雄二と明久の勝ちで良い」

優子は自分の召喚獣が負けた理由に気づき声をあげるが、途中で明久がその声を遮り、翔子に聞くと彼女は負けを認め、



「勝者。吉井明久、坂本雄二」

明久と雄二の勝利が告げられる。

「賭けは俺の勝ちだな」

「ちょっと待ってください。今のは無効ですわ」

「異議は認めない。何をするかな」

美春は賭けは無効だと言うが伐がそれを認める事はない。

第90問（後書き）

どうも、作者です。

美春、深みにはまる。（爆笑）

彼女はうかつだと思っのは俺だけでしょうか？

清涼祭を終えても美春は伐から逃げられません。（苦笑）

## 第91問

「勝ったな」

「危なかったけどね」

伐は放心状態の美春を引きずりながら、舞台からおりてきた明久と雄二に声をかける。

「まあ。木下と姉を入れ替えるなんてむちゃな作戦より、良かったんじゃないか？」

「まあね」

「……明久、黒須」

伐は明久の作戦を誉めると明久が照れくさそうな表情をした後ろから、血の涙を流した雄二が2人を呼ぶ。

「雄二、どうかしたの？」

「何かあったか？」

「お前らは俺に何か言う事はないのか？」

雄二の言葉に2人は少し考えると、

「婚約、おめでとう。結婚式に呼んでくれるなら、霧島さん側で呼んでね。雄二の友人と呼ばれるのは恥ずかしいから」

「祝い金やなんだと面倒だからな。間違っても俺に招待状は送るなよ」

当然、2人は雄二と翔子の婚約を祝う。

「違うわ！？ どうしてくれるんだよ！！ あれにウェディング体験まで、体験じゃなく、本番にされちまうぞ！！」

「良いだろ。本番で式場のバイトもした事があるが、大金だぞ。籍を入れるのはお前の誕生日でも済ませておけば良いだろ」

「まったく、雄二程度の男が霧島さんが相手で不足だって言うの？ お前、何様だ！！」

雄二は2人の反応に声を荒げるが伐は心底どうでも良さそうに言い、明久は雄二の幸せが気に入らないように雄二の胸ぐらをつかみ、

「あん？ やるのかバカ久」

「あん？ 上等だ。バカ雄二。表出ろや」

睨み合いを始める。

「バカな事をやってないで、そろそろ行くぞ。売上が俺の取り分なんだ。アキちゃんには過労死するくらいまで働いて貰わないといけない」

「アキちゃん？」

伐はため息を吐き言々と明久は伐の口から出た言葉に顔が引きつる。

「黒須、アキちゃんってのは何だ？」

「見たままだ。ちなみに命名はDクラスの玉野だ。気をつける。あいつはある意味、お前の嫁より、盲目的だ。こいつが引いてたからな」

伐の言葉で明久と雄二の視線は放心状態の美春に向けられ、

「……清水さん以上の人がいるんだ」

「……何なんだ。この学園は？」

美春以上の人間の情報に表情は凍りつく。

「さあな。それより、戻るぞ。明日の決勝進出者が3名いるんだ。宣伝効果があるから、客が増えてるだろ」

「そうだな。秀吉も先に戻っているし、戻るか」

明久と雄二の疑問に答える事なく、言々と雄二は頷くが、

「黒須君、そう言えば、清水さんがずいぶんと大人しいけど、どうかしたの？」

明久は先ほどから何も話さない美春の様子を見て首を傾げる。

「ん？ さっき、ちょっとした賭けをしてな。美春は本格的に俺の肉奴隷に決定した」

「してませんわ!？」

「おっ、反応した」

伐は美春との賭けに勝ったと言うと美春は伐の言い方を全力で否定し、雄二は美春の様子に苦笑いを浮かべる。

「また、弱みを握ったんだ」

「弱みなんか握ってねえよ。今回は単純な賭けだ。決勝の相手がどうなるかってな」

「……どうして、こんな豚野郎どもがAクラスの2人相手に勝てるのですか」

明久は苦笑いを浮かべながら言う「と美春はぶつぶつと言いながら明久と雄二に殺意を込めた視線を送る。

「こわっ!？　ねえ。清水さん、僕ら悪くないよね？　僕らは僕らのやり方で勝利を勝ち取ったんだから、恨まれる筋合いはないよ」

「ミハルニハナシカケルナ。ブタヤロウ、オマエノヨウナブタヤロウガイナケレバハレテミハルハジユウノミダッタノニヤハリ、キサマノヨウナブタヤロウハコロシタホウガイインダ。コロス。コロス。コロス」

明久は美春の視線に自分は悪くないと言うが、その一言が美春に火を点け、彼女の背後からはまがましい殺意が溢れ出す。

「良かったな。清水、まだ、黒須のそばに入れるぞ」

「！？ な、何を言ってるんですか？ 豚野郎！！」

その様子に雄二は楽しそうに笑いながら美春に『伐のそばに入れる』  
と言うと美春から漏れていた殺意は一気に四散し、美春は全力で雄  
二の言葉を否定するが、

「さっさと帰るぞ」

「ちょっと！？ 黒須君、美春はあの豚野郎に言う事が」

伐はため息を吐くと美春を引きずって歩き出し、雄二と明久も2人  
の後を追いかけるように歩き出す。

## 第92問

「歩きますから、引きずらないでください」

「……ああ」

美春は伐に引きずられるのが恥ずかしかったようで声をあげると伐は興味なさそうに手の力を緩める。

「黒須にかかれば清水も形無しだな」

「そうだね」

明久と雄二は自由になり、ホツとしている美春を見て苦笑いを浮かべて言うつと、

「くだらない事を言ってますと殺します。豚野郎ども」

美春からは2人に向けて明らかな殺意が飛ぶ。

「んな事言つたつて、お前が黒須に逆らえないのは本当の事だろ？  
黒須の前じゃ、島田を追いかけて回していた時の勢いもねえしな」

「何を言ってるのですか？ この豚野郎。良いですか。美春とお姉さまは愛し合っているのです。愛し合う2人が求め合うのは当然の事ですわ。美春はお姉さま意外には興味などありません」

雄二は美春をからかうように言うと、美春は雄二の言葉を鼻で笑うが、



「じゃあ、何で、黒須だけは『黒須君』何だ？」

「！？　そ、それは……」

雄二は美春が伐だけを『豚野郎』と呼ばない事を言つと美春の表情は変わる。

「ダーリン、俺達は先に戻るか？　……ん？」

「黒須君、どうかしたの？」

「電話だな」

雄二と美春のやりとりなど伐は興味がなく、2人を置いて先に帰ろうとした時、伐の携帯電話が鳴る。

「……康太、どうした？」

「……喫茶店が占拠された」

伐は電話に出ると康太から、喫茶店が占拠されたと知らされる。

「……そうか」

「ちょっと、黒須君、そうかじゃないよ。ムツツリーニ、どういう事？」

伐は頷くが明久は意味がわからずに声をあげる。

「…………… 伐が追い払ったチンピラが仲間を連れて帰ってきた。姫路、島田姉妹、秀吉、工藤。その他、クラスメートが捕まっている」

「姫路さん達が！？ 黒須君、どうしよう？」

「…………… 痛めつけ足りなかったか？」

康太から捕まっているのが女性陣だと知らされると明久は慌てて声を上げるが、伐は落ち着いた様子でチンピラに情けをかけすぎたと言っている。

「ちょっと、黒須君、落ち着きすぎだよ」

「慌てたって何も変わんねえ……………」

「おい！？ 清水」

「お姉さま、美春が行きますから、待っていてくださいね」

伐の落ち着いた様子に明久は声をあげると美春は伐が落ち着けと言う言葉を聞く事なく爆走して行き、

「お姉さま、美春が助けに参りました！！」

「み、美春！？」

「何だ？ この女？ 自分から捕まりにきたぞ」

「良いじゃねえか、ノラ猫がくるまでの楽しみが増えたんだからな」

「お姉さまを放しなさい。豚野郎ども!!」

電話の先からは美春の威勢の良い声が響く。

「……まったく、助けないといけない人間が増えたじゃねえか」

「えっ!? でも、清水さんなら大丈夫じゃないの?」

伐は美春の行動に舌打ちをするが明久は美春が人外化すれば大丈夫だと言おうとするが、

「言っただろ。殺気を出す人間の攻撃は単純でわかりやすい」

「……………伐、清水が捕まった」

伐がため息を吐いた時、康太が美春がチンピラに捕まったと言う。

「……………最悪だな」

「まあな。女どもが食われる前に助けてやらないといけないよな」

「当たり前だよ。姫路さん達に何かあったらどうするんだよ」

雄二は状況を悪くした美春の行動にため息を吐くと伐はあまり興味なさそうに言う。明久は今すぐにでも駆け出す勢いで叫ぶ。

「……………落ち着け、人質を増やすような真似は止める」

「そつだな」

「だけど、今も姫路さんや美波達は怖い思いをしてるんだよ!」

伐と雄二は落ち着いているが明久は声をあげる。

「とりあえず、康太。チンピラの死角から男どもを縛り付けている縄をほどけ。後はチンピラが女どもにちよっかいをかけたらヤツらは勝手にチンピラに襲いかかる」

「……その光景が目には浮かぶな」

「……本当だね」

伐は康太に指示を出すと、

「ほら、俺達も行くぞ」

1人で教室に向かい歩き出す。

### 第93問（前書き）

総合評価1000ポイント超えました。1ポイントだけ。（苦笑）

お気に入りを入りを1人に消されたら終わり。

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。

### 第93問

「……康太、どうなってる？」

「……………今のところは伐の到着を待っているだけだ」

「そうか」

伐は教室の前に着くと繋げたままの携帯電話で教室の中に隠れている康太と連絡を取る。

「……………何割捕まったフリをしてるんだ？」

「……………姫路、島田姉妹、工藤、清水、秀吉の女子以外の縄は解いた」

「……………流石、仕事が早い。後はチンピラが木下の尻でも触れば勝手に進む」

伐は教室に入るタイミングを予想すると、

「……………他に女子がいるのに秀吉にいくか？」

「木下が1番、色っぽいだろ」

雄二は伐の言葉にため息を吐くが、伐は当たり前前の事を言うなど言う。

『……………しかし、ノラ猫のヤツはいつまで俺達を待たせる気だ？ ガ

キのクセに生意気なヤツだ』

『まあ、それも今日までだろ。大人の恐ろしさってヤツを教えてやるよ』

チンピラ達は教室で高笑いをあげていると、

『ん？ そう言えば、お前、この間、ノラ猫と一緒にいた娘だな』

『何？ へえ。ノラ猫はこんな貧相なのが良いのかよ。俺はこっちの巨乳娘の方が良いな』

『そう言うなよ。ノラ猫のツレだぞ。あいつの無表情な顔が歪むのがみたいだろ？』

チンピラの1人が愛子に気づき、伐と愛子の関係を勘違いしているようで下品な笑みを浮かべると愛子との距離を縮めて行く。

「……………伐、工藤が危ない」

「そうか」

康太は愛子にチンピラが襲いかかろうとするのを見て、伐に連絡をいれるが伐は特に行動する気はないように見える。

「黒須、そうかじゃないだろ」

「そつだよ」

「……………慌てるな。康太、中の男どもにこう言え。『チンピラを捕ま

えれば女の子からの評価が上がるだろうな』と」

「……………了解」

伐は康太に指示を出すと、教室内からFクラス男子の魂の叫びが聞こえる。

「相変わらず、単純だな」

「……………ああ」

伐は教室内から聞こえるクラスメートの叫び声に呆れたように言い、雄二が隣で頷くなか、

「お前ら、よくも……!!」

明久が叫び声をあげながら教室に入ってくる。

「おい。明久!？」

「やれやれ。王子様の登場はまだ早いだろ」

明久の行動に雄二は驚きの声をあげるが、伐はため息を吐きながら教室に入ろうとすると、

「霧島、行くぞ。俺達は王子様をお姫様のところまで連れて行かないといけないんだからな」

「おいおい。待たれてるのは明久だけじゃないだろ。少なくともお前の助けを待っているお姫様が2人いるんじゃないか?」



だるそうに雄二に向かい言つと雄二は苦笑いを浮かべながら伐に言うが、

「知らねえし、興味もねえよ。さつさと行くぞ。場慣れしてるヤツがいたら簡単に鎮圧されちまうからな」

伐は興味がなさそうに教室に入って行き、

「やれやれ」

雄二は苦笑いを浮かべたまま伐を追いかける。

「……やれやれ。チンピラがこんなところで何をやってるんだ？ さつき、見逃してやったんだ。恥をさらしにくるなよ」

『……ノラ猫』

伐はチンピラの1人を見据えて興味なさそうに言つとチンピラは忌々しく伐を睨みつける。

「……お前らのせいであの小物をぶちのめす算段が外れちまったじやねえかよ。うさははらさせて貰うぞ」

『ノラ猫おおー!!』

伐のチンピラなど相手ではないと言つ態度にチンピラは伐に殴りかかるが、伐はチンピラの拳を平然と受け止め、

「だつせえな。組の小間使いとは言え、学生相手にぼろ負けで恥さ

らし、最近はメンツを大切にするからな。外国に行く事になるんだ  
ろうな。パスポートは持つてるか？」

伐はチンピラの腕を捻りながら言うと、

「……ネジ切れるか？　ダーリンの前に練習しとくのも良いな」

表情を変える事なく、恐ろしい事を言う。

「……なんか余裕そうだね」

「……そうじゃのう」

「……」

チンピラ相手に平然と振る舞う伐の様子に愛子と秀吉は安心したのか苦笑いを浮かべ、美春は伐の姿を直視できないように顔で顔を赤くしながら伐から視線を逸らす。

### 第93問（後書き）

どうも、作者です。

前書きにも書きましたが総合評価1000ポイント超え

やっぱり、記念は必要なのかな？

仮に書くなら……

座談会？……無いな。伐は出てこない。

作者の他の作品とのコラボ？……無理だな。理音とも深秋とも絶対に噛み合わない。

他の作者さんとのコラボ？……いや、サドでよくやってるからあまりお徳感がない。

まあ、気が向いたらと言う事をお願いします。（苦笑）

## 第94問（前書き）

先日の総合評価1000越えに続き、

ユニーク60000

PV600000

を越えました。ありがとうございます。

引き続き頑張りますのでよろしくお願いします。

## 第94問

『ノラ猫、それまでだ。それ以上、暴れるとお前の大切な娘の顔に一生消えないキズが付く事になるぜ』

「……………!？」

チンピラの1人は愛子を伐の大切な女性と決めつけているようで愛子の頬にナイフを軽く当てながら言うと、伐の表情は誰も気づかない程度に小さく歪む。

『……………へえ、ノラ猫、今、お前のその無表情な顔が少しだけ歪んだな』

周りの誰も気づかない程度だったが愛子を人質に取っているチンピラだけは伐の微かな変化に気づいたようでゲスな笑みを浮かべると、

『そうだな。今の状況はあの時と似すぎているからな。まあ、今回のお前は捕らわれの身じゃないけどな』

伐の過去を知っているようで高笑いをあげる。

「……………」

『おいおい。こんなに舞台が整っているのに無表情なままかよ。俺はお前の顔が苦痛に歪む姿がみたいんだよ。あの時のお前の顔は見物だったぜ。大切な黒猫がお前みたいなガキを庇って死んだあの時みたく、泣き叫べよ。そうすれば俺達はお前だけは見逃してやるからさ』

チンピラは伐を挑発するように笑う。

「……黙れよ」

『あん？ 何か言ったか？ 泣く事しかできない子猫ちゃん』

伐はその時の事を思い出しているのか、口から出る言葉は今の伐とは違い酷く弱々しい。

『……あん？ 聞こえねえよ。何て言ったんだ？』

「……伐、聞くな。お前は他人を見下しているくらいがちょうど良い」

『！？』

チンピラは伐を挑発する事が楽しかったようで伐にナイフを向けると、康太はそのスキを見逃さずにチンピラの後ろから灰皿でチンピラの頭を叩きつける。

『……クソガキ、てめえ、殺してやる！！』

「死ぬのはてめえだ」

チンピラは康太の行動に腹を立てて康太にナイフを向けた時、伐は康太の言葉に冷静さを取り戻したようでいつもの冷たい笑みを浮かべて、チンピラを蹴り飛ばす。

「……伐。大丈夫か？」

「当たり前だ。康太、ダーリン、お前らはそいつらの縄を解いたらここから出ていけ」

康太は伐がいつも通りか確認すると伐は表情を変える事なく言い切る。

「黒須くん」

「……さつさと行けよ。邪魔なんだよ」

愛子はチンピラの言葉が伐の古傷をえぐっているため、心配そうに声をかけるが、伐の言葉は冷たい。

『てめえ、ノラ猫』

「うるせえな。くせえ息を出すんじゃないよ」

チンピラは伐に向かいナイフを向けて、伐に殺意を込めた視線を向けるが、伐はナイフを向けられている事など興味がなさそうに気だるそうに言う。

『黒猫みたいに這いつくばって死ねや！！』

「……てめえみたいなゲスがあの人を語るんじゃないよ」

チンピラは伐に切りかかるが伐は無表情なままチンピラのナイフの刃を右手でつかむ。

「黒須君！？」

「叫ぶな。みつともねえ」

明久は伐の右手から流れ出す赤い液体を見て声をあげるが伐は無表情のまま言つと、

「……悪いな。あんたらが誰と繋がっているか。吐いて貰う。もちろん、もう目星は付いてるんだけどな」

伐はチンピラの鳩尾に膝を突き刺し、倒れ込みそうなチンピラの耳元で言う。

『……ノラ猫』

「お前らは入っては行けないノラ猫のしみに足を踏み入れた」

伐を睨みつけるチンピラから伐は体を放すとチンピラは腹を押さえて膝を付くと伐は冷たい笑みを浮かべて蹴りやすくなったチンピラの頭を蹴る。

「……容赦ねえな」

「まさか、悪鬼羅刹に言われるとはな」

伐の様子を見て他のチンピラを殴りつけている雄二がため息を吐くと伐は表情を変える事なく言い、

「さつさと片付けて店を直さないと。明日来る姫路の父親に見せられるくらいまで直さないと」



「……つたく、めんどくせえな」

2人でチンピラに押されているクラスメート達を助けて行く。

「……あの2人ってあんなに強かったんだ」

「ちょっと、反則だよな」

明久は伐と雄二の様子に苦笑いを浮かべると教室を覗き込んだ愛子は苦笑いを浮かべる。

## 第94問（後書き）

どうも、作者です。

少しだけ見えたノラ猫の過去。

ノラ猫と黒猫の關係に。

キズをえぐられたノラ猫の復讐は？

そして、ノラ猫の過去を聞いた愛子はどうするんでしょうか？（悪笑）

## 第95問

「……黒須、坂本、この状況を説明して貰おうか？」

「げっ！？ 鉄人」

伐と雄二がチンピラ全てを捕らえると騒ぎを聞きつけた西村教諭が教室に現れ、額に青筋を立てながら、目立つように暴れていた伐と雄二に声をかけると雄二は西村教諭から逃げ出そうとするが、

「霧島、逃げる必要性はない。元々、悪いのはこいつらを裏で学園に引き入れた小物の教頭だ」

伐は雄二の首を捕まえると西村教諭だけではなく、野次馬達にも聞こえるように言う。

「お、おい。黒須、言って良いのか？」

「ああ。ここまで派手に騒いだんだ。小物がとぼけてもこいつと教頭が密会していた現場の証拠もあるしな」

雄二は伐の言葉に慌てるが、伐は康太がチンピラの1人と竹原が密会していた証拠をつかんでいるため、表情を変える事なく言うと、

「西村先生、霧島、悪いけど、俺は今からこのクズどもを尋問するから、店の修繕は手伝えない」

チンピラの前に移動して携帯電話でどこかに電話をかけようとする。

『教頭？ 竹原？ 知らねえな。俺達はノラ猫、お前をつぶしたいからここで騒いだ！？』

「しゃべんな。息がくせえ。今から俺の許可なくしゃべったらヤツは膝の皿をキレイに割ってやる」

チンピラの1人は竹原とは関係ないと言おうとするが伐は表情を変え、話そうとしたチンピラの膝を勢い良く踏みつける。

「黒須！？ お前、何て事を！？」

「悪いな。鉄人、今回、俺は警察を介入させるつもりはねえ。こいつらはあの人を侮辱した。けしてふれてはいけないものを平気な面をして傷つけた」

伐のいきなりの行動に西村教諭は驚きの声をあげるが、伐は冷たい笑みを浮かべて言うと、

「悪いな。霧島」

たった一言だけ、雄二に謝る。

「……バカか。お前は、違うか。お前もやっぱりFクラスだ」

雄二は伐の言葉に呆れたようなため息を吐くと、

「頭にきてんのはお前だけじゃねえんだよ。俺らは俺なりに学園祭を頑張ってた。それを教頭1人が自分だけが儲けるためにつぶされたんじゃ、納得行くわけがねえだろ」

野次馬全員に聞こえるように叫ぶ。

「待つのだじゃ。雄二、黒須、それはいったいどう言う事じゃ」

「なんの事よ!？」

秀吉と美波は意味がわからずに伐と雄二に向かい聞くと野次馬全員がざわざわとしながらも伐と雄二の次の言葉を待っている。

「……黒須、坂本、お前達は何を言っているんだ？」

「簡単な事だ。うちの学園に生徒を取られた私立や召喚システムが欲しい人間が名誉欲の強い小物を使って学園の評判を落とそうとした。ばばあは科学者としてそれなりに名前も知れてるしな。評判が落ちれば科学者に教育は無理だとか難癖を撒けばさらに評判は落ちて行き、文月は終わり、もしくはばばあの学園長降格。ばばあがいなくなれば召喚システムの概要は？」

「……なるほど」

西村教諭は伐と雄二が何を知っているか話せと言うと伐は隠す事はないと思っていないのか、隠す事なく話すと西村教諭は頷き、

「……竹原教頭に話を聞く必要があるな」

竹原に確認しに行くと言う。

「とぼけるに決まってるだろ」

「それでもだ。それが本当だとしたら、お前達が処罰対象になる必

要がなくなるわけだ。黒須、そいつらは警察に引き渡す。おかしな真似はするな」

伐は西村教諭の言葉を鼻で笑うが、西村教諭は伐に釘を刺す。

「あのなあ」

「黒須くん、西村先生に任せようよ」

「まったくだ。こんなヤツらのせいでお前にいなくなれると俺達は困るんだよ」

伐は西村教諭の言葉にため息を吐くが愛子と雄二が伐を引き止めると、

「……………鉄人、教頭とこいつらが密会していた証拠。伐、お前も持っている証拠を出せ」

康太は西村教諭に自分の持っている証拠を渡すと伐にも証拠を出せと言う。

「……………これを警察に渡すと俺は調べ損なんだが」

「……………良いから出せ。伐」

伐は康太の言葉にため息を吐くが康太は真っ直ぐと伐を見て言うところスレートや野次馬達の視線が伐に集まる。

「……………まったく、大損だ。売ればそれなりの収入になったはずなのによ」

伐はため息を吐くとUSBメモリーを西村教諭に投げつけると、

「確かに預かった。黒須、お前は学園長に話をしてこい」

「……パス」

西村教諭は伐に学園長に今の騒ぎを説明してこいと言うが伐は面倒だと言うと教室を出て行く。

## 第95問（後書き）

どうも、作者です。

教頭の企みだだ漏れ。（爆笑）

チンピラとの密会に、伐が調べ上げていた証拠。

教頭は召喚大会の結果をみる事なく、退場かな？（苦笑）

また、単独行動のノラ猫。

手は切れたまま。（爆笑）



## 第96問

(……ちつ。やっぱり、吸えねえよな)

伐は教室を出るとイラつきを抑えたため、タバコを吸える場所を探すが、先ほどと同様に学生である伐がタバコを吸えるような場所はなく、

(……今日はもう帰っても良いな)

家に帰ると決めた時、

「黒須？ お前、手をどうしたんだ？」

「……根本か。何でもねえよ。ちょっと切れたただけだ」

恭二が伐を見つけ、伐の手から流れ落ちる血液を見て言うが、伐はたいしたキズではないと思っているようで表情を変える事なく何でもないと言う。

「そんなわけないだろ。血の量から見れば結構なキズだろ」

「手のひらだから、派手に見えるだけだ。それより、根本、タバコ吸える場所はねえか？」

「知らねえよ。俺は吸わないからな」

伐はケガの治療より、イラつきを解消したいように恭二に聞くと恭二はため息を吐く。

「そうか。じゃあな。役立たず」

「おい。待て。タバコより、先に治療しろよ」

伐は恭二を役立たずと言い、歩き出すが恭二は伐の手をつかむと伐を引っ張って歩き出す。

「……何だ？ 俺の肢体が目的か？ 恩を売っても値引きはしねえぞ」

「いるか！？ 俺は女が好きだ！！」

「友香に振られてそっちに走ったんじゃないのか？」

「そんなわけないだろ！？」

伐はため息を吐きながら言うと、恭二は全力で否定する。

「なら、何が目的だ？ お前に俺を助けるメリットはないだろ」

「うるせえな。ケガでお前が役に立たなくなると俺がお前らFクラスをぶったおす面白みがなくなるんだよ」

「だから、言ってるだろ。こんなもんはケガのうちにも入んねえよ。だいたい、試召戦争なら勝手にやれ。俺は知らん」

恭二が伐を怒鳴りつけるが伐は自分のケガにも興味などなさそうに言った時、

「黒須くん、手をケガしたままどこを歩いているんだよ」

「……お子ちゃま」

愛子は伐のケガを心配していたようで伐を見つけて2人に近づいてくる。

「おい。お前、黒須の知り合いか？ こいつを保健室まで連れて行くのを手伝え」

「うん。ボクはもともと、黒須くんの治療をするために探してたんだし、問題ないよ」

恭二は愛子を見て言うと言うと愛子は恭二と一緒に伐を捕まえて保健室まで伐を連行しはじめ、

「……つたく、何なんだよ」

伐はため息を吐きながら、2人に引きずられて行く。

「お。工藤、黒須を見つけたみたいだな」

「……雄二、動かないで上手く貼れない」

「お待たせ。坂本くんに代表」

「げ、坂本」

2人が伐を保健室まで連れて行くと雄二もチンピラとのやり合いにところどころケガをしていたようで翔子に絆創膏を貼られており、

雄二の顔を見た恭二は苦虫を噛み潰したような表情を見ると、

「俺は行くからな」

愛子に伐を押し付けて保健室を出て行く。

「根本はどうしたんだ？」

「知らん。それより、ずいぶんと良い身分だな」

雄二は恭二の背中を見て伐に言うが伐は知らないと言った後、救急箱を漁りながら雄二が翔子に治療を受けているのを見て言う。

「し、仕方ないだろ。クラスのヤツらは修理とかが忙しいんだから」

「まあ、口では何とでも言えるよな」

「ちょっと、黒須くん、治療なら、ボクがやるから、座ってよ」

雄二は伐が思っているような事はないと言うが伐はどうでも良いと言った感じで片手で器用に治療を始め出すと愛子は伐に治療を変わると言うが、

「……………いらん」

伐は一言で断る。

「……………黒須は愛子に治療して貰うべき」

「必要な！？」

翔子は伐に向かい言うが、伐は必要ないと言おうとした時、翔子は伐にスタンガンを押し当てる。

「おい。翔子？」

「愛子、これで黒須の治療ができる」

「そ、そうかも知れないけど、代表、さすがにこれはないよ」

スタンガンの威力に気を失った伐と翔子のいきなりの行動に愛子と雄二は顔をひきつらせる。

第96問（後書き）

どうも、作者です。

まさかのスタンガン。（爆笑）

気を失った伐と愛子の実技に移るのか？

## 第97問

「……起きないな」

愛子は伐の治療を終わらせるが、伐は翔子からのスタンガンが思いの外効いているようで目を覚まさない。

「工藤、黒須の事を任せて良いか？」

「うん。大丈夫だよ」

雄二は自分の治療が終わるとしばらく、伐の治療を見ていたが先ほどから翔子に保健室のベッドに押し倒されそうになっているため、愛子に伐を任せて退却を始め、

「……雄二、逃がさない」

翔子は先ほど伐を眠らせたスタンガンを右手に雄二の後を追いかけて保健室を出て行く。

「代表……でも、それだけ、坂本くんの事が好きなんだろうな」

愛子は翔子の行動に苦笑いを浮かべた後、最近、知り合った事のないタイプであり、気になりかけている伐の寝顔を覗き込むと、

「こうやって、悪態吐かずに眠っているとかわいいのにな」

愛子は伐の顔を見て、自分の体温が上がって行くのを感じる。

(……このドキドキはやっぱ僕は黒須くんの事が好きなのかな?)

愛子は今まで感じた事のない自分の気持ちに戸惑っているようで真剣な表情をした時、

「……お子ちゃま。俺は霧島嫁に何をされたんだ？」

伐は目を覚まし、意識が途切れる前に翔子に何かされた事は覚えているようで頭を押さえながら、愛子に聞く。

「えーと、スタンガンを押し当てられたのかな？」

「……スタンガンか？……ちつ、やっぱり、霧島嫁みたいな霧島夫以外の相手に殺気が出ないタイプはやりにくいな」

愛子は翔子の行動を思い出して苦笑いを浮かべて言う。伐は舌打ちをした後、

「……悪かったな」

「えっ！？ う、うん」

伐はベッドから頭を押さえたまま、起き上がると愛子に一言だけ謝り、愛子は今まで伐から聞いた事のない言葉に驚きを隠せないでいる。

「……俺は帰るぞ。お前は自分のクラスに戻れ」

「う、うん？……って、帰ったらダメだよ。まだ、下校時間まで時間があるよ」



伐は帰ろうとするが、愛子は慌てて伐の手をつかむ。

「……なんだ？」

「なんだ？ じゃないよ。まだ、帰ったらダメだよ。さっきの騒ぎでFクラスの教室はめちゃくちゃなんだよ。手伝わないと」

愛子は伐に向かい帰らないでFクラスの修理を手伝えと言うが、

「……めんどくせえから、パスだ。だいたい、俺は肉体労働には向いてねえんだよ。そう言うのはバカに任せれば良いんだよ」

伐はやる気などないと言う。

「あのさ。あの騒ぎって、黒須くんが原因なんじゃないの。それならさ」

「勘違いするな。小物な竹原の浅はかな策略だ。俺は関係ねえよ」

愛子はチンピラと伐のやりとりをそばで聞いていたせいか、伐にクラスメートに謝った方が良いと言うが、伐は竹原が小物のせいだと言いつ切る。

「それとも、俺を引き止めて食われないのか？」

「ちょっと、いきなり何をするの!？」

伐はしつこく言う愛子をベッドの上に押し倒して言うと愛子はいきなりの伐の行動に慌てるが、

「……いろいろとストレスが溜まる事ばかりだったからな。お前で解消するか」

伐は愛子の胸に手を伸ばそうとした時、

「あなたは何をしているんですか!？」

雄二から伐の事を聞いたのか保健室を訪れ、伐が愛子に襲いかかっているのを見て声を上げるが、

「……胸は小さいが感度は悪くないな」

「ダ、ダメだよ!？ が、学校でなんて!？」

伐は止まるわけなく、愛子の少し寂しい胸を揉み、愛子は顔を真っ赤にしている。

「美春の話を聞きなさい!！」

「……なんだよ。邪魔するな。それともお前も混ざりたいのか？俺は別に2人相手でも構わないぞ」

美春は伐が愛子を襲っているベッドに駆け寄り、伐の手をつかむと、伐は表情を変える事なく言う。

「そんなわけないでしょ!？ 変な事を言わないでください!？」

「お前の意見が通るわけないだろ」

美春は全力で否定するが、伐は美春もベッドの中に引きずり込む。

「……えーと、僕、初めてだから、優しくしてね」

「流されてはいけませんわ。美春の初めてはお姉さまと決めているんです!？」

愛子は流されかけるが美春はジタバタと逃げ出そうとしているが、伐は気にする事なく、2人を美味しくいただくとした時、

「……伐、あんた、学園内で何をする気だい？」

「……ばばあ。邪魔するな」

学園長が保健室に入ってきて、伐を止める。

「学園内でそんな事をしたら困るんだよ。タバコ吸わせてやるから、学園長室まできな。竹原の件で話があるから、坂本と吉井、他にも話を聞きたいヤツを連れてきな。これはあたしからの命令だ」

「……ちっ。仕方ねえな」

学園長は伐に明久達を連れて学園長室にくるように言うと伐は舌打ちをした後、ベッドからおり、Fクラスの教室に歩き出す。

## 第98問

「……霧島、火炙りか？」

伐は教室に戻り、雄二に声をかけようとするが、雄二はクラスメイト達に十字架に貼り付けられており、十字架の下にはもう修復は無理そうな廃材が積み上げられ、怪しい覆面を被ったクラスメイトが松明を持ち、雄二を焼き殺そうとしている。

「黒須、助けてくれ！！」

「いくら出す？」

「そんな事を言ってる場合か！？」

雄二は伐に助けを求めるが伐は当然、金銭を要求する。

「黒須君、まさか、僕達を止める気？」

「……ダーリン、目が血走ってるぞ」

「当たり前だよ。あのブサイクが保健室から霧島さんと2人で出てきたんだよ！！」

「……雄二、すごく男らしかった」

明久は雄二が翔子と保健室から出てきた事が許せないと叫ぶと翔子は頬を赤く染める。

「だから、言ってるだろ！！ さっきの騒ぎのキズを手当てしていただけた。黒須、お前も見えてたよな」

「……ああ」

雄二は明久達が嫉妬する意味はないと伐に保健室での事を確認するが、

「……ミサちゃんまで保健室に連れ込みやがったぞ」

『火炙りじゃ生ぬるいな』

『ヒモなしバンジーはどうだ？』

クラスメート達は相変わらず、伐をミサちゃんと判断しているため、雄二への伐は火炙りでは生ぬるいと言う声があがりはじめ、

「巨乳娘のゴマ団子ならここにあるぞ」

『『『それだ！！』』』

伐は雄二の命などどうでも良さそうに『最終兵器』を取り出すとクラスメート達の声はそろうが、

「……ヒドいです。私だって練習すればきっと上手になるはずですよ」

「瑞希、落ち込まないでよ。さっき見せて貰ったレシピは薬品さえ使わなければ完璧だったから、すぐに上手くなるわよ」

「……薬品を使う事に問題があるんじゃないかな」

瑞希は小さくなっていじけだし、美波が彼女を励ましているが、秀吉は顔をひきつらせている。

「……………伐、大丈夫か？」

「ん？ ああ、問題ない。たいしたキズじゃない」

「……………そのわりには」

クラスメート達がいかに雄二に罰を与えるかを討論しはじめた時、康太は伐のキズを心配しているようで包帯が巻かれた伐の手を見て言う。

「お子ちゃまが下げさなただけだ。こんなもんはつばつけとけば治る」

「……………そうか」

伐は愛子の治療が下げさだと言うと康太は納得したのか頷き、

「康太、ばばあからの伝言だ。さっきの騒ぎの原因を知りたいヤツをばばあ室に集めてくれ」

「……………了解したが、雄二が行かないと始まらないんじゃないか？」

伐は康太に学園長からの伝言を伝えると康太は雄二は必要だと言う。

「……………仕方がないな。お前ら、それまでにしろ。霧島が死んだら、Aクラスとの協定が破れる。旦那の生き死にを決めるのは嫁だ」

「……雄二は私のもの」

伐はクラスメート達に言うと翔子は頬を染め、

『坂本を許すな!!』

『そうだ。ぶち殺せ』

伐の説得は逆効果だったようでクラスメート達は雄二への殺意を垂れ流して叫び出す。

「……黒須、失敗ではないのか？」

「いや、そう言えば、さっき、霧島夫妻を見てFクラスの男子生徒もワイルドで素敵って言ってたAクラスの女がいたな。しかし、旦那が死んだら、嫁は悲しみFクラスとは絶縁。その女とも知り合う事はなくなるわけだ」

『『『!?!?』』』

秀吉はさらに燃え上がったクラスメート達を見て伐が失敗したと思ったようだが、伐の話は終わってなく、続けられた言葉に女に餓えた野獣達は止まり、

『『『俺達ワイルド』』』

暑苦しいくらいに筋肉を強調しながら、喫茶店の修理に戻り、

「……限度って言葉を知らないのか。気持ち悪いな」

「……そうじゃのう」

伐はクラスメート達の様子を見て眉間にシワを寄せて言うと秀吉は顔をひきつらせて頷き、

「霧島、ばあが呼んでるから、今回の巻き込まれた理由を聞きたいヤツらを集めて連れてきてくれ」

「ああ……つて、また、いないのかよ!？」

伐は翔子が雄二を十字架からおろされる姿を見ながら言っていると雄二の返事を待たずに教室を出て行く。



## 第99問

伐は1人で学園長室にくと保健室で話を聞いていた美春と愛子も話の内容が気になったようで先に学園長室にいる。

「ん？ まだいたのか？ 犯罪者」

「黒須君、教頭先生に何を言うの！？」

「……黒須伐」

伐は事的首謀者である竹原を見て鼻で笑うと竹原は忌々しそうに伐を睨みつけるが、事情を知らない愛子は慌てて伐を制止しようとするが、

「お子ちゃま、事情を知らないヤツが言うな。こいつは小物な犯罪者だ」

伐は愛子の制止をひらりと交わすと学園長室のソファに座り、懷からタバコを取り出し、

「……ガス切れかよ」

ライターで火を点けようとするが、ライターのガスは切れている。

「ばばあ。ライターかマッチあるか？」

「あたしはタバコを吸わないよ」

「……つたく、何のためにこんなとこまで来たんだよ」

「これが終わったら帰れるんだ諦めな」

伐は学園長に火を貸せと言うが、伐は結局、お預けをくらう形になる。

「……黒須くん、あなた、こんなところでタバコなんて取り出して停学にでもなったらどうするつもりですか？」

「そうだよ」

美春と愛子は当然のようにタバコを吸おうとする伐の様子に学園長と竹原の顔を見てまずいと言いたげに言うが、

「……」

「って言ってるけど、どうする？ 停学くらいなっておくかい？」

竹原は表情を変えずに学園長は諦めたと言いたげに苦笑いを浮かべる。

「えーと、問題ないの？」

「give-and-take」

愛子が顔をひきつらせて伐を見ると伐は興味なさそうに言い、

「ちょっと、黒須くん、いきなり何をするんですか!？」

「あ？ ストレス解消だよ。入れねえから安心しろ」

近くに居た美春を引き寄せ、彼女の肢体をまさぐる。

「止め！？ ……っ」

「黒須くん、ストップ」

「……何だ。お子ちゃま。お前も可愛がって欲しいのか？」

美春は伐の手技に甘い声が漏れるのを必死に抑えていると愛子は慌てて伐を止めるが伐はそう言いながら、愛子を引き寄せる。

「……伐、あんたは何を考えてるんだ。仮にもここは学園長室だよ」

「……冗談に決まってるだろ。見られて感じる性癖はねえよ」

学園長は頭を押さえながら、伐を制止すると伐は2人から手を放して言う。

「……それでくそじやりどもはいつくるんだい？」

「知らねえよ。霧島に任せたからな。来る人数を調整してるんだろ。Fクラス全員がその犯罪者の被害者だからな」

学園長の質問に伐は興味なさそうに答えると、

「黒須くん、さっきから、教頭先生を犯罪者って言ってるけど」

「……お子ちゃま、お前の頭は学校のお勉強にしか使えないのか？」

今日起きていた騒ぎの首謀者がその小物だつて言ってるんだよ」

愛子は話が繋がらないと首を傾げ、伐は面倒くさそうに愛子に説明をする。

「ウソっ！？ 何で教頭先生が？」

「小物だから、甘い餌に釣られたんだよ。そして、切られた自分主導で話が進んでたと思ってたがただの哀れなトカゲのシッポだったわけだ」

「……」

愛子は驚きの声を上げるが伐は竹原を小バカにすると、竹原は伐を睨みつけ、

「ノラ猫、貴様はこっち側のはずだ！！ なぜ、そこにいる！！ お前は私のコマだったはずだ。契約だつてしたはずだ」

伐を裏切り者と罵るが、

「は？ 笑わせるな。小物、契約つてのは自分と相手に対する約束事だ。空手形を売って自分の良いよう使う事じゃねえよ。悪いな。あんたは契約の意味を知らねえから、良いように使われたんだよな。現実を知らずに自分を過大評価してる小物つてのは哀れだね」

伐は竹原を鼻で笑い、

「だいたい、こんな事をペラペラと話すあんたがつかつたんだよ。切り札つてのは後に出すから切り札なんだ。それを知らないあんた

「はただの小物だ」

竹原を小物だと言い切る。

## 第100問

「ぐっ……」

竹原は伐の言葉に苦虫を噛み潰したような表情をする。

「元々は成績しだいで腕輪が暴走するとあんたはわかってたんだ。なら、バカ相手におかしな手を使わずに何もしなければあのバカ2人は召喚大会にそこまで興味は示さない。参加してたとは言え、相手しだいで簡単に負けただろうな。へんな勘ぐりをする前にデータを集める事に力を使えよ。小物」

伐は竹原のやり方は目先の事など考えていないと言う。

「えーと、黒須くん、腕輪の暴走って？」

「ああ。そのままだ。召喚大会の賞品は欠陥品だった。成績が良くなると暴走する」

愛子は伐の話の意味がわからずに伐に聞くと伐は隠さないで言う。

「そんな危ない事に美春を巻き込んだんですか!？」

「あ？ お前は大丈夫だ。暴走するほど点数高くないだろ。聞いてなかったのか？ バカ以外が使うと暴走するんだよ」

美春は伐につかみかかりながら言うが、伐は美春じゃ暴走しないと言う。

「AないしBクラスレベルで暴走するんだ。何もなくても暴走するだろ。ただ優勝する気なら、お子ちゃまや久保に頼めば良いわけだしな」

「確かにそうだよな」

「……」

伐は万が一の事を考えて美春を選んだと言うと愛子は少しだけ嬉しそうに表情で頷くが対称的に美春は仇を取るかのように殺意を込めた視線で伐を睨みつけている。

「まあ、後は壊滅的にコマを選ぶセンスがない。嫌がらせは直接的な上に自分達とあんたが繋がっているとも隠さないバカ2人で何をしたかったんだ？」

「……」

伐は竹原のやってた事は的外れだと言うと、

「まあ、その分、俺は楽だったけどな」

「……な！？　っ……だ、だめ！？」

すでに竹原の事など興味がなさそうに伐を睨みつけている美春を抱き寄せ、彼女の体をまさぐる。

「……伐」

「……わかってるよ」

伐の行動を見て学園長はため息を吐くと伐は美春から手を放すが美春は荒くなりかけた呼吸で瞳を潤ませて伐を見ている。

「……ノラ猫と言う割には飼いだったわけか」

竹原は先ほどから学園長に制止される伐を見て忌々しそうに言うと、

「勘違いするんじゃないよ」

「勘違いするんじゃないよ」

まるでタイミングを見計らったかのように伐と学園長の言葉は重なる。

「……ノラ猫にはノラ猫の流儀がある。おまえみたいに受けた恩を仇で返す気はねえよ。だいたい、そんなマネをしたら、俺はあの人に顔向けができない」

「あたしはこのくそじゃりに恩を売ったつもりもないけどね」

伐は竹原のような行動はしないと言うと、学園長は伐に恩を売ったつもりはないと言うが、伐の言葉に何か思う事があったようでクスリと笑う。

「それで、ばばあ。こいつはいつまでここに居るんだ？俺が西村に渡した情報なら、直ぐにブタ箱に入れれるだろ」

「それは2度でまになるから、人数が集まってからにしようじゃないか」



伐は竹原をいじるのに飽きたようで学園長に言つと学園長からは待てと言つ言葉が告げられる。

「……やれやれ。タバコもお預け、女もお預け、しまいにやこれか」

「あはは。何か自由な黒須くんがやりたい事やれない姿も珍しいね」

伐は学園長の言葉にため息を吐くと愛子はいつもと違う伐の様子に苦笑いを浮かべると、

「……」

「ちよつと、黒須くん！？ どこ行く気？」

伐はソファーから立ち上がり、廊下につながるドアの前に歩き出し、愛子は伐が出て行くと思ひ慌てて伐を止めるが、

「……迷つてないで、さつさと入って来いよ。俺は歸りてえんだ」

「ぐぼつ！？」

伐は勢い良くドアを開けるとドアにぶつかった明久は壁まで吹っ飛び、

「……いきなり、開けるな」

「……まったくなのじゃ」

雄二と秀吉は良く飛んだ明久を見て顔をひきつらせる。



第100問（後書き）

どうも、作者です。

祝100問

花火は上げられないので明久をぶっ飛ばしました。（爆笑）

## 第101問

「霧島夫妻にダーリン、康太、木下姉妹、巨乳娘、島田か」

「黒須、姉妹とはどういう事じゃ!？」

吹き飛ばされた明久を心配して瑞希と美波は明久に駆け寄り、秀吉は伐が自分と姉を姉妹とひとまとめにした事に不満を漏らす。伐は興味なさそうに揃ったメンバーを眺める。

「あれ？ 優子も着たんだ？」

「愛子？ ええ、話を聞くとうちの店で騒いでいた3年生2人も関係してるみたいだから」

愛子は優子がきた事に首を傾げると優子は常夏コンビの顔を思い出したようで不快そうな表情で言う。

「揃ったね。くそじゃりども、さっさと入ってこないか、このうすのろ」

「……」

ドアを開けっ放しで話し始めたため、学園長は眉間にシワを寄せて言う隣で竹原は明久と雄二をまるで仇を見るように睨みつけている。

「おい。小物、この2人を睨みつけるのは筋違いだ。あんたがドジを踏んだ原因はあんたが無能だったからだ」

「……ぐっ」

伐は竹原の視線に気づくがすでに竹原の相手などする価値もないと言っ意味を込め言っとな竹原の顔は歪む。

「……さてと、思っただよりも人数が少なかったね。Fクラス全員がくと思っただけだね」

「仕方ねえだろ。俺達のクラスの出し物はボロボロにされちまったんだ。修理とか時間がかかるんだよ」

学園長は予想していたより人数が少ないため、苦笑いを浮かべるとクラスの喫茶店が襲撃された理由を知っている雄二が竹原を睨みつけて言っ。

「まあ、そうだね。竹原、まずはあんたからこのくそじやりどもに謝罪の言葉はないのかい？」

「……すまなかった。君達の喫茶店が襲撃されたのは私が原因だ」

学園長は雄二の言葉にため息を吐いた後、竹原に謝罪を強要すると竹原は頭を下げるが、

「そんな口先だけの謝罪はいらねえよ。なんの足しにもならんかな」

伐は竹原が形だけでしか謝っていない事を見透かしてくだらないと言っ。

「そうだな。日本には古来から土下座って言っ風習があるんだ。せ

めて、それくらいはやってくれないとな」

「ちよつと、坂本、黒須、あんた達は教頭先生になんて事を言うてるのよ!？」

雄二も伐と同じように思ったようで竹原に向かい言うと美波は慌てて雄二を止めるが、

「霧島、必要ねえよ。こんな小物の土下座に価値はねえし、何より、未だに自分が上だと思って、俺達を見下した目をしてるからな」

伐は竹原の目から彼の心の中を見透かしたように言うと竹原は開き直ったのかゲスな笑みを浮かべる。

「で、ばばあ、こいつの処分はどうするつもりだ？」

「……伐、落ち着きな。せっかく来てもらったヤツらが置いて行かれてるから」

伐は竹原の処分を学園長に言うと学園長はため息を吐いた後、事の原因になった『白金の腕輪の欠陥』、『竹原の企み』を簡単に説明する。

「……学園の転覆ですか？」

「いきなり大きな話で頭が痛いわ」

学園長の説明に事情を知らなかったメンバーはいきなりの展開に付いていけないようだが、

「まあ、それだけ、試験召喚システムは価値があるんだよ」

伐は興味なさそうに言う。

「それじゃあ、アキ達が召喚大会に出たのは？」

「俺が巻き込んだ。利害が一致したしな。だから、あいつらはペアチケットを誰と行くかは考えてないぞ」

「って事は黒須くんも？」

伐が明久と雄二がペアチケットをどう使うかは知らないと言うと愛子は伐がペアチケットを美春と使うと思っていたようで確認するよう言う。

「興味ねえよ。金にもならねえしな。美春にやる約束だ」

「黒須！？　ウチを売ったわね！？」

「ふふふ。多少納得ができませんが、ペアチケットを手に入れました。これでお姉さまとデート。デートノアートハアンナコトヤコンナコト」

美春はペアチケットを伐から貰える事を思い出したようで美波とのデートを思い浮かべ、背後からは黒いものが溢れ出して行く。

## 第102問

「……オネエサマ、オネエサマ、ミハルトエイエンノアイヲ」

「く、黒須、あんた、美春をどうにかしなさいよ!？」

美春は背中からまがましいものはみ出しながら美波との距離を縮めて行き、美波は伐に美春を止めると言うが、

「島田、俺はやりたい事がやれない時のストレスをなめてたんだ」

伐は美春を止める気はないように興味なさそうに言う。

「黒須、ウチを裏切ったわね!？」

「……裏切るも何もないだろ」

美波は襲いかかってくる美春をギリギリで交わしながら伐を非難するが、伐には非難される筋合いもなく、

「美春、落ち着きなさい。ウチに清涼祭中に何かしたら、黒須に食べられちゃうのよ。落ち着きなさい!？」

「ドウセ、タバラレテシマウナラ、イツソコノママ、オネエサマニミハルノジュンケツヲ」

「黒須、あんた、美春に何をしたのよ!？」

「……騒ぐな。指も入れてねえよ」



美波は美春を思いとどませようとするが、美春のなかには伐に美味しくいただかれてしまう恐怖が刷り込まれているようで引くつもりはなく、美波は伐を怒鳴りつける。

「……伐、いい加減に止めな。話が進まない」

「……ったく、おい。止まれ。止まらないとお仕置きだ」

「……!？」

学園長は頭を押さえてため息を吐いた後、伐に止めるように言うと美春は伐の言葉には反応すると伐からくるお仕置きに怯え、美波の後ろに隠れると小さく震えている。

「……完全に制御してるな」

「……そうだね」

雄二と明久は美春の様子に苦笑いを浮かべる。

「ばばあ、それで、そっちの小物の処分はどうするんだ？」

「さて、どうするかねえ」

伐は美春の態度など気にする事なく、学園長に竹原の処分を聞くと学園長は何か企んでいるのか、口元を小さく緩ませる。

「……ばばあ、お前は何を企んでる？」

「企んでるなんて、ひどい言いがかりだね」

伐は学園長の様子に何かを感じ、聞き返すと学園長はとぼけたように言う。

「……皿まで食ったか？」

「やれやれ、察しが良い、くそじゃりだね」

伐は学園長の様子から1つの答えをはじき出すと学園長は苦笑いを浮かべる。

「黒須君、どういう事？」

「……そのままだ。あのばあ、小物を毒だと理解した上で飲み込みやがった」

明久は伐と学園長の様子に意味がわからずに聞くと伐は忌々しそうな表情で言う。

「ちょっと待て。って事は竹原は警察に突き出されないで、このまま、文月に居座るのか？」

「それはおかしいであろう!」

雄二と秀吉は当然、声を荒げるが、

「……ばあ、その小物を飼うのに納得できる説明をしろ」

伐だけはその場で割り切ったのか、いつものように聞き返す。

「そうさね。まずは大幅な減給と今回仕掛けてきた私立校の情報を洗いざらい吐く事」

「それは当然だな」

「後はこんな風に性格は悪いが金の計算ずば抜けてるんでね。いまから金勘定が得意な人間を探すのも骨が折れる」

学園長は竹原を学園に残す理由をあげるが、

「ちょっと待ってください。教頭先生のせいで黒須くんは手にケガしたんですよ」

「……雄二もたくさん殴られた」

愛子と翔子は許せないと言う。

「……ばばあ、目的はそれだけじゃないな」

「……本当に嫌になるねえ。くそじゃり」

しかし、伐は学園長の腹のなかを読み切ったようで学園長に向かい言つと学園長はため息を吐く。

「黒須君、どう言う事？」

「……今回、俺とお前達が手を組んだ理由を考えろ」

「……なるほど、学園の評判か」

「しかし、本当に頭の回転が速いね」

伐の言葉に雄二は学園長の考えがわかり、学園長は苦笑いを浮かべる。

「……黒須、もっとわかりやすく教えなさいよ」

「まったく話に付いていけないのじゃ」

学園長の考えを理解した伐と雄二以外は説明をして欲しいと言う。

## 第103問

「……少しは自分で考えろ」

伐は興味なさそうに言うが、

「伐、あんたが説明しな。立場的にあたしが言う説明じゃないしね」

「……ちっ」

学園長は伐に説明するように言い、伐は舌打ちをすると、

「今回の処分をする上でこの小物を警察に突き出す場合と突き出さない場合はどっちが得だ？」

「得？　って、犯罪者がいるのは学園としてダメなんじゃないの？」

伐の質問に愛子は首を傾げるが、

「お子ちゃま、お前は先に俺と小物のやりとりを聞いていただろ。こいつはトカゲのシッポだ。本体はシッポが切れても痛くない」

「黒須の例えはわかりにくいのう。もう少し簡単に言っただくれぬか？」

伐は竹原を捨てゴマだと言うが、秀吉は意味がわからずに首を傾げる。

「秀吉、簡単に言えば、うちのクラスの明久と同じだ」

「僕と同じ?」

「……………いてもいなくても気にならない」

「簡単に言えば役立たずですわ」

雄二が秀吉の疑問に答えると康太と美春が雄二の言葉を補足する。

「何だとバカ雄二!! 表でろや」

「あん? 上等だ。返り討ちにしてやる」

明久は雄二の言葉に激怒し、2人でにらみ合いを始める。

「……………バカ2人は無視して、この小物をけしかけた人間はこいつが捕まろうと痛くない。だけど、小物が捕まった時の文月はそうもいかない」

「……………確かに、教頭先生が捕まるって結構なニュースよね」

「優子、どういう事?」

伐が話を続けると優子は伐と学園長が何を言いたいかわかったようで表情が鋭くなると愛子はまだ合点がいかないようで優子に聞く。

「えーとね。うちが試験校って事は知ってるわよね?」

「うむ。そのため、学費も抑えられておると言う話であろう」

優子の言葉に秀吉が頷くと、

「そうよ。じゃあ、聞くけど、試験校とは言え、ここまで学費が抑えられる理由は何？」

「……」

優子は質問を被せるが、瑞希や美波と言った事を理解していないように首を傾げる。

「……うちは試験校だ。多くのスポンサーがいる事で成り立っているって事だ」

「スポンサーですか？」

伐は理解能力がないメンバーを見てため息を吐くと文月学園がスポンサーの力で成り立っていると言うが、それでも、瑞希は理解できないのか首を傾げる。

「スポンサーが運営費や人件費を寄付してくれるから、学費が抑えられるの」

「お前らが仮にスポンサーだった時、教頭が犯罪を起こすような学園に寄付ができるか？」

伐と優子の説明に誰一人、寄付はできないと言う。

「今のスポンサーもそうよ。文月学園から手を引いて行く。ここま  
で言えばわかる？」

「スポンサーをなくしたら、学費が上がるから、生徒が集まるかわからんのじゃ」

「そう言う事だ。となると召喚システムを戦争道具とかに使いたいヤツらがここを飲み込みにかかる」

伐はようやく理解したかと言いたげにため息を吐くと、

「悪いね。学園長と言う立場的には隠蔽するのはやりたくないんだけどね。事情もあるのさ」

学園長は集まった全員に頭を下げる。

「だけど」

「……島田」

美波は納得できないと言おうとすると伐は美波を呼び、

「……学園の評判が落ちれば子供を心配した親は転校を進めるぞ」

瑞希の転校を防ぐためでもあると耳打ちする。

「……あんたはこれを知ってたわけね？」

「途中からな。だから、利害が一致したからお前らにも協力したんだ。納得しろ」

「……わかったわ」



伐は美波に瑞希の転校阻止のためだと言うと美波は納得がいかないながらも頷き、

「ダーリンと霧島旦那は問題ないな」

「えっ!？」

「ああ。俺、明久、康太の3人は教頭の裏を知ってる上で協力したんだ。異議を唱える資格はねえよ」

雄二は明久の答えも聞かずに答える。

「……って感じた。文句はあるだろうが、納得しろ。今の生活が気に入ってるならな」

「……」

「沈黙は納得したと受け取るぞ。ばばあ」

「ああ。あたしの話は終わりだよ。すまなかったね」

伐は話は終わりだと言うとドアに向かい歩き出し、学園長はもう1度、生徒達に頭を下げる。

## 第104問

「ちょっと、待ちなさいよ」

「……うるせえな」

伐の言葉に美春は納得していないのか伐を追いかけてくるが、伐はうっとうしいと言いたげに言い、止まる事なく先を歩いて行く。

「美春は納得していないですわ」

「知るかよ。だいたい、お前が納得するとか俺はどうでも良い」

伐は美春の事など知らんと言う。

「あの小物なんて、美春もどうでも良いですわ。あなた、仮にあのバカ2人が決勝に上がってこなかったらどうするつもりだったんですか。美春はまだしもあなたの成績な……」

「……余計な事を口にするな」

美春は竹原の事ではなく、伐が自分の身をどうでも良いと思っている事に怒っているようで廊下の真ん中で腕輪の暴走の話を話そうとしたため、伐はため息を吐きながら彼女の口を塞ぐ。

「……」

「……俺はお前と違うんだ。ちゃんと、その場合は策も持っている」

美春は伐をにらみつけると、伐はため息を吐き、

「さっさと戻れ。下校時間にはまだ早いぞ」

「その言葉、そっくり返しますわ」

美春に戻るように言うと、美春は伐に言い返す。

「俺は俺でやる事があるんだよ」

「……帰るつもりじゃないんですか？」

「ああ。ストレス解消はだいぶしたしな。なかなか、かわいい反応だったぞ。こんどはもつと先を教えてやるよ」

伐は美春の耳元でささやくと彼女の顔は真っ赤に染まり、

「な、何を言っているんですか？」

「お前が期待してる事だ」

伐を怒鳴りつけるが伐は一言だけ言うと1人で歩き出す。

「……何なんですか？ どうして、美春は」

「なんだ？ まだ認めないのか？」

美春は伐の背中を見て立ち尽くしていると、雄二は美春と伐の様子を見ていたようでニヤニヤと笑いながら美春に声をかける。

「……豚野郎？ 何かよろですか？」

「別に、俺は黒須に用があったから、追いかけてきただけだしな。お前の事なんて、どうでも良い」

美春は雄二の顔をにらみつけると雄二は美春の事などどうでも良いと言ひ、伐の後を追いかけて行く。

「……意味がわかりませんわ」

美春は自分の中にある伐への想いが理解できないように立ち尽くしている。

「おい。黒須」

「……」

雄二は伐に追いつき、伐を呼ぶが伐は雄二の顔を見る事なく、先を歩いて行く。

「答えろよ!？」

「……騒ぐな。うつつしい」

雄二は伐の反応に声をあげると伐はめんどくさそうに言う。

「黒須、お前、学園長室では割り切って納得しろ。って言ったわりにお前自身が納得してないんだろ。俺もそうなんだ。だから、憂さ晴らしに付き合わせろ」

「……ずいぶんと好戦的な代表様だ」

雄二は伐が何をする気かわかっているようでニヤリと笑うと伐は呆れたようなため息を吐く。

「お前に言われたくないね。それでターゲットは3年A組の夏川と常村って言うあの変態2人組で良いんだろ？」

「他にいないだろ。それにああいう自分を棚に上げるタイプは逆恨みで何かを仕掛けてくるからな。2度と立ち直れないようにして、どっちが上かわからせる必要がある。まあ、俺の場合は頭に顔、その他いろいろと見ても負けてるところは1つもないけどな」

伐と雄二は竹原のコマだった3年の夏川と常村を叩き潰すつもりのように3年A組の教室の前で言う。

「だけど、あれくらいの小物なら、叩き潰しても偶然だとか言っただけ、また因縁つけてくるんじゃないか？ 小物だし」

「だろうな。俺もまさか世の中にあんな小物が存在するとは思わなかった。知ってるか？ あいつらが俺達に嫌がらせしてた理由。裏で推薦して貰うためとか言うんだぞ。あんなのを推薦した時点で来年度から、文月からの推薦枠ダメになるだろ」

「まったくだ。推薦って事は成績だけじゃなく、それに見合った何かがないといけないはずなのに何も無いだろ」

「ん？ 思い出した。不細工なツラとセンスのない髪型があったな」

「後は汚い性格がな」

伐と雄二は教室のなかに聞こえるように夏川、常村を罵倒して行く。

## 第104問（後書き）

どうも、作者です。

美春は伐への想いを自覚していない方向で。  
（爆笑）

伐と雄二の2人は憂さ晴らしへ。  
常夏コンビの運命は？

## 第105問

「……坂本、黒須」

「お前ら、3年の教室までくるなんて良い度胸だな？」

伐と雄二の罵倒に夏川、常村は額に青筋を浮かべて廊下まで出てくるが、

「しかし、あの汚物は特にたいした事ないのにどうしてあそこまで強気でいけるんだ？」

「さあな。一般的な人間と価値観が違う……違うな。汚物だから、価値観が根本的に違うんだろ」

「確かに、汚物だから汚くて敬遠された方が自信になるんだろ」

伐と雄二は2人が廊下に出てこようが止める気はない。

「お前ら、聞いているのか!!」

「無視するなんて良い度胸だな？」

夏川と常村は伐と雄二に止めさせようとするが、

「霧島、知り合いか？」

「いや、こんな汚い面した知り合いはいない。それより、知ってるか？　なんか、他のクラスに嫌がらせして回ってる人間がいるらし



いぜ。まあ、ここは学園の模範になる最上級生の最上位クラスの前だし、そんな奴はいないと思うけどな」

「まあな」

伐と雄二は教室のなかの生徒に聞こえるように言う。

「おい。2年が調子にのってんじゃないぞ!!」

夏川は伐と雄二の挑発に我慢できなくなったように伐の胸ぐらをつかむと、

「霧島、正当防衛は成り立つと思うか？」

「俺達は言いがかりじゃなく、ホントの事を言ってるしな。先に手をあげたのも。その夏……変態先輩だし、大丈夫だろ」

伐は表情を変える事なく言い、雄二は苦笑いを浮かべる。

「わざわざ、言い直すんじゃないよ!! その減らない口に先輩の恐ろしさってのを教えてやるよ!!」

夏川は抑えきれなくなったように大声をあげて伐の顔を殴りつけようとするが、

「悪いな。たかが1年、早く産まれただけで先輩ヅラしないでくれよ。下級生から尊敬されてる先輩方に失礼だ」

「いだだだだ!?!」

伐は表情を変える事なく、夏川の手首を握ると、夏川は悲鳴をあげる。

「てめえ」

「そつちもやる気か？」

夏川がやられる姿に常村は怒りをあらわにすると雄二は待っていませんとニヤリと笑うが、

「あなた達、教室の前で騒がしいですよ」

教室から1人の女子生徒が出てきて仲裁に入る。

「……小暮」

「はじめまして、わたしは3年Aクラスの小暮葵です」

女子生徒は『小暮 葵』と名乗ると伐と雄二に頭を下げると、

「2年Fクラス、代表の坂本雄二だ」

「……黒須伐だ。別に覚えなくても良い」

伐と雄二は葵に向かい頭を下げる。

「常村くん、夏川くん、今日の2人の行動をわたしの部活の後輩から聞きました。頑張っている後輩にたいして嫌がらせは最上級生の行動とは思えません」

「……」

葵は夏川と常村を非難するように言つと2人は黙り込むが、

「後輩に正しい姿も見せられないんですか？」

「……ちつ、悪かった」

「すまないな……これで良いだろ」

葵の言葉にしぶしぶ、□だけで伐と雄二に謝る。

「悪いな。□先だけの謝罪で納得するほど俺らは心は広くないんだよ」

しかし、伐が許す訳はなく、

「葵さんと言つたな。俺もなるべく、美人な先輩の言葉は聞きたいけどな。時と場合によるんだ。この2人に俺達のクラスはいわれのない中傷を受けた。人に言われてしぶしぶ□先だけで謝る？俺達をバカにしてるとしか思えないだろ？本当に謝る気なら誠意を見せろよ。『校内放送で名乗つて2年Fクラスに嫌がらせをしていませんでした』くらい言えよ」

夏川と常村に本気の謝罪を要求する。

「それは、さすがにやりすぎじゃないですか？」

「まともに謝る気が見えたらここまで言わねえよ。この2人は俺達のクラスをバカにしてんだよ。自分達がやった事を棚にあげてな。」

だいたい、本気で謝るつもりなら、ここで口先だけじゃなく、うちの教室にきて土下座くらいするのが筋だろ」

葵は伐に言い過ぎだと言うが伐は考えを変える気はない。

## 第106問

「違うか？」

「……確かにあなたの言う通りかも知れませんね」

伐の言葉に葵は頷くが、

「あ？　なんで俺達がそこまでやらなきゃいけないんだよ」

「だろ？　この変態2人は反省なんて何もしてねえんだよ」

夏川はそこまでのする気はないと唾を吐き捨てるように言い、伐は夏川と常村を見下すような視線で言う。

「その目が気に入らねえんだよ。Fクラスのクセに反抗的な目をしやがってよ。俺達はAクラスだぞ。年上だぞ」

「だから、さつきも言っただろ。下に尊敬して貰いたいなら、この美人な先輩くらいの事をやれよ」

常村の言葉に伐はため息を吐くと、

「だいたい、目が気に入らねえだ。良い事を教えてやる。俺はあんたらみたいな汚物は見てねえよ。それなのに目が気に入らねえ？　何、人になった気でいるんだ？」

夏川と常村など眼中にないと鼻で笑う。

「てめえ!!」

夏川は伐の態度が気に入らないため、再度、伐の胸ぐらをつかむと、

「……話しかけんな。息がくせえ」

「ぐはっ!？」

伐は最近、定番になりかけている言葉を発し、躊躇する事なく、夏川の目に指を突き刺し、夏川は悶絶して廊下を転がり回る。

「さてと、俺と伐はうちのクラスを侮辱したこの2人を教室まで引きずって行って土下座の1つでもさせたいんだが、最上級生で生徒の模範にならないといけない。3年Aクラスの生徒はこいつらをかばうのか？」

雄二は教室に聞こえるようにおかしな事をした夏川と常村を引き渡せと言うと教室からは雄二と伐の意見が正しいと言う声と夏川や常村と同じように2年Fクラスをバカにする声が聞こえている。

「なるほど、成績は良くても、ばばあが敵を作ってまで、召喚システムを守ろうとしている理由も理解できないわけか？ この変態2人だけじゃなく、このクラスも最低だな」

伐は3年Aクラスの反応を鼻で笑うと、

「霧島、悪いな。お前とダーリンに頼まれた依頼は達成出来そうにない。俺は今、ガラにもなく、本気でイラついている」

「だろうな。俺もだ」

伐は口元を緩ませ笑い、雄二は伐の意見に同意する。

「一応、鉄人は話がわかるからな。俺がこの変態2人を半殺しにしてもある程度は庇ってくれるだろ」

「お前、何を言ってるんだ!？」

伐の瞳のなかには同年代の人間が持つわけのない異常な冷たさがあり、伐の様子に今まで伐を見下していた夏川と常村の背中には冷たいものが伝う。

「霧島、お前は手を出すなよ。ケンカ両成敗で元々の非はあの変態2人にある。悪くて俺は退学だろうけどな。鉄人の警告も無視したんだ。そっちも停学は免れないだろ。大変だな。この時期の停学、わけも聞かれるだろうし、噂はすぐに広がるからな。3年全体の進路に不利に働くだろうな」

「じふっ!？」

伐は自分達の行動を悔いるとも言いたげに言うと、何も躊躇する事なく、常村をAクラスのなかに蹴り飛ばし、

「……言っておく。俺の前では言葉には注意しろ。俺は悪意のある言葉には鼻が効くんだ。お前ら、この汚物を半殺しにした後に同じようにしてやるよ」

先ほど、Fクラスをバカにした生徒をすべて指差して言った時、

「……………伐、そこまでだ」

「あがつ!？」

康太が音もなく忍び寄り、伐にスタンガンを押し当て、いきなりの事に伐は体を硬直させて気を失う。

「康太!？」

「……………雄二、帰るぞ。伐を失ってまでこいつらに痛めつける価値はない。伐を運ぶのを手伝ってくれ」

康太の登場に雄二は驚きの声をあげるが康太は言い切り、

「……………そうだな。康太、お前の言う通りだ。悪いな。小暮先輩、迷惑をかけた」

「いいえ。あなた方のクラスに迷惑をかけてしまった事をあの2人に変わって頭を下げさせてください」

雄二は苦笑いを浮かべながら、伐を背負うと葵と10人程度の先輩が雄二と康太に謝罪をすると、

「小暮先輩だっけか？ みんな、あんたみたいな先輩だったら、学校ってもっと楽しいんだろうな」

「……………まったくだ」

雄二と康太は笑顔を見せて言う。



## 第106問（後書き）

どうも、作者です。

最初に変態コンビが伐により引き裂かれる事を期待した皆様には謝罪を。

すいませんでした。話の流れと伐の過去を知っている康太には伐を止めるだけの理由があります。これは先に進む事で明らかになりますので許してください。

ツンデレ猫のお怒りは皆さんにどう映ったでしょうか？

伐の古傷はFクラスで癒されているんでしょうか？（悪笑）

## 第107問

「……ん？　ここは？」

伐は目を覚ますと教室の隅で壁に寄りかかっている。

「あつ！？　雄二、ムツツリー二、黒須君が目を覚ましたよ」

伐が状況をつかもうとした時、明久が伐に気づいたようで騒ぎ出し、

「黒須くん、大丈夫？」

「まったく、あなたは少しは大人しくできないのですか」

明久の声に美春と愛子は伐のもとに駆け寄り、伐に声をかけるが、

「……うるせえ」

伐は騒ぐなと言いたげに言うと不機嫌そうな表情で教室を出て行くとする。

「待て。黒須、話がある」

「……なんだ？」

雄二は伐の様子に苦笑いを浮かべながら、伐を引き止めると伐はとりあえず、立ち止まる。

「あの変態2人には関わるな。相手をするだけ無駄だ」

「お前の指示に従う義務はねえよ。だいたい、俺はお前に首輪をつけられる気はねえよ」

雄二は伐に向かい言うが、伐はあの2人をぶちのめす気のようにである。

「おいおい。今日はずいぶん血の気が多いな。たまってるのか？」

雄二は伐の様子にため息を吐くと、

「!?!」

美春は身の危険を感じたのか、伐から距離をとる。

「……うるせえ。ただ、あの汚物は徹底的にぶちのめさないと気がすまないだけだ」

「別にそれ自体は止める気さねえけどな。ただ、清涼祭が終わるまで待て。だいたい、あいつらに頭にきてるのはお前だけじゃないだよ。1人で抜け駆けは許さねえぞ」

伐は雄二の話を聞く気はないと言うと雄二は何か考えがあるのかニヤリと笑い、雄二の言葉にクラスメート達も頷く。

「……そろいもそろってバカかよ」

「言っただろ。バカはこのクラスの色だ。それに、お前も最近は染まってきたるだろ？」

伐はクラスメート達の様子に呆れたようにため息を吐くと雄二は二ヤリと笑う。

「そんなわけあるか。まあ、代表様が何か企んでるみたいだからな。しばらくは預けてやる」

「そうしてくれ。少なからず、お前と俺はあの変態2人以外に3年Aクラスの生徒に目を付けられたからな」

伐はため息を吐くと雄二は面倒だと言いたげだが、口元は緩んでおり、

「あの2人って、仲良いわよね。なんか、変なところで」

「……と言うか、あそこの空気は歪んでる気がする」

伐と雄二の姿に美波と明久は顔をひきつらせる。

「なら、俺は今日は帰るぞ」

「待て。片付けを手伝え」

伐は教室を出て行こうとすると雄二は伐の肩をつかむ。

「……肉体労働はベッドのなかと決めてるんだが」

「……あんまり、ここで言うな。暴動になる」

「知るか。朝から何連敗もしてるのに自分達は悪くないと言ってるヤツらなんだ。すこし、どこが悪いか考えさせろ」

伐は雄二の言葉を鼻で笑うと、

「まあ、彼女持ちには関係ないか」

爆弾を落とす。

「おま！？　今、余計な事を言うな！？」

『……坂本、殺す』

クラスメート達から雄二へ向けて殺意が溢れ出す。

「黒須！？」

「逃げなくて良いのか？」

雄二は伐の名前を叫ぶが、伐は楽しそうに笑うと、

「お前、覚えてろ！？」

雄二は全力で教室から逃げ出し、クラスメート達は怪しげな覆面を被り、雄二を追いかけて行く。

「これで少しは気が晴れたな。巨乳娘、島田、今の状況を教える。破損状況と売上、後は霧島が計算してるなら、修繕にかかる見積もりもだ。後、木下、ばばあの部屋にノートパソコンがあるから持ってきてこい」

「わかったのじゃ。行ってくるのじゃ」

「これだけど、何するの？」

「バカどもを金の計算するのに邪魔だから、追いつたんだろ。早いとこすませるぞ。修理費用で赤なら他を考えないといけないだろ」

伐は美波から帳簿を受け取ると帳簿を開きながら計算を始めだし、

「……黒須くんって、本当にいろいろできるよね」

「……ええ」

愛子と美春は伐の姿に苦笑いを浮かべる。

## 第108問

（……修繕費用が高いな。教室自体は清涼祭が終わればばあに直させるが、いくら頑張ったって巨乳娘の親父が見にくる明日には間に合うわけがないだろ。最悪だな）

伐は伝票や修繕費の見積もりと教室の様子を見てため息を吐く。

「ねえ。黒須、ため息を吐いてるって事は厳しいの？」

「ああ。最悪だ。机やイス、壁は後で学園側に直して貰えば良いが、食器類は割れたものは使えないし、食器がないって事は客も回せない。何より、この状態の喫茶店に入ってくる客はよほどの物好きだ」

「確かにそうじゃのう」

伐がため息を吐く姿を見て美波が不安そうな表情をして伐に声をかけると伐は隠す事なく言い、秀吉は表情を曇らせる。

「で、でも、あんたならどうにかなるんでしょ。いつもみたいに何か考えなさいよ」

「むちやな事を言っな。無い袖は振れねえよ」

美波は伐が最悪だと言う様子に瑞希の転校を心配して伐に詰め寄るが伐は美波の手を払うと、

「木下、事情を話して演劇部からテーブルを借りれないか聞いてくれ。巨乳娘と島田は鉄人のところに行つて、召喚大会の会場の隣に

オープンカフェにできないか聞いてこい。ばばあは今回はそれくらい口利きをしてくれるだろうから、大丈夫だとは思っけだな」

3人に指示をだす。

「オープンカフェですか？」

「ああ」

「どうして、そうなるのよ？」

伐の提案に瑞希は首を傾げ、美波は眉間にシワを寄せる。

「仕方ねえだろ。壁の修繕、その他もろもろは時間がかかるんだよ。こんなボロボロな教室で飲食店をやるよりずっとましだ」

「でも、結構、盛り上がるし、土埃がまったりしない？」

「まあな。そこが考えどこなんだよ。せつかく、決勝参加者がそろってるんだしな。店から召喚大会が見えた方が宣伝にもなって良いだろ？」

「確かにそうだけどさ」

伐の提案には利点もあるが召喚大会の盛り上がりを考えると衛生面的に納得はできない。

「とりあえず、空き教室を使えないかも視野に入れて話してこい。担任が知らないで進めて問題になっても困るからな」



「確かにね。それじゃあ、ウチと瑞希は西村先生のところに行ってくるけど、黒須、あんたは何をするの？」

伐は瑞希と美波に改めて指示を出すと美波は伐がサボるのではないかと疑いの視線を向けて言う。

「……うるせえな。ちゃんと働いてるだろ。つたく、もともと、俺はサボるつもりだったんだぞ。何でこんな事までしないといけないんだよ」

「ちゃんと、働きなさいよ。あんたが学園長とやった事も関係してるんだからね。美春、工藤さん、黒須が逃げないか見張っててよ」

「わかったよ」

伐は面倒だと言いたげにため息を吐くと美波は美春と愛子に伐の監視を頼むと愛子は頷くが、

「お姉さま、待ってください！？ 美春はこんな危険人物のそばにいるのはイヤです！！ 美春も連れて行ってください」

美春は伐を監視する人間が少なすぎると言い、身の危険を感じているように美波と瑞希に付いて行きたいと叫ぶ。

「なら、行け。お子ちゃま。こっちこい。今から女にして……」

「あなたは学園で何をするつもりですか！！」

伐は美春を追い払うように出てけと言うと愛子の腰に手を回し、彼女を引き寄せると美春は伐を怒鳴りつけ、

「美春、工藤さん1人だと危険だからお願いね。瑞希、速く行くわよ。黒須に時間を与えると2人が妊娠しちゃうから」

「えーと、はい。急いで行ってきますね」

美波は瑞希に急ぐように言い、2人は教室を出て行くと、

「中になんか出さねえよ。できたら面倒だしな」

伐は表情を変える事なく言い切り、

「さてと、せっかくだし、2人まとめて美味しくいただくか」

美春の体を引き寄せる。

「ちょっと、放しなさい！？ 変態！！」

「へえ。この距離だとやっぱり、ドキドキするね」

美春は伐の手から逃げようと暴れる隣で愛子は顔を赤らめて伐の顔を見つめる。

「工藤さん、騙されてはいけませんわ！！ 確かに見た目は良いですが、性格は最悪ですわ」

「そんな事はないよ。清水さんだってわかってるでしょ。ねえ、黒須くん、ボクは黒須くんに初めてをあげても良いよ。だけど、代わりにはすぐには言わないけど、『伐くんの心』が欲しいかな？」

美春は愛子に伐の顔に騙されると叫ぶと愛子は美春の言葉を否定し、顔を赤らめたまま、恥<sup>づ</sup>かしそうに伐へ愛の告白をする。

## 第108問（後書き）

どうも、作者です。

まさかの愛子の告白に皆さんはどう思っただろう？

そして、伐はどうするんでしょうか？

そろそろ、本気でヒロインを決めないといけないかな？と思っ  
てます。

と言う事でアンケートです。

内容は伐のヒロインは？

1・愛子

2・美春

3・美波

4・ひとまず、まだ決めずに愛子と美春で遊んでいて欲しい。

5・その他（名前をお願いします）

とりあえず、美波と伐のやりとりがわりと好きなのでヒロイン候補  
に再浮上させました。（苦笑）

期限は清涼祭終わるまでくらいで、多くの意見をお願いします。

## 第109問

「……」

「く、工藤さん、あなたは何をいきなり言い出すんですか!？」

愛子のいきなりの告白に伐は眉間にシワを寄せ、美春は驚き声を上げる。

「別にいきなりじゃないよ。最初はイヤな人だなと思ってたけど…  
…目が自然に伐くんを追うんだよ。清水さんは違うの?」

「そ、それは!？」

愛子は美春をライバルと判断しているようで美春をまっすぐと見て  
言々と美春は慌てる。

「……勝手に盛り上がるな」

「いたっ!?! いきなり、何するの!?!」

伐は自分の手のなかで勝手に話を進める愛子にデコピンを喰らわせ  
ると愛子は伐のいきなりの行動に驚き、額を押さえる。

「そんなめんどうなものが付いてくるなら、いらねえよ。肉奴隷な  
らいるしな」

「ちがつ!?! 違います!?! み、美春はあなたのものにはなりま  
せんわ」

伐は愛子の告白を拒否すると美春の胸を揉み始め、美春は伐から逃げようとするが、伐の手から逃げ切れるわけではない。

「むう。伐くん」

愛子は自分の言葉を伐が直ぐに聞き入れてくれるとは思っていなかったように、美春の肢体をいじくりまわす伐を見て、不機嫌そうな表情をすると、

「伐くんは積極的な娘より、反抗的な娘の方が好みなの？　ボクの肢体はまだ成長過程だから、伐くんの好みに育てて欲しいな」

「何度も言わせるな。俺は心とかめんどうなものはいらねえんだよ」

「み、美春だって、身体だけの関係なんてイヤですわ！？　そう言うのは愛が有ってこそです。ですから、美春はお姉さまが良いんですわ！？」

自分から伐の首に手を回して言うが、伐は冷たく言い、美春は伐の腕から逃げだそうとジタバタしながら言う。

「あれ？　伐くんはボクを『身体だけでも良い』って言わせる自信が無いのかな？」

「そんな安い挑発に俺がのると思うか？」

愛子は伐を挑発するようにニヤリと笑うが伐は愛子の挑発を鼻で笑った時、

「……黒須、演劇部から備品の使用許可を貰ってきたのじゃが、ワシは今は邪魔かのう」

秀吉は伐からの指示を終えて教室に戻ってきたようで目の前で繰り広げられているやりとりに頬を赤くして恥ずかしそうに目を逸らしながら言う。

「弟くん!？」

「別に邪魔じゃねえよ。良くできたな。こっちにこいよ。ご褒美にお前も可愛がってやる」

秀吉の登場に愛子は驚きの声をあげるが伐は動揺する事なく、秀吉にこっちにこいと言う。

「ワ、ワシは男じゃ。男のお主にして貰うような事はないのじゃ!？」

「なら、お前が攻めて見るか？ 俺は別にどっちでもいけるぞ」

秀吉は顔を赤くしたまま、伐を怒鳴りつけるが伐は表情を変える事なく言う。

「お、お主は何を言うておるのじゃ!？」

「……秀吉、あんた、否定するなら、顔を赤くしないでくれる」

秀吉が伐を怒鳴りつけると秀吉の様子を見て優子がため息を吐く。

「どうした？ お前の好きな薄い本の世界じゃないのか？」

「……」

伐は優子の言葉が意外だと言うと優子は伐を睨みつけるが、

「あれか？ お前のなかでは『俺×秀吉』だから、『秀吉×俺』の受け攻め反転は許せないのか？」

「……黒須くん、学校でおかしな事を言わないでくれるかしら」

伐は優子の視線など気にする事はなく言うと言つと優子は眉間にシワを寄せながら伐を睨みつける。

「なんだ凶星か」

「違うわよ！？」

「優子、伐くんのペースに巻き込まれてるよ」

伐はくだらないとため息を吐くと優子は声をあげ、優子は優子の様子に苦笑いを浮かべると、

「優子、何かあった？」

「あったも何も、優子。そろそろ交代時間よ。少しはこっちの時間も気にして」

優子は優子がFクラスにきた意味を聞くと優子のため息を吐き、優子呼びにきたと言う。



「そつか。もう。そんな時間か。それじゃあね。伐くん」

「!？」

愛子は優子の言葉に頷くと伐の頬に口づけをし、美春を挑発するよ  
うに笑い、

「優子、戻ろう」

「ええ」

頭を押さえる優子と驚き顔の美春を置いて喫茶店を出て行き、

「……黒須、一本取られたようじゃな」

「……うるせえよ」

伐は愛子の行動を予測していなかったようで不機嫌そうに秀吉の言  
葉に返事をする。

## 第110問

「……こんなもんか」

「そうね。これなら、どうにかなるんじゃない」

伐は瑞希と美波から空き教室の使用許可を貰えたと聞いて喫茶店再建計画をまとめると美波がそれを覗き込んで納得したように頷くが、

「……島田、読めてないのに頷くな」

「い、良いでしょ。雰囲気くらい味わったって」

伐は日本語の読めない美波に無駄な事をするなと言うと美波はバツが悪そうな表情をする。

「しかし、誰も戻ってこぬのう。せつかく、黒須が代案を出してくれてもこのままじゃ、作業も進められんのじゃ」

「そうですね」

雄二を追いかけて行ったクラスメートが誰も帰ってこないため人手が足りなく、秀吉がため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべて頷く。

「まあ、何もやらないでいるのは時間の無駄だからな。食器や調理器具とかから運ぶぞ。重いものは体力バカに任せれば良い」

「そうじゃのう」

伐は何もやらないのは時間の無駄だと言うとまとめてあつた食器を持つと秀吉も伐に続く。

「ねえ。黒須、あんたと木下は男なんだから、テーブルを運べばいいんじゃないの？」

「そうですね。楽な事をしないでください」

美波は伐と秀吉に重いものを運ぶように提案すると美春が美波の言葉に同意するが、

「……うるせえな。俺はベッドの上以外じゃ、持久力はねえんだよ。だいたい、俺は充分に働いてるだろ。少しはねぎらって貰いたいくらいだ。まあ、後で美春に奉仕させ……」

「しませんわ!？」

「……黒須、もう少し言葉を選べんのかのう」

伐は自分は文句を言われるほどサボっていないと言うとたまっている鬱憤を後で美春で晴らすと言うおうとするが、美春はそんな事はしないと叫び、秀吉はため息を吐く。

「選ぶ必要なんてないだろ。だいたい……なんだ？」

「清涼祭中は少しは自重しなさいよ。あんたの悪評が瑞希の転校の理由にもなってるんだからね。学校でそんな行為してたりしたら……」

伐は関係ないと言おうとするが美波が伐の首を引っ張り、瑞希の転

校阻止のために顔を赤くしながらおかしな事をするなど言う。

「あん？ 別に今時、学校でセッ……」

「それを言うなって言ってるのよ！！」

伐は美波が止める理由がわからないと言おうとするが、美波は伐の首をつかむが、

「……うるせえな。耳元でキャンキャン騒ぐなよ」

伐は鬱陶しそうに美波の手を払うと、

「だいたい、学校での制服半脱ぎでは男のロマンだろ。なあ、木下」

「……ワシに同意を求めんで欲しいのじゃ」

秀吉に同意を求め、秀吉は顔を赤くして伐から顔を逸らす。

「ほらな。これが一般的な男子高校生のロマンだ」

「……」

伐は秀吉の反応を気にする様子もなく言うと美波は呆れたような表情をするが、

『ふざけるな。美人女教師が男のロマンだ！……！』

『違う。部室で美人の先輩が相手がロマンだ！……！』

『俺は子犬タイプの後輩の女の子が良い！！！！』

伐の言葉に反応するように雄二を貼り付けた十字架を抱えたクラスメート達がお互いの性癖を叫びながら戻ってくる。

「……なんなのよ。これ？」

「人手が戻ってきたな」

「お前ら、助けるよ！？」

美波はクラスメート達の様子にため息を吐き、伐は興味もなさそうに人手が増えたと言うと十字架に貼り付けられた雄二が助けを求めて叫ぶ。

「ああ。おい。霧島をそろそろ解放しないと霧島嫁にお前ら八つ裂きにされるぞ」

『霧島さんからの折檻！？』

『最高だ！！』

伐は仕方ないとため息を吐き、雄二を解放するように言っが逆に盛り上がり始め、

「……悪い。霧島、予想以上の変態の集まりだった」

「諦めんな！！」

伐はさすがに少しひいたようで雄二に謝ると雄二は声をあげる。



## 第111問

「しかし、空き教室を借りるか。全然、考えてなかったな」

「そうだね」

雄二を解放してFクラスの生徒に伐が状況を説明すると雄二は苦笑いを浮かべる。

「設備は本来の教室より狭いが修理だなんだするよりは良いだろ。それとばあと西村には修理のために放課後残るって許可も貰ったから、連絡入れるヤツは先に入れておけ」

「そうだな。必然的に席は減っちまったがこれなら、無事な食器や備品でなんとかなりそうだ。時間もそれでどうにかなるだろ」

伐の言葉に雄二は頷き、クラスメートに向かい指示を出し始めると、

「さてと俺は少し休憩に入らせて貰うぞ」

「……こっちにこないでください。変態」

伐は雄二に任せて一息つくと言うと美春はまた伐に襲われると思ったように美波の後ろに隠れて伐との距離をとる。

「……今はそんな気分じゃねえよ」

伐は美春の様子にため息を吐くと売上から1万円札を抜き取り、

「コンビニでライターかマッチを買ってくる。適当に飲みもんとかも買ってくるから、誰か付いてこい」

「黒須、ちょっと待ちなさい!？ ウチも行くわ」

近くのコンビニに行ってくると言うと1人で出て行き、美波は伐1人に行かせると危険だと思っているようで伐の後を追いかける。

「……島田は大丈夫だろうな？」

「……ライターかマッチが買えれば問題ない」

2人が出て行ったのを見て雄二がつぶやくと康太がコンビニの品揃えしだいと言い、

「……20分経っても帰ってこなかったら探しに行くぞ」

「……そうじゃな」

雄二は伐の下半身を信頼していないためか時間を決めて伐と美波を探しに行くと言つと秀吉は頷くと、

「それなら、誰かもう1人くらい、付いて行けば良いんじゃないかな？」

明久から提案が出る。

「そうだな。清水、行ってこい」

「イヤですわ!？」



「良いのか？ このままだとお前の大好きな島田が黒須の毒牙にかかるぞ」

雄二は明久の言葉にすぐに頷き、美春に行くように言うが美春は先ほどから美波への愛より伐への恐怖が上回っているようであり、直ぐに雄二の指示をはねのけるが雄二は美波が伐に襲われると言うが、

「……それで傷ついたお姉さまを美春が優しく慰めれば良いのですわ」

美春は伐の行動からおかしな事を学び取っており、伐と美波を追いかけようとしなない。

「雄二、清水さんを行かせたら、ヘタしたら2人ともつてのも……清水さん、行ってくれないかい？ 僕達が後で追いかけるから！！」

「豚野郎、あなたはいつたい何を想像してるのですか！？」

明久は苦笑いを浮かべながら美春には危険だと言おうとするが途中で伐に美波と美春が食べられている姿を思い浮かべたようにで全力で美春に伐と美波を追いかけるように頭を下げるとクラスメート達も明久と同じ答えに行き着いたようにで美春に頭を下げるが、美春は当然、罵倒する。

「……そうだな。明久の言う事も一理あるな。ってなると清水を行かせるのは危険か？ 黒須に襲われても問題なくて、居ても邪魔にしかない奴……」

雄二は美春だと問題あると考え直すと役立たずが良いと言い出し、

「どうして、みんなで僕の事を見るの!？」

「決まってるだろ。基本的に力仕事だから男手がいるだろうしな。何より、お前ならどうなっても良い」

クラスメート達の視線は明久に集中し、明久は声をあげるが、雄二は明久は邪魔だと言い、クラスメート達は大きく頷くと、

「みんななんか嫌いだ!!」

明久は泣きながら教室を出て行き、

「ん？ 吉井はどうしたんだ？」

「鉄人、何でここに？」

「……坂本、お前は生徒指導室に連れて行かれないようだな」

明久と入れ替わるように西村教諭が入ってくると雄二は余計な事を言う。

「遠慮します。それで、何かあったんですか？」

「ん？ 黒須から召喚許可を出してくれと言われていてな。今回は事情が事情だったからな。それで、吉井はどうしたんだ？」

伐は観察処分者を有効利用しようと西村教諭を呼んでいたようだが明久はいなく、教室は微妙な空気になる。



## 第111問（後書き）

どうも、作者です。

伐の計画はクラスメートの行動に無駄になりました。（苦笑）

伐、明久、美波の買い物はどうなるんでしょうか？

アンケート

現在

1位 愛子 4票

2位 先送り 3票

3位 美波、美春 2票

5位 優子 1票

アンケートは清涼祭終了までです。  
ご協力よろしく願います。

## 第112問

「ダーリン、島田、ビールで……」

「良いわけないでしょ!!」

明久が追いついて、3人でコンビニに入ると伐は当たり前のようにビールを買い物カゴに入れるが美波は当然、伐を怒鳴りつけるが、

「……そうだな。ドイツ帰りの島田は日本のビールはまずいだけだしな」

「そつちじゃないわよ!! あんた、ウチ達は学生なのよ。未成年なの。お酒を飲んで良いわけないでしょ!!」

伐は日本のビールは美波の口には合わないと言うと美波は伐の胸ぐらをつかむ。

「……おい。島田、お前は本気で言ってるのか？」

「当たり前でしょ!!」

伐は美波を見て、信じられないと言う表情をするが、美波は理音の胸ぐらをつかんだまま言う。

「……ダーリン、俺は今、貴重なものを見ているぞ」

「えーと、黒須くん、僕もお酒は止めた方が良いと思うよ」

伐は高校生にもなつて飲酒を反対する美波を見て『こいつ、大丈夫か?』と言う表情をしながら、明久に同意を求めるが明久は苦笑いを浮かべて美波の意見に同意すると、

「……悪い。あまりの俺との価値観の違いに少しめまいがした」

伐は頭を押さえる。

「それより、僕としてはお酒を買うよりは……」

「まあ、確かに米は大切だな。お前らのバカな行動で帰る時間も遅くなりそうだしな」

明久は目を輝かせながらおにぎりやパンを買い物カゴに入れ始めると伐は明久の意見に反対はせず、

「仕方がない。酒は部屋に帰ってからにするか。西村も教室にいらるうから、飲めないだろうしな。全く、言つてこなかったのは俺のミスだが、あれだけの人数が居て、誰1人、観察処分者の利点に気づかないのはどうなんだよ? 買い物より、優先する事があるだろ」

ため息を吐きながら、ビールを戻して行く。

「あんたの生活態度に問題があるからでしょ。普通なら、アキがくる必要もなかったのよ」

「……なんだ? 食つて欲しかったのか? 今はそんな気分じゃないんだが」

美波がジト目で伐を見ると伐はため息を吐き、

「3Pか？　今日は体力的に……」

「だから、そう言うのを止めなさい。って言ってるのよ」

明久と美波を食うと言うと美波は再度、伐の胸ぐらをつかむ。

「……たく、口うるせえな。別に俺の生活態度が悪かろうとお前には関係ないだろ」

「関係ないわけないでしょ！！　元々、瑞希の転校だって、あんたの悪い噂のせいでしょ！！」

伐は美波の相手をするのが鬱陶しいと言いたげに彼女の手を払って言うが美波は伐を怒鳴りつける。

「だいたい。それがわかんねえんだよ。俺は自分で言うのもあれだが善人じゃねえんだよ。正直、あの胸を見れなくなるのは残念だが、基本的にあいつが居なくなろうとどうでも良い」

「あんたね」

「話は終わってねえよ。問題は巨乳娘の父親と俺は面識がないのに俺を名指しにしてきたって点だ。一応、商売柄、知り合った人間の名前と顔は忘れないようにしているが、俺の関わった人間で学園以外で巨乳娘との関係者と俺に接点があると思うか？」

「そうだね。確かに姫路さんのご両親と黒須くんは関係なさそうだね」

伐は瑞希の両親と自分のつながりが見えないと首を傾げると明久は頷く。

「あれじゃないの？ 『ノラ猫』 っていう噂を聞いてるとか」

「それこそ、ありえねえんだよ。一般人がノラ猫」俺なんて図式がどこから出てくる？ あの人のつてでそれなりに裏の界限や権力者には名前が知れてるかも知れないけどな」

「……あんたはいつたいどんな生活してるのよ？」

美波は伐の生活に大きなため息を吐くが伐は気にする様子も見せず、

「巨乳娘の親父が俺」ノラ猫だと知ってる人間とつながりがあるとしたら、召喚大会の結果を見ても納得しない可能性はあるな。まあ、どっかでケンカを売ってきた相手を半殺しにしているのを見かけたくらいだと良いんだが」

瑞希の父親が『黒須 伐』に不信感を持っている事を祈るとわざとらしく十字架をきる。

「ねえ。あんたってクリスチャン？」

「なわけねえだろ。俺は宗教なんてペテンに付き合うほどヒマじゃねえんだよ。だいたい、来世だ。祈れば幸せになれるだ？ ただのバカだろ。例え、神がいたとしても神っていうのは俺らみたいな塵あくたをあざけ笑ってる性悪だ」

伐は神など信じないと言っと、



「えーと、タ……」

「これで会計お願いします」

レジでタバコを追加しようとするが、美波に邪魔される。

## 第112問（後書き）

どうも、作者です。

伐と美波のやりとりが好きです。

美波相手だと伐は少しだけ受け身な会話ですから。（苦笑）

瑞希の父親が知っているのは『黒須 伐』？ それとも『ノラ猫』？

そして、鉄人に睨まれている教室は？

## 第113問

「……なに、これ？」

「秀吉、姫路さん、何があつたの？」

伐、明久、美波の3人が教室に戻るとクラスメート達はよほど疲れ  
ているのかぐったりとしているが、

「おい。休んでるヒマがあつたら働け」

伐は表情を変える事なく、ぐったりとしている男子生徒を蹴りなが  
らまっすぐに歩いて行く。

「く、黒須、もう少し労ってやれんかのう。先ほどまで鉄人がおつ  
て、みな、限界まで働いておつたのじゃ」

「知らねえよ。だいたい、バカ何人かが雑巾とほうきで野球でも始  
めて西村に捕まつたんだろ。自業自得だ……おい、木下、本当なの  
か？」

「……うむ」

秀吉は伐の行動をいさめようとするが、伐は知らないと言うと冗談  
で西村教諭に捕まつたと言うが秀吉は伐の一言に頷く。

「……冗談で言っただけだな」

「……まったく、坂本、あんたがついていながら何やってるのよ」

伐がため息を吐くと美波が雄二に言うが、

「美波、雄二の事だから、先頭に立ってたはずだよ」

「だろうな」

「……」

明久は雄二も参加していたと言うと瑞希と秀吉は何も言わず、その沈黙が明久の言葉を肯定している。

「……まったく、あんた達はやる気があるの」

「まあ、気にするな。作業自体は進んでるんだ。美春、木下、巨乳娘、適当に取ったら配ってやれ」

美波はため息を吐くと伐はコンビニ袋から缶コーヒーを取り出し、ブルタブを開けながら言う。

「ワシらが配るのか？」

「綺麗どころが配ればまたやる気になるだろ……島田、睨むなら、お前も手伝えば良いだろ」

秀吉は自分達が配るわけがわからないと言うが、伐は女性陣が配る事で男子生徒がやる気を出すと言うと名前があがらなかった美波は伐を睨みつけ、伐は美波にも配れと言うが、

「黒須くん、美波が配るより、ミサちゃんが配った方がみんな元気

にな……いだだだだ！！！？？？」

明久は美波じゃ役不足だと言い、美波のお怒りを買い、関節技をかけられる。

「……ダーリン、なぜ、余計な事を言うんだ。島田、ダーリンにそんな風に言われたくなければもう少し考えて行動しろ。ツンデレも行き過ぎればただの暴行だ。そのうち捕まるぞ」

「……わかったわ」

伐は明久と美波を見てため息を吐くと飲み干した缶コーヒーの空き缶をゴミ箱に投げると、

「すごいです」

「一発じゃな」

空き缶はきれいな弧を描きゴミ箱に入る。

「さてと後はこれの配線か」

「黒須くん、これはどうするんですか？」

伐はまとめてある機材を見て言うと、瑞希が伐に質問する。

「せっかく、召喚大会決勝進出者がいるのにお前らが見れないのはあれだろ。それで康太の設置してる盗撮用カメラと盗聴器の電波を拾ってここでも見れるようにしようと思ったんだ。会場じゃ前を陣取らなければ見えにくかったしな。客引きには良いだろ」

「はい」

伐は興味なさそうに言つと瑞希は召喚大会を見れる事が嬉しいよう  
で嬉しそうに頷くと、

「まあ、頑張つて応援してやれ。お前が応援すればあのバカは喜ぶ  
だろ」

「はい。一生懸命応援します。吉井くんも坂本くんも清水さんも黒  
須くんもです」

瑞希は全員を応援すると言つ。

「……巨乳娘、俺達が勝つと問題があるんだよ。理解してるのか？」

「はわ！？ そ、そうでした。でも、決勝戦ですし、やっぱり、頑  
張らないといけないかな？ って……」

伐は白銀の腕輪の暴走条件を知ってるはずの瑞希の言葉にため息を  
吐くが、瑞希は少し慌てながらも伐には頑張つて貰いたいと言つ。

「……わかった。頑張つて負けてきたら良いんだな」

「そうじゃなくてですね……黒須くん、ありがとうございます」

「礼の意味がわからん」

伐は話が上手く噛み合わない瑞希との会話にため息を吐く。

「あ、あの。黒須くんや吉井くんは私の転校の事を知ってるんですよね？　それで頑張ってくれてるんですね？」

「……まあ、俺は依頼を受けただけだな。それより、知ってたのか？」

「はい。なんとなくですけど、学園長室での吉井くと坂本くんを見てて……」

「ダーリンを見てての間違いだろ」

「そ、そんな事はないです」

瑞希は伐達が瑞希の転校阻止のために動いた事を知っていたように伐に頭をさげると伐は瑞希をからかうように言つと瑞希は顔を真っ赤にして慌てると、

「……別にうるさく言つつもりはないけどな。女から押し倒しても問題はないだろ。ダーリンは鈍いからな。それくらいやらないと気づかないだろ」

「お、押し倒すなんて！？　そ、そんな事は！？」

伐は瑞希にさっさと行動に出ろと言い、瑞希は顔を真っ赤にして慌てる。

### 第113問（後書き）

どうも、作者です。

遊んで鉄人に捕まったFクラス。危機感ないな。（苦笑）

瑞希と伐の会話。この2人が落ち着いて話するのはなかった気がしますね。

アンケート

1位 愛子 6票

2位 美春 4票

3位 先送り 3票

4位 美波 2票

5位 優子 1票

となっています。愛子が逃げ切るのか美春が追いつくのか？

個人的には美波に頑張って貰いたい。（苦笑）



## 第114問

「……いつもそばにいて思っている日常って言うのは簡単に壊れるぞ」

「どという意味ですか？」

伐は慌てている瑞希を見てため息を吐きながら言つと瑞希は意味がわからないようで顔を赤くしたまま首を傾げる。

「さあな。こつから先は自分で考えろよ。俺はそこまで優しくねえよ」

「黒須くん？」

伐は自分で考えろと言つと立ち上がり、瑞希は伐に声をかけるが、

「タバコ吸ってくるだけだ。そろそろ、康太も復活するだろうし、配線は康太に任せる。あいつの方が詳しいしな」

伐は瑞希の呼びかけに返事をするとうちを出て行く。

「あれ？ 姫路さん、黒須くんは？」

「タ、タ、タバコを吸いに行くそうです！？」

「また？ 問題起こさなければ良いけど」

明久は伐が出て行ったのを見て瑞希に聞くと瑞希は明久に声をかけ

られて声を裏返すと美波は伐のタバコに良い印象がないせいかなため息を吐く。

「まあ、黒須くんだし、大丈夫だよ」

「何を根拠に？」

明久は伐なら問題ないと言うと美波は明久に聞き返す。

「ほら、黒須くんはそこら辺は上手くやると言うか、そんなへまをしな……………あれ？」

「吉井くん、どうかしたんですか？」

「アキ、どうかしたの？」

明久は苦笑いを浮かべながら伐は大丈夫だと言おうとすると何かが引っかかり首を傾げる。

「いやさ。姫路さんのお父さんがどうして黒須くんを知ってるのかな？ とお……………姫路さん、今の話なし！！」

「大丈夫ですよ。美波ちゃんから転校の事を聞いたんですよ。さつき、黒須くんに教えて貰いました」

明久は瑞希の転校を知らないはずになっているので慌てて話を誤魔化そうとするが、瑞希は明久達が自分のために動いてくれた事を知っていると言う。

「……………あいつ、あれで口が軽いわよね」

「美波ちゃん、違いますよ。黒須くんは優しいんですよ。ただ、素直に手を伸ばすのが照れくさいです」

美波は瑞希に伐が自分達が瑞希に黙ってやっていた事をバラしていたのを知ってため息を吐くと瑞希はクスリと笑うと、

「そうは見えないけどね」

美波はもう1度、ため息を吐く。

「それで、吉井くん、お父さんと黒須くんがどうかしたんですか？」

「あ、うん。僕が見ていた黒須くんと姫路さんと姫路さんのお父さんがケンカになった黒須くんが重ならないんだよ」

「どういう事ですか？」

「黒須くんって、基本的に受け身の人なんだよ。ケンカを売られれば買っけど、自分からは仕掛けないんだ」

明久は瑞希が父親とのケンカになった伐が普段の伐と重ならないと言う。

「確かに、そうね」

「雄二みたいなバカなら、悪名が広がるのが名誉みたいに言うだろうけど、黒須くんは名前が広がるのは面倒だとか言いそうでしょ？」

「……おい。明久、ずいぶんと言いたい放題だな」

明久の言葉の途中で復活したようで青筋を浮かべながら明久に声をかけ、

「事実だろ。バカ雄二」

「あん？ やるのか、バカ久」

明久と雄二の睨み合いが始まる。

「確かに明久の言う通りじゃのう。のう、姫路、お主の父親はなぜ、黒須を知っておったのじゃ？」

「はい。えーと、会社の同僚の方が黒須伐と言う少年をリーダーにした不良グループに……あれ？」

「……黒須が誰かとつるんでケンカ？」

秀吉が瑞希に聞くと瑞希は父親から聞いた伐の話の聞いて首を傾げると美波も同様の疑問を持ったようで首を傾げる。

「……伐の名前を悪用しているヤツがいる」

「って考えるのが妥当だろうな。あいつの名前を使って暴れればあいつが出てくるとでも思ったんだろが」

「黒須はそんな挑発にのらんのじゃ」

雄二、康太、秀吉は瑞希の父親が言っていた伐は別人だと結論付ける。

「それがわかれば瑞希の転校はなくなるんじゃないの？」

「だけど、黒須とそいつが別人だって証明できないだろ」

「黒須の写真を見て貰うのはどうじゃ？」

明久達は伐にかかった疑いを取り除こうと話をはじめるが、

「……話しないで働け」

「いだ!？」

タバコを吸って帰ってきた伐が明久を後ろから蹴る。

「ちょっと、黒須くん、何をするんだよ!？」

「そうじゃ。上手くいけば、姫路の転校の話もなくなるのじゃぞ」

明久と秀吉は伐に自分達は解決策を見つけたと言っが、

「知るか。さっさと始めろ。俺はバイトがあるんだよ」

伐はそんなものは知らないと言っ。

## 第115問

「待つてよ。黒須、これがわかれば瑞希の転校も取り消されるかも知れないでしょ。それにあんたへの疑いだって晴れるのよ」

「お前らバカだろ……悪かった。今更だな」

美波が伐につかみかかるが伐は興味なさそうに美波の手を払う。

「何よ。その言い方は？」

「巨乳娘の父親が気にしてるのはFクラスの悪名、Fクラスの成績だろ。俺はあくまでその一部だ。それに俺じゃないと証明されてもそんなバカ達に因縁つけられてる俺の評価は変わらない。足りない頭を使って余計な事を考えるなら、必要な事をやれ」

美波は必要な事だと言いたげに伐を睨みつけるが伐は無駄な事を止めろと言い、自分の作業を続けていく。

「……確かに、黒須の言う事も一理あるか」

「でも、雄二」

伐の言葉に雄二は納得したようで頷くが明久は納得できないと言う表情をする。

「黒須の言う事は間違ってる。時間を無駄にして、姫路や島田の帰りが遅くなるとまた悪い印象を与える可能性もあるしな」

「確かに姫路さんや秀吉が帰る時間が遅くなると危ないよね」

「……アキ、何で、ウチが入ってないのかしら」

雄二は伐が何を考えているのか理解しているようでため息を吐きながら言々と明久は納得するが、美波の名前が入っておらず、美波は額に青筋を浮かべる。

「そりゃあ、美波みたいな。胸のない女の子を……うわ！？　ちょっと、清水さん」

「コロシマス。オネエサマヲバカニシテキズツケル。ブタヤロウ。ミハルノテデヤツザキニシマス」

明久は美波の怒りなど気にする事なく、笑い飛ばすと美波をバカにされて人外化しはじめた美春からナイフが飛ぶ。

「……黒須、止めてくれ」

「……めんどくせえ。もともと、ダーリンが余計な事を言うからあなるんだ。たまにはダーリンもあいつに引き裂かれれば反省するだろ」

「……引き裂かれたら終わりなのじゃ」

雄二は美春の様子にため息を吐き、伐に言々と伐は余計な一言が多い明久に腹を立てているようで知らんと言っ。

「コロシマス。コロシマス。コロシマス。コロシマス。コロシマス」

「……黒須、あんた、美春をどうにかしなさいよ。あんたしか美春を扱えないんだから」

「あん？ お前だって、ダーリンの無神経な言葉に腹を立ててるんだろ。しばらくはほっとけ」

美波は美春の様子に冷静になったようで伐の肩をつつきながら言うが伐は知らないと言う。

「ちょっと、黒須くん、見捨てないで!？」

「自業自得だ。自分の言葉に責任を持つ事を覚えろよ」

「明久、そこはもつと危険みたいだぞ」

明久は美春から逃げるために伐の後ろに隠れると雄二は楽しそうに明久に言う。

「え？ ここが1番、安全だ……し、清水さん？」

「オネエサマダケデハナク、バックンニマデチカヅクブタヤロウ。ヤハリ、ミハルノコノテデヤツザキニシマス」

美春は人外化してる影響か、自分が認めようとしない想いを漏らしながら、背中からはみ出す黒い殺意<sup>もの</sup>はさらなりまがまがしさを強めて行く。

「……………伐、そろそろ止めろ」

「……………めんどくせえな」



あまりの美春の変貌にFクラス全員がひき始めた時、康太が伐に言う  
と伐はため息を吐き、

「コロシマス。コロシマス。コロ、コロス。コロス。ミハルイガイ  
ヲミルバツクンモミハルノモノニナライノナライッソ」

「黒須くん、逃げよう!？。このままじゃ、2人とも清水さんに殺  
されちゃうよ!？」

「……逃げるなら、1人で逃げるよ。めんどくせえ」

美春が伐と明久に飛びつくと明久は伐の手を取り、逃げだそうとす  
るが伐は明久の手を払うと、

「……美春、俺は死ぬなら、腹上死と決めてるんだ。俺を殺したい  
なら、付き合うよな？」

飛びかかってきた美春を平然と受け止め、彼女の耳元でささやき、

「……………」

「ん？ 処理落ちしたな」

美春は伐の言葉に頭がついていなくなり、気を失う。

## 第115問（後書き）

どうも、作者です。

美春、人外化での告白。（爆笑）

雄二の言っていた明久への殺意は強まりました。

明久は生き残れるのか？

処理落ち美春の反応に伐は何かを思っんでしょうか？

アンケート

1位 愛子6票

2位 美春5票

3位 先送り3票

4位 美波2票

5位 優子1票

美春が追い上げてます。

今回の美春の告白で票は動くのか？

番宣

バカテスで4作目を書き始めました。

『あたしと優菜とFクラス』と言う作品です。

この作品を異色。(爆笑)

## 第116問

「さてと、さっさと始めるぞ」

「ちよつと、黒須、あんた何してるのよ!？」

伐は処理落ちした美春を投げ捨てる。と美波は美春を抱き止めて、伐を怒鳴りつける。

「……何か文句あるか？」

「文句あるか？　じゃないでしょ。美春はあんな状態だったけど、あんたに告白したのよ。もっと優しくするべきでしょ!！」

伐は美波の反応に面倒そうに言う。と美波は伐の態度が気に入らないように伐を怒鳴りつけるが、

「知らねえよ。何度も言わせるな。恋愛なんかめんどろな事を俺はする気はねえんだよ。だいたい、そんな事をやってられるほど俺はヒマじゃない」

伐の反応は冷たい。

「黒須、あんたね!！」

「……うるせえな。その迷惑な倒錯娘を俺に押し付けて自分は安全圏か？」

美波は伐の反応がよほど頭にきたように伐を怒鳴りつけるが伐は面

倒事を押しつけるなど言う。

「誰もそんな事を言っていないでしょ！！ 確かに美春の行動は迷惑だけど、それとこれは話が別よ。女の子からの告白なのよ。大切にしようとは思わないの？」

「思うわけねえだろ。良い事を教えてやる。愛だ。恋だ。言えるのは生きるのに余裕のあるヤツの特権だ。悪いが、俺には興味もないし、ヒマもない。ただやりたい時はその時、適当に食えば良いしな」

美波の言葉を伐は鼻で笑うと、

「さっさと始めろ。霧島も話していたが遅くなるとおかしなヤツらが出てくるしな……まあ、ここにおかしなヤツらがたまってるわけだが」

早く作業に移るように言うとき美波の言葉など興味がなさそうに作業を始めようとするが、

「ちょっと待ちなさい。ウチはそんな事を言ってるわけじゃないわよ！！ 美春からのあんたへの告白なのよ。何かないわけ？」

「それこそ、お前に関係ないだろ…… ったく、他人ひとの話に首をつこつむんじゃねえよ。それともなんだ？ どんな形でも告白したこいつがうらやましいから当たってるわけか？ それとも気づかない鈍バ感への当てつけか？ だいたい、仮に俺がどんな答えを出すにしてもお前は第3者（他人）なんだ。熱くなるんじゃねえよ」

美波は伐の胸ぐらをつかもうとするが、伐は美波の手を軽く払うと熱くなる事なく首を突っ込むなど言う。

「黒須……」

「まあ、島田も落ち着け。第3者が関わると面倒になるのは本当の事だしな」

美波は伐に今にもつかみかかりそうな目を見ると雄二は伐は女だろうと平気で殴りそうなため、割って入る。

「坂本、止めないで。こいつには思い知らせてあげないといけないのよ!!」

「落ち着け。黒須は女だろうが、かかってくるなら、平気で殴りつけるぞ」

「当然だ。男女平等とか抜かしてるんだ。仕掛けられたら俺は女だろうが殴りつける」

美波は雄二の制止も聞かずに伐に飛びかかろうとすると伐は口元を弛ませるがその目は寒気を感じるほど冷たく、

「ひっ!?!」

美波は伐の目を見た瞬間に血の気が引く。

「……もう1度、言う。俺はこいつが告白してこようが何も感じない。愛だ。恋だ。そんなものは信じる価値すらない。勝手に言うのはかまわんが俺に押しつけるな。わかったか。現実も知らないバカ女」

「いたっ!？」

伐は美波に近寄り、言いたい事だけ言っていると彼女の額に強力なデコピンを喰らわすと、

「霧島、俺はバイトの時間になるから、あがる。遊んだ分、ちゃんと働けよ」

先にあがると言い返事を聞く事なく教室を出て行く。

## 第116問（後書き）

どうも、作者です。

告白されようが伐は変わりません。

熱くなる美波に対して冷静な伐。

そして、ノラ猫帰宅。

相変わらずのマイペース。

アンケート

1位 愛子、美春 9票

3位 先送り 3票

4位 美波、優子 2票

6位 秀吉 1票

美春がついに追いつきました。  
そして、秀吉参戦。（爆笑）



## 第117問（前書き）

話の流れ上、今回はいつも以上に短いです。

## 第117問

(……ちっ)

「……………伐。らしくないぞ」

伐は教室を出ると美波との会話にそれなりにイラついてたように舌打ちをすると、康太が後をつけていたように伐に声をかける。

「……………何のようだ？」

「……………たいした事じゃない。ただ、脅しとは言えやりすぎ」

伐は康太を睨みつけると康太は首を振り、伐の美波への言葉は脅しだと理解しているようである。

「……………脅し？ 何を言ってる本心だ。俺は男だろうと女だろうと仕掛けてくるなら、顔だろうがどこだろうが殴りつける」

しかし、伐は康太の言葉を鼻で笑うが、

「……………それは嘘だ。伐にとってあの人の教えは『絶対』。伐にとってはその教えを守り続ける事があの日の『贖罪』だから」

康太は視線を逸らす事なく言い切る。

「……………勝手に言ってる」

「……………勝手に言わせて貰う」

伐は康太の言葉に小さく顔を歪ませるが直ぐに表情をもとに戻して歩き出す。康太の話はまだ終わってないよう。伐の後について歩き出す。

「……ついてくるな。話すのは勝手と言ったが聞くとは言っていない」

「……勘違いするな。俺はそっちにようがあるだけだ」

伐は康太が自分の後をついてくるため、ついてくるなと言うが康太は伐の言葉を聞く事なく後ろを歩く。

「……なら、先に行けよ。後ろをちよろちよると歩くな」

「……俺は俺のペースで歩く。伐の言う事を聞く気はない」

伐は康太が鬱陶しいようで康太に先を歩けと言うが康太は伐の言葉を聞かないと言うと、

「……ったく、何だよ。用があるなら、さつさと言え。俺はお前らとは違うんだ。その日のエサにありつかないといけないんだぞ」

伐は舌打ちをして康太に用件を話せと言う。

「……特に用はない。ただ、無理をするな。工藤が捕まったのはお前のせいじゃない」

「あ？ 何で俺が気にする必要がある？」

康太は先ほどのチンピラと揉めた事を伐が自分を責めていると思っ

ているように声をかけるが伐は康太の心配を鼻で笑う。

「……………そうか。何ともないと言うなら、それで良い。ただ……………」

「……………悪いな。俺はお前に心配されるほど弱かねえよ」

康太は伐に何か言おうとするが、伐は康太の言葉を遮り、歩き出し、

「……………」

康太はそれ以上、何も言わずに伐の背中を見送る。

## 第117問（後書き）

どうも、作者です。

伐と康太の会話。康太票を狙ってるわけではありません。（爆笑）

アンケート

1位 美春11票

2位 愛子10票

後は変わらないため省略。（苦笑）

美春、逆転です。やはり人外化での告白の影響か？

まあ、どっちになってもしばらくは美春と愛子で遊ぶつもりです  
けど。（苦笑）

## 第118問

「……で、結局、終わらなかったわけか？」

『『『すいませんでした』『』『』』

清涼祭2日目に少し遅れて登校すると喫茶店の修理は終わっており、伐のため息混じりの言葉にクラスメート達は伐に罵って貰いたいように土下座をして伐の次の言葉を待つが、

「霧島、後、どれくらいかかりそうだ？」

「一般開放までフルに使ってギリギリつてところだ」

「なら、さっさと始めるか」

伐はクラスメートに構う事なく、雄二に進捗状況を確認すると作業を始め出す。

「……ねえ。雄二、黒須君はどうかしたの？」

「ん？ 別にどうもしないだろ。いつも通り、愛想はないがな」

「でもさ。いつもなら、冷たい言葉の1つや2つあるよね？」

明久も伐の冷たい言葉に何かおかしなスイッチが入っているように雄二に声をかけるが雄二はいつも通りだろと言い、

「さっさと始める。時間がないぞ。ムツツリー二、須川、料理の仕

込みは終わってるか？」

「……………問題ない」

テキパキと状況を確認して必要な人員を振り分けて行く。

「……………ねえ。黒須」

「黙れ。話す時間があるなら、さっさと働け」

伐は気だるそうな表情で作業を続けていると昨日は言い過ぎたと思っ  
っているのか美波が伐に声をかけるが、伐は美波を追い払うと、

「康太、カメラの方向のチェックは終わってるのか？」

「……………問題ない。昨日、あれから確認した」

「なら、後は本番中の映像の切り替えか？　まあ、これは康太に  
できないか」

召喚大会を映し出すための機器を見てため息を吐く。

「ねえ。黒須、聞ってるの？」

「うるせえな。俺がお前の相手をする義務はねえよ。ヒマならどっ  
かで働くか、外で愛想笑いでもして客引きでもしてろ」

美波は自分の話を聞かない伐を見て、伐の手をつかむが伐が捕まる  
事はなく、めんどくさそうに美波に仕事をしろと言うと、

「昨日はウチが言い過ぎたわよ。確かにウチがうるさく言う事じゃなかったわよ。だけどね……」

美波は昨日の伐への態度を謝り、

「悪いんだけど、美春の再起動を頼める？　ウチが声をかけても無理なの」

教室の隅を指差す。

「……何で、美春はあのような事を言ってしまったのでしょうか？」  
美春が好きなのはお姉さまであつて、あんなスケベ男ではありませんわ。バツクンをスキニなるナンテアリエマセンわ。ミハるガス  
キナのはお姉さま以外にいませんわ。そう美春が好きなのはお姉さま  
お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉  
さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉

「……あれはなんだ？」

美波の指の先には壊れたテープレコーダーのように何度も同じ言葉を繰り返している美春が置いてあり、伐は眉間にシワを寄せて美波に聞き返すと、

「昨日のおかしな告白を覚えてたみたいで朝からあの調子なのよ」

美波は美春をどうしたら良いかわからないようにため息を吐く。

「知らん。勝手に自爆したようなヤツは捨てておけ」

「でもさ。美春があのままだったら、召喚大会はマズいでしょう？」



それにさっきしばらくDクラスに預かって欲しいって頼んだら返品されちゃったのよね」

伐は知らないと言い切ると興味なさそうに作業を続けるが、美波は召喚大会に影響があると言い、Dクラスにも預けて置けないと言う。

「……仕方ない」

「やってくれるの？」

「……売上の低下は俺の収入に関わる」

伐は依頼料にしか興味はないと行った感じで立ち上がると、

「さっさと働け」

「いたっ!？」

美春の頭をメニューで叩くと美春は何があつたかわからずに見上げると伐が無表情のまま立っており、

「それ以上、遊んでるとこの場でひんむいて捨てるぞ。ここのバカどもはもしかしたら、そっちのヤツらより質が悪いからな」

働けと言うと自分の作業に戻り、

「……何で、美春の頭を叩くんですか!？」

美春は一瞬、呆けた後、伐を怒鳴りつけるが伐が美春の相手をする事はない。



## 第118問（後書き）

どうも、作者です。

美春は本当にヒロイン候補かと疑問に思う件。（爆笑）

普通なら近づかないよな？と思いながらも気にしないのが伐です。

アンケート

1位 愛子 12票

2位 美春 11票

3位 美波 4票

愛子が再び、1位に返り咲きます。このまま行くのでしょうか？

そして地味に票を増やしてきた美波が追いつき三つ巴の戦いになるんでしょうか？

期限は清涼祭修理までですが後何話あるかはわかりません。（爆笑）

## 第119問

「伐くん、いる？」

「ん？ 工藤か、黒須なら、学園長室で休憩中だ」

清涼祭2日目が始まり、しばらくすると愛子が伐を訪ねるために喫茶店に顔を出すと雄二が愛子を見て伐の居場所を答える。

「そつか。残念」

「なんだ。黒須に用があるなら、学園長室に行ってくれば良いだろ」

「いやあ、流石にボクは1人で学園長室に入る勇氣はないかな」

愛子は伐がいない事に苦笑いを浮かべると雄二は用があるなら行ってこいと言つが愛子は流石に無理だと言つ。

「まあ、確かにそつか。それで何にする？」

「うーん。伐くんに会いたかったただだから、特に考えてなかったんだよね」

雄二は愛子にメニューを渡すと愛子は苦笑いを浮かべたまま、メニューを開くと、

「えーと、工藤さん、黒須くんに会いたかったって言うのは？」

「またあのスケベが何かしたの？」

瑞希と美波が愛子の言葉を聞いて声をかけてくる。

「えーと、ボク、昨日、黒須くんに告白したんだ」

「そ、そうなんですか!？」

「……美春と言い、工藤さんと言い、何であの性悪に？」

愛子は2人の質問に伐への告白を隠す必要はないと思っているのか隠す事なく言うと瑞希は驚きの声をあげ、美波は伐がモテる意味がわからないと言いたげに眉間にシワをよせると、

「あつ、やつぱり、清水さんもだったんだ。先に牽制しといたのが仇になったかな」

愛子は美春が伐の事を好きになっていると気づいていたため、苦笑いを浮かべる。

「……なんで、黒須みたいなのがモテるか、ウチには理解できないわ」

「美波ちゃん、言い過ぎじゃないでしょうか？」

美波は伐の行動を思い返してみたようだがやはりわからないと言うと瑞希は苦笑いを浮かべて言うと、

「そりゃあ、人の好みは人それぞれだしね。ボクだって、2人がどうして吉井くんの事が好きかわからないしね」

愛子は伐をバカにされているのがそれなりに頭にきているのか笑顔で瑞希と美波の想い人である明久はないと言う。

「そんな事はないです。吉井くんは昔から優しくて頼りになります  
! !」

「べ、別にウチはアキの事なんて! ?」

瑞希は明久をバカにされたと思い反論をしようとし、美波は口では明久の事など何とも思っていないと言うが、目は愛子を睨みつけている。

「でしょ。ボクは2人の好みはわからないし、2人だってボクの好みはわからないんだから、口にする事じゃないと思うよ」

「.....そうね。ウチが悪かったわ」

愛子は瑞希と美波の反応に満足がいったようでくすりと笑うと美波は愛子に謝ると、

「まあ。伐くんは吉井くんみたいな優しさは無いけど、伐くんだって優しいんだよ。ただ、恥ずかしがり屋さんだから、表立っては見せてくれないし、何より、口が悪いから誰も気づいてくれないんだよ。まあ、ボクとしてはこれ以上、ライバルが増えるのは遠慮したいけどね」

愛子は自分で言うときながら恥ずかしくなったようで瑞希と美波から目を逸らして笑う。

「ふーん。そんなものかな?」

「知ってる？ ノラ猫って汚いとかかわいげがないと言われるけど、あれで結構、かわいいんだよ」

美波は納得しようと思っただけは頷くと愛子はくすりと笑い、

「坂本くん、やっぱり、ボクは帰るよ。 伐くんがいる時間を見てまたくるから、その時はお願いね」

「ああ。 またの来店、待ってるぜ」

メニューを閉じると雄二に帰ると言い、

「迷惑をかけたお詫びに今度は代表を連れてくるね」

「おい！？ 工藤、止めてくれ」

最後に雄二に翔子を連れてくると言っただけで喫茶店を出て行く。

## 第119問（後書き）

どうも、作者です。

愛子来襲。しかし、伐は喫煙中。

けっきょく、伐に禁煙は無理です。（苦笑）

アンケート

1位 愛子 13票

2位 美春 12票

3位 美波 5票

接戦は続きます。



## 第120問

「……面倒だな。不戦敗で良くないか？」

「何を考えてるのよ。あんたが決勝を見れるようにって設備をつけたんでしょ。なら、しっかりと働いてきなさいよ」

「まったくなのじゃ。これを設置するにもそれなりに時間を割いたのじゃ。使わなければもったいないのじゃ」

伐はタバコ休憩から帰ってくるとすでに竹原の企みを潰しているせいか召喚大会が面倒になってきているようであまりため息を吐くと美波と秀吉は伐の言葉に呆れたようなため息を吐く。

「……ったく、わかってるけどよ。実際は面倒くさくなってるのは俺だけじゃないだろ？」

「確かに。何だかんだ言って目的のもの（ペアチケットと白金の腕輪）を手に入れるのは決定したしな。イマイチ、やる気にかけるな」

伐は面倒だと言いたげに言う雄二も伐と同じようにため息を吐く。

「あのね。あんた達はクラスだけじゃなく、文月学園の代表なの。あんまり、おかしいところを見せて学園の評判を下げたら頑張ってきた意味がないでしょ」

「そつだよ」

美波は伐と雄二に気合いを入れろと言うと明久も2人にしゃんとしろと言うが、

「あのなあ。こっちは負けて、その後に西村の補習を受けないといけないんだ。不戦敗の方が点数も減らないし、お得だろ？」

「確かにそうですね」

伐は決勝戦は出来レースのため、自分と美春には補習が待っているだけだと言うと美春は伐の意見に賛成だと頷く。

「ですけど、決勝戦進出なんですよ。Fクラスから2組もそれなら注目されますよ」

「……目立つのは面倒だからな。商売柄目立ちたくないんだが」

瑞希は知名度が上がると言うた伐はため息を吐きながら、立ち上がり、

「まあ、肉奴隷候補が面倒な状態になったからな。新しい候補を探すのに役立つか」

「ちょっと待ちなさい！！何なんですか？その態度は！！」

頭を掻くと美春は伐の言葉に立ち上がる。

「なんだ？お前もお子ちゃまみたいに俺を縛り付けておきたいとでも言うつもりか？勘違いするなよ。俺はお前の肢体カラダ以外には興味はないんだ」

「ちょっと、黒須！？ あんた、こんなところで何を言い出すのよ！？」  
「ちょっとは美春の気持ちも考えなさいよ」

伐は美春の反応に面倒くさいと言いたげに言うと美波は慌てて伐の口を塞ごうとするが、

「島田、お前も余計な事に首を突っ込むな。そうやって、どこかでこいつを甘やかすから、こいつが頭に乗ってお前を追いかけて回すんだ。イヤならイヤだと拒絶しろ」

伐は美春がつけあがった原因は美波にあると言う。

「黒須君、そんな言い方はヒドいよ！！」

「は？ 事実だろ。面倒な相手とは関わるな。安全に生きるのに最も単純なルールだ。覚えておけよ。今回だってお前らは俺に関わらなければ少なくとも今の状況にはなっていないんだ。お前らに取つての『最悪』はどんな形かは知らないけどな。今の状況が最悪それに近い事はバカなお前らでもわかるだろ」

明久は伐の言葉に伐を怒鳴りつけるが伐はここにいるヤツらは甘いと鼻で笑う。

「……黒須君」

「なんだ？ バカが1人前に怒ったか？」

明久は伐の言葉に頭にきたようで伐の胸倉をつかむが伐は簡単に明久を交わすと、

「悪いな。仲良しごっこは吐き気がするんだ。俺は決勝戦までサボらせて貰う」

気だるそうに教室を出て行こうとするが、

「待てよ。今の言葉を取り消せよ。美波や清水さん、みんなをバカにするな!!」

明久は伐につかみかかる。

「雄二、明久を止めるのじゃ」

「いや、待て。黒須には黒須の考えがあるんだろ」

秀吉は明久を止めようとするが、雄二は秀吉を押さえる。

「あのな。バカをバカにして何が悪い。俺は事実を言っているんだ。謝る意味がわからん」

「ふざけるな!!」

伐がため息を吐いた時、明久は伐を殴ろうと拳を振り上げた時、

「待て。明久、考えろよ。ケンカはマズいんだ」

「だけど、雄二」

雄二がため息を吐きながら明久の手をつかむと、

「黒須、このバカはお前の考えに納得が言っていないみたいだぜ」

伐を挑発するように笑う。

「バカに納得できるなんて思っちゃいねえよ」

「だろうな。だけど、それだと困るんだ。だから、召喚大会で決着をつける。お前の事だ。間違っても俺達に勝つなんてへまはしないからな。お前と明久で決着をつけな。お前は俺に負ければはあの依頼は守れるだろ？　それでお前が負けたら、明久の言い分でも少し聞いてやれ」

雄二は伐の考えを理解しているようで伐を上手く悪役にして明久を納得させようとする。

「<sup>バカ</sup>観察処分者がガチで俺と1対1？　結果は目に見えてるだろ」

「まあな。だけど、明久は火が点いてるからな。明久、お前は問題ないな？」

「うん。僕が勝ったら黒須君にはみんなの前で土下座で謝って貰う」

伐は雄二が上手く自分の考えに乗ってくれたため、小さく口元をゆるませるが雄二以外は伐と雄二の思惑に気づいてなく、

「生意気な口は勝ってから言えよ。後、お前が条件を出したんだ。お前が負けた時はわかってるよな？」

「僕は負けない」

明久に向けて冷たい笑みを浮かべて言うと明久は伐を睨み返す。



## 第120問（後書き）

どうも、作者です。

伐の挑発に明久は簡単に引つかかる伐の目的はまあ、ベタベタです  
が明久がやる気になっているから良しとしましょう。（爆笑）

アンケート

1位 美春 18票

2位 愛子 16票

3位 美波 6票

美波は地味に増えていますけど追いつけないですね。

美春が引き離しに入りました。さあ、どうなるんでしょうか？

## 第121問（前書き）

今回はいつにも増して短いです。



## 第121問

（……まったく、簡単に引つかかってくれたのは良いが、あいつはいろいろと大丈夫なのか？）

伐は屋上に登り、自分の挑発の意味もわからずに自分を睨みつけていた明久の顔を浮かべて呆れたようなため息を吐いていると、

「こんなところにいた。どうして、ボクが喫茶店に行くといつもいないの？」

「……知るかよ」

愛子が伐を見つけて駆け寄ってくるが、伐は愛子に見つかりと面倒だと言いたげに立ち上がり屋上を後にしようとする。

「待って！？ 待ってよ。どうして、ボクを無視しようとするの！？」

「うるせえな。何で俺がお前の相手をしないといけないんだ？」

愛子は伐の行動に声をあげて伐の腕をつかむが伐は気にする事なく階段を下りて行こうとする。

「ちょっと！？ 危ない！？ 危ないよ！？」

「そう思っなら放せ」

愛子は伐に引きずられ階段にさしかかり声をあげるが、伐は冷たい。

「なんで、ボクにはそんな風に冷たいの!!」

「知るか。お前が勝手に勘違いしてるだけだろ。俺は誰にでもこんなだ」

愛子は告白までしている自分への伐の態度に文句があると言うが伐は面倒だと言いたげにため息を吐く。

「そんな事ないよ。現にさっきだって教室に行ったらさ。伐くんは清水さんを召喚大会の決勝に出てこないように怒らせてたし」

「それは、なんだ？ 意味のわからない事を言うな」

愛子はFクラスの教室を覗いてきて聞いた伐への文句に伐の考えを理解していると言うが伐は表情を変える事なく、身に覚えはないと言うが、

「間違つてないよ。ボクは清水さんに負けなくらいに伐くんを見てるから、伐くんの不器用な優しさも、迷惑がかかるから自分から人を遠ざけようとする姿も全部」

愛子は伐の顔を真っ直ぐと見て言う。

「……お子ちゃま」

「何……いたっ!? な、何をするんだよ。いきなり!?!」

伐は愛子の顔を見てため息を吐くと愛子にデコピンを喰らわせ、愛子は伐のいきなりの行動におでこを押さえて涙目で伐を見るが、

「お前の浅い考えを押し付けて勝手に美化するな。俺はあいつらみたいなバカを見て頭にきたただけだ」

伐はくだらないと鼻で笑う。

「で、でも、あれで清水さんは怒って決勝に出るかわからないし、吉井くんは本気で怒ってるよ。伐くんを謝らせるって」

「そりゃあ、ずいぶんとヒマだな」

愛子の考えは伐と雄二が明久達を誘導した事を当てているが伐は明久と美春が怒っているなど関係ないと言うと、

「じゃあな。お子ちゃま、俺はお前の相手をする気はないんでな。学祭を見て回りたいなら、他を当たれ」

愛子の相手をするのが面倒だと言って歩き出す。

「ちょっと待ってよ！？ 少しくらい付き合ってよ。良いでしょ」

「興味ねえよ」

「良いから、良いから」

愛子は伐の手をつかむと強引に伐を引きずって行き、

「……めんどくせえ」

伐はため息を吐く。



## 第121問（後書き）

どうも、作者です。

伐の考えは愛子にはお見通し。（苦笑）

そして、伐を拉致。だけどデートの様子は書かれない？

召喚大会の決勝は伐の思い通りに進むんでしょうか？

アンケート

愛子、美春19票で同数です。

今更ですが、作者は2人ともって話やハーレムってのは大嫌いなので書きません。同数で締め切りになった場合は先送りにするかも知れません。（苦笑）

## 第122問

「ねえ。せっかくのデートなんだから、少しでも笑顔を見せてくれないかな？」

「……人を引っ張り回しているヤツのセリフか？ だいたい、こんなくだらない物を楽しむほどヒマじゃないんだよ」

愛子は伐の不機嫌そうな顔に苦笑いを浮かべるが、伐は知らないと言っと、

「……だいたい、俺を誘ってないで他を誘えよ。水泳部期待のホーブなら、それなりに近づいてくるヤツだっているだろ」

「へえ。伐くんはちゃんとボクの事を見てくれてるんだね」

自分にかまうなと言うが、愛子は伐が自分が水泳部に所属している事を知っている事に嬉しそうな表情をする。

「……言っとくが、へんな勘違いするなよ。俺は競泳水着には興味はない」

「……えーと、何でその答え？」

伐は嬉しそうな表情をする愛子に勘違いするなと言うがその発言はズレており、愛子は苦笑いを浮かべる。

「……最近は競泳水着愛好会って言うわけのわからん集まりがあるらしいからな」

「……何をするんだろうね？」

「……愛好会って言うんだから、着るか愛でるんだろ」

伐は興味ないと言うと愛子は顔をひきつらせるが、

「それより、何か食べない？ 機械的に作ってるものなら、食べられるんでしょ？ 学園祭の出し物なんだから、誰かのためにとか、伐くんが食べられない条件は満たしてないと思うんだけど、それに召喚大会の決勝は1時だし、早めに食べておいた方がよいよ」

すぐに笑顔を見せて、伐を食事に誘う。

「……断る。飯なら1人で行け。だいたい、俺はお前に付き合う義理はない」

「ちょっと待ってよ!？」

伐は愛子の誘いを断ると愛子の相手をする気はないと歩き出すが愛子は伐の腕をつかむ。

「……放せ」

「いや。良いでしょ。Fクラスの人達を怒らせたんでしょ。やる事も無いんだから良いでしょ」

「……うるせえな。あのバカ達は俺が挑発した事より、こんな状況を見つけた方がめんどくせえよ」

伐は愛子という事をFFF団に見つかりと面倒だと言う。

「ちゃんと、女の子として見てくれてるんだ。嬉しいな。」

愛子は伐という事を周りからそう言う風に見られているかも知れない事が嬉しいと言う。

「……………わけのわかんねえ事を言っていないで放せ」

「あれ？ 伐くん、もしかしてテレた？」

伐は愛子の言葉に少し呆気にとられると愛子は嬉しそうに伐の顔を覗き込む。

「……………なわけあるか。なんで、俺が……………」

「伐くん？ どうかしたの？」

伐は愛子の事など知らないと言っている途中で伐の視線には何かが映ったように言葉は止まり、愛子は何かあったのかと思い伐の視線の先を見るがそこには特におかしなものはない。

「何かあったの？」

「……………別に、仮に何かあったとしてもお前には関係ねえよ」

愛子は伐の様子に首を傾げるが伐は何もないと言うが、

「……………」



伐の表情は険しくなっ て行き、 1人で歩き出し、

「ちよつと、伐くん？ ……」

愛子は伐を引き止めようとするが、伐の表情は今まで愛子が見た事のない表情で愛子は何も言わずに立ち尽くしてしまふ。

## 第122問（後書き）

どうも、作者です。

伐の視線の先には誰が居たんでしょうか？（苦笑）

アンケート

すいません。前回、投票数を間違えてました。

数え直した投票数です。

1位 愛子21票

2位 美春20票

3位 美波7票

連続投票はなしでお願いします。

## 第123問

(……俺の気のせいだよな。あのクズがいるわけない)

伐は愛子を置いて歩き出すとしばらく何かを探しているが、目的のものは見つからず、気のせいだと思おうとした時、

「……そんな怖い顔をしてどうしたのかな？」

伐の耳には不快な男の声とともに右足の太ももには強烈な痛みが走る。

「……てめえ」

「へえ、立ってられるんだ？　少しは成長したのかな？　『子猫ちゃん』」

伐は振り返り、男を睨みつけると男は伐を小バカにするようなゲスな笑みを浮かべ、その手には伐の右足をえぐったであろう赤い液体が滴るナイフが握られている。

「……何でここにいる？」

「故郷に戻ってくる事を君に責められたくはないな。私から言わせて貰えば君のようなゴミクズが1人前に学校に通っている事の方が責められる事だと思うよ」

伐は男を睨みつけたまま言うと男は完全に伐を見下したような目で嘲笑い、伐に場違いな事をするなと言うと、

「あのクズをせっかく始末してあげたのにまだ、君はそこにしがみつくの？ 君は俺と同じ狂気<sup>もの</sup>になれるのになんであんなちっぽけなものにしがみつくんない？ 私も君も何かをつかむ手は持っていない。あるのは何かを奪うための手<sup>もの</sup>だけだよ。私の忠告を聞けないような賤<sup>しや</sup>のなっていない子猫はあのクズのように保健所送りにしてあげるよ」

伐に愛おしい者を見るような視線で殺意を向ける。

「……悪いな。俺はノラなんでね。首輪をつけられる趣味はねえんだよ」

「へえ、その足を平気で振り回すのかい？ ……だけど、君が思っている以上にケガは深いみたいだよ」

「……っ！？」

伐は痛む足を使いながらもいつもと遜色ない踏み込みで男に蹴り込むが男は伐の蹴りに併せて右足のキズを殴りつけ、その衝撃に伐の顔は歪む。

「……言う事を聞かないならいらないや。あのクズみたいに壊してあげるよ」

「……こっちのセリフだ。てめえの汚い口であの人を語るな」

男は伐の態度に興味がなくなつたと言いたげに言つと普段、冷静な伐からは信じられないくらいに伐からも男と同じような狂気<sup>もの</sup>が溢れ出す。

「そうそう。それを見たかったんだよ。だから、わざわざ、あんなつまらないクズを壊してあげたんだからさ……ふはは。今のはちょっと惜しかったね」

「……黙れ。すぐに口を聞けなくしてやるがな」

男の言葉を遮り、伐の拳は男の顔面に向けられるが男はなんなくそれを交わすと高笑いを浮かべ、伐は冷たく抑圧された声で男に言った時、

「西村先生、あそこです」

「おい。お前達、そこで何を……お前は!？」

伐と男の事を見て美波が西村教諭を連れてくると西村教諭は男の顔を見て驚きの表情を見せる。

「なるほど、宗一がいるわけか。あのクズ、どこまでも余計な事をしてくれる。まあ、良いや。今日は退いてあげるよ。バイバイ。子猫ちゃん」

「待て……っ!？」

「急いでキズの手当てでもしたら、君に障害が残ったりしたら、私の楽しみが減ってしまうからね」

男は西村教諭の顔を見てそう言うとな伐の右足のキズを蹴りつけて、伐の体勢が崩れたのを嘲笑った後、悠々と歩いて行くと伐は立ち上がり、痛む右足を引きずりながらも男を追いかけようとするが、

「……黒須、むちやをするな」

西村教諭は伐をつかむ。

「放せ！！ 俺はあのクズを殺すんだ！！ 放せよ！！」

「……ちよつと、黒須、どうしたのよ？」

伐は西村教諭の体を少しずつ引きずりながら男の背中を追いかけてうとし、美波は今まで見た事のない伐の様子に顔を青くして聞く。

「放せ！！ 放せよ！！」

「……熱くなるな。だいたい、お前を人殺しになぞさせん。俺にあいつとの約束を破らせるな」

伐の姿は今までの伐からは想像もできないくらいに情けなく弱々しい年相応の姿であった。

## 第123問（後書き）

どうも、作者です。

駆けつけた美波と鉄人。

ここで美波の票は延びるのか？（苦笑）

伐の過去に関わっているであろう男。

この男は物語にどうかかわってくるんでしょうか？

伏線が拾えるかは不安です。

男と黒猫、そして鉄人。

この3人にはどんな因果関係があるんでしょうか？

アンケート

1位 愛子 24票

2位 美春 20票

3位 美波 8票

愛子が引き離しに入りましたが伐のピンチに駆けつけたのは美波です。伐と美波の話を書いてヒロイン候補との清涼祭イベントとは一先ず終わりかな？

後は美春が決勝に出てくるかくらいです。



## 第124問

「……まったく、お前は」

「……」

西村教諭は伐を保健室に連れて行くため息を吐くが伐は反応する事なく、先ほどの男への殺意を止められないようにで目の奥には怪しい光が灯っている。

「このキズでは召喚大会は無理だな」

「……勝手に決めるな。島田、そこで青くなってるなら、救急箱でも取れよ。役にたたねえな」

西村教諭は伐の足のキズを見てため息を吐くが伐は何ともないと言うと一緒にきて伐の足から流れる血の量を見て顔を青くしている美波に手当てをするから、救急箱を取れと言いが、

「あ、あんた、何を言ってるのよ。そのケガじゃ……」

「うるせえな。やるかやらないかは俺が決めんだよ。関係ないヤツが余計な事を言うな」

美波は顔を青くしたまま救急箱を伐の前に運ぶと伐は乱暴に救急箱を取り上げ、応急処置を始め、

「……止めても無駄か？」

「当然だ。あのクズは俺をおもちやだと思ってやがるからな。血は流れたが他に支障はないはずだ」

西村教諭は伐の様子を見てため息を吐き、伐が止まらない事を確認すると伐は不機嫌そうな表情で処置をしていく。

「ちょっと、本気で言ってるの！？ 充分過ぎるくらいの大ケガよ！！」

「……だから、どうした」

美波は病院に行けと言うが伐は鬱陶しそうな表情で言うと、

「だから、どうしたって、あんたバカじゃないの！！ 誰が見たって大ケガよ。何かあったらどうするつもりよ！！」

美波は伐の態度に伐の胸ぐらをつかみ、怒鳴りつける。

「……耳元でぎゃあぎゃあ、騒ぐな。鬱陶しい。それにお前には俺に何かあっていなくなった方が都合が良いだろ。巨乳娘の件も美春の件も。いろいろとな」

「そう言う事じゃないでしょ！！」

伐は美波に偽善者ぶるなと言いたげに鼻で笑うが、美波は伐を怒鳴りつける。

「……西村、うるせえから、こいつを連れてけよ。治療もできねえ」

「……黒須、先生と呼べ」

伐は西村教諭に美波を連れて行けと言うと西村教諭はため息を吐き、

「島田、こいつは言って聞くようなヤツじゃないから、いくら言っても無駄だ。特に今回に関しては。俺はさっきの男が何かしてないか。見回りに行くなら、無茶をしないように見張っている」

美波に伐の見張りを押し付けて保健室を出て行く。

「おい……っち、本当に行きやがった」

「西村先生、見張りつて、黒須相手に……」

伐は西村教諭が保健室を出て行ったのを見て舌打ちをすると美波は西村教諭の言葉を考えた後、保健室と言う特殊な空間に伐と2人つきりになってしまったと気づき、慌てて伐から距離をとる。

「……何をしてるんだ？」

「……な、何も無いわよ」

伐はいきなりの美波の行動に意味がわからないと怪訝そうな表情をすると美波は伐に押し倒されないように距離を取りながら何も無いと言う。

## 第124問（後書き）

どうも、作者です。

美波と伐は保健室、先日ですが保険医いつもいない？（爆笑）

足を刺されてるのに応急手当で動けるのかよ？と言うのはお約束  
と言うことで見逃してください。

アンケート

1位 愛子24票

2位 美春20票

3位 美波10票

美波の追い上げはあるのか？ と言うかアンケートを取り始めて一  
月以上経ちますが清涼祭が終わる気がしない。（苦笑）

## 第125問

「……見てるだけなら、消えろよ。金とるぞ」

「うつさいわね。ウチは西村先生にあんたの見張りを頼まれたのよ。仕方ないでしょ」

伐が右足の治療をしているのを一定の距離を取ったまま、見ている美波の様子にこっちを見るなと言うと美波は伐の言う事は聞かないと言うと、

「それにあんたの様子だと見張ってないとさっきの危ない男を探しに行きそうだし……」

美波もそれなりに伐のケガを心配しているようでちょっと気まずそうな表情をして言う。

「……ヒマなヤツ」

「かわいげのないヤツ。せつかく、ウチが心配してあげてるのに」

伐は美波の態度にため息を吐くと美波は伐の言葉が気に入らないと言いたげに伐を睨みつけるが、

「かわいげ？ 俺にそんなもんを求めるんじゃないよ」

伐は美波の怒りを鼻で笑う。

「さっさと消えろよ。ここにいたって何もできないんだ。客引きの

「1つでもしてろよ」

「……客引きって言ったって、ウチはオマケだもん。お客さんのほとんどは瑞希や木下、あげく……アキにまで声をかけてるし、ウチが居なくなっただけでお店は回るわよ」

伐は美波にさっさと喫茶店に戻れと言うと美波は自分がウエイトレスでも客はこないと落ち込む。

「……うざいな。落ち込むならよそでやれよ。こっちは血が抜けて体がだりいのに、余計にだるくなるようなもんを押しつけんな」

「ウ、ウチだって、好きで言ってるわけじゃない……!？」

伐は美波に向かいうざいと言うと美波は伐にバカにされたのが頭にきたようで伐との距離を忘れて伐の胸ぐらをつかむと自分が危険地域に入ってしまった事に顔を青くするが、

「なんだ？　好きで言ってるわけじゃないなら、さっさと意味を言え」

伐は美波を襲う気がないのか言いたい事があるなら早く言えと言うと、

「……ねえ。あんた、本物の黒須？」

「……Fクラスではお前は割とまともだと思ってたが勘違いだったようだな」

美波は伐が自分に手を出さないため、何を思ったのか伐を偽物だと

聞き、伐は美波を冷たい目で見て言う。

「ちがつ！？ 違うわよ！？ ふだんのあんたを見てたら、こんな近くに入ったら……胸とか触られたり、エッチな事されたりするでしょ？」

「なんだ？ して欲しいのか？」

「って、違うわよ！？ どこに手を回してるのよ！？」

「ん。ケツ」

美波は伐の近くは危ないから警戒していたと言うと伐はため息を吐きながらも彼女のヒップに手を伸ばし撫でると美波は伐の手を払い、伐を睨みつけるが、

「して欲しいなら、やっても良いが、今は血が足りてねえからパスだ。本番なしなら、いかせてやるくらいはしてやるぞ」

「しなくて良いわよ！？」

伐は美波に希望はあるかと聞き、美波は顔を真っ赤にして全力で否定する。

「そりゃ、残念。お前の容姿はそれなりに好みだからな。かわいいがつてやつても良かったんだが」

「な、何をいきなり、言うのよ！？」

伐は美波の慌てる姿を見てくすりと笑うと美波は慌てて伐から視線

を逸らすと、

「……ったく、テレるなら、自分は巨乳娘や木下に負けてるとか言うんじゃないよ。お前は視野が狭いんだよ。ダーリンにしか目が行かないから、自分が人気がない可愛くないと思うんだろ。個人の趣味趣向ってのを取り除けばお前の容姿は上の上だ。持ってるヤツが卑屈になるのは目障りだ」

伐は興味なさそうに美波は瑞希や秀吉にも負けてないと言う。



## 第125問（後書き）

どうも、作者です。

伐と美波の会話がいつもと違います。美波は大勢の時や明久がいる時は強気ですが2人つきりなので受け攻め反転です。

後は最近、作者がおっぱい星人だと言う風評が出ているため、伐には美波の尻に手を伸ばしました。（爆笑）

言っておきます。作者は女の子の全部が大好きです。一部分だけ、ひいきはしません！！

このコメントに関する誹謗、中傷は受け付けません。コメントは『賛成意見』もしくは『よりマニアックな意見』でお願いします。

アンケートは変わりないので省略。

第126問（前書き）

PVが1000000を超えました。

ありがとうございます。

## 第126問

「えーと……」

「なんだ？　言われなれない事を言われてテレたのか？」

美波は伐の言葉に少しテレたようで伐から視線を逸らすと伐は無表情のまま、美波の心情を言い当てる。

「う、うるさいわよ！？」

「……うるさいのはお前だ」

美波は伐を怒鳴りつけるが伐は治療を終えたようで右足の痛みを確認するために立ち上がると、

「……」

ほんのわずかだけだが顔を歪ませる。

「……ねえ。本当に大丈夫なの？」

「さあな。神経や筋繊維は切れてないだろうが痛みは別だからな」

美波は伐の表情の変化に気づいたようで心配そうな表情をするが、伐はまるで美波には関係ないと言いたげに軽く跳ねたり、歩いたりして行動時に感じる痛みを確認しているように見える。

「……ねえ。なんで召喚大会に出るの？　さっき、教室じゃサボリ

たいみたいな事を言っただじゃない」

「……お前には関係ないだろ」

美波は教室で召喚大会の決勝をサボりたいと言っていた伐と今のケガをおしてまで出場しようとする伐が重ならないように聞くが伐はめんどくさそうに言う。

「言いなさいよ」

「お前に話す意味がないだろ」

美波は何も言わないで自分の神経を逆なでする伐の態度が気に入らないようで伐につかみかかるが伐は気だるそうに彼女の手を払うと、

「……効くかはわからないが気休め程度に飲んでおくか」

救急箱から鎮痛剤らしき錠剤を取り出し飲み込む。

「……ねえ。なんでそこまでして召喚大会に出るの？ 教頭先生の悪事も碎いたんだし、さっき、あんたも言っただけど負けて補習室送りになるのよ。あんたに得なんかないじゃない」

「……しつげえな。お前には関係ないだろ」

「だって、おかしいでしょ！！ わざわざ、やる気のないアキを焚き付けて、あんたがウチらを甘えてるってバカにするのはさっきみたいなもめ事はあんたの行動を見ればわかるわよ。だけど、それなら、ウチらに関わらなければ良いじゃない。いつもみたいに簡単にあしらえば、アキだってあんな風に怒らなかつたんだから」

伐は美波に鬱陶しいと言うが、美波は伐の考えがわからないと言う。

「……これだから、バカは嫌いなんだ」

「黒須！！」

伐は美波の言葉に舌打ちをすると美波は伐に今の行動の意味を話せと詰め寄るが、

「……お前さ。仮に俺が答えたらどうするつもりなんだ？」

「そ、それは協力できる事があれば、協力とか？」

伐はため息を吐きながら美波に聞き返すが美波は伐から話を聞いた後の事は一切考えていなかったようで自信なさげに首を傾げると、

「……」

「何よ。その顔は！？　ウチをバカにしてるの！？」

「……呆れてるんだよ」

伐は美波の様子にため息を吐き、美波はまた伐にバカにされていると思い、伐を怒鳴りつけるが伐はわざとらしく大きなため息を吐く。

「な、何よ？」

「何も考えずに、他人の領分<sup>おれ</sup>に入ってくるな。お前は俺との関係を否定しても、周りはそうは見ない。噂<sup>おれ</sup>つてのはそれだけ危険なもの

だ」

美波は伐のため息に伐を睨みつけるが、伐は自分に関わるなど言う  
と、

「俺の相手をしてるまにお前の大好きなダーリンは巨乳娘や木下に  
誘惑されるぞ」

「ちょ、ちょっと、いきなり何を言っのよ!？」

伐は美波との距離を縮めて彼女の耳元で明久が瑞希や秀吉に取られ  
ても良いなら、ここで遊んでろと言うと美波は顔を真っ赤にして慌  
て、

「……今更、バレてないと思えるのはある意味才能だな。まあ、気  
づいてないのは鈍感<sup>バカ</sup>だけだしな」

伐はため息を吐くと保健室を出て行こうとし、

「ちょっと、黒須、どこに行くのよ!？」

「……決まってるだろ。会場だ。これでお目付役は終わりだろ。さ  
つさと戻れよ」

美波は慌てて伐を引き止めようとするが伐は壁にかけてある時計を  
指さすとケガをしている右足を引きずる事なく、保健室を出て行く。

## 第126問（後書き）

どうも、作者です。

前書きにも書きましたがPVが1000000アクセスを超えました。

ありがとうございます。

超えた話の裏話があんな暴露話と言う事に若干、恥ずかしくはありますが続けていけるのは読みにきてくれる皆様のおかげです。引き続き楽しんでいただけるように努力しますのでこれからもよろしく願います。

アンケートは変わらないので省略します。

## 第127問

(……やれやれ。悪役か)

伐は1人遅れて会場に上がると先ほど挑発した明久だけではなく、ペアであるはずの美春にも睨まれており、伐の挑発の意味を理解している雄二は苦笑いを浮かべている。

(……まあ、正義の味方つてのもガラじゃないからな)

伐は自分は正義の味方や誰かのためにと言つのもガラじゃないと考えていると召喚大会決勝戦が開始され、

「……サモン試獣召喚」……

大会会場の床からは機械的な魔法陣が浮き上がり、4体の召喚獣が召喚される。

「……黒須くん、約束は覚えてるよね？」

「約束？ 別に覚えている必要はないな。悪いがダーリンみたいなバカに負けるほど俺はお人好しじゃない」

明久は伐を睨みつけて言うが伐は明久の話など知らないと鼻で笑うと、

「なら、意地でも思い知らせてやる!!」

明久の召喚獣は伐の召喚獣に向け、突進し、木刀で伐の召喚獣をな



ぎ払うが、

「……流石、バカの代名詞の観察処分者。扱いにはなれてるな」

「へえ。黒須も明久ほどじゃないが、上手く扱うな」

伐は慌てる事なく、明久の攻撃を交わしており、雄二は感心したように頷いている。

「……ちっ」

「ダーリン、ずいぶん熱くなってるな。そんなんじゃ、俺には当たらないぞ」

明久は当たらない攻撃に少しイラついているようで舌打ちをすると伐は興味なさそうに言う。

「しかし、最悪の事を考えて決勝戦は暗記ものの日本史にして明久にも勉強させたが、黒須はその倍以上か」

雄二は決勝戦で伐達が上がってこれなかった事も考えて、明久とともに日本史を勉強していたのだが伐の点数はその更に上であるが、

「……ちっ、腐っても観察処分者か」

明久のなれた召喚獣さばきで伐を追い詰めて行き、伐は舌打ちをする。

「喰らえ!!」

「……ちっ」

振り下ろされる木刀を伐は両手でガードすると伐と明久の点数差は縮まって行き、

「まだまだ」

明久は更なる追撃を仕掛けて行く。

（……まあ、攻撃が素直だな。あれだけ、扱えるなら、もつといやらしい攻撃をすれば良いものをまあ、現実を知らないバカだからか）

「何で、当たらないんだよ」

伐は明久の性格から次の攻撃を予測しているようで明久の攻撃は伐には当たらなくなって行き、伐は攻撃を交わしながら明久に向けて、武器であるナイフを飛ばすと明久はそれを木刀で叩き落とす。

（……結構、盛り上がってきたな。そろそろ、頃合いか？）

明久の連続攻撃を交わす伐を見て、観客は盛り上がって行く。

「当たれ！！……な、何で！？」

「……餌を撒かれてた事に気づかないのはバカな証拠だ」

明久は伐の召喚獣へ向かい木刀を振り下ろすが木刀は伐の召喚獣の頭に当たる事なく、空中で止まり、明久は驚きの声をあげる。

「明久、黒須の武器を考えろ！！」

「黒須くんの武器ってナイフとか！？　って、何、これ！？」

雄二は明久が驚いているのを見て叫ぶと明久は伐の召喚獣の武器はナイフだったと言うが明久の召喚獣には何か細い糸が絡まっており、明久の召喚獣は動きを止めており、動きを制限されている召喚獣の影響が明久の体も動かない。

「……俺は１度も俺の武器はナイフだと言った記憶はないんだがな」

伐は明久の驚きの表情に冷たい笑みを浮かべると明久の召喚獣の腕や足にナイフを突き立てて行く。

「ぐっ！？」

「明久、黒須のナイフには鋼糸が付いているんだ！！　それがお前の動きを封じているんだ！！」

「そ、そう言えば、Dクラス戦で、でも、あれはナイフがマヒとか付いたナイフじゃなかったの！？」

雄二は明久に伐の武器の正体を話すと明久は確かに自分の召喚獣の周りに刺さっているナイフを見て驚きの声をあげると、

「……それはお前が勘違いしただけだろ。俺が勝った場合はどうしてくれるんだ？」

伐は冷たい笑みを浮かべて明久の召喚獣を切り裂き、

「あだだだ！？　痛い！？　何、この痛みは！？」

明久の召喚獣は消滅し、明久はフィードバックを受けているため、床の上でのたうち回り始めるが、

「……さてと、決着をつけようか？」

「ああ。そうだな」

伐はすでに明久の事など興味なさそうに雄二に向かう。

## 第127問（後書き）

どうも、作者です。

あれだけ、舞台を整えて起きながら明久敗れる。（爆笑）

明久に負ける伐の絵はどうしても見えませんでした。明久<sup>ザコ</sup>を蹴散らして雄二との勝負。

美春は動かず。

決着は次回かな？（悪笑）

アンケート

1位 愛子24票

2位 美春21票

3位 美波10票

このまま行くのか？ 美波の追い上げに期待したい作者がいます。

## 第128問

「おいおい。あそこまで舞台を整えたんだ。負けるところじゃないのか？」

「それでも良かったんだけどな。ダーリンに負けるのはこの世界の中で最上級の恥辱だと思ったから止めたんだ。俺にも俺のイメージが重要だからな」

雄二はフィードバックのある明久を平然と痛めつけて倒した伐の様子に苦笑いを浮かべると、伐は明久に負けるのは自分のキャラではないと表情を変える事なく言い切り、

「確かにな。明久に負けるなんて恥以外の何物でもないしな」

雄二は伐の言葉にニヤリと笑う。

「ちょっと、2人とも、なんで僕の事をバカにするんだよ！？バカ雄二、少なくとも雄二は同じチームなんだから心配するべきだよね！！」

「だまれ。バカ久、お前の勉強に付き合ってやったんだ。せめて、清水くらい討ち取れよ。本当にお前、役立たずだよな」

明久は痛みにもたうち回りながらも雄二に文句を言うが、雄二は明久を罵倒し、

「さてと、2対1になったな。さっきから、清水は仕掛けてこないが、どう言っつもりだ？」

開戦から何もしてこない美春を挑発するように笑う。

「……………美春は棄権しますわ」

『えっ！？ 清水さん』

雄二の挑発に美春はすでに召喚大会の事などどうでも良くなってきているようで熱くなる事なく『棄権』を宣言すると会場を降りて行き、立会人の教師が美春を呼び止めるが美春は立ち止まる事なく、歩いて行く。

「なんだ？ 良くわからないが、イーブンに戻ったようだな。まあ、明久に削られた分、俺が少し有利みたいだけだな」

「どうかな？ 点数以外にもやり方ってヤツがあるんだ。もともと、200点くらいしか取れないバカが頭にのるなよ」

雄二は美春の退場にニヤリと笑って伐を挑発するが、伐が挑発にのるわけがなく、口元には冷たい笑みすら見えるがその笑みは伐が痛みに耐え、唇を歪ませているだけである。

……………

……………

……………

…

『坂本、負けんじゃねえぞ!!』

『そうだ。黒須をぶちのめせ!!』

美波がFクラスの喫茶店に戻ると伐と康太が設置した映写機が召喚大会の決勝の様子を映し出しており、伐に先ほどバカにされたクラスメート達は伐が女装していないせいもあるか、ほとんどが雄二を応援している。

「美波ちゃん、どうかしたんですか？」

「な、何でもないわよ!？」

美波はいつものように気だるそうに雄二の前に立つ、伐の足がどれだけ重傷か理解しているため、不安げな表情で戦う伐の姿を見ていると瑞希は美波の様子に気づいて声をかけるが、美波は慌てて何も無いと言うが、美波の表情は暗い。

「島田、黒須に何かあったのか？」

「な、何もないわよ!？ 変な男にナイフで足を刺されたなんて事なんて絶対にないから、安心し……………待った!？ 今のなし!？」

秀吉は美波の様子に聞き返すと美波は慌てて何もないと言うが、慌てている彼女は口を滑らせる。

「どう言っ事ですか!？」

「そっじゃ!？」



決勝戦に周りは集中しているようで美波の言葉に瑞希と秀吉が驚きの声を上げるなか、

「……………島田、何があった？」

康太が美波に詰め寄る。

「ウ、ウチだって、わからないわよ。ただ、黒須に因縁があるのか良くわからないけど、廊下で黒須が右足を刺されて、ウチも西村先生も召喚大会は棄権しろって言ったのに、黒須は決勝に出るって聞かなくて、今だって足が痛いはずなのに、何でよ？」

「……………それが『親猫』の教えだからだ」

美波は伐の足から流れ出ていた大量の血液を思い出したようで顔を真っ青にして床に座り込むと、康太は何かを呟いた後、

「……………島田、その男はどこに行った？」

美波につかみかかるように聞く。

「わかんないわよ。ウチは西村先生と黒須を保健室に連れて行くのが精一杯だったし」

「……………そうか」

「待つのじゃ。ムツツリーニ！？」

「そ、そうです」

美波は男の事を知らないと言うと康太はその男を探しに行くつもり  
のようで教室を出て行こうとするとそれに気づいた秀吉と瑞希は康  
太が捕まえると、

「っ、土屋!？」

「……………あの河の先は楽園」

康太は大量の鼻血を噴射して秀吉と瑞希の腕の中で力尽きる。

第128問（後書き）

どうも、作者です。

康太、散る。（爆笑）

せっかく、かつこよく行こうと思ったのに。（苦笑）

アンケート

1位 愛子26票

2位 美春23票

3位 美波10票

そして

康太 1票

康太参戦。（爆笑）

## 第129問

「しかし、黒須はそんな状態で走り回っておるのか？」

「う、うん」

秀吉は眉間にシワを寄せながら言う。美波は伐の事が心配なようで小さく頷く。

「……美波ちゃん、行きましょう。黒須くんを止めましょう」

「無理よ。ウチも西村先生を止めたのに聞きもしなかったんだから……」

瑞希は美波の手を取り、美波を召喚大会に連れて行くこととするが、美波は首を振る。

「島田が行かぬのなら、ワシと姫路だけで行ってくるのじゃ」

「はい。黒須くんは『面倒だ』って良いながらも私達をいつも助けてくれます。今日は私達が助ける番です」

「でも、黒須がそれを望んでないのよ。ウチらが言っても『余計な事をするな』って言うわよ」

秀吉と瑞希は2人でも伐を止めに行こうとするが、美波は2人の手をつかみ、首を振る。

「ですけど、美波ちゃんだって、黒須くんを止めたいんじゃないん

ですか!」

「そうじゃ。もし、そのケガが原因で黒須が歩けなくなったり、最悪、死んでもうても良いのか?」

瑞希と秀吉は美波に向かい言つと、

「……良いわけないでしょ。でも、黒須はあいつはウチ達の助けなんていらないうて言うわ。なら、好きなようにさせてあげれば良いでしょ」

悔しそうな表情で言葉を絞り出す。

「美波ちゃん、ダメです。黒須くんはいつも面倒だつて良いながらも私達を助けてくれます。今回は私達の番のはずです」

「島田が言つておつたのじゃろう。黒須は猫じゃ。かわいげのないノラ猫じゃとノラ猫は自分から助けを求めるような事はせんのだ。それならば気づいた人間が手を差し伸べなければ、いけないのだ。あやつは他人を突き放す。自分の領域に他人を入れぬように。だからこそ、ワシらは友としてあやつを止めぬと行かんのじゃ」

『やつちまえ。坂本!』

瑞希と秀吉はそれでも伐を止めに行くと言つた時、召喚大会を見ていたクラスメートとお客さんが一気にわく。

「何があつたのじゃ!?」

「黒須くん!」

秀吉と瑞希が召喚大会を見ると、伐の召喚獣の点数は一桁になりながらも雄二の召喚獣の攻撃を交わしている。

.....

.....

.....

...

「黒須、そろそろ良いだろ？」

「まだだな。盛り上がり欠ける」

雄二は結果は決まっているのだが、召喚大会の盛り上がり演出している伐に言うが伐はまだ盛り上がりにかけていると笑う。

「何だ？　ここからの逆転でも演出しようて言うのか？」

「そうやって、上から見ると足元をすくわれるぜ」

雄二はニヤリと笑うと雄二の召喚獣が伐の召喚獣を殴りつけるが伐の召喚獣は雄二の召喚獣の腕をつかむと召喚獣を投げ飛ばす。

「たくよ。相変わらず、器用だよな。まだ、数回しか、召喚獣を出していないはずなのによ」

「当たり前だ。俺達だけじゃなく、こいつらにだってクセがあるん

だ。それを見極めない人間に簡単に負けるわけには行かないだろ」

雄二は伐の召喚獣の操作に苦笑いを浮かべると伐は挑発するように言う。

「へえ。さつきは点数を引き合いに出した割に今度は扱い方がよ。気が変わったか？」

「知らねえよ。だいたい、頭の良し悪しは成績じゃねえからな。道具も頭も使いようだ。居ただろ。成績が高いからと言って、俺達Fクラスをバカにして惨めに地面に這いつくばった変態2人が」

「ああ。確か、3年の……名前は何だった？ 顔面があまりにわいせつすぎて名前が思い出せないんだが」

どうやら、伐と雄二の常夏コンビへの制裁は終わっていないかったよう。で観戦客に聞こえるような声で言う。

「ああ、あれだ。3年Aクラスで昨日、頭に女性物の下着をつけて喜んでいたのが、変た……夏川ってヤツだったな」

「おいおい。そんな変態が最上級生のそれもAクラスにいるのかよ。もう1人は」

「知ってるか？ ここだけの話。もう1人の方は俺達がノリで着たチャイナ服に欲情して男を襲ったらしいぞ。名前は常村だったな」

「おいおい。変態の上にホモかよ」

『そんな汚いものを想像させないで!!』

『目が目が腐ります!!』

『癒やしを、伐×秀吉本よ』

『私は伐×康太本が良いわ!!』

伐と雄二の言葉にB L好きの女生徒達からあまりの汚さに悲鳴が上がり、

「……黒須、改めて思ったんだが、この学園は多いな」

「普通だろ」

雄二は聞こえてくる腐女子の声に顔をひきつらせるが、黒須は興味なさそうに言っと、

「そろそろ、決着をつけるぞ」

「ああ」

伐と雄二の召喚獣は一気に駆け出し、交差すると点数の劣る伐の召喚獣の得点は0になり、床に倒れ、

『勝者、坂本雄二、吉井明久』

立ち会いの教師から雄二と明久の勝利を告げる声が会場に響く。



## 第129問（後書き）

どうも、作者です。

召喚大会の決勝も『常夏への罵倒』（爆笑）

そして、飛び交う腐女子の悲鳴。

……雄二はひく。

アンケート

1位 愛子 26票

2位 美春 23票

3位 美波 11票

4位 先送り 3票

5位 優子、康太 2票

7位 秀吉 1票

康太の追い上げはあるのかそしてついに

美紀（玉野さん） 1票

玉野さんついに参戦です。

## 第130問

(……終わつたな。一先ずはこれで依頼終了だな)

伐は勝ち名乗りを受けている雄二と明久を置いて会場を後にする。

(……ったくよ。あのクズが出てきたせいかな治療費やら何やらで赤じゃねえだろうな)

伐は痛む右足を見てため息を吐くと誰の視線からも見えなくなる物陰に移動すると激痛が走る右足を押さえ地面に座り込むが頭は『いつも通り』動いているようで冷静に金勘定をしており、

(……今ならこっちに目線がくる事もねえな)

立ち上がる気力を呼び覚ますために制服からタバコを取り出して口に加えた時、

「黒須！！ 何してるねよ！！ こんな人目のあるところで何考えてるのよ！！」

手に救急箱を持った美波が伐を見つけてタバコを取り上げる。

「……うるせえな。いっぷくくらいさせろよ」

「させられるわけないでしょ。それより、これ」

伐は現れた美波を見て面倒くさそうに言うが美波は伐の様子にため息を吐くと伐に救急箱を渡す。

「ああ……めんどくせえ」

「ちょっと、めんどくさいじゃないでしょ!! あんたのケガは大ケガなのよ!!」

伐は美波から渡された救急箱を見て面倒だと言つと美波は伐を怒鳴りつけ、

「つたく、治療させてどうするつもりだ? 俺にまだ店番でもやれつて言う気か?」

「ふざけた事を言わないで、言うわけないでしょ。あんたが行くのは病院に決まつてるでしょ!!」

伐は口うるさい美波の相手をするのが面倒なようで立ち上がると美波は伐の隣りに立ち、肩を貸すように伐を支える。

「……島田、お前」

「何よ?」

伐は美波の行動に怪訝そうな表情で美波を呼ぶと美波は不機嫌そうに返事をする、

「男らしいな」

「あんた、殺すわ」

伐は美波の行動に思つた事を口にすると美波は伐に殺意を込めた視

線を送るが、

「別にバカにしちゃいねえよ。気の強い女は嫌いじゃねえしな。だいたい、女の子らしい女なんて、嘘臭くて気持ち悪い」

伐は美波を誉めていると言う。

「……あんたが気持ち悪いって言ったって、一般的な男は違うでしょ？」

「ん？ ああ。現実を知らない童貞どもは女に夢を持ってるだろうな。俺から言えばバカとしか言えないけどな。男が女を買うように女だって男を買うんだ。だから、俺みたいなのラだって生きていけないんだからな」

美波は伐が少数派だと言うが伐は美波の意見は現実も知らないバカの言葉だと鼻で笑うと、

「お前だって、ダーリンを押し倒したいと思った事が押し倒した夢くらい見たことあるだろ？」

「な、無いわよ！？」

美波に下世話な事を聞き、美波は顔を真っ赤にして否定し、

「……そんな様子じゃ、説得力ねえよ」

伐は美波の様子にため息を吐く。

「だいたい、恋だ。愛だ。言ったって、ただの性欲だろ。良い女が

居れば押し倒したい。女だって、良い男が居れば種が欲しくなる。文明だなんだ言っただって、動物なんだ。盛るに決まってるんだろ」

「ちょ、ちよっと、どこに手を回してるのよ!？」

「胸」

伐は恋愛に夢など見るなと良いながら美波の胸に手を伸ばし、美波から、伐の顔面に向けて拳が飛ぶが伐は平然と交わすと、

「とりあえずは校門はまずいか。裏門まで連れてけ。後は勝手にやるから」

美波に裏門まで連れていけと言う。

## 第130問（後書き）

どうも、作者です。

結局、美波は男らしい。（爆笑）

割と良い感じに見えますが愛子爆走のため、今まで作者が押していた美波の伏線は全て廃棄になるでしょう。（苦笑）

## 第131問

「美波ちゃん、黒須くんはどうしたんですか？」

「ちよつと、出てくるって」

美波は伐を裏門に送り届けた後、喫茶店に戻ると瑞希が声をかけてくるが、美波は伐が病院に行ったとは言わずに苦笑いを浮かべる。

「……つたく、サボりなんて、良い身分だよな」

『ああ。俺達がいくら稼いだって、この売上は黒須の懐に入るんだろ。なら、頑張る意味もないよな』

クラスメート達は美波の声が聞こえたようで先ほどの喫茶店でのやりとりもあるせいか、伐がいない事に舌打ちをしたり、文句を言う声が聞こえる。

「……」

「……島田、黒須に何があったのじゃ？ 何も言ってくれぬとワシらは力になる事もできんのじゃ」

美波は聞こえてくる伐への批判に納得できない部分もあるようで唇を噛み締めると秀吉は美波の様子に気づき声をかけるが、

「……何でもないわ」

自分自身、伐の行動の意味を聞かされていないため、何も言う事は



できない。

「……ったく、何で優勝したのに回復試験を受けないといけないんだよ」

「……雄二はまだ良いだろ。僕は黒須くんに負けたから補習もあるんだから」

美波が納得がいかなさそうな表情をしていると明久と雄二が喫茶店に戻ってくる。

「吉井くん、坂本くん、優勝おめでとうございます　本当にお疲れさまです」

「姫路さん、ありがとう」

「ああ。まあ、なんとかな。黒須が本気だったら絶対に勝てなかったしな」

瑞希が2人を出迎えると明久は嬉しそうに返事をし、雄二は伐の考えをある程度理解しているためか苦笑いを浮かべた時、

「ん？　黒須はどうした？」

伐がいらない事に気づいて首を傾げる。

「えーと、私も良くわからないんです。美波ちゃんが何か知ってるみたいなんですけど……」

「何かあるようでのう。何も話してくれんのじゃ」

瑞希と秀吉は何もわからないと言う。

「そうか。島田、ちょっとこい」

「……別に何も知らないわよ。ウチは何も聞かされてないし」

雄二は美波に話を聞きたいと言うが、美波は不機嫌そうな表情をして言つと、

「そうか。なら、島田、質問を変えるぞ……黒須は右足をどうかしたのか？」

「!？」

雄二は伐の様子がおかしな事に気づいていたようで美波に聞くと美波は雄二の言葉に驚き、

「坂本、ちょっと良い？」

「ああ。悪いな。ちょっと、出てくるって、何でお前達まで付いてこようとする？」

雄二に伐のケガについて相談をしようとするすると雄二は頷いて美波と教室を出て行こうとするが、明久、秀吉、康太、瑞希の4人はそろそろと後を付いてこようとするため、雄二は立ち止まりため息を吐く。

「雄二、何やってるんだよ。早く行くよ」

「……なあ。お前ら、島田はあまり話を広めたくないから、俺を呼んでるだ。空気くらい読めよ」

明久は雄二の様子に早くしろと言うが雄二は肩を落としてため息を吐いた時、

「……島田と2人つきり？ 雄二、浮気は許さない」

「しょ、翔子！？ ま、待て！？ まったくの誤解だ！？ 何より、意味がわからん！？」

翔子のしなやかな指がすつと伸びてきて雄二の頭をつかむ。

「あはは。代表、坂本くんの話も聞いてあげようよ……あれ？ 伐くんは？ また、休憩？」

「工藤か。黒須がどこに行ったかはわからんのじゃ」

愛子も翔子と一緒にFクラスを訪ねてきていたようで雄二と翔子の様子に苦笑いを浮かべながら、伐がない事に気づき、伐の居所を聞くと秀吉は知らないと言首を振る。

「またか……なんか、今日はタイミングが悪いなあ。さつきも険しい顔して、どこか行っちゃうし」

「……ねえ。工藤さん、それって、召喚大会の少し前？」

「うん。そうだよ。島田さんは何か知ってるの？」

愛子は今日は伐とタイミングが合わないと言と苦笑いを浮かべると美波

は表情を暗くしたまま愛子に聞き返すが愛子は伐が右足を刺されている事を知らないため首を傾げる。

## 第132問

「えーと……」

美波は愛子の質問に視線を逸らすと、

「霧島さん、ちょっとだけ、坂本を借りるわよ!!」

「ぐわっ!？」

美波は雄二の首を引っ張り、雄二を引きずって教室を出て行くが、

「……黒須や吉井だけじゃなく、島田にまで雄二、絶対に許さない」

翔子はそう言うとともに雄二と美波を追いかけて行く。

「……ねえ。伐くんにかあったの？」

「……うむ。どこまで言っただいかわからぬと言うが、ワシらもあまり詳しくはないのじゃ。ただ、さっき、島田が口を滑らせたのじゃが、黒須は足を刺されておるとの事なのじゃが……」

愛子は美波の様子に伐に何かあったのかと不安そうな表情を見ると秀吉は愛子の様子に自分が知っている事を話す。

「……黒須くんが足を？　って、ちょっと待ってよ!?　いつのはな……」

「明久!?　声を落とすのじゃ!？」

明久は伐の足のケガを知らなかったため、大声を上げるとクラスメート達の視線が明久に集まり、秀吉は慌てて明久の口を手で塞ぎ、

「……………島田と工藤の話から推測して」

「……………ボクと別れてすぐだね」

康太と愛子は伐が足を負傷したまま召喚大会に出場していたと言う。

「な、何で？ 何で黒須くんが？ そこまでして決勝戦に出るのさ？」

「……………それが依頼だから、今回の件の締めが不戦敗だと締まらないから」

明久は伐の行動の意味がわからないと言うと康太は伐の考えを理解していたようで清涼祭の裏で行われていた事件と瑞希の転校阻止の締めくくりに召喚大会に出場したと言う。

「ちょっと待つてよ。それこそ、わからないよ！！ それだけなら黒須くんが僕を煽ったのは何の意味があるんだよ？」

「伐くんが吉井くんを煽ったのは1つは清水さんを引き離すため……………」

「……………召喚大会でも負けちゃうと補習室送りになりますね」

明久はまだ、伐の行動が理解できずに声を上げると愛子は自分が話して良いものかわからないように苦笑いを浮かべて、美春を補習か

ら逃すためと言う。

「……………後は召喚大会を盛り上げるための演出。焚き付けて、激しい召喚大会を演じる事、そして、下位の成績者でも戦い方によっては上位の成績者に勝てるところを会場に見せつける事」

「……………姫路の父親にFクラスを認めさせるためなのじゃな」

「……………きつとね。伐くんは恥ずかしがり屋さんだから、本当の事を聞いても、『うるせえ』、『勘違いするんじゃないやねえ』、『お前の浅はかな考えを押し付けるな』。とか、表情を変える事なく言うたろうけどな」

康太が伐の行動のもう1つの意味を話すと先ほどまで伐を非難していたクラスメート達は静まり返り、愛子は伐の様子が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべると、

「……………ねえ。美波は黒須くんの居場所を知ってるんだよね？」

明久は真剣な表情になり、美波が伐の居場所を知っているか確認する。

「はい。知っていると思います」

「確証はないのじゃが、決勝の途中で島田は喫茶店を出て行ったのじゃ。帰ってきた後はどこか集中できんようじゃったしのう」

瑞希と秀吉は美波しか伐の居場所を知らないと言つと、

「ちよつと、美波を探してくる」

「吉井くん、ちょっと待つて！？　ボクも行くよ！！」

明久は急いで喫茶店を出て行こうとし、愛子も明久を追いかけて行こうとするが、

「戦死者は補習」

「て、鉄人！？」

廊下を出たところには西村教諭が立っており、召喚大会の決勝戦で伐に負けた明久を補習室に連れて行くために明久の首をつかむ。

「ちょっと、鉄人！？　今はそこじゃないんだよ！？　僕は黒須くんに謝らないといけないんだ」

「吉井、黒須からの伝言だ。『何でも言う事を聞くんだよな。なら俺の分の補習もお前に追加してやる』とな」

明久は補習から逃げるためと伐に決勝戦前にヒドい事を言ったと思っているようで伐に謝りたいと言うが、西村教諭は伐から明久に補習を追加するように頼まれており、明久を担いで補習室へ向かい歩き始めると、

「西村先生、伐くんはこの病院に行っただんですか？」

「……知らない」

愛子は西村教諭が伐から伝言を受けているため、伐の居場所を知っていると思ったようで西村教諭につかみかかるように聞くが西村教



諭は首を振ると明久を担いで歩き出す。

## 第132問（後書き）

どうも、作者です。

明久、補習室送り。（爆笑）

カッコ良く教室を飛び出したのに。

何か知ってるはずの鉄人は何も言いませんでした。

伐はどうなったのか？

そして、嫁から逃げる雄二と美波は？

### 第133問

「ちょっと待て！？ 島田！？」

「良いから早くきなさいよ」

「……雄二、待たないと許さない」

雄二は美波に引きずられながら翔子に追いかけて回されている。

「許さないって、何をするつもりだ！？」

「……まずは雄二の机の1番下の引き出しの二重底にして隠している本を燃やす」

「翔子、何でお前がそれを！？」

「……お義母さんに教えて貰った」

翔子は雄二の大切な本を人質？に取る。

「あのばばあ！！」

「……雄二、お義母さんをばばあなんて言ったらダメ。止まって、雄二。止まらないと燃やしても許さない」

「燃やす事は前提なのかよ！？」

雄二は翔子が自分の母親から、自分の大切な本の隠し場所を聞いて

いる事に叫ぶが翔子は少しずつ雄二を追い詰めて行く。

「待て、翔子。だいたい、俺が追われる理由がわからない。島田はクラス代表の俺にクラスの事で言っておきたい事があるからであつて、お前が考えているような事は何一つとしてない。そ、そうだな。島田！！」

「坂本、何を当たり前の事を言ってるのよ」

「……本当？」

雄二は今から美波と話すのはクラス代表としての仕事だと言うと美波は雄二が翔子に命を狙われている状況などは目に入っていないようにため息を吐き、翔子は確認のために美波に聞き返す。

「本当よ。黒須の事でね」

「……やっぱり、黒須が浮気相手」

「ちよつと待て！？ どうして、そこに行き着くんだ！？」

美波は雄二に伐の事を相談したいと言うと翔子はその言葉で再度、火が点き、雄二の頭に手を伸ばすと雄二の頭は何かが軋むような音を立てている。

「霧島さんが居ても変わらないか……坂本、黒須ね」

「待て、島田！？ まずは翔子を止める！？ 聞く前に死んでしまっう！？」

美波は雄二の頭蓋骨が軋む音など気にする事なく話しですが雄二に聞く余裕はなく、美波に助けを求める。

「もう。何を言ってるのよ。霧島さんはちょっと嫉妬してるだけでしょ。あんたは彼氏なんだから、それくらいの度量を見せなさいよ」

「……これが嫉妬程度に見えるか？ 割れ、割れるううう！！！！？  
??」

美波は雄二に彼氏としての自覚が足りないと言った時、雄二は気を失い。

「坂本？ まったく役に立たないわね」

「……島田、雄二を返して貰う」

美波は雄二がこうなった原因は自分だと自覚がないため、ため息を吐くと翔子は雄二を引きずって行く。

「……なんか、ムダな時間だったわね。……黒須のケガ、大丈夫かな？」

美波は雄二と翔子の背中を見送り、ため息を吐いた後、悪態ばかり吐くわりに頼りになる伐の事を思い出して不安げな表情をした時、

「お姉さま そんな顔をして、美春が居ない事を寂しく思っ  
ていたのですね」

「み、美春！？ ちがつ！？ 違うわよ！？ 抱きつかないで！？」

美春が美波を見つけて彼女に抱きつくとき美波は逃げだそうとするが、美春の腕から逃げ出す事が出来ず、

「お姉さま、覚悟してくださいね」

「い、いやあ……!!??」

美春が美波のチャイナ服に手をかけようとする。

「美春、止めなさい!?!?　　うちは男が好きなのあんたなんかに興味はないのよ!?!?」

「嘘です。お姉さまは美春を愛してくれているはずですよ　　さあ、お姉さま。美春と間違いを冒しましょう」

美春の手により、美波の貞操が奪われようとした時、

「……康太。こっちのAngelからも必要じゃないか?」

「……そっちは任せる」

「ああ。任された」

美波の耳には今、学園にいるはずのない伐の声が聞こえ、

「あんた達は何をやってるのよ!?!?」

「……俺の嗅覚を舐めるな」

「美春、たぶん、島田は耳が弱いから、先にそこを中心に攻めると

口では文句を言っても肢体からだがその気になるぞ」

美波は声を上げるが、康太は撮影を止める事なく、伐に至っては美春にアドバイスまで始めている。

### 第133問（後書き）

どうも、作者です。

雄二、翔子に連れて行かれる。雄二の貞操は？（爆笑）

そして、美春に襲われる美波のピンチに駆けつけた伐と康太。

しかし、助ける気はなし。（爆笑）

伐のケガはどうなったんでしょ？



## 第134問

「黒須くん、あなたのアドバイスを受けるわけじゃありませんわ。美春は最初から、お姉さまは耳が弱いと知っていましたから」

「ちょっと！？ 美春、やめなさい！？ 黒須、あんたは何を言ってるのよ！？」

美春は伐のアドバイスを聞くまでも知っていたと言うと必要以上に美波の耳を攻め立てようとするが、美波はなんとか交わしている。

「……まったく、美春、お前、ヘタクソだな。耳を狙えとは言ったが誰もそこだけとは言っていないだろ。他も攻めながら警戒を解かせたり、スキを作らないといけねんだよ。こんな風にな」

「ちょっと、何を！？ ……………っ！？ ダ、ダメ、そんなところは……あう……」

伐は美春じゃ、美波を満足させられないと言うと美春の背後に周り込み、彼女の首筋にキスをし、流れるように彼女の肢体からだに手を滑り込ませて行き、美春の口からは甘い声が漏れ始める。

「ちょっと、黒須、あんたは何を考えてるのよ！？ こんなところで止めなさい！！」

「……仕方ねえな。流石に人目につきすぎるしな。康太、死んでないで行くぞ」

美波は美春により、脱がされかけたチャイナ服を慌てて元に戻すと

伐を止めると伐はため息を吐きながら、美春を解放して、赤い血の海に沈んでいる康太に言う。

「……………まだ、俺には写すべきものがある」

「わかってるなら、さっさと立ち上がれ」

康太はふらつきながらも立ち上がり、伐は興味なさそうに康太に言った時、

「黒須、あんた、足は大丈夫なの!!」

美波が伐の胸ぐらをつかんで聞く。

「大丈夫かと聞くな、胸ぐらをつかむんじゃねえよ」

「あつ!?!……………それで足は大丈夫?」

伐はため息を吐き言つと美波は慌てて伐から手を離してもう1度、聞くが、

「……………うるせえな。耳元できゃんきゃん騒ぐな。って言ってるだろ」

「良いから、早く答えなさいよ!!」

伐はうるさいと言い、美波はそんな伐の態度に声を張り上げる。

「……………何ともねえよ。知り合いの医者に縫って貰って痛み止めも打って貰ったしな」

「痛み止めつて、入院とかしなくて良いの？」

「バカじゃねえのか？ そんな金、どこにある」

伐は美波の様子にめんどくさそうに言つと、

「おい。そこで悶えてないで立て、最後まで言う事を聞いたら、さつき以上の事をしてやるから」

「そ、そんなもの入りませんわ！？」

床に腰を下ろしている美春に言つと美春は顔を真っ赤にして立ち上がり、伐を怒鳴りつける。

「なら、さつさと戻れ。そして、売上に貢献しろ」

「……わかってますわ」

伐はわかっているなら、働けと美春に言つと美春は伐の真意を聞いていないため、伐を睨みつけた後、1人で喫茶店に向かい歩き出す。

「……ねえ。黒須、美春の誤解とかなくて良いの？」

「必要ねえだろ。そんなもん、だいたい、さつきも言ったが俺の領分に入ってくるんじゃないよ」

美波は伐に美春が誤解したままで良いかと聞くが、伐は興味なさそうに言つと、

「ほら、さつさと戻れよ」

美波を追い払うように言う。

「……わかったわ。黒須、あんたも無理しないでくらいの早さで良いから戻ってきなさいよ」

「知らねえよ。俺の仕事は終わってるんだからな」

美波は伐に教室で待っていると言い、伐がめんどくさそうに答える  
と、

「良い？　ウチらの依頼は瑞希の転校阻止なの。だから、瑞希のお父さんにはあんたが真面目に働いている姿を見せる必要もあるんだからね。依頼は終わってないわよ」

「……めんどくせえ」

美波は伐に向かい、これなら従うでしょと言いたげに言い、伐は美波の言葉にため息を吐く。

「それじゃあ、戻るわよ。肩くらい貸してあげようか？」

「そうだな。とりあえずはこのケツの撫で心地は良いから手伝って貰うか」

美波は伐の様子に勝ったと思ったように伐の顔を覗き込んで言うと  
伐は美波の尻を撫で直し、

「あんたは何をしてるのよ!？」

美波は伐の行動に渾身の右ストレートを放つが伐はそれを平然と交わす。

### 第134問（後書き）

どうも、作者です。

美春いじりを忘れない伐は男だと思います。

そして、伐は美波の尻がお気に入りになってます。まあ、胸は揉み  
ごたえないでしょうしね。

アンケートは変わらないです。このまま、愛子が逃げきるんでしょ  
うか？

## 第135問

「……たく、めんどくせえな」

「そう言わないでください」

伐がクラスの喫茶店に戻ると愛子達の話で伐の誤解はとけており、それどころか、足のケガの事すら広がっていたため、伐は椅子に座らせられて変な気づかいを受けるが、伐は心底鬱陶しそうに舌打ちをしていると瑞希はそんな伐の様子に苦笑いを浮かべる。

「巨乳娘、それで、お前の父親はここにきたのか？」

「いえ、まだ来てないんですね。どうしたんでしょうか？」

「……なあ、お前の父親ってお前に性格が似てるのか？」

伐は面倒になってきているため、瑞希の父親が来たら帰ろうと決めたよう瑞希に父親がきたかと聞くと瑞希は首を傾げるため、伐は何か引っかかったようでため息を吐きながら、瑞希に父親と性格が似ているかと聞く。

「えーと、いきなりどうしたんですか？」

「……良いから、答えろ」

「えーと、どちらかと言えば、私の性格はお母さんに似ていますね」

「……そうか」

瑞希は伐の質問の意味がわからないため、首を傾げながら言うつと伐は立ち上がる。

「黒須くん、どこに行くんですか？」

「便所」

「足は大丈夫なんですか？ 近くまでなら、私が肩を貸しますよ」

「あー、その胸が近くにあるのはそれなりに楽しいが、お前、鈍いから遠慮する」

伐がトイレに行くと言うつと瑞希は気を使うが、伐は瑞希の気づかいは不安しか感じなかったようで断ると1人で喫茶店を出て行く。

……

……

……

…

「……なんだ。あれは？」

伐がトイレから出ると喫茶店の廊下に戻る途中で黒いスーツの男性と美波の妹の葉月と同じ年くらいの少女が警備員と揉めている。

「……まあ、ロリコンは増えているからな」



「その少年、勘違いしないでくれないかい。これは私の妻だ」

伐は最近珍しい光景でもないなと言うと喫茶店に戻ろうとすると伐の声が聞こえたようで男性は心外だと言いたげに伐に向かい言うが、

「……別に他人の性癖を否定する気もないから、構わないでくれ」

伐は興味無さそうに歩き出すと、

「私は本当にお父さんの妻ですよ」

少女は間違っていないと伐の手をつかむ。

「……なわけあるか。こっちの人の……マジか？ この肌の状況から推測すると……41？」

「わあ。凄いです。正解です。でも、女性の年を言うのはマナー違反ですよ」

「ああ。すまん」

伐は少女の顔を見て、肌の状況から年齢を予想したようであまりの見た目のギャップに顔を引きつらせると少女は正解だと言った後、伐にマナーがなってないと言うと伐は少女の勢いに謝ると、

「……まあ、ロリは見た目の問題だからな。真性か」

「……君、勘違いしないでくれ。私だって年相応の外観の方があり

がたいんだがね……。何度、犯罪者扱いを受けた事が……」

「私、そろそろ成長期がきても良いと思うんですけど」

伐はあまりこの2人に関わり合いたくないと歩き出そうとすると男性と女性は伐を捕まえて愚痴を始めだし、

『それじゃあ、私は警備に戻りますので、すいませんが、よろしくお願いします』

警備員は伐に2人を押し付けて自分の仕事に戻り、

「……めんどくせえ」

伐はなんで、自分がこんな事になっているかわからないため、ため息を吐く。

### 第135問（後書き）

どうも、作者です。

伐、姫路夫婦に捕まる。（爆笑）

前から書きたかったんですが、9巻で瑞希の両親が出てきた時は考えていたのより濃くて驚きましたけど。（苦笑）

宣伝？

GAUさんが伐を使ったif小説『夜の帳と野良猫と墮天使』を書いてくれました。作者の書く伐とは違う伐が見れます。

## 第136問

「聞いてるのかい？」

「……その前に、どうして、俺があんたらの話を聞かないといけないんだ？ 俺はクラスの仕事があるんだ。無関係な人間に関わらないといけない理由がわからない」

男性は伐のため息を吐く姿に文句があると言うが、伐は自分には関係ないと言うと、

「……だいたい。合法ロリとロリコンの夫婦なんだ。お互いの性癖があつてるんだ。俺にどうすれと言うんだ？」

「……私はロリコンではないと言っているだろう」

面倒だから関わらないでくれと言いたげに言い、歩きだそうとするが、男性は伐の肩をつかむ。

「……なんだよ？」

「お父さん、この子の言っている事も正しいですよ。あの、えーと、あなた、お名前は？」

伐は男性の態度にイラついてきているようで、目つきを鋭くして男性を睨みつけようとするが女性の緩い声に阻まれる。

「……別にあんた達に話す必要性があるとは思わないんだが」

「そう言わずに教えてください」

女性が伐に名前を訪ねるが、伐は面倒だと言いたげにため息を吐くが、女性は退かず、

「……黒須伐。別に覚えなくても良い」

「黒須伐だと？ ……お前がか？」

伐は名前を言わないと解放されないと判断したようで疲れたようなため息を吐くと男性は伐の名前に何か引っかかったようで伐の顔を覗き込む。

「……なんだよ？ 俺はロリコンに因縁をつけられるような事はしてねえぞ」

「だから、違うと言っているだろ!!」

伐は男性の態度に不機嫌そうに言う「と男性は声をあげると、

「あなたが黒須くんですか、瑞希ちゃんがいいつもお世話になっていきます」

「……瑞希？ ……巨……姫路の両親？」

女性は伐の名前に聞き覚えがあるようで伐に頭を下げると伐は女性の言葉に少し考えると2人が瑞希の両親である事に気づき、一瞬、呆けるが、

「……別に、あいつの世話なんかした覚えはねえよ。勝手に言っ

るだけだろ」

直ぐに表情を元に戻し、自分は何をしてないと言い、

「……さっきも言ったが、俺もクラスの仕事があるんで遊んでられないんで」

面倒な事になったと思いながらも、1人で歩きだそうとする。

「黒須くん、待ってください。あの。瑞希ちゃんの元に連れて行って貰いたいんですけど、聞いていたところに行っただんですけど、中華喫茶なんてなくて」

「……あのバカ、場所が変わった事を言っただけだよ」

瑞希の母親は伐の手をつかみ、瑞希の元に連れて行って欲しいと言った、伐は瑞希の母親の言葉で全て納得が言ったようだったため息を吐くと、

「……案内しますから、付いてきてください」

「はい。お願いします。お父さんも行きますよ」

「ああ」

瑞希の両親を喫茶店まで案内すると言うと瑞希の母親は笑顔で頭を下げた後、不機嫌そうな表情をしている父親に声をかける。

「……こっちはです」

「黒須くん、瑞希に会う前に聞いておきたい事がある」

「……俺に答える義理はない」

伐はけだるそうに歩きだすと父親は伐に聞きたい事があると言いが、伐は自分には関係ないと言い先を進むが、

「待ちなさい。君はうちの瑞希をどう思っているんだ!!」

「……」

瑞希の父親はやはり瑞希の父親らしく、突拍子のない事を伐に聞き、伐はあまりの突拍子のない言葉に頭が痛くなってきたようで頭を押さえる。

## 第136問（後書き）

どうもです。

瑞希の父親、勘違い。（爆笑）

瑞希の説明に何かを勘違い、嫉妬。そして、伐の悪い噂と重なっての流れです。

そんななか、彼女の想い人の明久は鉄人の鬼の補習。（爆笑）

熱くなってる父親に呆れる伐。

この2人……と言うか、姫路一族と伐は噛み合わない気がします。



## 第137問

「……………つたく、めんどくせえ」

「君、私の話を聞いているのかい？」

伐は瑞希の父親の言葉に面倒そうにため息を吐くと、父親は伐に向かい口調を強めて聞くが、

「……………くだらない事言っんじゃないよ」

「いだ！？ き、君は突然、何をするんだ！？」

「……………うるせえよ。姫路の親だろうがわけのわかんねえ因縁つけられてこっちはイラついてるんだよ」

伐は瑞希の父親相手でも躊躇する事なく、デコピンを放ち、父親は何があつたかわからないと言った表情で伐を怒鳴るが伐は文句を言う前に自分の非を詫びると言つと、

「……………見た目は悪くないが、ああ言つ、世間知らずは遠慮する。めんどくせえからな」

瑞希の父親に関わり合いたくないと言いたげに先を歩きだし、

「お父さん、今のは黒須くんに失礼ですよ」

「しかしな。あんな、態度の悪いのに瑞希が騙されていると思うと」

「良いから、行きますよ」

瑞希の母親は父親に伐に失礼だと言うが、父親は納得がいかないと言つ表情をすると母親は父親の手を取り、2人で伐の後を追いかけてくる。

(……………やっぱり、真性だろ。しかし、何と言つか、完全に見せ物だな)

伐は後ろを歩く、姫路夫婦を噂する声がちらちらと聞こえるため、面倒くさそうに不機嫌そうな表情をしていると、

「黒須、あんた、何してるのよ？ サボろうとか考えてないでしょうね？」

「……………島田か」

「何よ？」

「……………睨むな」

客引きに出ていた美波が伐を見つけて近寄ってくると伐はまた面倒な奴に見つかったと言いたげに顔をしかめる。

「黒須くん、この子も同じクラスですか？」

「……………ああ」

「ちょっと、黒須、こっち、きなさいよ」

母親は美波の事を伐に聞くと、伐は頷くが、美波は瑞希の母親を見て、何か勘違いしているようで伐の手を引っ張ると、

「あの子は何？ まさか、あんたの同業者？」

「……まあ、ロリコンと援交の小学生に見えるよな」

美波は姫路夫婦に犯罪臭がすると言い、伐は面倒だと言いたげにため息を吐く。

「……黒須くん、君の口から説明を頼めるかい」

「お願いします」

姫路夫婦は自分達が説明するのは信じて貰えないかも知れないと判断すると伐に美波に説明する事を頼むと、

「……めんどくせえな。島田、これは真性ロリコンと合法ロリの姫路夫婦だ」

「……黒須、あんた、また何、わけのわからない事を言ってるのよ。こんな小さな子が……姫路夫婦？ こ、これは確かに瑞希とそっくりね」

伐は2人を瑞希の両親だと言うと美波は最初は伐の言葉にため息を吐くが母親の小さな体に不釣り合いな果実むねを見て、納得したようで膝を落とし、

「……何か納得がいかないが、納得はしていただけたようだね」

「そうですね」

姫路夫婦は美波の様子に何か引つかかるところはあるようだが頷くと、

「……島田、落ち込む暇があったら行くぞ。まだ、仕事があるんだからな」

「うるさいわよ!! 何で、うちの周りはあんなばっかりなのよ! ! なんて、なんでよ」

伐はため息を吐くと美波を回収して歩きだし、美波は伐に引きずられながらも、自分に足りないものを思い涙を流すが、

「……お前以外にも木下姉やお子ちゃまとか無い奴もいるから、騒ぐな」

伐は美波の魂の叫びなど気にする事なく先を進む。

### 第137問（後書き）

どうも、作者です。

美波、瑞希の母親の胸を見て惨敗。（爆笑）

しかし、伐は気にしない。

やっぱり、この2人の絡みが好きです。

まあ、いい友人ではあるのかな？

アンケート

1位 愛子 26票

2位 美春 24票

3位 美波 11票

4位 先送り 3票

5位 優子、康太 2票

7位 秀吉、美紀（玉野さん） 1票

美春に1票追加されました。

このまま行くのか？ 波瀾が起きるのか？

## 第138問

「……姫路、客を連れてきたぞ」

「はい？ お父さんお母さんも」

伐は美波を引きずったまま、喫茶店に戻ってくると瑞希は両親を見て声をあげる。

「……姫路、店の場所が変わった事くらい伝えておけ」

「……なんで、なんで、神様は持つ者と持たざる者を創るのよ。不公平よ」

伐は瑞希のせいで面倒になったと言いたげに言う伐の手には美波が虚ろな目でぶつぶつと呟いており、

「黒須くん、美波ちゃんはどうかしたんですか？」

「……こっちは良いから、あっちの相手をしてこい。俺はあの2人の相手は面倒だ」

瑞希は首を傾げるが、伐は美波に関わる前に両親の相手をしろと言うと美波を引きずって行く。

「……なあ、黒須、さっき姫路の口からあの2人は両親だって聞こえたんだが」

「……ああ」

雄二は伐と瑞希の話を聞いていたようで、瑞希の母親に顔を引きつらせていると、

『こ、合法ロリだと？』

『その前に、見てみる。あの巨乳を』

伐と雄二の話を盗み聞きしたクラスメート達が何かを呟きはじめ、

『『合法ロ！？……』』

「……騒ぐな。うぜえ」

3名のクラスメートが瑞希の母親に叫び声を詰め寄ろうとするのを見て、伐はその3名を蹴り飛ばす。

「お、おい。黒須、そんな事をして良いのか？」

「知るか。それより、バカな事してるヒマがあったら働け。おかしな事をして、巨乳娘がいなくなっても良いなら、暴走でも何でもしろ。お前らが問題を起こしたんだ。居なくなっても俺の知った事じゃねえしな」

雄二は伐の行動に顔を引きつらせるが、今問題が起きてても自分のせいじゃないと言つと、

「姫路、そこで立ち話するな。中に入るなら入る。他に行くなら行くではつきりしろ。邪魔だ」

「は、はい。それじゃあ……お父さん、お母さん、こっちに来てく  
ださい」

瑞希に入口に立つなと言うと瑞希は両親を空いているテーブルに案内する。

「それじゃあ、代表様、任せたぞ」

「俺か？ お前が行った方が良いんじゃないのか？」

「……遠慮する。俺が巨乳娘と会話がかみ合わないのはどうやら血らしいからな」

伐は瑞希と両親がテーブルに座るのを見て、雄二の肩を叩くと雄二は伐に行けと言うが伐は面倒だと言いたげに雄二を追い払うように手を振ると雄二は苦笑いを浮かべながら、瑞希と両親のテーブルにメニューを持って行く。

「……ったく、いつまで、ぶつぶつ言ってるんだよ。さっさと働け」

「……だって、瑞希はあんなものを持つてるのよ。でも、ウチは、ウチは」

「……勝手にしろ」

伐はいつまでも落ち込んでいる美波に鬱陶しいと言うが、美波はそれでも納得がいかないようでぶつぶつと言っており、伐は面倒だと言うと美波を投げ捨て、

「黒須、あんた、何すんのよ!？」



「……知るか。だいたい、何で、俺がお前の面倒を見ないといけないんだ」

美波は伐の行動に怒りの声をあげるが、伐は知らんと言いつり、

「さっさと働け。召喚大会上位入賞者がそろってるせいか、客も集まってきたるんだからな」

「あ、あんたに言われるまでもなく、わかってるわよ。そんな事！」

「……わかってるなら、キャンキャン騒ぐな」

伐は美波に働けと言うと美波は伐の胸倉をつかんで言うが、伐は面倒そうに美波の手を払い、

「あの2人は仲が良いのか、悪いのか。わからんのだ」

「……………ケンカするほど仲が良い」

秀吉と康太は伐と美波の様子にため息を吐く。

## 第138問（後書き）

どうも、作者です。

結局、伐の態度は変わりません。瑞希の両親は口が悪いクラスメイトくらいで見てくれれば良いなあ。（苦笑）

そして、美波とのやり取りもこれで一先ず、終りでしょうか？

アンケート

1位 愛子29票

2位 美春27票

3位 美波11票

4位 先送り3票

5位 優子、康太2票

7位 秀吉、美紀（玉野さん）1票

愛子と美春の差は埋まりません。このまま愛子が逃げ切るのか？  
作者は美波が書きたくなってるので、たぶん、美波は自サイトで書く。（爆笑）

まあ、まだ先の話ですが。（苦笑）

## 第139問

「……だりい」

「伐くん、こんなところでタバコってもう隠れなくて良いの？」

伐は屋上に移動してタバコを銜え、タバコに火を点けようとした時、愛子が伐の後を付けてきたようので伐の顔を覗き込む。

「……別に良いんだよ。もう直ぐ一般の開放時間は終了だ。こんなところにくる一般人何かいねえよ」

「でも、見つかったら、面倒な事にならないかな」

「見つかったら、見つかっただろ。停学なら、お前と違って喰らいなれてるからな」

伐はけだるそうにタバコをふかすと愛子は苦笑いを浮かべるが、伐は気にする事などない。

「……ねえ。足、大丈夫？ 痛くない？」

「……お前に心配される意味がわかんねえよ」

「心配するよ。だって、ボクは伐くんが好きなんだしさ」

愛子は伐の足のケガを心配して伐を追いかけてきたようで不安そうな表情で伐に言うが、伐は愛子には関係ないと言うが、愛子は伐の制服をつかむが、

「……お前、ウザいな」

伐は愛子の心配など必要ないと彼女の手を払うとタバコの火を消し、屋上を出て行こうとする。

「伐くん」

「……何度も言わせんな。恋愛ごっこなら、余所でやれ。俺を巻き込むな。いい迷惑だ」

「恋愛ごっこなんかじゃないよ。ボクは本当に伐くんが好きなの！」

伐は愛子になど付き合ってられないと言うが、愛子は伐の手をつかみ、本当に伐の事が好きだと言うが、

「……勘違いするな。お前が俺に好意があると思っ込んでるのは、お前がお粗末な尾行した時に俺がたまたま助けたから、その時の恐怖とかをすげ変えてるだけだ。恋愛のれの字も知らないガキが、調子に乗るな」

伐は愛子の告白を鼻で笑うと、

「俺に関わるヒマがあったら、他の事をしろよ。俺とお前は関係ない他人なんだよ。勝手に盛り上がんじゃねえよ。うぜえ」

もうここには用がないと言いたげに屋上を降りて行く。

「ちょっと、待ってよ!？」

「……待たねえよ」

愛子は伐の後を追いかけるが愛子が階段の踊り場に着いた時には伐の姿は見えず、

「あれ？ 伐くん？」

愛子は伐が消えた事に首を傾げる。

「……つたく、めんどくせえ」

「黒須、あんた、また、タバコ？」

伐は愛子を撒くと頭を掻きながら、喫茶店に戻ると伐が戻ってきた事に気づいた美波が伐を睨みつけると、

「……うるせえな」

「黒須くん、ありがとうございます」

伐は美波を見て鬱陶しいと言いたげに言うと瑞希が伐を見つけて駆け寄って来るなり、伐に頭を下げる。

「あ？ お前に礼を言われる事はしてねえよ」

「そんな事ないです。お父さんとお母さんが文月学園に残っても良いつて、お父さんはちょっと納得がいかなさそうだったんですけど、お母さんが黒須くんはちょっと口が悪いけど優しい人だってフオローしてくれて」

「……黒須が優しい？」

伐は瑞希に礼を言われる意味がわからないと言うと瑞希は母親が伐を認めてくれたと嬉しそうに言う。美波は納得がいかなさそうにこめかみを押さえると、

「はい。Fクラスのみなさんの事もみんな良い人だって」

「……少なくともバカどもは真性ロリ巨乳を眺めに行った。お前の父親と同類だ」

瑞希は美波の言葉など気にせず笑顔で伐に言うが、伐はFクラスの変態っぷりを再認識したようで頭を押さえる。

## 第139問（後書き）

どうも、作者です。

伐と愛子の絡みはあっさりと。（苦笑）

伐は恋愛する気はないから愛子は大変です。

そして、どう行き着いたらFクラスが良い人に思えるのか？ まあ、瑞希の母親は『天然』だから、ツンデレにゃんこの本性を見極めたに違いない。（爆笑）

アンケート

1位 愛子 29票

2位 美春 27票

3位 美波 11票

4位 先送り 3票

5位 優子、康太 2票

7位 秀吉、美紀（玉野さん） 1票

そして

高橋洋子

吉井玲

なぜに？



## 第140問

「お父さんと同類？」

「……いや、良い」

瑞希は伐の言葉の意味がわからずに首を傾げると、伐はすでに瑞希には言うだけ無駄と判断しているようでも良いと言つと、

「それで、黒須くんが協力してくれたおかげですから、私は文月学園に残れるんです。だから、ありがとうございます」

「……お前、判断を誤つたな」

瑞希は改め、伐にお礼を言つと伐は瑞希の選んだ答えは間違いだと言ひ、

「俺は仕事を請け負つただけだ。礼なら、お前のために動いた鈍感<sup>バカ</sup>に言つてやれ。それに俺は礼を貰うよりは、こっちの方が良い……」

「ふええええ！！！！？？？　く、黒須くん、突然、何をするんですか？」

「……やっぱり、若いのは張りがあって良いな。最近ばばあの相手ばかりだったからな」

自分はいくまでも瑞希に礼を言われる事はやってないと言ひながらも瑞希のそのたわなに育つた果実<sup>むね</sup>に手を伸ばすと瑞希は驚きのあまり声を出して飛び退くが、伐は気にする様子はなく、ぼそつと呟く。

「く、黒須、あんた、さつきは胸じゃないって言ったのにその行動は何よ！！」

「うるせえな。ある乳にはある乳のない乳にはない乳の良さがあるんだよ。だいたい、サイズなど関係あるか」

伐の呟きに美波は自分のプライドをまた傷つけられたと言いたげに伐の胸倉をつかむが、伐が気にする事はなく、彼女の手を払い、

「霧島、さつさと売上よこせ。康太、今回の写真の売上、誤魔化すんじゃないぞ」

雄二と康太に報酬を寄こせと手を出す。

「……………わかってる。今回は伐のおかげで貴重な写真も撮れたから、色を付けてある」

「ほらよ」

「確かに受け取った。俺はバイトがあるから、上がるぞ」

康太は伐の言葉にすでに用意していた封筒を渡し、雄二は少しなごり惜しそうに売上から諸経費を引いた金額全てを伐に渡すと、

「じゃあな」

「ちよつと、黒須！！」

「うるせえよ。もう、依頼は終わっただろ。付いてくんじゃねえよ」

喫茶店を出て行こうとすると美波は何か伐に言いたい事があるように伐を呼び止めるが伐が振り返る事はない。

『おい。坂本、打ち上げするくらいは残してあるんだろうな？』

「いや、それをやると契約破棄とみなされるだろうからな。あいつを敵にするようなバカなまねはできねえよ」

『ふざけるな！！』

伐がいなくなったのを見て、クラスメート達は雄二に詰め寄るが雄二は伐への報酬を誤魔化す事はできないと言うとクラスメート達から不満の声が当然漏れ收拾がつかなくなりだし、

「ちょっと、最初からの約束でしょ。黒須がいなかったら、ここまでの事ができた？」

「そうじゃ。黒須がいなければ、どうなっておったかわからんのだよ」

美波や秀吉、瑞希がクラスメートを抑えようとするが、収まる事はなく、

「これは何の騒ぎですか？」

「ああ。黒須に売上を全部渡す約束だったからな。それで、不満が出てるんだ」

「まったく、あの男は強欲でスケベで最低ですわね。さっきも美春

のお尻を撫でて行きましたし」

騒ぎに美春が顔を出すと雄二は苦笑いを浮かべながら、今の状況を説明すると美春は伐に文句を言い始める。

「あのさ。清水さん」

「話かけないでください。豚野郎!!」

「いや、お尻に封筒が付いてるんだけど」

「本当よ。美春、それどうしたの?」

明久は伐の文句を言っている美春に声をかけると美春は明久に話しかけるなどと言うと明久は美波の背中に隠れながら美春のスカートに封筒が付いていると言うと、

「本当ですわ。これはなんですか? ……これ」

「如月ハイランドのペアチケットだな」

「黒須の清水への報酬のようじゃのう」

美春は封筒を開けると伐が美春に約束していた報酬が入っている。

「……他にも何か入ってますわ……」

「俺か? ……『引き忘れだ』……あいつ」

美春は封筒の中には自分への報酬以外が入っていると封筒を雄二に

渡すと封筒の中には伐の字で書かれたメモとFクラスが打上に使うくらいのお金が同封されており、雄二はそれを確認すると、

「打上費用だ。騒ぐな。俺も上がるぞ」

封筒からいくらか金を抜き取ると騒いでいるクラスメート達に封筒を手渡し、教室を出て行こうとする。

「ちょっと、雄二、どこに行くんだよ」

「あ？ 打ち上げに行ってくるんだよ。1人で打ち上げさせるわけにはいかねえだろ」

「そう言う事ね」

明久は雄二に声をかけると雄二は伐の後を追いかけると言い、美波は頷くが、

「でも、黒須くんは今日はバイトがあるって」

「……………今日、伐はオフ」

瑞希は伐がバイトに行くと言っていたと言うが、康太はそれは嘘だと言うと明久、秀吉、康太、瑞希、美波は雄二の後を追いかけて行き、

「……………お礼くらいは言わないといけませんわよね」

美春はペアチケットを見た後、少し遅れて教室を出て行く。



## 第140問（後書き）

どうも、作者です。

清涼祭編、終わりかな？

この後、伐の部屋に乱入するか、打ち切るかは考え中。

どちらが良いか。感想をいただけると幸いです。

アンケート

1位 愛子30票

2位 美春27票

3位 美波11票

4位 先送り3票

5位 優子、康太2票

7位 秀吉、美紀（玉野さん）、洋子（高橋先生）、玲1票

アンケートは次の更新までとさせていただきます。愛子が逃げ切るのか？ 美春が追い抜くのか？

伐の家に乱入する可能性の薄い愛子は不利か？

## 第141問

「……のう。雄二、本当にここなのか？」

「……クラス名簿の住所で言えば、間違いなくここなんだが」

「……絶対に違うと思いますわ」

明久達はクラス名簿に書かれていた住所を手掛かりに伐の家を探すが、書かれた住所は大きな公園であり、雄二、秀吉、美春はため息を吐くが、

「凄いね。あれだけ、お金を集めてればこんな広い土地に住めるんだね」

「……まさか、黒須って、野宿してるの？」

「そんな、黒須くんはとっても強いですけど、いくらなんでも危険すぎます」

明久、美波、瑞希の3人はずれた発言をしており、

「……おい。お前ら、黒須が住所に嘘を書いてるって発想にはならないのか？」

「そ、それくらい、わかってるよ。冗談に決まってるじゃないか」

「そうよ。冗談に決まってるでしょ――！」



雄二は3人の答えに大きなため息を吐くと明久と瑞希は雄二から目を逸らし、美波は慌てて否定する。

「しかし、困ったな」

「ねえ。坂本、あんたって、黒須の携帯の番号を知ってるんじゃないの？」

「いや、この間、聞いた番号にかけても繋がらなくなってた」

雄二は困ったように頭を掻くと美波は雄二が伐の電話番号を知っていた事を思い出すが、雄二は苦笑いを浮かべて以前、康太から聞いた番号に電話をするとすでに使われていないようである。

「……………伐は長い間、同じ電話番号を使わない」

「……………あいつはいったい何をしてるのよ」

康太は伐の携帯事情を話すと美波は頭を押さえる。

「ねえ。ムッツリー二も知らないの？」

「……………俺が昨日、かけた番号は既に使用されていなかった」

「……………意味がわかりませんわ」

明久は康太に知らないかと言うが康太は首を振り、美春はため息を吐き、

「ムッツリー二、黒須は家も定期的に変えてるって事はないよな？」

「……………伐の家は昔から変わっていない」

「……土屋、あんた、場所を知ってるのにここに来たわけ」

雄二は伐の徹底ぶりにため息を吐きながら聞くと康太は伐の家を知っているようで美波はどうして無駄な事をするのと言いたげに康太に聞く。

「……………ここに来る事は無駄じゃないから、ここはあの場所から伐の家に帰る途中」

「……ムツツリーニ、それは黒須はまだ家に帰っていないと言う事かのう？」

康太は美波の言葉に何かを考えているのか遠くに視線を逸らして言う、秀吉は康太の言葉に声をかけるが、

「……………俺は何も知らない」

「いや、何かあるって言うてるようなもんだからな」

康太は秀吉の疑問に首を振って否定するが隠しきれerわけはなく、雄二はため息を吐く。

「まあ、ここに居れば黒須くんがくるって事だよな。先に家に言ってもこの人数で家の前に立ってても仕方ないしね」

「それなら、そのコンビニで買い物するのと黒須を待つのに別れない？」

「そうだな。黒須の家は康太が知ってるみたいだから最悪、撒かれ  
ても問題ないが、買い物くらいはしておくか」

明久はそれならここで暫く待っていようとと言うと美波が近くのコン  
ビニを指差して買い物を済ませる事を提案すると雄二は頷き、

「それじゃあ、俺とムツリーニは黒須がくるのを待ってるから、  
お前らはこれで買い物していてくれ」

先ほど封筒から抜き出してきたお金を秀吉に渡し、4人はコンビニ  
に入っていく。

## 第141問（後書き）

どうも、作者です。

伐の家にはまだ着きません。

伐はどこへ行ったのでしょうか？

伐の家は康太にバレてます。

アンケート結果

1位 愛子36票

2位 美春29票

3位 美波11票

4位 優子、先送り3票

5位 康太、玲2票

7位 秀吉、美紀（玉野さん）、洋子（高橋先生）船越先生1票

アンケートにご協力いただきありがとうございました。

結果としては愛子がトップですね。愛子ルートでがんばりましょう。

美波ルートは自サイトで書きます。

美春は……気が向いたら自サイトで。

分岐で書こうと思っていた美春原案。

如月グランドパークに伐を誘おうと頑張るがすべて交わされる美春。  
没ネタになるかは気分しだい。（苦笑）

## 第142問

「……………つたく」

伐は人気のない路地裏の少し開けた場所でカップの日本酒を開け、地面に乱暴にかけると今から自分がする行動になど意味がないと言いたげに舌打ちをすると、

「……………なあ、あんたはどうして俺なんかを拾ったんだ？俺みたいにな『親に捨てられてのたれ死ぬ人間』なんてこの世界に溢れるのに」

虚空に向かい問いかけるが答えがあるわけもなく。

「……………つたく、何してるんだよ。死んだ人間が答えるわけなんてねえのによ」

伐は答えなど聞こえるわけがない事を理解しているためか自分の似合わない行動に舌打ちをする。

「あのクズが帰って来たせいかな……………くだらねえな」

学園で再会した男の事が思い浮かびだされたようで三度、舌打ちをすると頭を乱暴に書いた後、自分を抑えるためか懷からタバコを取り出し、口に加えて火を点け、

「……………」

そこに眠る人間が信仰していたのか目を閉じて十字を切ると、

「……………じゃあな」

その場所を後にする。

……………

……………

……………

……………

…

「なあ、ムツツリーニ」

「……………どうかしたか？」

「お前と黒須はどんな関係なんだ？」

雄二は康太と伐を待っているなか、気になる事があるようで康太に伐との関係を聞くと、

「……………無関係」

「嘘を吐くにしてもそれは酷くないか？」

康太は何を言いたくないと言いたげに雄二から視線を逸らして言い、雄二は康太の言葉にため息を吐く。

「まあ、ムツツリー二は黒須の過去を知ってる事は俺もわかってる。言いたくないなら言いたくないで良いんだけどな。ただ、目を離さないでやってくれるか？」

「……………わかってる。俺もあんな伐は3度も見たくない」

雄二は雄二なりに伐の危うさを感じ取っているようで康太に言うと康太は少し表情を歪めると過去を後悔するように言い、

「しかし、黒須は1人だって言うわりにはちゃんとムツツリー二は仲間なんだよな」

「……………勘違いするな。俺は伐の仲間じゃない。俺にそんな資格はない」

伐を心配している康太を見て雄二は安心していうようでくすりと笑うが、康太は雄二の言葉を首を振って否定すると、

「おい。それってどういう事だ？」

「……………話すつもりはない」

雄二は康太の口から聞こえた言葉に驚きの表情をするが康太は何も話す事はないと首を振る。

「……………ムツツリー二？」

「……………何でもない。気にするな」



雄二は康太の様子に康太に声をかけ、康太が首を振った時、

「……黒須や吉井だけじゃなく、今度は土屋」

「あはは。代表も落ち着きなよ」

雄二の背後から黒い殺意<sup>もの</sup>をだだ漏らしにした翔子が現れ、愛子はそんな翔子のように苦笑いを浮かべていると、

「しょ、翔子、何でお前が、ここにいるう……!!??」

「そのコンビニに入ったら、吉井くん達に会ってね。黒須くんのお家に行くって言うからボクと代表もお邪魔しようかな? って……

……坂本くん、聞いてる?」

「……雄二には聞こえてない」

雄二は翔子がここにいる理由を聞くと愛子が雄二の質問に答えるが、雄二は翔子にアイアンクローを喰らい、愛子の説明は聞こえていない。

## 第142問（後書き）

どうも、作者です。

伐は過去に因縁がある男に再会したことでちょっとセンチ。（苦笑）

とりあえず、親猫（仮）はクリスチャンかな？

どんな人間かはもう少し先です。以前、美波との会話で出た伐が神を信じていない理由にこれが繋がっているかは不明。

そして、康太と伐の間には何があるんでしょうか？

正式ヒロイン愛子と翔子が加わり、伐の家への襲撃は？

……伐はこの人数を見て家に帰る気になるんだろうか？（爆笑）

## 第143問

(……あいつらは何をしてるんだ?)

伐は公園を抜けて帰った方が家まで近いので、タバコをくわえながら公園を歩いていると視線の先には翔子にアイアンクローを受けて悶えている雄二と愛子、康太の姿が映り、

(……まあ、関係ないな)

どうでも良いと言いたげにタバコをふかすと2人に声をかける事なく、公園を出て行こうとする。

「伐くん、無視する事ないよね?」

「……」

愛子は伐に気づき、伐の手をつかもうとするが、関わり合う気もないため愛子の腕を交わすと1人で歩いて行こうとするが、

「……………伐、待て」

「あ? 何のようだよ?」

「……………ボクは無視なのにどうしてムツッリーニくんの言葉は聞くの?」

康太が伐を呼び止め、伐は面倒そうに返事をするので愛子は不満げに頬を膨らませる。

「決まってるだろ。お前は俺とは無関係だからだ。康太はビジネスパートナーだからな。話を聞く価値があるなら、話くらいは聞く」

「むう」

「それで、何のようだ？」

伐は愛子の相手をする気はないと言つと愛子は不満そうな表情をするが伐は気だるそうに康太に聞くと、

「……………今から、伐の部屋で清涼祭の打ち上げ」

「寝言は寝て言え」

康太は伐の部屋で打ち上げをするつもりだと言つと伐は自分を巻き込むと言つと1人で歩きだす。

「……………寝言など言っていない」

「なら、戯言だ」

康太は伐の横に並び言つが、伐は康太の話など聞く気もなく、先を進もうとするが、

「黒須、あんた、何をしてるのよ！！ 空気くらい読みなさいよ」

「……………まだいるのかよ」

コンビニ袋を持った美波が伐を怒鳴りつけ、伐はコンビニから出て

きた明久達を見てため息を吐く。

「……………観念しろ。伐」

「……………俺をお前らのくだらない友情ごっこに巻き込むんじゃねえよ。迷惑だ」

康太は伐に逃げられないと言うが、伐は唾を吐き捨てるように言う  
と付いてくるなと言いつきだすと、

「待つてよ。黒須くん、女の子が荷物を持ってるんだし、黒須くん  
も手伝つてよ」

「……………うるせえ」

明久は当然のように伐の隣に並んで伐にも手伝えと言い、伐の眉間  
には皺がより、不機嫌そうに言う。

「黒須、あまりそのような表情かおをするものではないのじゃ」

「そうです。笑顔は大切です」

「……………黙れ。お気楽軍団」

伐は足早に歩きですが、康太が伐の家を知っているせいか道を間違  
える事なく、明久達は伐の後を付いてくるため、

（……………撒いても、康太がいるからな。厄介だ）

撒こうとも考えるが康太の存在に舌打ちをすると、

「……………着いた」

「ここ？ アパートとかじゃないの？」

伐の家の前に着き、そこには小さなビルが立っており、

「……………伐の部屋は2階のテナントを改造して住処にしている」

康太は伐の部屋の事を説明すると伐の部屋の前まで続いている階段をあがって行き、

「伐くん、行かないの？」

「……………」

愛子は伐の様子も気にする事なく部屋の前に移動するメンバーを見て苦笑いを浮かべて伐に聞くと伐は1度、ため息を吐いた後、部屋に向かう事なく歩き出し、

「ちょっと、伐くん、どこに行くんだよ!？」

「……………どこだって良いだろ。めんどくせえから、一人身の客のところに泊まる」

愛子はそんな伐の様子に慌てるが、伐は鬱陶しいと言うと携帯電話を取り出して電話をかけながら1人で陽が落ち始めてきた街へ消えて行く。

### 第143問（後書き）

どうも、作者です。

伐は夜の街に消えていきました。

やっぱり、伐になれ合いは似合わないなと思いました。

乱入と意見をくれた皆様すいませんでした。

そして、伐の住処はテナントを改造してまあ、『黒猫の事務所兼住処』に居候しており、黒猫が死んだ今でもそこにしがみついている  
と思ってください。

伐が自分の部屋に他人を入れる事はあまりないと思います。

黒猫がいた場所だから、かけがえのない場所だから

さあ、次からは強化合宿編ですかね？

如月グランドパークは伐のキャラクター上あり得ませんしね。先日  
も書きましたが、美春ルートなら書くつもりでしたけど。（苦笑）

## 第144問

「……めんどくせえ」

「いきなり、それはないんじゃないかな？」

伐は珍しく朝から登校してきており、屋上でタバコに火を点けた時、愛子が伐の顔を覗き込む。

「おはよう。伐くん」

「……」

「ねえ。挨拶くらいしてくれたって良いでしょ」

愛子は笑顔で伐に朝の挨拶をするが伐が返事を返す訳もなく、愛子是不満げに頬を膨らませると、

「……」

「ちょっと、どこ行くの！？ タバコ吸ったまま、学校内に入ったらダメだよ。停学になっちゃうよ！？」

伐は愛子の相手をしたくないため、立ち上がるとタバコをくわえたまま屋上を後にしようとし、愛子は慌てて伐の腕をつかもうとするが伐は愛子の手を交わした時、

「最悪じゃあーっっっ！！」



「きゃっ!？」

屋上の出入り口の裏側から明久の叫び声が響き、愛子はその叫び声に可愛い悲鳴を上げて伐の腕に飛び付く。

「……ダーリンだな」

「え？ 吉井くんの声？」

「……」

「えっ!？ 伐くん、どこに行くの？」

伐は明久の声だと言うと愛子を自分の手から引き離して明久の声が聞こえた場所に歩きだし、愛子は慌てて伐の後を追いかけると、

「……僕が何をしたって言うんだよ」

手紙を手に悲しそうな声でぶつぶつと話している明久が立っており、

「……脅迫状か？ ダーリンも大人になったな」

「く。黒須くん!？」

伐は音もなく明久の背後に移動して明久の手紙を取り、明久は伐の登場に驚きの声を上げる。

「えーと、脅迫状を貰ったら大人なのかな？」

「く、工藤さんまで!？」

愛子は伐の言葉に苦笑いを浮かべると明久は驚きの声を上げるが、

「ちょっと、黒須くん！？ 何するんだよ！？」

「何だ？ こんなくだらないものを集める趣味でもあるのか？ ずいぶんと殊勝な趣味だな。Mか？」

伐は明久宛の脅迫状を興味無さそうに破り捨てると明久は驚きの声を上げ、伐は明久の事などどうでも良いと言いたげに聞くと、

「違うよ！？ そんな趣味はないよ！？」

「……島田に関節技を受けて喜んでるんだ。ドMだろ」

「違うよ！？」

明久は伐の言葉を全力で否定する。

「ねえ。吉井くん、これ、どうするの？ 心当たりとかないの？」

「どうしよう？ 僕にはこんなものを貰う心当たりもないし」

愛子は伐と明久の様子に苦笑いを浮かべながら脅迫状に心当たりはないかと聞くと明久はまったく心当たりがないように首を振り、

「黒須くん、どうしたら良いかな？」

「知らねえよ。本気で殺す気なら、こんなもんはださねえよ。警戒されるより、無警戒の時にサクッとここにナイフを突き立てればい

いんだからな」

明久は伐に泣きつくが、伐は明久の心臓の上の指を置き、冷たく感情のない声で言うと、

「まあ、帰り血とかは服の始末とか面倒だからな。うちの学園で効率が良いのは巨乳娘の料理か？」

「ちょっと、何で、黒須くんは僕を殺すつもりなの！？ 助けてくれる気はないの！？」

「何度も言わせるな。俺が欲しかったら、条件に見合った報酬を用意しろ」

明久の息の根を止める方法を考え出し、明久は伐に助けて欲しいと伐につかみかかろうとするが伐は明久を当然のように交わし、依頼ならいけると言い、

「西村がうるせえから、先に戻るぞ」

短くなったタバコの火を携帯灰皿で消して、1人で教室に戻って行く。

第144問（後書き）

どうも、作者です。

強化合宿編スタートです。

どうなるんでしょうか？

折った美春、美波フラグ。  
（爆笑）

第145問（前書き）

今回は秀吉ファンに怒られるかも知れません。（苦笑）

## 第145問

「ねえ。黒須くん、犯人探しを手伝ってよ」

「……しつけないな。依頼なら受けてやるって言ってるだろ」

明久は教室に戻る伐の隣に並ぶと伐に脅迫状の犯人探しを手伝って欲しいと言うが、伐はただでは手伝う気はないため、面倒くさそうに教室のドアに手をかけ、ドアを開けた時、

「お願い。黒須くん、僕は黒須くんが欲しいんだ!!」

「……ダーリン、必要な言葉が抜けてるぞ」

明久は脅迫状に余程追い詰められているようで勢いで叫び、その内容に伐はため息をついた後、

「まあ、何なら、俺に首輪でも付けてみるか？ ご主人様？」

「く、黒須くん」

妖艶な笑みを浮かべると明久の理性を剥いでいくような甘い声で明久の耳元でささやき、明久は頬を赤く染めて伐の瞳を見つめ返し、

「どちらかと言えば、黒須くんになら首輪を付けて欲しいかな」

「そうか……それなら、プレゼントだ」

「はい。ご主人さま」

明久は伐にいじめられたいと言うと伐は懷から首輪を取り出し、明久に首輪を取りつけようとする。

「……明久、冷静になれ」

「そうよ。アキも黒須も何をしてるのよ!？」

「そうです。そう言うのは明久くんにはまだ早いと思います!！」

伐と明久の様子にFクラス男子が鼻血を吹きだし、廊下では腐女子から黄色い歓声上がるなか、雄二はため息を吐き、瑞希と美波が伐と明久のなかに割って入る。

「姫路さん、美波、邪魔しないで、ご、ご主人さまああ!!!！」

「……お主達は朝から何をやっておるのじゃ?」

明久は瑞希と美波により、伐との距離を引き離されると涙を流しながら伐に手を伸ばすと秀吉はため息を吐くが、

「何だ? 嫉妬したか?」

「ち、違うのじゃ!?! だいたい、ワシは男なのじゃ!?! や、止めるのじゃ……っ!?!」

伐はそんな秀吉の様子にくすりと笑うと秀吉の背後に回り込み、秀吉の首筋にキスをすると秀吉の口からは甘い声が漏れる。

「……黒須、お前は何がしたいんだ?」

「ん？　ここ2、3日は仕事で加齢臭のする親父の相手ばかりだったからな。若いのが欲しくてな」

「止め、止めるのじゃ」

「そんな事を言ってこいつは止めて欲しくなさそうだぞ」

雄二は伐の様子にため息を吐くが、伐は気にする事なく、秀吉のズボンのなかに右手を滑り込ませると、

「……秀吉、黒須くん、あなた達は何をしてるのかしら？」

隣の教室で騒ぎを聞きつけたのか優子が額に青筋を浮かべて伐と秀吉に声をかけるが、

「どうして、欲しいんだ？　口に出して言ってみろ」

「……意地悪をしないで欲しいのじゃ」

伐は優子を見殺しにして秀吉の耳元で甘くささやくと秀吉はすでに完全に流されており、

「秀吉、あんたは何を言ってるのよ！？」

優子は頬を染めている弟の様子に声を上げると、

「木下さん、何を言ってるの！！　ミサちゃんと秀吉くんの本番なんて見れる機会は貴重なんだよ！！　もっと、自分に素直になろうよ……」



「ちがつ！？ あたしはそんなのを見る趣味はないわ」

伐と秀吉の様子を嗅ぎつけたようで美紀が拳を握り締めながら優子に言つと優子は否定しようと声を上げるが、その視線は伐と秀吉に釘づけになっており、本心では止めるつもりはないようであり、伐と秀吉の周りには多くの観客が集まり始めている。

「伐くん、ダメ！！」

「……また、お前かよ」

そんな騒ぎに我慢が出来なくなつたのか愛子は観客をかき分けて伐の手に抱きつき、秀吉から伐を引き離すと伐は愛子の顔を見て舌打ちをする。

## 第145問（後書き）

どうも、作者です。

ヒロインそっちのけで秀吉と明久に手をかける主人公。（爆笑）

さすがに本当にこんなことがあったら大変だとは思いますが、文月学園だと違和感のないのが不思議です。（苦笑）

今回の秀吉に襲いかかった件に関しての誹謗・中傷は例の如くやさしく願います。

## 第146問

「何で、そんな反応なの？」

「知るか。だいたい、何でお前に俺の行動を制限されないといけない」

「それは……」

愛子は伐の反応に頬を膨らませると伐は愛子につるさく言われる筋合いはないと言い、愛子は清涼祭で伐に告白しているため、自分を見て欲しいと言う想いがあるようで伐から恥ずかしそうに視線を逸らす、

「やっぱり、姉妹どんぶりが良いか？」

「ちょ、ちよっと！？ 何でそうなるのよ！？」

「ん？ 観客もいるからな。美人姉妹の濡れ場は必要な絵だろ？」

「ワシは男なのじゃ！？」

伐は愛子の事など気にする事なく優子に手を伸ばそうとし、秀吉が愛子から助けられたこともあり少し冷静になったように声を上げる。

「……木下、空気を読めよな。それでも役者か？ ここは女を演じる場所であって、自分が男だと主張する場所じゃない」

「そ、そうなのかのう……く、黒須、できれば優しくして欲しいの

じゃ。ワシも姉上も初めてじゃからのう」

伐は秀吉に役者として何か欠けていると言うと秀吉は頬を真っ赤に染めて、伐に自分と優子をお願いするが、

「秀吉、あんた、何で頬を染めるのよ!? 流されて良い場面じゃないわよ!? だいたい、何で、あんただけじゃなく、あたしも巻き込むのよ!?!」

「……まったく。黒須、ここで2人を脱がせても金にならないから止めておけ」

優子は得意の妄想力でそれなりにこの後の事を想像してしまったように顔を真っ赤にして叫ぶと雄二は伐を止めるために金を引き合いに出し、

「……そうだな。只見をさせるにはもったいないからな。後の楽しみに取っておくか」

伐は納得したようでまだ、理性のタガを外しきれない優子のタガを外すように彼女の耳元でささやくと、

「そんな機会、あり得ないわ!」

「まあ、俺は下の口が素直になつてくれれば良いから、上の口はどうでも良い」

優子は拳を振りまわすが伐はその拳を慌てる事なく交わすと1人で教室に入っていく。

「それで、結局、何があつたんだ？」

「……ダーリンが大人になつただけだ」

伐が教室に入つた事で騒ぎは終わりを告げ、雄二がこんな騒ぎの原因は何かと伐に聞くと伐は気だるそうに言い、

「アキ、ちょっと、良いかしら？」

「明久くん、やっぱり、坂本くんと」

「ちょっと、待ってよ！？ 2人とも何を勘違いしてるの！？ だいたい、何で相手が雄二なのさ！！ 僕は秀吉や黒須くんの方が良いに決まつてるでしょ」

瑞希と美波は背後に黒いものはみ出しながら笑顔で明久の肩をつかむと明久はまた、伐と秀吉の名前を出し、

「ダーリン、自分でつけてみる」

「はい。ご主人さま」

伐は明久の前に首輪を出すと明久は伐の顔を見上げて首輪を受け取るが、

「……明久、話を戻すな。それで、大人になつたとかわけのわからない事を言つてないで説明をしる。隠すと余計ややこしくなるぞ」

「そ、そうだね。えーと、言い難いんだけどさ。朝、これを貰ったんだ」

雄二はため息を吐きながら明久を止めると明久は正氣に戻ったように懐から伐が破り捨てた脅迫状を拾って来ていたようで雄二の前に出すと、

「ん？ ラブレターか？」

「みんな、まだカッターは早いわ。落ち着きなさい。だいたい、どう考えてもアキがラブレターを貰えるわけがないでしょう？」

雄二は冗談を言いながら脅迫状を受け取ると教室内が殺氣立つ。

## 第146問（後書き）

どうも、作者です。

完全に明久か秀吉ルートに入っている流れですが、この作品は『愛子』ルートです。（爆笑）

せっかく、BLのタグを付けているので遊びたくまりました、ここまでやるつもりは最初ありませんでしたが、いいのかなあ？と思いつながら気持ちにしません。

例の如く、誹謗・中傷はやさしくお願いします。

## 第147問

「失礼な。僕だってラブレターの一通や二通」

「次は耳よ」

明久は美波の言葉に有って無いようなプライドに火が点いたようで見栄を張ると明久に向かいカッターが投げられ、カッターは教室の後ろの掲示板に突き刺さる。

「心の底からゴメンさい!？」

「それで、雄二、それはなんなのじゃ？」

明久が美波に土下座をして謝っている様子に秀吉はため息を吐くと雄二に明久の手紙の内容を聞き、

「ラブレターだな」

「……アキ、死ぬ覚悟はできてるわね」

「明久くん、ちょっと良いですか？」

雄二は明久の不幸が楽しいようにニヤリと笑うと瑞希と美波を中心にFクラスの生徒は明久に殺意を向けると、

「違う。違うよ。雄二もおかしな事を言わないで!？　そ、それは……」



「何なんですか？ 明久くん」

「素直に話さないよ。今なら、肋骨5本で許してあげるわ」

明久は自分に向けられる殺意に怯えながらも何かを言おうとするが、直ぐには思いつかなかったたようでしどろもどろになっており、瑞希と美波は額に青筋を浮かべながら明久との距離を縮めて行く。

「きよ、きよ……『競泳用水着愛好会の勧誘文』！！」

「まあ、確かにあの密着具合はそそる」

明久は行きついた答えはおかしいが、伐は気にする事なく頷くと、瑞希と美波は明久の変態っぷりに何かぶつぶつと言いだめるが、クラスメートからは明久を称賛する声が響き、

「……相変わらず、バカしかないな」

「……納得したお主が言う言葉ではなかるうに」

伐はくだらないと言いたげにため息を吐くと秀吉は伐の様子にため息を吐いた後、

「それで、雄二、それは何なのじゃ？」

雄二に再度、手紙の事を聞くと、

「脅迫状みたいだな。『あなたのそばにいる異性にこれ以上近付かない事』って書いてあるな」

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおる異性に対して何らかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じやろうが。つまり」

「うん。手紙の主はこのクラスに3人しかいない異性。つまりは姫路さん、秀吉、黒須くんのうちの誰かに好意を寄せている奴だつてわかるね」

雄二は明久が貰った脅迫状の内容を話すと明久の予想で美波は何か武器になりそうなものを探し始め、

「……島田、使うか？」

「ナイフ？　ウチはどちらかと言えば、鈍器が良いんだけど」

「鈍器は片づけが大変だから止めておけ。これなら、血を洗い流すだけで良いからな。鈍器はいろいろとはみ出てくると面倒だ」

伐は懷からナイフを取り出すと美波は何かを考え、

「ちょっと、冗談にしては悪質だから！？」

明久は伐と美波の会話に声を上げる。

「ん？　続きがあるぞ。なにに、『この忠告を聞き入れない場合は、同封されてる写真を公表します』」

「写真？　そう言えば、もう1つ、封筒が入ってた」

雄二は脅迫状の続きを読むと明久は思い出したようにポケットから

封筒を取り出し写真を確認した後、

「もう、いやああああ!？」

写真の内容がショックだったようで声を上げるが、

「何だ？ ただの清涼祭のアキちゃんの写真だろ」

「……………売り上げは好調。秀吉と伐に並ぶ勢い」

伐は写真を覗いてくだらないと言い切り、康太もすでにムッツリ商会で取り扱っていると言い、

「な、何で!!!??？」

明久は知らされた事実に関心を押さえて叫ぶ。

## 第148問

「なら、明久が死ぬだけか？ 問題ないな」

「バカ雄二、何だ、その態度は！！」

雄二は明久への脅迫状に興味がなくなったように、脅迫状を投げ捨てると明久は手に持っていた『アキちゃんの写真』を放り出して雄二につかみかかると睨みあいを始め、

「……巨乳娘、その写真をどうするつもりだ？」

「そうよ。瑞希、独り占めはするいわよ」

瑞希は『アキちゃんの写真』を拾い上げて懷にしまうのを見て、伐が瑞希に言つと美波は自分にも分けると瑞希に詰め寄る。

「美波ちゃん、待つてください。私はこの写真を、明久くんを魅力でWEBで発信したいんです」

「……スキャナーがいるわね。一先ず、家にあるので良いかしら、先月、買い換えたばかりだから、画像も良いはずよ」

「お願いします。今日の帰りですが、早速、良いですか」

「もちろんよ」

瑞希は何を考えているのか頬を染めて明久の醜態を全世界に発信すると言つと美波も納得したように瑞希に協力すると言つと瑞希と美

波はがっちりと握手を交わし、

「明久、落ち着くのじゃ！！ 飛び降りなんて早まったマネをするでない！！」

「放して秀吉！！ 僕はもう生きていける気がしないんだ！！」

明久は瑞希と美波の様子に雄二との睨みあいなどどうでもよくなつたようで窓に向かおうとすると秀吉が明久をつかみ、明久を止めるが、

「木下、死にたい相手を止めるな。ダーリン、死ぬのは勝手だけだな。余所でやれ。お前の死体処理にばあに金を使わせるな」

「そうだな。自殺者なんか出たら、またスポンサーが減るとか言う騒ぎになるな」

「2人とも、そんな事を言っていないで手伝うのじゃ！？」

伐と雄二は明久を止める気はなく、秀吉は自分1人の力では明久に引きずられるようで2人に助けを求める。

「……仕方ねえな。おい、ダーリン、お前は俺のものだろ。死ぬことを俺は許可してないぞ」

「じ、ご主人さま」

「……黒須、その止め方はどうなんだ？ 明久、お前も頬を染めるな」

伐は気だるそうにため息を吐くと伐の耳元でささやくと明久は頬を赤く染めて立ち止まり、雄二は2人の様子にため息を吐くと、

「黒須、ムツツリーニ、この写真は真犯人を見つけるために役に立たんかのう？」

秀吉は一先ず、止まった明久を見て、安堵のため息を漏らした後、伐と康太に真犯人を探す協力を仰ぎ、

「ナイスアドバイスだよ。秀吉、流石、僕のお嫁さんだ!!」

「婿の間違いじゃろう!？」

明久は伐に流されないように大声を上げて秀吉を誉めるが、言葉はおかしく、秀吉は全力で否定するが、

「あの……どちら間違いだと思えますけど……」

「俺には関係ねえよ」

瑞希は苦笑いを浮かべて明久と秀吉の言葉に苦笑いを浮かべ、伐は興味無いと気だるそうに言う。

「ムツツリーニ!! 犯人を見つけるのに協力して」

「後にしろ。お前の騒ぎで流れていたが、俺が先約だ」

明久は先ほどから協力を仰げない伐を諦めて、康太に協力をお願いしようとするが、雄二も何か康太に頼んでいるようで明久を止め、

「雄二がムツツリー二に頼みごと？」

「……………雄二の結婚が近いらしい」

「結婚？ ガキでもできたか？ 付き合いの長い幼なじみで生理の時期も知っていると油断したか？ やるなら避妊くらいしろよ」

明久が首を傾げると康太は忙しいと言いたげに明久の疑問に答え、  
伐は康太の言葉に雄二に向かいバカな事をしたなと言う。

## 第149問

「ちげえ！？俺はやってねえ！！」

「……そうか。不能か」

「それもちげえ！？そんな目で見るな！？」

雄二は伐の言葉を全力で否定すると伐はある答えに行きつき、雄二の下半身に可哀想なものを見るような視線を向けると雄二は自分の下半身の1部分を隠しながら否定する。

「子供ができてないなら、一応話を聞くよ。雄二に何があったの？」

「一応つてのが癪に障るが、まあ、良いだろう。実は今朝、翔子がMP3プレーヤーを隠し持っていたんだ」

「MP3ね。生活に困ってない奴は余裕があつて良いな」

明久が雄二に何があったかと改めて聞くと雄二は翔子がMP3プレーヤーを持っていたと言うが、それは直ぐに結婚に繋がる事ではなく明久は首を傾げるなか、伐は興味もないためかため息を吐く。

「いや、あいつは結構な機械オンチだからな。そんなものを持っていて、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ。そこが怪しく思つて没収してみたんだが、そこにはねつ造された俺のプロポーズが録音されてた」

「ああ、あれか」



「召喚大会の準決勝のじゃな」

雄二はMP3に入っていた内容に顔を青くして言う。と伐と秀吉はそれに心当たりがあるようで頷き、

「……ああ、それを婚約の証拠として父親に聞かせるつもりだろうだ」

雄二はこのままでは自分の人生が決められてしまうと言いたげに言う。

「なるほど、ダーリンも霧島も脅迫を受けてると言っただころか？」

「ああ。これは再生用のコピーだしな。オリジナルを探さないと俺の将来が……」

伐は雄二も明久と同じようにある意味脅されていると理解すると雄二は切羽詰っているようで叫ぶが、

「遅かれ、早かれ、そうなるんだ。問題ないだろ」

「……確かに、それを調べるなら他の事をした方が効率が良い」  
伐は別にどうでも良いと言うと康太も犯人探しは無駄だと判断したようである。

「そう言う問題じゃないだろ……」

「そつだよ……」

「脅迫されているもの同士、おかしな同盟が組まれておるのう」

雄二は声を上げると珍しく、明久が雄二の味方をし、秀吉は2人の様子に苦笑いを浮かべた時、

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

教室のドアを開けて大きな箱を持った西村教諭が教室に入ってくる。

「とにかく頼むぞ。報酬に今度お前のお気に入りに入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその2を持ってくるよ」

「……………必ず、調べ上げておく」

西村教諭の言葉に明久と雄二は康太に報酬を提示すると康太は大きく頷き、2人は康太の様子に安心したように頷いた後、席に戻ると、

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ、旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだが……………」

（…………強化合宿ねえ。時間がある奴は余裕だな。まあ、俺はサボるから、関係ねえな）

西村教諭が強化合宿の説明をしているなか、伐は強化合宿をサボる

つものようでありを開く事なく欠伸をしている。

## 第149問（後書き）

どうも、作者です。

明日からは強化合宿。サボるつもりのは話は聞いてませんが、きつと鉄人に捕まって強制参加でしょう。（爆笑）

強化合宿で愛子との距離は縮まるんでしょうか？

予告？

活動報告に自サイトで書く予定の『美波・美春共通ルート』1話目を書きました。

こちらのサイトでは書かないと思いますが興味のある方は覗いてみてください。

## 第150問

「黒須、帰るのか？」

「……ああ。終わったんだ。いつまでも残ってたって仕方ねえだろ」

「いや、できれば、犯人探しを手伝って欲しいんだが」

「知らねえよ。だいたい、お前の場合は脅迫でも何でもないだろ。卒業後に入籍が、お前の来年の誕生日に入籍に変わったただけだろ」

伐は放課後になり、席を立つと雄二は伐に脅迫犯探しを手伝って欲しいと言うが伐は関係ないと言うと教室を出て行く。

「伐くん」

「……また、お前かよ。つきまとうな」

伐が校門を出た時、愛子は伐を待っていたようで伐の姿を見つけて駆け寄ってくるが、伐はそんな愛子を見て気だるそうにため息を吐き、

「何で、そんな態度なの？」

「何で、俺がお前の相手をしないといけねえんだよ」

愛子は相変わらずの伐の態度に不服そうな表情をするが、伐は面倒そうに言々と愛子の相手をするつもりなどないと言った感じで1人で歩きですが、

「待つてよ。何で、そんな風に態度を変えるの？　ボクの告白、そんなに迷惑だった？」

愛子は伐の手をつかみ、今にも泣き出しそうな声で聞く。

「……」

「どうして？　前は機嫌は悪そうでも面倒そうでも話もしてくれたのに、どうしてなの？　答えてよ」

伐はそんな愛子を見ても表情は変わる事はなく、愛子はそんな伐の様子に普段見る事のないくらいの弱々しい声で聞く。

「……ちつ、めんどくせえな」

「伐くん？」

伐は舌打ちをすると愛子の頭を乱暴に撫で、愛子は伐の突然の行動に何があったかわからないような表情をして、伐を見上げると、

「……前にも言っただろ。余計な事に首を突っ込もうとするな。それが安全に生きるために必要な事だ。ノラ猫おれの領分にガキが入ってくるな」

伐は普段の伐とは違う子供に言い聞かせるような優しい声で言うが、

「……いや、何で、そんな事を言うの？　ボクは伐くんのそばに居たいよ。伐くんは口は悪いし、エッチだけど優しいよ。自分が傷つ

いても平気だつて顔してそんな事をしていると伐くんが壊れちゃうよ」

愛子は伐が心配だと言う。

「……余計なお世話だ。ノラ猫<sup>おれ</sup>がどこで死のうとお前には関係ねえ。それに俺は簡単に壊れるわけにはいかねえんだよ」

伐は唇を噛むと何かを思い出しているのか、目には怪しげな光が灯り、

「……あのクズを地獄の底に叩き潰すまでは壊れるわけにはいかねえんだ」

「……伐くん、大丈夫？」

伐は殺意を込めて言うと、愛子は伐の様子に心配そうな表情で声をかけるが、

「……何もねえよ。それより、いつまで抱きついているつもりだ？俺は帰りたいんだ」

伐は直ぐにいつもの気だるそうな表情になると愛子に放すように言う。

「今日はバイト？」

「……お前には関係ねえだろ」

愛子は急いでいるように見える伐を見て、また、バイトがあるのかと聞くが伐は関係ないと言うと商店街の方向に歩きだし、

「ちょっと、待ってよ。商店街に行くなら、ボクも行くよ」

「……ついてくるな」

愛子は伐の隣に並ぶが伐は気だるそうに言い、

「ボクだって、商店街に用があるんだよ。明日のお弁当の材料を買わないといけないからね。そう言えば、伐くんは明日のお弁当はどうするの？　なんなら、ボクが作るうか？」

「……何度も言わせるな。俺は他人の作ったものは食べねえんだよ。だいたい、俺は合宿に参加するつもりもねえしな」

愛子は伐にお弁当を作るうかと聞くが伐は気だるそうに合宿をサボるというと、

「そうなんだ」

愛子は伐が合宿に参加しない事を聞いて残念そうな顔をする。



## 第151問

（ああ。伐くんは合宿にこないのか。少しは期待してたんだけどな。残念だよ）

「おはよう。愛子」

「おはよう。優子」

「どうかしたの？　なんか元気ないわね」

愛子は強化合宿のAクラス集合場所に着き、伐が強化合宿に参加しない事を残念だとため息を吐いていると愛子の様子を優子が声をかけてくる。

「そんな事ないよ。ただ、ちょっとだけ、伐くんが強化合宿に参加しないって聞いたからさ」

「……黒須くん？　さっき、秀吉に途中まで荷物を持ってもらってきたんだけど、Fクラスの集合場所にいたわよ」

「うそ！？」

愛子は苦笑いを浮かべながら伐がいない事が残念だと言うと優子は伐を見たと言い、愛子が驚きの声を上げると、

「愛子、あたしが言うのはおかしいかも知れないけど、黒須くんは止めた方が良くと思うわよ。一緒にいるといろいろと危ないって言うかさ」

「心配してくれてありがとう。でもね」

優子は愛子に向かい伐だけは止めておいた方が良いと言うが、愛子は優子が自分を心配してくれている事に礼を言うがそれでも伐が好きだと笑い、

「ちょっと、伐くんのところに行ってくるね」

「ちょっと、愛子！？ もう直ぐ時間よ！？」

伐に会いに行くと言い駆け出して行き、優子は愛子を止めるが愛子は振り返る事はない。

「……黒須、お前は何がしたいんだ？」

「……知るか。文句は西村に言え、と言うか。縄を解け」

雄二はFクラスの集合場所に着くと動けないように縄で縛られている伐を見て眉間にしわを寄せて聞くと伐は忌々しそうに舌打ちをすると、

「鉄人？ 何かあったのかよ？」

「……ああ。俺はサボる気だったからな。さっきまでバイトしてたんだよ。そしたら、バイト先に現れてこんな状況だ」

雄二は伐の縄を解きながら、伐が縛りあげられている理由を聞き、伐はバイト先で拉致されたと言う。

「おいおい。鉄人はお前のバイト先にまで現れるのかよ。よく停学を喰らわなかったな」

「……あん？ おかしな勘違いするんじゃないよ。基本的にあつち系のバイトは次の日が休みの時にしかしてねえよ。金額次第で平日でも行くけどな。基本的には深夜営業のレストランでバイトだ」

雄二は伐のバイト先は売春のみだと思っているため、顔を引きつらせるが伐は縛られていた手や足を動かしながら雄二に向かいおかしな事を言っなど言っとな

「……まったく、縄の跡が点くまできつく縛りやがって、俺の肢体は商品なんだぞ」

「……………河の向こうは楽園」

「ム、ムツツリーニ！？ く、黒須くん、き、昨日はどんなプレイだったの！？」

伐は自分の手首に残る縄の跡を見ながら舌打ちをすると伐と雄二の今までのやり取りを聞いていなかった康太をはじめとしたFクラスの生徒達は伐の身体に残る縄の跡におかしな事を想像したようで鼻血を吹き出して沈んで行き、明久は康太を抱えながら伐に昨日は何をしていたかと聞く。

「……………緊縛プレイ」

「緊縛プレイ！？ そ、そんな、ご主人さまが縛られるなんて、どんな人が相手だったの？」

「類人猿だな」

「……そうだな」

伐は明久の質問に表情を変える事なく言うと明久の中では伐は絶対的な主人に分類されているようで驚きを隠せないように聞き返すと伐は明久の様子に表情を変える事なく言い切り、雄二はため息を吐く。

## 第151問（後書き）

どうも、作者です。

伐、鉄人に捕まる。（爆笑）

裏話ですが、伐のバイト先の深夜営業のレストランの店長と鉄人は知り合いです。

店長は鉄人の元教え子と設定しています。同じく、最初に伐を文月学園に送ってきた伐のお客さんもです。

それゆえ、待ち伏せ拉致。

Cクラス設備のため、文月学園での集合でバス移動のFクラス。移動時の騒ぎに伐はどうするんでしょうか？

そして、伐に会いに向かった愛子は？

## 第152問

「あはは。相変わらず、Fクラスは面白いね」

「ん？ 工藤」

「おはよう。伐くん、坂本くん」

鼻血で沈んでいるFクラスの惨劇を見て愛子は苦笑いを浮かべると雄二が愛子に気づき、愛子は2人に挨拶をすると、

「ああ。おはよう」

「……」

雄二は愛子に挨拶をするが伐は面倒そうにため息を吐く。

「ちょっと、伐くん、会うなり、ため息は酷くない？」

「……うるせえな。お前の集合場所はあっちだろ。さっさと戻れよ」

愛子は伐の様子に不満そうに言うが、伐は愛子を追い払うように手を振ると、

「黒須、工藤の言うとおりだぞ。少しくらいは相手をしてやれ」

雄二は真っ直ぐに伐にぶつかって行く愛子は伐の弱みの1つと認識しているようでニヤニヤと笑いながら伐をからかうように言う。

「……嫁、旦那が俺に近づいてくるから引き取りに来い」

「……直ぐに行く」

「黒須、ちよつと待て！？　なんでお前が翔子の電話番号を知っているんだ！？」

伐は雄二の笑い顔にイラつとしたようで携帯電話を取り出すと何故か知っている翔子の電話番号に電話をかけ、雄二は声を上げると、

「……俺は情報屋だ。文月の関係者の電話番号、メールアドレス、住所くらいは一方的に知っている」

「……いや、普通はあり得ないよ」

伐は興味無さそうに当然だと言い切り、愛子は流石にあり得ない伐の言葉に顔を引きつらせるが、

「それで、逃げなくて良いのか？」

「しょ、翔子、待て。まずは話し合いと言つものを覚える！？」

「……雄二、浮気は許さない。やっぱり、早く婚約をしないといけない」

伐は表情を変える事なく雄二に逃げなくて良いのかと言うと雄二は背後に翔子からの殺気を感じて振り返ると翔子が立っており、雄二との婚約を早急に進めようとしている。

「嫁、これを返しておく」

「……ありがとう。やっぱり、黒須は良い人」

「て、てめえ、黒須！？ 何でお前がそれを持ってやがるんだ！？」

伐は翔子の様子に口元を緩めせると前に雄二が翔子から取り上げたMP3プレーヤーを翔子に投げ、雄二は伐が康太に預けたはずの『自分のプロポーズがねつ造されたもの』を持っていた事に声を上げるが、

「悪いな。俺も仕事の関係上、霧島家を敵に回す事は避けたいからな」

「……これで婚約の話が進められる」

伐は雄二と翔子を天秤にかけ、当然、後で役立つ方に肩入れしており、翔子は雄二の浮気より自分の手に戻った婚約に欠かせないMP3プレーヤーを大事そうに握りしめる。

「えーと、代表。もう少し、坂本くんの意見も聞いてあげたらどうかな？」

「そうだ。工藤、良い事を言った！！ 翔子、それを俺に渡すんだ！！」

「……雄二は恥ずかしがり屋さんだから、私が全部準備する。婚約から結納、結婚式まで」

「良かったな。ダメな亭主でも嫁が有能で」



愛子は雄二と翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄二は翔子にMP3プレーヤーを渡すように言うが、翔子は雄二との結婚までのプランをすでに立てているようで幸せそうに表情をすると伐は興味はなさそうだが、雄二に諦めるように言う。

「て、てめえ、黒須！！　どうしてくれるんだよー！！」

「知るかよ。だいたい、お前がいつまでも過去の事を引きずってるから面倒な事になってるんだろ。わざわざ手を離そうとするんじゃないよ。離しきれねえくせによ。お前から見てるとめんどくせえんだよ」

雄二は翔子から無理やりMP3プレーヤーを取り上げるわけにもいかずに伐の胸倉をつかみ言うが、伐は雄二と翔子の過去を全て知っていると言いたげに言う　と雄二の手を払い、

「……俺はバスの中で寝るから、後は勝手にしろ」

これ以上、面倒事に関わりたくない　と欠伸をしながらバスに向かい歩きます。

## 第153問

「おい。黒須」

「……うるせえ」

伐がバスで眠っていると雄二が伐の身体を揺すり、伐は不機嫌そうに目を覚ます。

「お前、よくこんなところで寝れるな」

「……そんなくだらない事で起こしやがったのか？」

雄二は移動するバスの中で寝られるのが信じられないのか伐の様子にため息を吐くが、伐はくだらない理由で起こすなと言うと、改めて目を閉じるが、

「寝るな。さつきから、お前の寝顔を見て理性と本能の間で揺れている奴らがいる。このまま寝てると危ないぞ」

「……黒須くんの寝顔、あれは誘ってると思うんだ。そう思うのは僕だけじゃないはずだ」

雄二はため息を吐きながら、明久を中心にしたクラスメートの男子生徒達が伐を狙っていると言う。

「あ？ 知るかよ。金も払わずに襲いかかってきたら、窓から捨てれば良いだけだ。数だ。力で何とかなるほど、俺はバカじゃねえよ。だいたい、西村が乗り込んでるバスでそんな事をしてくるバカがい

るか？」

「いや、どちらかと言えばバカしかないぞ」

「……確かにのう」

伐はうるさいと言いたげに雄二を睨みつけると襲いかかってきたらそれなりの対処をすと言い、目を閉じるが雄二と秀吉は西村教諭がいようとFクラスには関係ないと言い、

「ホントよ。黒須、木下、あんた達は襲われないようにしなきゃダメよ」

「そうですよ。気をつけてくださいね」

「島田、姫路、なぜ、ワシと黒須を女扱いするのじゃ！？　ワシは男なのじゃ！！」

瑞希と美波は伐と秀吉に気をつけるように言つと秀吉は声を上げて自分が男だと主張するが、

「黙れ。黙らないなら、その口を無理やり塞ぐぞ」

「何をするつもりじゃ！？」

伐は寝るのを邪魔されているせいか不機嫌そうに秀吉に言つと秀吉は驚きの声を上げる。

「あ？　方法なんていくらでもあるだろ。こっちはさっきまで寝な

いで働いてたんだ。それなのにこんな金にもならねえものに無理やり参加させられてイラついてんだよ。あんまり、俺をイラつかせるな」

「わ、わかったのじゃ。すまなかったのじゃ」

伐は秀吉を睨みつけて言うと言いつつ秀吉は伐に怒られて小さくなって謝り、

「木下、好きじゃああああ！！！！！！」

「我慢などできるか！！！！！！」

「鉄人など知るか！！！！！！」

そんな秀吉の姿がつぼに入ったようで男子生徒3人が秀吉に襲い掛かるが、

「……だから、騒ぐなって言ってるだろ」

伐は寝られない事に余程、頭にきているようで不機嫌な表情をしたまま、秀吉に飛びかかってきた男子生徒3人の顔面を殴りつけると、

「ゴミが人間様と同じバスに乗っちゃいけないえよな？」

「ちょっと、黒須、それは洒落にならないわよ！？」

「あ？俺は忠告したはずだ。それを守らねえバカが悪いんだろ」

窓を開けて男子生徒の1人の身体を走行中のバスから本気で捨てようとし、美波は慌てて伐を止めようとするが伐が話を聞き入れる気

はなく、

「おい。鉄人、黒須を止めろ！！　いくらなんでも洒落にならん」

雄二は前にバスの前方に座っている西村教諭に声をかける。

「黒須、いい加減にしないか！！　ゴミを窓から捨てるな！！　マナーくらい守れ！！」

「あ？　環境汚染か？　仕方ねえな」

『『『それで納得するのかよ！！？？』』』』

西村教諭は伐を怒鳴りつけると伐は一先ず、納得したようで上半身が窓の外から出ていた男子生徒の首をつかんで車内に戻すと男子生徒を顔からゴミ袋の中に突っ込み、自分の席に戻り、目を閉じる。

## 第154問

「ん？ お前達、忘れていたが昼はどこかで止まるわけではないから、各自、食事をするようにしろ」

昼も近くなり、西村教諭は各自、持ってきたお弁当で昼食を済ませると連絡するとバスの中は弁当を広げながらクラスメート達は騒ぎ始める。

「あんまり、騒がしくなると黒須が怒るのではないかのう？」

「まあ、大丈夫だろ。流石に昼だしな。黒須だって起きたら飯くらいは食うだろ」

秀吉は先ほどの伐の様子に少し声のトーンを落として言うが雄二は気にする必要はないと言い、自分のリュックからサンドイッチを取り出し、

「明久、お前、今日も塩と水か？」

「失礼な。見てみる。このパンを」

明久をからかうように言うと、明久は勝ち誇ったように総菜パンを取り出す。

「何だ。つまらんな」

「僕だってこれくらいはするよ……姫路さんのお弁当が出て来ても困るしね」

「……………確かに」

雄二はつまらなさそうに言う。明久はお昼を忘れてくると瑞希の毒に等しいお弁当を進められる可能性もあるから先手を打ったと瑞希に聞こえないように言い、康太は納得するが、

「明久くん、お昼はそれだけですか？ 私、みんなで食べようといっぱいお弁当を作ってきたんですけど」

瑞希は恥ずかしそうに重箱を取り出し、

「く、黒須、起きるのじゃ！？ 昼の時間なのじゃ！？」

「……………伐、いくら眠くても飯くらいは食うべき」

秀吉と康太は瑞希の料理をはつきりと毒と言える伐を叩き起こそうと慌てて伐の身体を揺する。

「……………うるせえな。誰が起こして良いと言った？」

「……………黒須、良いか。よく聞け。姫路がみんなの分だと言って弁当を持って来たんだ。お前にはあの毒を排除して貰いたい。安いかも知れないが報酬はこれで手を打ってくれ」

「お、お願いだよ。黒須くん」

伐は眉間にしわを寄せて不機嫌そうに声を上げると雄二は安いかも知れないと言いながら、伐の手の中に1000円札を2枚押し込む。

「……1人頭、500円か？ お前らの命はずいぶんと安いな」

「仕方ないのじゃ。完全に予想外なのじゃ！？ ワシらはあんな姫路の笑顔を見せられて断れんのじゃ」

伐は金額を確認してため息を吐くと秀吉は計算外で何も用意していなかったと言い、

「……まあ、内容が内容だけに妥当か？ おい。巨乳娘、前に俺が言った事を覚えてるか？」

「覚えてますよ」

伐は清涼祭で瑞希に料理に薬品を使うなと言った事を覚えているかと聞くと瑞希は直ぐに覚えていると言うがその視線は泳いでおり、

「ちょっと、黒須、何をするのよ!？」

「そうです。酷いです」

伐はそれでこの弁当にも薬品が投入されていると判断し、瑞希から重箱を取り上げるとちゅうちよする事なく重箱ままゴミ袋の中に捨て、瑞希と美波は伐を非難するように言うが、

「前に言っただけだ。お前の料理は食いもんじゃない。正当な評価だ。親のすねをかじってる奴は余裕だな。食いもんで遊んでも何も言われないと思ってやがるんだからな。お前が無駄にした食いもんで何人の人間が死なずに済むかも考えないんだろっからな」

伐は今回も瑞希の言い分を聞きいれる事なく切り捨てる。





## 第154問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希の料理はゴミ扱い。（爆笑）

ここまで言える伐はやっぱり凄いんだと思います。

と言うかここまで瑞希の料理をバカにしてる小説家さんっているのかな？

とか思います。

まあ、伐はこんな性格だからまあ、いいや。（爆笑）

宣伝

以前活動報告に書かせていただきました『美波・美春共通ルート』の第1問を自サイトで更新しました。

興味がある方は『悠久に舞う桜』と言うサイトで書いてますので除いて見てください。そして、できれば感想もいただけたら幸いです。

## 第155問

「あ、遊んでるなんて、そんな言い方ないじゃないですか!!」

「あ？ 他に言うなら、ドブに捨てるか？ 良いか。巨乳娘、お前がやってるのは難民キャンプの中で腹を空かせている奴らの前で食いもんを与えないでいる事と一緒にだ。違うな。自覚がない分、さらに質が悪い」

瑞希は彼女なりにみんなに食べて貰おうと思っただけのためか、伐に向かい言うが、伐は当然のように瑞希の言葉を斬り捨て、

「お前が遊んだ食材を育てるのにだって金も手間もかかってるんだよ。それを無駄にしておいて自分は悪くないか？ ふざけるなよ」

「く、黒須、流石に言い過ぎじゃないか？」

更に追い討ちをかけて行き、流石に瑞希が涙目になり始めたため、雄二が割って入る。

「あ？ 俺はこの間、忠告はしたはずだ。それを無視したんだ。言われて当然だろ」

「だとしてもさ」

「黒須、あんたの言い分もわかるわ。でも、瑞希は瑞希なりにみんなに美味しい料理を食べて貰おうとしたのよ。そこをくんでも良いでしょ。それにあんたはわからないかも知れないけど料理ってそれなりに難しいのよ。誰にだって失敗はあるわよ」

伐は自分には非はないと言い切るが、明久も流石にこの状態を収集をつけたいようで瑞希側に立とうとすると、美波も伐は言いすぎだと言いたげに言う。

「これは失敗じゃねえ。だいたい、俺が料理できないと決めつけるな」

「……………伐の料理は絶品」

伐は瑞希の料理は失敗以前の問題だと言うと康太が伐が料理をできると告げる。

「本当なのか？」

「あ？ 別におかしかねえだろ。こっちは1人身で生きてるんだよ。バカみたいに高くて不味い弁当なんて食えるか」

「い、意外ね。あんた、いつも固形の携帯食を食べてるでしょ」

康太の発言に雄二は驚いたような表情をして聞くと伐は生きるのに当然の事だと言い切ると美波は心底驚いたような表情で言う。

「俺は料理ができる。まあ、できなくても、料理に薬品を使うなんてふざけた事はしねえよ。巨乳娘、これは最後の忠告だ。2度と料理に薬品を入れるなんて事をするな。今度、同じ事をしてきたら、ゴミ箱じゃなく、お前の口の中に全部詰め込んでやる」

「黒須くん、そんな事したら、姫路さんが死んじゃうよ！？ ……あ？」

「あ、明久くん、私の料理ってそんなにひどいんですか？」

伐は瑞希に向かい、次は彼女の料理を全て彼女に食わせると死の宣告をすると明久は流石に言いすぎだと叫ぶが叫び終わった後に、瑞希の目には大粒の涙が溢れている事に気づく、

「ああ、ダーリン、巨乳娘を泣かせた」

「ちょっと、黒須くん、悪いの。僕！？」

「……とどめは間違いなく、明久じゃな」

伐は自分は関係ないと明久が瑞希を泣かせたと言つと明久は自分は悪くないと声を上げるが、秀吉は明久の言葉に首を振る。

「ひ、姫路さん、泣かないで、確かに薬品を入れちゃったのは大問題だけど、姫路さんがみんなのために美味しい料理を作ろうって思ってくれた気持は受け取ったから」

「で、でも」

「そ、そうだ。今度、僕が姫路さんに料理を教えるよ。僕も料理は得意だからさ。料理に薬品はいらないってきちんと教えてあげるから……」

「あ、明久くんがですか？ ……お、お願いします。私、頑張ります」

明久は瑞希の様子に慌てて彼女を励まそうとしたのか、いつの間に

か明久が瑞希に料理を教える流れになって行く。

## 第155問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希の料理いじりを続けました。（爆笑）

そして、なぜは明久が瑞希に料理を教える流れに、この後明久は美波とFFF団に殺られるんでしょうか？

アンケート？

先日、報告させていただきましたが、自サイトで美波と美春の分岐前のルートを書いてますが、更新した時の報告って要りますかね？報告するとなるとこれとは更新日もずれると思いますから活動報告での報告になります。

できれば意見をください。

1．報告してほしい。

2．必要はない。

期限はひとまずは3月いっぱいをお願いします。

後、美波・美春共通ルート第2問を自サイトで更新しました。

## 第156問

『吉井が姫路さんに料理を教える？ …… 2人っきりでキッチンで何をするつもりだ！！』

『こ、個人レッスンだと？ よ、吉井の野郎、姫路さんの手取り、足取り、腰取り、色々な事を教えるつもりか？』

「……アキ、あんた、瑞希に何をするつもり？」

明久が瑞希に料理を教えると言う話にクラスメート達はいろいろな妄想を始め、美波はその妄想に間違った方向に感化され、明久の肩をつかむ。

「み、美波、みんなも何をいきなり何を言い出すの！？」

「……授業料は巨乳娘の肢体カラダか？」

「く、黒須くん、僕はそんな事はしないから！？ み、みんなを煽るような事を言わないで！？ み、美波、ぼ、僕の肩が未だかつてない音がしてるから！？」

明久は周りからの殺意に耐え切れなくなり、落ち着くように言うが、伐はどうでも良いと言いたげに欠伸をしながらクラスメートを煽ると明久の肩をつかんでいた美波は手に更なる力を込め、明久は声をあげ始め、

「……黒須、お主は何がしたいのじゃ？」



「あ？ 当然の流れだろ……腹、減ったな」

秀吉は狭いバスの中でも明久の処刑を始め出すクラスメートを見て、ため息を吐くと伐は自分には関係ないと言っている途中で、頭が覚醒してきたようで腹が減ったと呟くと、

「……ん？ 西村にしては気が利くじゃねえか」

「黒須、お主、鉄人に捕まったと言う割にはしっかりと弁当を作ってきてるではないか」

カバンに携帯の固形食がないかと漁ると伐のカバンの中には弁当箱が入っており、秀吉は感心したように言う。

「バイト先の賄いをつめただけだ。基本的に賄いを作るのは俺の仕事だからな。まあ、家に帰って一眠りしてから食うつもりだったし、ここで食っても問題ないか」

「黒須くん、あ、あの」

「あ？ なんだよ」

「ど、どうして、そんなに上手に詰めてあるんですか？ 黒須くんなら」

「口に入れば同じと盛りつけになどこだわらぬであらう」

伐は弁当箱を開けると弁当箱の中は美味しそうなおかずがキレイに並べられており、瑞希と秀吉はいつも見ている伐なら味はまだしも見た目など気にしないといい、

「あ？ バイト先の料理人がうるせえんだよ。見た目まで気にして料理だとかぬかして、家に持って帰る物だと言っても口うるさく言ってくるんだ」

「そうなのか。なかなか、命知らずな人間もいるもんじゃのう」

伐は舌打ちをしながら、バイト先に面倒な奴がいると言うと秀吉は伐にそこまで仕込んだ人間がいる事に苦笑いを浮かべた後、まじまじと伐の弁当を見て、

「のう。黒須、ムツツリーニがお主の料理は絶品と言うておったのじゃが、少し、相伴をさせて貰うわけにはいかんかのう？」

「き、木下くん、ずるいです。く、黒須くん、あの後学としてなんですけど……できれば、私にもお願いしたいんですけど」

伐に味見させて欲しいと言うと瑞希は恥ずかしそうに伐に言う。

「あ？ お前らは自分の分が……ちっ」

伐は知らないと言おうとするが、瑞希の弁当を捨てたせいで瑞希の手元には何もなかったため、舌打ちをすると瑞希と秀吉の前に自分の弁当を差し出し、

「……寝る」

「黒須くん、あの？」

「姫路、気にするでない。黒須なりの気づかいなのじゃ」

目をつぶると瑞希は伐の行動に意味がわからないように首を傾げ、  
秀吉は伐と瑞希の様子に苦笑いを浮かべる。

## 第156問（後書き）

どうも、作者です。

明久、バスの中でも処刑される。（爆笑）

そんななか、ツンデレにゃんこは我が道を行く？（苦笑）

明久を瑞希の料理で気を失わなかったから、こんな感じです。

## 第157問

(……だりい。タバコ、どうするかな？ これじゃ、合宿中に切れるな。とりあえず、これを吸ったら来る途中で見たコンビ二にでも行ってくるか)

「伐くん、またタバコ？ そんな事をしてると停学になっちゃうよ」

伐は合宿所に着くと荷物を部屋に置き、1人で合宿所の裏でタバコに火をつけるが、タバコの箱の中は残りわずかなようで合宿所を抜け出す事を考えていると愛子は伐がどこかでタバコを吸っていると確信していたようで伐を見つけて駆け寄ってくるので、

「……また、お前か？ あっち行けよ。Aクラスが俺と一緒にいると余計な事を言われて停学だ。不良だとかくだらない事を言い始める奴が出てくるぞ」

「うーん。確かにそうかも知れないんだけどさ。Fクラスを見てると伐くんが普通に見えてくるんだよね」

「……あんな奴らと一緒にするな」

伐は愛子を追い払うように手を振るが愛子は気にする事なく伐の隣にくると伐よりは他のFクラスの生徒と居た方が問題があると言い切り、伐はクラスメート達と比較された事に不服そうに言い、愛子がいなくならないせいもあるのか歩き始める。

「ちょ、ちよっと、どこに行くの!？」

「……コンビニ、タバコが切れそうなんだ」

「待つて!?! 流石に制服だと見つかるよ!! 本当に停学になっちゃうよ」

「別にするなら、すれば良いだろ。その方が昼間から生活費を稼ぎに行けるから都合がいいしな。だいたい、タバコ無しで一週間も生きていけるかよ。金もおろさないといけねえよな……財布、カバンの中かよ。めんどくせえな」

愛子は伐を慌てて伐の腕をつかもうとするが伐は愛子の手を交わし、コンビニにタバコを買いに行くと言うと愛子は伐には停学になって欲しくないため、伐を止めようとするが、伐は気にする事なく歩いて行こうとするが財布の中身を確認しようとするが伐はバイトの後に西村教諭に拉致されたため、財布を持っていなかった事に気づき、自分の部屋に戻ろうとすると愛子は伐の後ろを付いて行く。

「あれ? 優子に姫路さん、島田さん? 何かあったの?」

「愛子に黒須くん? いたわ。みんな、こっちよ」

愛子は伐と一緒に歩いていると優子を中心とした女子生徒達が殺気だって歩いており、愛子が優子に声をかけると女子生徒達は伐を囲み、

「……何だよ?」

伐は不機嫌そうに囲まれた理由を聞く。

「黒須くん、あなたに聞きたい事があるんだけど、良いかしら?」

「金にならない話ならパスだ。俺はこれからタバコを買いに行かねえといけないからな」

優子は伐を睨みつけるが伐は興味無さそうに言つと囲みを気にする事なく歩き出そうとするが、

「待ちなさい。あなたに聞きたい事があるのよ。これに心当たりがあるでしょ!!」

「カメラ？」

「……盗撮用のだな」

優子は伐の肩をつかむと小さなカメラを伐の前に見せると愛子は首を傾げると伐はそのカメラに興味を示す事はなく、

「それで、これを仕掛けたのが俺だと疑ってるわけか？」

優子達が自分を囲んでいる理由に行きついたようでない事を言っているなど言いたげにため息を吐く。

## 第157問（後書き）

どうも、作者です。

伐は優子に疑われる。まあ、伐だから仕方ない。カメラを突き付けられたけどどうでも良さそうです。

伐は疑われている状況をどう切り抜けるんでしょうか？（悪笑）

宣伝？

自サイトで『美波・美春共通ルート』を更新しました。



## 第158問

「当然よ。あんたや土屋くん、Fクラスにはそんな事をしそうな人間が！？」

「……勘違いするな。俺は見たいと思ったら、映像じゃなく本物を見る」

優子は伐を犯人だと決めつけているようで伐に向かい叫ぶが、伐は優子との距離を詰めると彼女の耳元で彼女の理性がはがれおちるように艶のある声でささやき、優子の顔は真っ赤に染まって行くと、

「ちよつと、優子も落ち着いてよ。伐くん、優子から離れて」

「……黒須くん、あなたは相変わらずね」

愛子は慌てて伐を優子から引き離すと友香も一緒にいたようで伐を見てため息を吐く。

「ん？ 友香か？ お前も俺を疑ってるのか？」

「私は黒須くんは疑ってないわ。他のFクラスの生徒は疑ってるけど、前の祝勝会での事もあるしね。それで、今からこれを仕掛けてそんな人達に話を聞きに行くところだったの。その途中で黒須くんを見つけたから」

「木下姉や他の奴らは俺を疑ってるから、俺に飛びついてきたわけか」

「そう言う事ね」

伐は女子生徒の中にCクラス代表の『小山 友香』の姿を見つけてこの状況の聞くと友香は疑われるような事をしている伐が悪いと言いたげにため息を吐く。

「……俺は無関係だ。後は俺の勘だが康太も無関係」

「どう言う事よ。こんな事をするのは土屋やアキ達しかいないでしょ」

伐は康太とは商売の関係もあるためか康太を無関係だと言うが美波はそれを信じられないように伐につきみかかろうとするが、

「……キャンキャンと耳元で騒ぐな。このカメラはどこにあった？」

「女子の大浴場の更衣室です」

「……康太がお前らに見つかるようなところに設置するかよ。何より、康太の使う盗撮用のカメラはもっと小型で性能が良い」

伐は美波の手を払うとカメラの設置場所を聞き、瑞希は伐の質問に答えると伐は康太が犯人ではないと確信に変わったように深いため息を吐く。

「そ、その信頼の仕方もどうかと思うんだけどね」

「まったくね。黒須くん、それなら、これを設置した人に心当たりはないの？」

「……心当たり？　あり過ぎてわからん。男だつたら誰でも盗撮力メラくらい設置したくなるだろ。まあ、最近は男とは限らないけどな。盗撮した映像つてのは同姓が流す事も多いからな」

愛子と友香は伐が康太が犯人ではないと思う理由に苦笑いを浮かべると伐に他に心当たりはないかと聞くと伐は興味がなさそうに言う  
と、

「……ああ。霧島嫁、巨乳娘、島田、たぶん、旦那とダーリンは関係者だ」

「……雄二、浮気は絶対に許さない」

「……やっぱり、お仕置きは必要ね」

「そうですね」

伐は何かあるのか瑞希、美波、翔子の3人に向かい明久と雄二が関係者だと言うと3人は背後に真っ黒な殺意を垂れ流して駆け出し  
て行き、伐を囲んでいた女子生徒のほとんどが3人に続いて行く。

「……あいつらの頭の中では関係者〃犯人なんだな？」

「それって、2人は犯人じゃないって事？」

「ああ。ダーリンはバスの中でクラスメートに殺されかけたから、今は蘇生中だ。旦那はあれでも代表だからな。さっきまで、友香や嫁と一緒にたただろ」

「そうね。代表は呼び出しを受けてたから、坂本くんはさっきまで

「一緒だったわね」

「そ、蘇生中ってバスの中で何があったのよ」

伐は関係者とは言ったが犯人だとは言っていないと言うと愛子は伐の言葉に2人が犯人ではないと気づいたようで伐に聞くと伐は2人にはカメラを設置する暇がなかったと言うと友香は納得し、優子はFクラスのバスで起こった惨劇に予想がつかないようで顔を引きつらせる。

## 第158問（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりの友香登場で場は落ち着きます。

Cクラスからは伐はそれなりに信頼を得ている氣もしますね。もちろん、Fクラスは伐を信頼してませんが。（苦笑）

伐が康太を犯人ではないと思う理由は自分がその場にいたら考えるであろう理由です。あれだけの情報網や盗聴器、盗撮カメラを設置している人間が簡単に見つかるには設置しないでしょうから。

明久と雄二への拷問は回避しようかな？　と思っただけどお約束だからやめました。

さあ、次回はどうなるんでしょうか？

伐を疑った優子の運命は？

**第159問（前書き）**

連続投票です。

## 第159問

「……だりい」

「ちよつと、黒須くん、こんなところでタバコに火を点けないでよ！？」

「……うるせえな。こっちは根拠もないのにわけのわからねえ因縁をつけられてイラついてるんだ。お前が他の事で解消してくれるなら吸わないでやるよ」

「……見つからないようにね」

伐はくだらない事に巻き込まれてイライラしてきたようで懷からタバコを取り出し、火を点けようとすると優子は慌てて止めようとするが伐がイラつきの原因は誰だと言いたげに言う「と優子は1歩下がる。」

「で、でも、伐くん、さすがにまずいよ」

「あ？　今は職員は打ち合わせ中だ。見つかるわけねえだろ。木下姉、部屋に財布取りに行くのが面倒になったから1000円貸せ、それでさっきの水に流してやる」

「わ、わかつたわ」

愛子は流石にいつ教師が通るかわからないため、伐の制服をつかんで言う「伐は見つからない確信があるようでタバコを銜えたまま、優子に金を貸せと言うと優子は慌てて財布から1000円札を取り

出し、伐はそれを受け取るとコンビニに向かって歩き始めると、

「待って、代表達を止めなくて良いの？」

「……知らねえよ。俺には関係ねえだろ。勝手に勘違いしてるんだ。誰がFクラスが犯人だと言いだしたか知らねえけどな。あいつらはバカだから疑われたんだ。それなら本当にしてやるって考えになる可能性が高いけどな。まあ、根拠もなく疑ったんだ。どっちも自業自得だろ」

「……そこまでわかってるなら、どうして煽ったの」

愛子は伐の前に立って伐を引き留めようとするが伐は興味が無いように止まる事はないが友香は伐の言葉にため息を吐き、

「……みんな、手伝って、1番状況を理解してるのは黒須くんだから姫路さんや霧島さんを止めるのを手伝ってもらってから」

「そうね。黒須くん、お願いするわ」

「……おい。俺には関係ねえだろ。それに俺を使いたいなら金が見合ったものを出せ」

友香は残った女子生徒達に伐を捕まえるように指示を出すと伐は逃げるのは面倒なようにため息を吐く。

「それなら、あたしが渡したお金を依頼料にするわ。説明だけなんだし、それで充分よね？」

「……めんどくせえな。だいたい、俺が説明したって他はまだしも、



先頭を切っていった3人は止まらねえよ」

「良いのよ。あの2人はどうせ、おかしい事をするんだから、私達は土屋ちゃんと敵対しなければ、黒須くんの話で土屋くんを完全に敵に回したら、本当に盗撮される恐れもあるわけだし」

優子は伐の手の中にあるお金を依頼料だと言うと伐は内容から妥当だと思ったのかため息を吐くが瑞希、美波、翔子の3人は知らないと言い切ると友香には友香なりの考えがあるようで康太とは和解しておきたいと言う。

「……友香、お前、厄介に成長したな」

「そりゃあね。黒須くんや坂本くんを見てると代表や人に指示を出す人間が何をしないといけないとわかるからね。私は代表なんだし、クラスの女子生徒を守る義務があるのよ」

「……まあ、康太はあの2人にある事でエロ本で依頼されてるから、そっちも忙しいしな。あいつを懐柔したいなら、清涼祭の時のチャイナ服をきて写真でも撮らせてやれ」

友香は代表としての自覚があるようで苦笑いを浮かべると伐は康太を懐柔する方法の1つを教えると、

「行くぞ。なるべく、職員が打ち合わせしてる間にコンビニに行ってきたいんだ」

けだるそうにタバコを吹かしながら歩きだす。

## 第159問（後書き）

どうも、作者です。

友香が厄介に成長してます。（苦笑）

彼女のそばには葵先輩がいるから成長株だとは思ってます。8、9巻での活躍もありますから伐と関わったことでその片鱗を見せてもいいかな？と思いました。

盗撮カメラの犯人どうしよう？

原作どおり美春かな？

1部の男子生徒かな？

どっちにしよう？

男子生徒達を犯人にするのは『美波・美春ルート』と考えたら、こっちはやっぱり美春かな？



「そ、そうだよ。助けてよ。黒須くん!!」

友香は伐の発言に驚きの声を上げるが、伐は2人を助ける義理はないと言い切り、明久と雄二はそんな伐に助けを求めるが、

「康太、話がある」

「……………どうした？」

「い、良いのかな？」

「言いわけないでしょう。愛子、小山さん、みんなも手伝って」

「ええ」

伐は2人の助けを当然、無視して康太を呼ぶと愛子は苦笑いを浮かべて明久と雄二に視線を送ると優子はこの拷問の原因である瑞希、美波、翔子の3人を止めようと女子生徒に声をかけ、

「ほら、伐くんも土屋くんも手伝って」

「……………めんどくせえな」

愛子は伐と康太に手伝うように言い、伐は面倒そうにため息を吐く。

「……………黒須、これはどう言う事だ？」

「そうだよ。説明してよ!!」

明久と雄二が一先ず、解放されると2人は伐に説明を求め、

「ああ。木下姉」

「ええ。女子の大浴場の更衣室に仕掛けられてた盗撮用のカメラなんだけど」

伐は優子に明久と雄二に盗撮用のカメラを見せるように言うと優子は2人にカメラを見せると、

「ムツツリー二!!」

「……………人違い」

2人は当然、康太を疑うが康太は直ぐに首を振る。

「これは康太のカメラじゃねえよ」

「……………俺のカメラはもっと小型で性能が良い。こんな安物と一緒にするな」

「……………伐くんの言った通りなんだ」

「……………頭が痛くなるわね」

伐は康太のカメラではないと言うと康太も自分のではないと否定し、愛子と友香は顔を引きつらせると、

「それなら、これは何なのじゃ?」

「そうだよ。ムツツリー二のカメラじゃないなら」

「……おい。黒須、これって、そう言う事か？」

明久と秀吉は盗撮用のカメラが出てきた意味がわからずに首を傾げるが雄二は何か気がついたようであり、

「ああ。たぶん、ダーリンと霧島旦那を脅迫している奴のものだ」

「脅迫？　って、この間、吉井くんが貰ってた？　坂本くんも脅迫受けてるの？」

「……あなた達、本当に何をしてるのよ？」

「……ホントよ」

伐は雄二の考えている事を肯定すると愛子は明久が脅迫状を貰っていた事を知っているため苦笑いを浮かべるが事情を知らない友香と優子はため息を吐く。

## 第160問（後書き）

どうも、作者です。

伐は明久と雄二を助ける気はありません。（爆笑）  
あくまで、康太の仲介としての依頼ですから。

宣伝？

自サイトで『美波・美春共通ルート』の第5問まで更新しました。

## 第161問

「ちょっと、黒須くん、どうして言っちゃうんだよ!? ……あづ  
っ!?」

「あ? この前も言っただろ。アキちゃんの写真が出回ろうが、霧  
島夫妻が正式に婚約しようが知っちゃ事じゃねえんだよ。お前らが  
くだらねえ騒ぎを起こすから、俺は巻き込まれてんだ。俺としては  
お前らが脅迫されてる理由を公にされた方が楽なんだよ」

明久は自分のチャイナ服姿の写真で脅されているため伐につかみか  
かり、伐を非難するが伐は吸っていたタバコの灰を明久の手の甲に  
落とすと明久は慌てて伐から手を放す。

「アキちゃん?」

「……清涼祭のチャイナ姿の時の事だ」

「………1枚、50円」

友香は聞きなれない『アキちゃん』の名前に首を傾げると伐は気だ  
るそうに答え、康太は『アキちゃんの写真』を懷から取り出すと女  
子生徒達が写真を見て騒ぎはじめ、康太は発注を受け始め、

「……土屋、雄二の写真は?」

「………10枚セットで、300円」

「……3ダース、お願い」



翔子は康太に雄二のチャイナ服の写真を大量発注すると、

「……………毎度あり」

「よく、こんな汚いものを買っな」

「翔子、何を買ってやがるんだ!？」

伐は雄二のチャイナ服の写真を見て眉をひそめ、雄二は翔子の行動に驚きの声を上げるが、

「……………勝った」

「……………伐や秀吉は1枚100円から500円」

「……………僕の2倍から10倍？」

「ムツツリーニ、どう言う事なのじゃ!？」

明久は1枚当たりの売値で雄二に勝った事で少し勝ち誇った表情をするが、康太は明久の様子に現実を叩きつけると明久は膝を付き、秀吉は知らせた事実の声を上げる。

「えーと、話がずれ過ぎてるんだけど、黒須くん、修正して貰って良いかしら？」

「……………めんどくせえな。ダーリンは『あなたのそばにいる異性にこれ以上近付かない事、この忠告を聞き入れない場合は、同封されている写真を公表します』ってな」

「もう、公表されてるわね。坂本くんの方は？」

友香は話が進まないため、伐に話を戻すように言っていると伐は気だるそうにタバコの煙を吐きだすと愛子は苦笑いを浮かべて雄二はなんでも脅迫されてるのかを聞くと、

「嫁へのプロポーズ」

「……雄二のプロポーズ、本当に嬉しかった」

「そんな事実はねえ！！ あれは秀吉がつ！？」

「……往生際がわりいぞ」

伐は欠伸をしながら雄二が翔子にプロポーズをしたと言うと翔子は顔を赤らめて嬉しそうに言うが雄二は全力で否定すると雄二は表情を変える事なく雄二のみぞおちに拳をめり込ませて雄二を力づくで黙らせる。

「ば、伐くん？」

「……坂本くんのプロポーズって召喚大会の準決勝の？ あれって、秀吉の演技じゃないの」

「木下姉、証拠って言うのはねつ造されるものだ。気にするだけ無駄だ。だいたい、旦那が嫁のものになる事は2年になって直ぐに決まった事だろ。それをいつまでもグダグダと言いやがって鬱陶しい。お前ら、場所を変えるぞ。嫁、旦那を預ける。好きにしろ」

「……わかった。黒須はやっぱ良い人」

愛子は伐の行動に驚きの声を上げるが、優子は雄二のプロポーズが偽物だと気づくが伐はプロポーズは些細な事だと言い切ると雄二の手足を縛り、翔子の方に投げて他のメンバーに出て行くように言う  
と1人で先に部屋を出て行く。

## 第162問

「……康太、ここは大丈夫か？」

「……………盗聴の気配はない」

部屋に雄二と翔子を残して明日からの授業で使う予定の教室の1つに入ると伐は翔子が持っていたプロポーズの音声の件もあるため、康太に盗聴の気配を確認すると康太は教室を少し調べると問題ないと言う。

「黒須、ここまでやる必要はあるのかのう？」

「さあな。さつきも言ったが、ダーリンと霧島旦那がどうなるうが知った事じゃないんでな。まあ、巨乳娘と島田、後はその2人と一緒にダーリンと霧島旦那に拷問をしに行った奴らは邪魔だ。出て行け」

「ど、どうしてですか!？」

「そうよ。ウチと瑞希にだって聞く権利があるわ!!」

秀吉は伐と康太の様子に苦笑いを浮かべると伐はどうでも良いと言いながらも瑞希と美波を始めとした『明久と雄二が関係者だ』と話した時に駆け出して行った女子生徒に

この教室から出て行けと言い、瑞希と美波は伐の言葉に納得ができないように声をあげるが、

「……冷静に話も聞けない奴らは邪魔なだけだ。俺は脅迫犯が誰だ

ろつが知った事じゃねえが、少なくともダーリンと商売敵の康太は納得がいかねえだろ。そんななかにお前らがいたら足を引っ張るところか相手の良いように使われるんだよ」

「確かにそうかも」

伐は感情で動くバカは話を聞く権利もないと言い、愛子は苦笑いを浮かべる。

「……で、ですけど」

「邪魔だ。だいたい、俺は友香や木下姉に依頼を受けたからであつて、お前ら状況も理解しようとしなくて駆け出すバカ相手に話す義務も義理もねえんだよ」

「……悪いわね。出て行つて貰えるかしら」

瑞希はそれでも納得がいかないと食いさがるが伐は冷たく一言だけ言つと出て行けとドアを指差すと優子は瑞希や美波に出て行くように言う。

「あ、あの。黒須くん」

「ダーリン、文句があるなら、お前も出て行け。何度も言わせるな。俺にはお前に説明する義務も義理もねえんだよ」

「……姫路さん、美波、ごめん、出て行つてくれるかな」

明久は瑞希や美波にも話を聞かせて欲しいと言うが、伐は明久は当事者だから聞かせてやるが文句があるなら出て行けと言うと明久は

自分を脅迫した犯人を知りたいようで2人に出て行くように言うがそれでも2人は納得できなさそうな表情をしており、

「何度も言わせるな。出て行け」

「ちょっと、黒須、放しなさいよ!!」

「そうです。私も美波ちゃんも犯人を捕まえるのに協力したいんです!!」

伐は話が進められないため、2人の首根っこをつかみ廊下に放り投げるが瑞希と美波は直ぐにドアを叩く。

「……ねえ。伐くん、中に入って貰わないと騒ぎにならない?」

「……知るか。勝手な自分の感情でダーリンの首を絞めてる事に気付かないバカは無視しろ」

「……良いのかしら」

愛子はドアを叩き続ける瑞希と美波の様子に苦笑いを浮かべるが伐はあの2人を話しに混ぜる気はないと言い切ると友香は頭を押さえながらため息を吐くが、

「はじめるぞ。まずは現状の報告からだな。康太、お前の調べた情報を教えろ」

「……………了解」

伐は康太に声をかけると現状で脅迫犯に付いてわかっている事を黒

板に書いて行く。

## 第162問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希と美波は邪魔扱い。（爆笑）

犯人を捕まえる上であの2人は邪魔以外の何物でもないとい伐は考えますしね。

すでに原作とは違う状況にまとめ切れるのかと思いつながらも気にしない方法で。（爆笑）



## 第163問

「……………」『犯人は女生徒でお尻に火傷がある』と言う事しかわからなかった」

「……………」黒須くん、やっぱり、土屋くんは姫路さん達に引き渡して拷問して貰った方がいいかしら」

康太がもたらした情報の1つに友香は康太を拷問にかけerる必要があると言っが、

「けつに火傷か？　ってなるとこいつらは犯人から外れるな」

「黒須くん、何で、そんな事を知ってるの？」

「あ？　こいつらは客、こっちはこの間、食った。その時には少なくともけつに火傷はなかった。なんなら、今から確認とってくるか？」

伐は友香の言葉など気にする事なく、2学年の生徒名簿から十数名の女生徒が犯人から外される女子生徒チェックをつけて行き、

「……………」

「……………」愛子、だから、黒須くんは止めなさいって言ってるでしょ。今からでも遅くないわよ」

「……………」

愛子は伐の口から出る言葉に悲しそうな表情をすると優子は今から他に好きな人を探せと言うが、愛子はそれでも伐の事が好きなのか小さく首を振る。

「と言うか、まさか、女子の大浴場に盗撮カメラが仕掛けられていたとはのう」

「そりゃあな。犯人にとっては自分の罪を押しつけるのにこれ以上はないバカがＦクラスに集まってるんだ。ダーリンや霧島旦那だけじゃなくな」

秀吉は女子生徒達から女子の大浴場に更衣室に盗撮カメラが仕掛けられていた事にため息を吐くと伐は罪を着せるのに充分な人材がそろっていると言うと、

「……確かに納得できるわね」

「……ホントよ」

友香と優子は頭が問題児ばかりのＦクラスに頭が痛くなってきたように頭を押さえる。

「しかし、姉上達、女子生徒が協力してくれるのはありがたいのじやが、どうやって犯人に行きつけば良いのかのう？」

「確かにそうだね。みんなが協力してくれるのは嬉しいけど、どうやったら、犯人を捕まえられるのかな？」

秀吉はそんな友香と優子の様子に苦笑いを浮かべながら犯人を見つけてるのはどうしたら良いかと聞くと明久も想像がつかないようで首

を傾げると、

「伐くん、犯人は女子って事だね。目的ってなんなのかな？」

愛子は伐の制服をつかみ、犯人の目的を聞く。

「まず、犯人が複数と1人に絞るかで変わってくるが、1人の場合はダーリンの周りにいる女に好意を持っている女……」

「……………犯人に心当たり」

「……………清水じゃな」

伐は明久を脅迫している犯人から状況を理解して行こうとすると伐、康太、秀吉は美春が犯人ではないかと言うと、

「……………うん。確かに清水さんの吉井くんへの殺意は納得できるね」

「……………確かにね」

愛子と優子は清涼祭での美春の様子を見ているため、顔を引きたせながら頷くが、

「……………確かに怪しい。しかし、犯人を決めつけるのは早計」

「そうだな。島田は彼氏にしたい女子生徒、お姉さまと呼びたい女子生徒2部門でぶつちぎりのトップだしな。ここの生徒はFクラスだけじゃなく、久保や玉野、おかしな奴は多いからな。美春以外にも同性愛者はいる」

「ねえ。黒須くん、どうして僕を見て久保くんの名前を出すの？」

康太は美春は犯人として容疑者の1人だが犯人を決めるのは早すぎると言う。と伐は頷き、美春以外にも犯人になりうる生徒は多々いると言う。

## 第164問

「……自分で考える。俺の仕事はこれで終わりだな」

「ちよつと、黒須くん、どこに行くのよ？　話は終わってないですよ？」

伐は明久の疑問の声に答える気はなく、もう自分の役目は終わったと言いたげに教室を出て行こうとすると優子は伐の手をつかむと、

「あ？　俺への依頼はもともダーリンと霧島への拷問を止めるための状況説明だろ。ここまで付き合ってたんだ。これ以上、束縛される気はねえよ」

「そうかも知れないけど、手伝ってよ。伐くん」

伐はこれ以上は関わるつもりはないと言い、優子の手を振り払うが優子が伐の前に立ち、伐の顔を見上げると女子生徒達がドアを塞ぐように伐の前に立ちふさがる。

「……何度も言わせるな。ただで動く気はねえよ。それにあんまりイラつかせるな。ただでさえ、こいつが切れそうでイラついてるんだからな」

『『うつ！？』』

伐はタバコの最後の1本を口にくわえ、空箱を握りつぶすと伐の不機嫌な様子に立ちふさがった女子生徒の数名は怯み、

「……どけ」

伐が女子生徒を睨みつけると愛子以外の女子生徒は伐の眼力に気落とされ、道を開けてしまうが、

「伐くん、協力してよ」

愛子だけは伐の前に立ちふさがっている。

「……しつこい」

「待つてよ！？ ボクも行くよ」

伐はめんどくさそうに愛子の横をすり抜けて行くと愛子は伐の後を追いかけて行き、

「……工藤さん、前途多難ね」

「……黒須くんは止めなさいって言ってるのに」

優子と友香は伐と愛子の様子にため息を吐く。

「翔子、や、止めろ！？ 考え直せ！！」

「……雄二、観念する」

伐はタバコを買うためにコンビニに向かう途中で廊下の隅で上半身裸に引ん？かれた雄二とその雄二に襲い掛かっている翔子を見つけるが、

「……ついてくんなよ」

「いや。ボクの話聞いてよ。犯人を捕まえるのに協力してくれたって良いでしょ」

「お前ら！？ 気づいているなら、止めろ！！」

伐は2人の事を気にする事なく、後ろを付いて行く愛子に邪魔だと言い、愛子も2人を気にする事なく伐に協力して欲しいと頼み込み、雄二は自分と翔子を確認した上で見ないふりを決め込んだ2人に助けを求める。

「……知るか。夫婦間の事に口を出すほど俺は野暮じゃねえよ」

「えーと、ボクも今の2人には関わり合いたくないかな」

伐は雄二の言葉には自分は関係ないと言い切ると愛子は雄二と翔子を直視するのが恥ずかしいようで頬を赤く染め、2人から視線を逸らしながら言つと、

「明らかにこの状況は違うだろ！？ 俺は襲われてるんだぞ！？」

「そう言うプレイだろ。知らねえよ。変態夫婦の情事の趣味なんて」

雄二は明らかに状況が違つと叫ぶが伐は知らないと言い切り、

「……お子ちゃま、ついてくんな。そろそろ、教師陣も解放されるからな。あいつらにも1度、解散するように伝えてこい。1度、解散してから。各自で犯人をどうするか考えさせろ。今は熱くなりすぎてるだろっからな」

「え？ 犯人を捕まえるんじゃないの？」

「……霧島嫁が注文を受けてるように客もいるんだ。中には盗撮されてる事さえ防げればいい人間だっているだろ。何をするにも1枚岩じゃなければスキを付かれるからな」

愛子にこれ以上付いてくるなと言うと盗撮犯をどうするか考えている生徒達に少し冷静になるように言うと愛子を置いて1人で廊下を歩いて行こうとし、

「……嫁、やるつもりなら盗撮犯の盗撮用のカメラで証拠映像を撮った方がさらに旦那が逃げづらくなるぞ」

「……わかった。教えてくれてありがとう。やっぱり、黒須は良い人」

「い、今だ!!」

「……雄二、逃がさない」

翔子にさらに雄二を追いつめる方法を話すと翔子は伐の言葉に雄二を押し倒している手を緩めると雄二は全力で逃げだし、翔子は雄二を追いかけて行き、

「伐くん、何がしたいの？」

「とりあえず、あいつらが騒いで教師の目が向けばタバコを買いに行く間は西村の目をあっちに向けられると思ってな」



愛子は伐が翔子を焚きつけた意味を聞くと伐は気だるそうに言った  
後、1人で歩きだす。

## 第165問

「……それなりに集まったが、巨乳娘、島田、霧島夫婦、お前らは出て行け」

伐は銜えていたタバコを携帯灰皿に押しつけるとタバコと一緒に買ってきたであろう缶ビールに平然と口をつけ、集まっていたメンバーでお話しにならない人間を見てここから出て行けと言うと、

「どうしてですか!？」

「そうよ」

「……何度も言わせるな」

「……その前にもう誰も黒須くんのタバコやお酒にツツコミを入れないのね」

瑞希と美波は当然、伐に向かい文句を言うが伐は不機嫌そうに答えるなか、伐がビールを飲んでいる姿に優子だけは顔を引きつらせる。

「悪いな。黒須、俺は俺をこんな事に巻き込みやがった奴を許すわけにはいかねえ。必ず、この手で息の根を止めやる」

「……他のメンバーはどうなんだ？ 旦那はここまで言ってるが、そこまでやる必要はあると思ってるのか？」

しかし、優子の言葉に誰も何も答えずに雄二は伐に向かい脅迫犯を絶対に許すつもりはないようであるが、伐は雄二の感情など関係な

いと言いたげに集まった生徒達に聞くと、

「流石に息の根を止めるは言いすぎだけど、女の子の中にもお客さんがいるみたいで、ムツツリー二くんのお店だと女の子は行きずらいから、彼女のお店が潰れるのも困るんだって」

「……工藤、その話では特定の客がいると言う事じゃろう。犯人はそこからはわからなかったのう？」

愛子は女子生徒は雄二が考えるまでの処分は考えていないと言うと秀吉は女子生徒のなかで犯人の正体はつかめていないのかと聞き返す。

「残念だけど、面と向かったの取引はしていないようなの。だから、正体まではつかめなかったわ」

「だろうな。康太の店は霧島旦那が康太からの許可も得ず、試召戦争のためにばらしやがったが、普通に考えれば盗撮や盗聴もしているんだ。表だって仕事ができるわけがない。この騒ぎだって、ムツツリ商会の主が康太だってばらしたバカがいるから、こいつらは最初、康太を犯人だと言って騒ぎがでかくなってるのにそれを反省する事なく自分の感情で動こうとしているバカがいるからな」

「……」

友香は脅迫犯の正体をつかむ事はできなかったと首を振ると伐は当然の事であり、本来なら康太の事をばらした雄二の事を責めるように言つと雄二は口を閉ざす。

「……………伐、公になった事で売り上げも増えている。悪かったこ

とだけではない」

「……まあな。康太がこう言ってるんだ。これ以上、言うつもりはないがそんな人間を引きいれると思うか？」

「……流石に無理だね」

康太は表だって商売をできるようになったため、悪いことばかりではないと言うと伐は特に雄二に興味もないため、ただ邪魔だと言い切ると愛子も伐と同意見のようであざ笑いを浮かべるが、

「黒須くん、でも、雄二の狡い頭は使えるんじゃないの？」

「まあな。旦那は嫁が関わってこないとそれくらいは割り切れると思うが、例外を認めると感情で動くバカ3人が付いてくる」

「……確かにそうじゃのう」

明久は雄二は使えるから仲間にした方が良くと言うが、伐は雄二を入れた事で3人の爆弾娘を引きいれる事を危惧しており、秀吉は明久と雄二への拷問を目の当たりにしているせいか大きなため息を吐き、伐に同意する。

## 第166問

「反論があるなら言ってみろ。聞くだけは聞いてやる。そっちの直情バカどももだ」

「……でも、それって聞くだけなのよね」

「当然だ。使えないバカを味方に引き……ダーリン、お前も出てけ」  
伐は言いわけくらいは聞いてやると言うと言つと優子は内容を聞いても伐は4人をこの話し合いに入れるつもりはないと理解しているようにうため息を吐き、理音は表情を変える事なくここから追い出すと言おうとした時、明久と目が合い、明久にも出て行けと言つ。

「ちょっと、それは酷いよ！？　ボクは被害者なんだよ！！」

「……使えねえから、それで、何かあるのか？」

明久は伐の言葉に当然、声をあげるが伐は明久は使えないと言い切り、雄二、瑞希、美波に聞くと、

「……なんで、ウチと瑞希が使えないって言つたのよ？　足を引つ張るって言つたのよ？」

「そうです。納得がいきません」

瑞希と美波は伐に自分達が外される意味がわからないと言つ。

「……1つ、ダーリンへの脅迫は内容を見てわかるようにダーリン

に近い異性が関係している」

「そうだよな。だから、姫路さんか秀吉、黒須くんに好意を寄せる女の子!？」

「どうして、ウチが入ってないのよ」

「いた!？ 胸がないから肋骨が!？」

伐は2人の反応にまだ気づかないのかよ言いたげに眉間にしわを寄せて明久が脅迫されている理由は2人に関係していると言うと明久はまたも美波を異性扱いせずに美波にお仕置きを喰らい始めると、

「きゃっ!？ な、何をするのよ!？ 黒須!！」

「……お前らを追い出すのはそれだ。過剰な暴力、今のメンバーを見て貰えばわかるように男は俺、康太、ダーリンと性別秀吉が1人他は女だ。作戦を立てる上でダーリンと女が組んだ時、お前らは確実にこいつを殺しに動く。そこで立てた計画が壊されたらたまったもんじゃねえよ。こっちは結局、タダ働きさせられてるのに邪魔をするようなバカをなんで入れねえといけねえんだよ」

「伐くん、女の子にはもう少し優しく」

伐は美波の首根っこをつかむと明久から引き離し、躊躇する事なく美波を床に投げ捨て、愛子は伐の様子に苦笑いを浮かべるが、

「知らねえよ。男女平等だ、何だ。言ってる癖に自分が先に仕掛けたのに男が女に暴力を振るうなんて最低、相手が悪い、自分は悪くないとか平気で言うバカ女、相手をする価値もねえよ。ダーリン、

お前も余計な事を言いすぎだが、そこまでやられてるんだ。拒絶しろ。少なからず、島田や巨乳娘のお前に対する暴力は行き過ぎてる。出るところに出れば大金を勝ち取れる」

「何だよ！！ アキが悪いんでしょ！！」

「そうです！！」

伐は懷から新しいタバコを銜えて火を点けながら、明久に瑞希と美波と縁を切るように言つと2人は納得がいかないと声をあげる。

「……出て行け」

「ば、伐くん！？」

伐は瑞希と美波の反応にこれ以上、会話をする価値もないと判断したようではある机を蹴り飛ばし、感情を全て押し殺したような冷たい声で言つとこの場にいる生徒達の背中には冷たいものが伝い始めるが愛子だけは伐を抑えようと伐の手に抱きつくが、

「……何度も同じ事を言わせるな。お前らがダーリンを脅迫している犯人を捕まえて好感度アップだとか考えてようが邪魔なんだよ。そんな事を考える以前に自分達の行動を考える。特別にもなり得ない癖にわがままな独占欲を出しやがって鬱陶しい。ダーリン、今、ここ、この場でこの2人を斬り捨てる。邪魔だ。関わるなと言え。それが言えないなら俺はこの件から手を引く。元々、うちの女ども着替えが市場に流れようがそのせいで事件になつても俺には関係も興味もねえからな」

「で、でも」

「世の中、人の繋がりつてのはお互いに利があるからだ。現状でこのバカ2人はお前にとって害はあっても利はない。そして、この場に  
いるメンバーがやろうとしている事にもな。このバカ2人はお前や  
霧島旦那、クラスのバカどもが清涼祭で自分のためにやってくれた  
事に感謝もしてねえよ。どこかでそれが当然だと思ってるんだよ。  
そして、自分の間違いにも気づかない最低のバカ女だ」

伐は淡々とした口調だが伐の言葉には反論は認めないと言う強さがあり、明久は言葉を詰まらせる。



## 第166問（後書き）

どうも、作者です。

伐、話を聞かずに自分が正しいと言い切る瑞希と美波にブチ切れる。  
（苦笑）

伐のキャラクター上、ただ追い出すだけかな？  
とかも思ってたんですが、さすがに切れるかな？と。  
明久はどんな答えを出すんでしょうか？

## 第167問

「……吉井くん、答えが出せないなら出て行ってくれないかな」

「小山さん？」

言葉を詰まらせている明久の様子に友香は明久にも出て行けと言い、友香の言葉に優子は驚いたような表情をすると、

「当然でしょ。はつきり、言わせて貰うけど、直ぐに感情で動いた姫路さんと島田さんを引きいれるのは私も反対だし、それに黒須くんと吉井くん、どっちが役に立つかなんて明白でしょ。私達は正直、吉井くんや坂本くんが脅迫されようとしても良いの。確かに同一犯なのかも知れないけど、そんな吉井くんのせいで、女子達の身の危険にさらすわけにもいかないでしょ」

「確かにそうね」

友香は明久には価値を見出せないため、明久ごと、瑞希と美波を追い出そうとすると優子や他の女子生徒も友香の意見に賛成のようで大きく頷く。

「そんなの酷いです！！ 明久くんは脅迫されているのにどうしてそんな事を言うんですか！！」

「ひ、姫路さん」

友香を中心とした女子生徒の明久の事など知らないと言う言葉に瑞希が声をあげると明久は何があったのかわからないようであるが、

「……お前が原因だろうが」

「あはは」

伐は瑞希の言葉に呆れたようにため息を吐くと愛子は苦笑いを浮かべる。

「……ダーリン、話は決まらないな。俺は上がるぞ」

「ちよつと、黒須くん!？」

「何だよ？　ここでこのバカを斬り捨てねえなら、何も変わんねえよ。こいつら抜きで何かをしてもバカは勝手に動いて全部ダメにする。その事の意味もわかんねえ奴らの相手をする義理はねえよ。だいたい、報酬もないのに付き合ってられるか」

「伐くん、ちよつと待つてよ!？」

伐はこれ以上は無駄だと言い、部屋を出て行こうとすると明久は慌てて伐を止めようとするが、伐は付き合う理由はないと言い部屋を出て行き、愛子は慌てて伐の後を追いかけて行くと、

「……どうしてくれるの？」

「何よ？　ウチらが悪いって言うの？」

友香は原因を作った瑞希と美波を睨みつけるが、美波は自分達が悪いとは思っていないため、友香を睨み返す。

「伐くん、協力してよ」

「……知らねえって、言ってるだろ」

愛子は伐の後ろを追いかけながら、もう1度、伐に犯人探しに協力して欲しいと言うが伐は知らないとい歩いて行くが、

「あれ？ 伐くん、どこに行くの？」

「うるせえな。付いてくんなよ」

愛子は伐の向かっている先に何か疑問に思う事があるようで首を傾げると伐は付いてくるなと言う。

「で、でも、こっちって、女子の大浴場だね？ どうするの？」

……伐くんもカメラを？」

「……なわけあるか」

愛子は伐が向かっている先には女子の大浴場しかないと言うと伐も盗撮用のカメラを設置すると思ったのか少し残念そうな表情をするが、伐はくだらない事を言うなとため息を吐き、

「……あいつらの事だ。カメラを1台、見つけて熱くなったんだろ。そのカメラは犯人の撒餌だ。他の奴に罪をなすりつけるためのな。だから、見つかりやすいダミーを置いて、見つかり難いところに本命を置く」

「それって、まだ、どこかにカメラがあるって事？」

「ああ」

伐は他にも盗撮用のカメラが置いてあると言う。

## 第167問（後書き）

どうも、作者です。

結局、伐は個人行動。ノラ猫の本領発揮かな？  
そして、伐と一緒に歩く愛子。

伐との距離は縮むんでしょうか？（悪笑）

## 第168問

「それじゃあ、どうにかしないと」

「……だから、ここまできたんだろ……今時、南京錠かよ」

愛子は盗撮カメラが他にもあると言う事実には驚きの声をあげるが伐は気にする事なく、大浴場の入口まで歩き、ドアに付いているカギを見てため息を吐くと携帯電話でカギの写真を撮った後、カギを平然と開け、

「……ば、伐くん、何で、簡単にカギを開けれるの？」

「あ？ これくらい、誰でもできんだろ」

愛子は顔を引きつらせるが伐は気にする事なく脱衣所に入って行き、

「……友香と木下姉はここにカメラが有ったと言ってたな。つとないと本命はこつちか？」

「……本当にあつた」

友香と優子から聞いた盗撮カメラを見つけた場所と脱衣所の全体を眺めると本命のカメラのある場所を予想し、カメラを見つけると愛子は苦笑いを浮かべると、

「これで一件落着かな？」

「さあな。カメラが2台とは限らないしな。この後に取り付けられ

る可能性は否定できないだろ。他にありそうなところを言うから入浴時間前に確認しろ」

「伐くん、何をするつもり？ それにそれって盗聴器？」

愛子は盗撮犯のカメラを取り上げたため、安心したように言うが伐はまだカメラを潰したただけと言い、見つけたカメラと懐から盗聴器を取り出し、大浴場の廊下に設置する。

「とりあえず、関係ない時間にここにくるヤツらは容疑者だ。せっかく、こんなものをくれたんだ。使わないと損だろ。後は独り言を話すようなタイプかはわからないが声や内容を押さえられれば思っ  
て康太から借りてきたんだ」

「ムツツリー二くんから？ えっ！？ それって、ムツツリー二くんは伐くんが単独行動で動いてる事を知ってるの？」

「……ああ」

「そうなんだ。それじゃあ、カメラと盗聴器で犯人の手掛かりを見つけるって事？」

「……他にねえだろ。後は西村に言っ  
て、こいつを変えて貰った方が  
良いんだけどな。少なくとも南京錠なら時間をかければ開けれる  
奴みたいだしな」

「……伐くん、よく、そんな事がわかるね」

伐は大浴場のドアの力ギを変えたいと言うが自分以外でも力ギを正規の方法以外で開けた人間がいると言うと愛子はため息を吐くが、



「見てみる。ここどこに何かでこすった後がある」

「……あるけど、言われないと気付かないよ」

伐は先ほど撮った写真を愛子に見せて説明すると愛子は伐に言われないと見つけれられないような小さな傷のため、苦笑いを浮かべる。

「後は男子の大浴場だな」

「えっ！？ どうして？」

「……少しは考える。犯人は女子の着替えを盗撮しているんだ。そして、ダーリンや霧島を脅迫するネタを押さえている。それを商売道具にして女どもに売っているんだ。ここ以外にも有っても不思議じゃねえだろ」

「ま、待つてよ。ボクも行くよ」

伐は男子の大浴場も見てくると言うと1人で歩きだし、愛子は伐の後ろを追いかけて行くと、

「……ひつつくな」

「いや。伐くんは口では人を突き放すけど、ちゃんとボク達に付き合ってくれる優しい人だよな」

愛子は伐の腕に抱きつき、伐は愛子に離れるように言うが愛子は伐が自分の思っているような人で嬉しいようで笑顔を見せるが、

「……………」

伐は愛子の相手をするのは面倒だと言いたげに気だるそうに言う。

## 第169問

(……男子の方にはカメラはなかったがまだ警戒しないといけないか。お子ちゃまには廊下にカメラと盗聴器をおいた事を伏せておけると言っただが、どれくらいで動きだすかな)

伐は男子の大浴場にもカメラと盗聴器を取り付けると部屋に戻り、懐からタバコを取り出してオイルライター火を点け、盗撮犯の事を考えながらライターの火を見ながらタバコをふかせていると、

「……黒須、ちょっと良いか？」

「断る」

雄二が伐に声をかけるが伐は雄二の相手をするつもりもないためか直ぐに話は聞かないと言う、

「盗撮犯の事を教えろ。お前が手を引いたとは言え、俺には大問題なんだよ。明久のはもう脅迫の意味を持ってないが俺は犯人を捕まえないと身の破滅なんだ!!」

「……うるせえ」

「あつっ!?! お、お前、何をしゃがるんだよ!!」

雄二は翔子に偽のプロポーズをこれ以上売られては困るため、何としても犯人を捕まえたように伐につかみかかると伐は火をつけたままであつたため、金属部分加熱され高温になっているライターを躊躇する事なく雄二のおでこに押し当てると雄二は伐の行動に驚き

の声をあげるが、

「……次はこれを目にだな」

伐は自分の行動を反省する事はなく、雄二が次に自分に何かしてきたらタバコの火が点いている部分を躊躇する事なく雄二の目に押し当てると言う。

「く、黒須、それはやり過ぎじゃと思うんじゃが」

「……知るかよ。毎回、毎回、同じ事を言わせやがって俺はただで動くつもりはねえんだよ」

秀吉は伐と雄二のやり取りに顔を引きつらせるが伐はライターの火を消し、自分はただでは働かないと言いと吸っていたタバコの煙を雄二に吹き掛けると、

「……いくらなら、お前の持っている情報を教えてくれるんだ？」

「さあな。現状じゃ、お前に肩入れするよりはもう少し待った方が値が釣り上がりそうだからな」

雄二は苦虫を噛み潰したような表情をして伐に情報売れと言うが伐は値段に見合った情報しか教える気はないようであり、

「……それは盗撮犯に付く事もあるって事か？」

「バカな事を言うな。俺は知っての通りノラなんでね。群れるのは性に合わねえんだよ。依頼できたとしてもそんな分の悪い泥船になんかのらねえよ」

「……それは盗撮犯には付かないと判断するぞ」

雄二は伐が完全な盗撮犯側に回る事を危惧したようだが伐は盗撮犯側は泥船だと言うと雄二はニヤリと笑うと、

「……そうだな。最近は工藤とも仲が良いみたいだからな。あいつを泣かすような真似はしないよな」

「うむ。黒須は素直じゃないだけで、良い奴なのじゃ」

伐のポリシーでもある『ベツトの上以外では女を泣かせない』と言う言葉を思い出したようで伐の後ろを付いて歩いている愛子が泣くような事はしないと判断し、雄二の言葉に秀吉は大きく頷く。

「……うぜえ」

「何だ？ 照れたのか？」

伐は雄二と秀吉の様子に気だるそうに頭を掻くとタバコをふかせたまま部屋を出て行くとするが雄二は伐をからかおうとしたようでニヤニヤと笑いながら言うと、

「……『俺はお前の夢を笑わない。お前の夢は、大きく胸を張れる。誰にも負けない立派なものだ』だったか？」

「お、お前、どうしてそれを！？」

伐は冷たい笑みを浮かべると雄二に全てを知っていると言いたげに言い、雄二は伐の言葉は自分にとって都合の悪い事だったようで顔

を引きつらせるが、

「……あそこまで人気がない道でカッコつけるなら、押し倒すくらいの気概を見せて欲しかったな」

伐は口元を緩ませ、雄二に向かい『ケンカを売る人間は選べ』と言うと部屋を出て行く。

## 第169問（後書き）

どうも、作者です。

伐と雄二のやり取りが実はかなり好きです。

雄二はいつもどこかで伐を挑発しますが伐はそれをすべて返して行く。

この2人は友人なのかな？とも思いついて書いています。

後、報告が3点。

1つはすっかり報告を忘れていたのですが、美波・美春ルートを更新した時は自分の活動報告に書かせていただきます。

2つ目は活動報告にまたバカとテストと召喚獣の二次創作の原案を書きました。今回の主人公は『教師』です。

3つ目は番宣です。

以前、活動報告に書かせていただいた。バカとテストと召喚獣二次創作『バカとテストと勤労少年』の連載を始めました。伐や理音、深秋、優菜達ともどもよろしく願います。

番宣

## 第170問

「……だりい」

「だるいじゃないわよ。黒須くん、詳しい話を教えなさい」

「えーと、ゴメンね。伐くん、ばれちゃった」

伐はタバコを銜えながら気だるそうに次の手を考えていると伐の姿を見つけた優子が伐に詰めより、優子の後ろで愛子は苦笑いを浮かべており、

「……だりい」

伐はもう1度、気だるそうに言うと、

「詳しい話は何もねえよ。今は犯人の行動待ちだ。動かなければ、それまで、動いたらカメラでも何でも外せば良いだろ」

優子を追い払うように手を振るが、

「そんな事を考えているなら、最初から言いなさいよ。そのせいで、Fクラスの男子生徒達が疑われるなら本当に覗いてやるって騒ぎになってるわよ」

「……ここまでバカかよ。まあ、あのバカどもから言わせれば大義名分を手に入れたって事だろ」

優子を含めた数人の女生徒は犯人が女生徒かも知れないと言う事は



知っているが、伐達の予想を聞いていない女子生徒達の多くは盗撮犯はFクラスの男子生徒と決めつけたようで疑われるなら本当に覗くと動き出したようであり、伐は気だるそうにため息を吐く。

「何で、そんなに落ち着いてるのよ!!」

「良いだろ。別に裏でこそこそ動き回るより、バカばかりなんだ。まっすぐに大浴場に進んでくるんだ。お前が居れば対処くらいできるだろ。戦術を考えるような頭はないんだ。今なら対処できるだろ」

「そう言う問題じゃないでしょ!!」

優子は伐の態度に声をあげるが、伐は作戦や方法を考える脳みそのないFクラスの対処の仕方など決まっていると言っが優子が収まりが付くわけはなく、伐を怒鳴りつけると、

「……うるせえな。耳元できゃんきゃん騒ぐんじゃねえよ。ここで騒ぐなら次の手を考えろよ」

「次の手って、黒須くんも言っただけど所詮Fクラスでしょ」

伐は優子にうるさいと言い、ここで自分に絡む暇があるなら覗き犯に備えると言っが優子は所詮はFクラスだと鼻で笑う。

「……そうやって、油断しているとバカどもに足元をすくわれるぞ。お前の油断でAクラスが負けそうになった事を思い出せ」

「……そうね」

伐はそんな優子の様子に気だるそうにF対Aの試召戦争を思い出せ

と言うと優子は自分の弱点を平然と狙ってきた伐を目の前に顔を引きつらせて頷き、

「伐くん、それならどうしたら良いの？ 有利にする方法ってあるんでしょ？」

「……それくらい自分達で考える。何度も言っているが俺はタダ働きする気はねえんだよ」

優子は伐に何か策はないかと聞くが伐は自分には関係ないと言うと、

「支払い**カラダ**はボクの肢体で」

「……木下姉、このバカを連れて行け」

優子は伐の顔を覗き込みながら依頼料は自分と言うが伐は気だるそうに優子に優子を連れて行けと言う。

「……」

「何だよ？」

「いや、黒須くんなら簡単にのると思ったから」

優子は伐が優子の誘いに乗らない事に驚きの表情をするが、

「俺が欲しいのは喰っても後腐れねえ女だ。こいつはめんどくせえ」

「……ふーん。それなりに筋は通してるのね」

伐は気だるそうに優子はいらないと言いつ切り、優子はそれでも伐が  
気に入らないようで  
伐を睨みつけながら言う。

## 第170問（後書き）

どうも、作者です。

やっぱり、Fクラスはバカばかり、しかし、伐には関係ない。

愛子の告白を相変わらず、スルーをしながらも結局、伐は折れるんだろうな。

だって、ツンデレにゃんこだもん。（爆笑）

## 第171問

「何だよ？」

「ちよつと、愛子が黒須くんを好きって言ってる理由がわかったのよ。それで、有利になる方法を教えて」

「……さつきも言っただろ。俺はただで動く気はねえよ」

伐は優子の視線に不機嫌そうに言う。優子のため息混じりで愛子が伐に懐いているのには納得したようで頷くと改めて伐にFクラスを押さえる方法を聞くが伐は気だるそうにため息を吐くと、

「良いでしょ。貸し1つと言う事で、お金払うほどの事でもないんだし」

「……貸しねえ。それはお前が責任持つんだろうな？」

「あんまりおかしな事じゃなければね。あれよ。エッチなのはダメよ」

「……まあ、この後に起こる事を考えると悪くはないか」

優子の提案に伐は少し考えると悪くはない提案だと考えたように頷き、

「霧島旦那とダーリンでも仲間に引き入れろ。あの2人がバカどもに付くと一気に形勢が悪くなるぞ」

明久と雄二を女子生徒の味方に引き入れるようにしろと言う。

「吉井さんと坂本くんを？ どうして？」

「あの2人は今は宙に浮いてるだろ。盗撮犯の件もあるからな。そのせいで女どもの疑われてるんだ。まだ、あっち側には入ってないだろ。霧島旦那は戦略の面を考えれば敵にすると厄介だし、ダーリンはFクラスで巨乳娘に並ぶワイルドカードだ。覗きの計画犯においておくと厄介でしかない。敵に回したくない人間は仲間に引き入れるのは当然だろ」

愛子は伐が明久と雄二を味方に引き入れろと言った意味がわからずに首を傾げると伐は気だるそうに答え、

「……確かにあの2人は敵にいと厄介そうね。それで具体的に何をしたら良いの？」

「……それくらいは自分で考えろよ」

「まあまあ、ここまで言っただから教えてよ」

優子はAクラスとの試召戦争まで上り詰めたのは伐以外に明久と雄二の力もある事を冷静に分析したようで納得はいかなさそうだが頷き、具体的な策を伐に聞くが伐はこれ以上は知らないと言うが愛子は何んだかんだ言いながらも伐は話に乗ってくれるため、伐の腕に抱きつきながら言うと、

「……だりい」

「黒須くん、あなた、実は結構なフェミニストよね」

伐は愛子を引き剥がしながらため息を吐き、そんな伐の姿にため息を吐く。

「ダーリンは脅迫犯を呼び出すのに女側に付けと言えど動くだろ」

「……犯人を捕まえるのにこっち側の方が良いと言えど良いわけね。確かに吉井くんを脅迫している人間を考えるとこっちに引き入れた方が動いてくれそうね」

「霧島旦那は嫁に任せる。2人つきりで話をさせて嫁に『旦那以外の男に裸を見られたくない』と涙でも浮かべて言わせれば旦那は簡単に落ちる」

「そうかな？ 代表と話をすると意地を張りそうな気もするんだけど」

伐が簡単に明久と雄二を女子生徒側に引き入れる方法を言うと愛子は雄二を仲間に引き入れるのは伐の方法では難しいと言ったが、

「……2人にすれば大丈夫だ。旦那は周りが騒ぐから素直にならなだけで」

「まあ、確かにそんな感じもするわね。どうして、姫路さんも島田さんも吉井くんもあの2人を無駄に煽るのかしら」

「……そして、嫁の間違った行動を手本としてあの2人はダーリンに攻撃をする。旦那は八つ当たりでダーリン相手にあの2人をけしかける。ダーリンはその八つ当たりをするのに旦那に嫁をけしかける」

「見事な循環だね」

「悪循環だけどね」

伐は気だるそうに今の明久と雄二の状況を話すと愛子と優子は苦笑いを浮かべる。



## 第172問

「代表、上手くやってよ」

「……頑張る」

「……どうして、俺を巻き込む？」

「まあまあ、伐くんの作戦なんだから見届けないといけないでしょ」

伐が言った雄二と明久を女子生徒の味方に引き入れろと言う言葉に優子は翔子を呼び出すと雄二から落とそうとしているようで翔子に作戦を話すと翔子は大きく頷くがここまで連れてこられた伐はめんどくさそうに眉間にしわを寄せている。

「それじゃあ、坂本くんを呼び出したいんだけど、黒須くん」

「……知らねえよ。呼び出す方法くらい自分達で考えろよ」

「でも、代表が呼び出してるって言うても坂本くんは来てくれないと思うのよね」

「確かに」

優子は伐に雄二を呼んで来いと言うと伐はそこまで付き合えきれないと言うが優子は雄二を呼ぶのに翔子では無理だと言うと愛子は苦笑いを浮かべ、

「……だりい。『盗撮犯の事で話がある。お前1人で中庭に来い

伐  
』」

伐はこれ以上は関わり合いたくないためか雄二にメールを送信して呼び出すと、

「後は上手くやれ。俺はこれ以上は知らん」

「愛子、黒須くんを捕まえて」

「了解  
」

この場所を離れようとするが優子は覗きに加担している男子生徒達を蹴散らすために雄二と明久以上に伐が重要な駒と判断しているため、愛子に伐を止めるように指示を出し、愛子は伐の腕に抱きつこうとするが、

「……ひつつくな。木下姉、俺はこれ以上、関係ないと言っているよな？」

「さつき、黒須くんが言ったのよね。敵に回したくない人間は味方に引き入れた方が良いつて、この件に関しては黒須くんを敵に回す事はできないのよ。覗き犯の襲撃に備えるためにお風呂の時間を削られるわけだし、協力してくれる男子生徒の確保はあたし達の1日を守るのに重要なもの」

伐は当然のように愛子を交わすと優子を睨みつけるが優子は伐の言葉をならって伐を味方に引き入りたいと言っ。

「……それこそ、知らねえよ。だいたい、貸し1つでそこまで協力できるか。こっちに旨みの1つもねえんだからな」

「旨み？ 何なら、ボクが背中を流してあげようか？」

「……そんなもんはいらねえよ」

伐は優子の言葉を聞く義理はないと言うと愛子は伐にすり寄るが伐はため息を吐き、

「それに俺達がここに居て、旦那に見つかったらどうするつもりだ？ 作戦は嫁に任せてるんだからな」

「そうかも知れないけどさ。見届けないといけないじゃない？」

「大丈夫だ。盗聴器は仕掛けてある。ここ聞くよりはきちんと音も拾える」

「……伐くん、聞く気はあるんだね」

「当たり前だ。旦那の弱みを握っておけば追々役に立つかも知れないからな」

雄二に見つかりと厄介だと言うが優子は作戦に役立つ雄二の動向が気になるため見届けたいと言うと、伐はこの場所では聞きづらいいと言い切り、愛子は伐と優子の言葉に苦笑いを浮かべると伐は雄二を脅すネタだと言うと、

「嫁、後はお前次第だ。旦那を仲間に入れられなくても、覗き犯に協力させないようにしる。きちんと見届けてやるからな。先に中庭に着くと旦那が逃げる可能性があるから、最初は隠れて旦那が出てきてから声をかけるんだぞ」

「……わかった」

「……結構、黒須くんも楽しんでるわよね」

「そうかも」

伐は翔子に最後の指示を出すと途中で雄二に見つからないように歩きだし、

「待つて。ボクも行くよ」

「待ちなさい。代表、お願いね」

「……わかった」

愛子と優子は伐を追いかけて行く。

## 第173問

「……黒須の奴、呼びだして置いてこないってのはどう言う事だよ？」

「坂本くんは中庭に着いたみたいね」

「そうだね。代表は上手くやってくれるかな？」

伐が仕掛けた盗聴器は雄二の声をしっかりと拾っており、雄二の声を聞いた愛子と優子は翔子が上手く雄二を落とす事を期待しているようで翔子の登場を待っていると、

「……雄二」

「しよ、翔子！？　なんで、お前が！？　黒須の企みか？」

翔子が到着したようで雄二に声をかけると雄二は驚きの声を上げる。

「……雄二に頼みたい事があったから黒須に雄二を呼び出して貰った」

「あの野郎……」

「……待って、雄二」

「いやだ」

「……お願い。雄二に手伝って欲しい」

翔子は雄二を呼び出すのに伐に協力して貰った事を素直に言つと雄二は伐に騙された事に腹を立てているようで舌打ちをすると中庭から去ろうとするがそんな雄二の腕を翔子はつかみ、雄二はまた翔子がデートだなんだと言つつもりだと思つていようで翔子の手を振り払おうとするが翔子はいつもとは違い涙目で雄二の顔を見上げると、

「……聞くだけは聞いてやる」

雄二は翔子から話を聞いてやると言つ。

「……ここまでは黒須くんの言つた通りね」

「坂本くん、本当に代表に弱いね」

「惚れた弱みつてヤツだ」

紫雄二と翔子のやり取りを聞いて愛子と優子は伐の作戦通りに進んでいるため苦笑いを浮かべるが、伐は興味無さそうに言つ。

「……雄二、Fクラスの男子達が女子風呂を覗こうとしているのは聞いている？」

「ああ、何か盗撮犯の疑惑がかかっているなら、本当に覗いてやるとか言つてる奴だろ。安心しろ。俺は協力しないから、今回の覗きに協力すれば完全に盗撮犯にされそうな勢いだからな」

翔子は雄二にFクラスの生徒が女子風呂を覗こうとしている話を雄二に聞くと雄二の耳にもすでに入っているようで雄二は覗きには協

力しないと言うと、

「……雄二、それなら、女子に協力して、雄二が女子に付いてくれれば、雄二の盗撮犯への疑いは晴れる……私が晴らす」

「……いやだね。確かに盗撮犯の疑いは晴れるだろうが、俺はさっき、拷問を受けてるんだからな。それにこれは裏に黒須がいるんだろ。あいつの手の上で踊る気はねえよ」

翔子は雄二に協力して欲しいと言うが雄二は先ほど翔子を先頭にした拷問と伐が翔子に協力しているためか協力できないと首を振るが、

「……お願い。雄二。私は雄二以外の男の人に裸を見られたくない」

「な、何を言ってるやがる！？俺はお前の裸になんか興味ねえ！？」

「……それは許さない」

翔子は雄二の顔を見上げと雄二を落としにかかると雄二は翔子の言葉に顔を真っ赤にして慌て始め、翔子の言葉を否定すると翔子の怒りを買って、翔子のすらっとした指は雄二のこめかみに伸ばされ、雄二の頭を絞め上げ、

「……これは失敗かな？」

「だよね」

「……ツンデレは素直じゃないからな」

「どう言う事？」

盗聴器から聞こえる雄二と翔子の声に愛子と優子のため息を吐くが  
伐は上手く行ったと思っているようで小さく口元を緩ませ、愛子は  
伐の言葉に首を傾げた時、

「は、放せ！？ 翔子！？」

「……協力する」

「わかった！？ 協力するから、放せ！？」

雄二は翔子に覗きの件に関しては服従する事を約束する。



## 第174問

「後は吉井くんね。黒須くん、どうしたら良いかしら？」

「……何度も言わせるな。俺はお前らに協力する義理はない」

雄二の腕に抱きついた翔子が合流すると優子は伐に明久を仲間に引き入れる方法を教えると言うが伐は眉間にしわを寄せて協力はここまてだと言っが、

「無駄だろ」

「うん。ここまで協力したんだから、最後まで協力しちやおうよ」

雄二は翔子を腕から引き離すのを諦めたようで眉間にしわを寄せたまま言っと愛子は伐はすでに協力してくれるものと考えているため笑顔で言っ、

「……黒須は良い人だから絶対に協力してくれる」

「……おかしな事を言っな」

翔子に至ってはすでに伐を『良い人』と認識しているよう伐は眉間にしわを寄せたまま翔子の言葉を否定すると、

「ダーリンを仲間に引き込むのは旦那が居れば簡単に思いつくだろ。俺はここから先は知らねえよ」

「あっ！？　ちよっつと、伐くん」

「……付いてくるな」

伐は歩きはじめ、愛子は伐の後を追いかけようとするが伐は巻き込まれて大分たっているせいかイラついているようで冷たく言い放つと愛子はその声に少し怯んだようで動きを止め、伐は1人で歩いて行く。

「愛子、あんまりしつこいのもどうかと思うわよ。得に黒須くんは1人でいるのが好きって感じだし」

「う、うん」

優子は愛子に今の伐には近づかない方が良いと言つと愛子は放れて行く伐の背中を見つめながら頷き、

「それじゃあ、坂本くん、どうやってたら、吉井くんを味方に引き入れられるかしら？」

「何で明久を仲間に入れる必要があるんだ？」

「伐くんが坂本くんと吉井くんを覗き犯に混ぜておくと厄介だからって、坂本くんと吉井くんをこちらに入れておいた方が良いつて」

優子は雄二に明久を仲間に入れる方法を考えるように言つと雄二は明久を仲間に入れる必要があるのかと聞き返すと愛子は伐が2人を仲間に引き入れると言われたと言つと、

「厄介だから引き入れろか？……そう言われるのはどうなんだ？」

「少なからず、黒須くんは坂本くと吉井くんを認めているって事じゃないの。他にはFクラスから仲間に入れておいた方が良くって人間は出てないわけだし……って、土屋くんを野放しにしてて良いのかしら？」

雄二は伐の評価にため息を吐くと優子は伐は雄二と明久を認めていると言いながらも康太を仲間に取り入れられないのは問題がないのかと首を傾げる。

「ムツツリー二は仲間に入れない方が安全だろ。脅迫犯の件もあると言つか……たぶん、言いたくはないがもうムツツリー二は尻に火傷のある女子を探す事しか考えてない」

「確かにね……後、優子の弟くんはどうするの？ 覗きに参加するようなタイプじゃないとは思っただけど、こっちに協力して貰う？」

「そうね。秀吉ならこっちに簡単に仲間に入れる事ができるわ」

雄二は康太は仲間に入れる事は止めた方が良くと言うと愛子は頷き、優子に秀吉をどうするかと聞くと優子は秀吉にも手伝わせると言う

「それじゃあ、秀吉に明久に仲間になれと言えば明久は簡単に落ちるだろ」

「……それはそれでどうなのよ？」

雄二は秀吉から明久に協力するように言えば明久は直ぐに仲間になると言い、優子は雄二の言葉にため息を吐く。

## 第174問（後書き）

どうも、作者です。

伐は退却し、代わりに軍師の位置に座った雄二。どうなるんでしょうか？

番宣？

以前、伐をAクラスにした特別問題を書かせていただきましたがそれを新しく投稿させていただきました。

『嘘と話術とノラ猫 if ノラ猫と陽の当たる場所』と言う題名です。

楽しんでいただければ幸いです。

## 第175問

「……だりい」

「……俺の顔を見るなり、ため息を吐くのはどうなんだ？」

伐は愛子達から離れて中庭以外でタバコを吸えそうな場所を探していると西村教諭に見つかり、伐は面倒そうにため息を吐く。

「仕方ねえだろ。こっちはこんな来たくもないところに無理やり連れてこられた上にくだらないバカどもに巻き込まれればな」

「……また、吉井と坂本が何かしてるのか？」

「まあ、そんなところだ」

伐は不機嫌そうな表情で言う。西村教諭は明久と雄二がまた何かしでかそうとしていると判断したよう。ため息を吐くが伐は詳しい事を言う気はないが、

「……お前も1枚、噛んでいるんじゃないだろうな？」

「巻き込まれてるって言うてるだろ。どうにかしろよ」

「……何をしているんだ？」

「……貸した。Fクラスのバカたちが覗きを企んでる奴らがいる……坂本と吉井は女どもの味方になるように木下姉や工藤、霧島が動いている」

西村教諭は伐に何が起こってるかと聞くと伐は表情を変える事なく、覗き犯を西村教諭に売ると、

「そうか……」

「どうせ、騒ぎを前もって収める気もないんだろ。まあ、説教されても聞くような奴らじゃねえしな」

「……お前はどこまで人を見透かしているんだ？」

西村教諭は何かを考えるような素振りを見ると伐は気だるそうにため息を吐いて教師陣は覗きを事前に防ぐ気はないと言つと西村教諭は呆れたようなため息を吐く。

「別に、誰だつて気づくだろ。この施設の風呂へ続く道は1本道、そこから覗けるようにはなっていない。それにまとめられたバカども、何か策を立てる人間がいないんだ。立てられる策は全力で正面突破。その状況で吉井が出てくるなら、召喚獣を使わないと突破できなくなる。吉井が女子勢に混じっているなら、そこを突破するのに召喚獣を出さないといけなくなる。そうすればうちのクラスのバカどものやる気は覗きに集中すればするほど自習に集中する」

「……黒須、お前は当然、こちらに付くんだろうな？」

「知らねえよ。俺には関係ねえしな。好き好んで補習を受けるわけねえだろ」

伐は西村教諭の様子に誰でもわかると言つと西村教諭は伐に女子勢の味方をしろと言つが伐は自分には関係ないと言つと、

「……ん？ 俺はやる事があるから行くぞ」

「……ああ。おかしい事をするなよ」

「俺に言う前に他の奴らに言えよ」

伐は何かに気づいたようで西村教諭から離れると西村教諭はため息を吐きながら伐におかしな事をすると言うが伐は自分に言う前に他に言えと言いついて行く。

（……まあ、ある意味、予想通りだったんだけどな）

「な、なぜですか！？ み、美春のカメラがな、無くなっているなんて、あ、あの豚野郎、まさか、美春の考えに気づいて……いや、あの豚野郎にそこまでの知能はありませんわ。それなら誰が……」

伐は西村教諭と話をしている途中で盗撮犯らしき姿を見たようで尾行すると盗撮犯は容疑者に上がっていた美春であり、伐は気だるそうにため息を吐くと美春はカメラを取り外された事に自分の行いを棚に上げて犯人を八つ裂きにする事を考え始めており、

（……まあ、証拠はつかめたから、後は使いどころか。さてとタバコでも吸ってくるか）

伐は美春を今、捕まえる気もないように盗聴器から聞こえる美春の声を聞きながらその場を離れて行く。

## 第176問

「……何のようだ？」

「えーと」

伐がタバコを吸っていると明久が伐に話があるようで何か言いたそうに近づいてくる。

「……用がないなら消えろ。俺はお前と話す気はない。さつきも言ったがお前の相手をするほど暇じゃねえんだよ」

「タバコを吸ってるのに？」

「……お前と話をしたって俺に何の得もねえだろ。金にもならねえしな」

伐は気だるそうに明久と話す気はないと言い、どこか行けと明久を追いつらうように手を振ると、

「さつきの事は謝るよ」

「……口だけの謝罪はいらねえよ。口だけの謝罪がなんの役にも立たねえのはテレビで申し訳なさそうに形だけの謝罪をしているお偉い様を見てればわかるだろ。そんなもんは誰も信じねえ。本気の謝罪ってのは血を流す事だ。お前にその覚悟があるのか？ それもねえのに偉そうな事を言うな」

明久は伐に先ほど答えを出さなかった事を謝ろうとするが伐は話を



聞く気などないと言う。

「覚悟？」

「……何かをしようとする人間は多かれ少なかれ覚悟を持っている。お前の覚悟は薄っぺらい。お前へ好意を持つている人間はそれで動いてくれるかも知れねえがな。俺はお前みたいな覚悟も信念も薄っぺらい人間の相手をするほど暇じゃねえんだよ。今回の件だって元はと言えばお前が薄っぺらいから起きた事だろ。脅迫？ 鼻で笑えよ。たかだかガキのやる脅迫だろ。そんなもんでうるたえるなら誰かのために何かのためになんて偉そうな事を言うんじゃないよ。へどが出る。そんな口先の事を言ってる、いつか本当に死ぬぞ」

明久は伐の言葉の意味がわからないように首を傾げると伐は明久の口先だけの言葉に付き合う義理はないと言い切ると、

「今回の脅迫、お前らが覗き犯だと疑われた事、そして、バカどもがそのせいで暴走した事、原因は全部お前だ。てめえのけつくらい、てめえで拭けよ」

「原因が僕？」

「……それにも気付かないでいられるなんてずいぶんとおめでたい頭だな」

今回の騒ぎの原因全ては明久にあると言うが明久には自覚もないように首を傾げたままであり、伐は気だるそうにため息を吐き、

「……女に優しいのも甘いのも美德じゃねえよ。それもわかんねえ奴は刺されれば良い。そうすればそれだけが優しさじゃねえって事

に気づくだろうからな。お前も霧島もな……お前が答えを出さないうちは次も同じ事が起きる。間違いなくな。バカに言うのも無駄かも知れないが少し考えて動けよ。自分の事、周りの事、守りたいもの、失いたくないものがあるなら手を伸ばしても手が届かなくなる前にな」

伐は明久に投げかけた言葉がらしくないと思ったように眉間にしわを寄せると新しいタバコを懷から取り出して火を点け、

「……らしくねえな」

「ごぼっ!？　ちょ、ちよつと、黒須くん!？　いきなり、何をするんだよ!?!」

タバコのフィルター部分を伐の言葉の意味がわからなくて間抜け面をしている明久にくわえさせると明久はタバコの煙を吸い込んだようで大きくむせるが伐は気にする事なく、

「……この授業料は貸した。そうだな。この覗き騒ぎを片付ける事ができたらチャラにしてやるよ。それができなかったら……肝臓で良い」

「ちよつと、対価がおかしいからね!？　まったく、黒須くんの言ってる意味もわからないし!？」

伐は一人で歩きだすと明久は背中を向けている伐に声をかけるが伐が振り返る事はない。

## 第177問

「……またきたのかよ。うぜえから、くるんじゃないよ」

「そんな事、言わないでよ。報告したい事だつてあるんだからさ」

強化合宿の自習時間が伐は愛子が近づいてきたのを見て気だるそうにため息を吐くと愛子は苦笑いを浮かべて伐の隣に座る。

「……なんだよ。Aクラスのお前がいないと戦力的に……必要ねえか、初日だし、Fだけだろうからな」

「初日だし？ それって明日からは他のクラスの男子も混じるって事？」

伐は愛子を追い払うように言うが、愛子は伐の隣に座ったまま首を傾げると、

「……自分の名前と顔が割れなければ処分が起きないくらいの騒ぎになれば処分もないだろうからな。捕まりさえしなければFクラスに罪をなすりつければ良いからな」

「それって、何か卑怯じゃない？」

「卑怯って言うのは戯言だ。考え付かないバカが悪いし、騙されるバカが悪い。何より、何も考えないでくだらない事を考えたバカが悪い」

伐はFクラス以外の男子生徒も覗きに参加すると言うと愛子は他の

クラスの男子生徒達に不快感をあらわにするが伐はどうでも良さそうに答える。

「ねえ、伐くん」

「……何度も言わせるな。協力はしねえよ。それに俺は仲好ごつこの好きなバカを見てると虫唾が走るんだよ」

愛子は伐に協力してくれないかと言うが伐は協力する気はないと言いつつ切ると、

「平和に風呂に入りたいなら、各部屋にある個人風呂を使え、他人を信じたっていい事なんかありやしねえよ。自分の身を守るのは自分1人なんだからな」

「そんな事を言いながらも、伐くんは助けてくれるよね」

「……ひつつくな。助けねえって言ってるだろ。俺は暇じゃねえんだよ」

愛子に自分の身は自分で守るように言うが愛子は伐なら助けてくれると言い、伐の腕に抱きつくが伐は気だるそうに愛子の抱きついてる腕を抜き取り、

「……勝手な期待なんかするんじゃないよ。俺は俺のためだけに動く、他人を信じたいと思うような生き方はしてねえんだからな……期待なんかするだけ、無駄だ」

「ば、伐くん？」

伐は少しでも表情を歪めると愛子は伐の表情が変化した事に気づいたようで少しでも不安そうな表情をするが、

「……じゃあな。せいぜい、覗かれないようにな。後はダーリンや霧島旦那が女側に付いたように女が男側に付かないとは言い切れないからな。せいぜい、気をつけるんだな」

「う、うん」

伐は直ぐに表情を元に戻すと気だるそうに女子生徒にも裏切り者がない可能性はないと言うと愛子は頷くが伐の表情の変化に愛子は伐の後を追いかける事も出来ずに立ちつくしてしまう。

（……何なんだよ。さつきから、らしくねえ。バカに毒されてるのか？ ……あり得ねえな。俺は俺だ。利を見て動く得にならないものは斬り捨てる）

伐は愛子から放れた事で自分のなかにある感情を整理すると、

（……腹減ったな）

昼食を食べていないためか腹の虫が鳴りはじめ、気だるそうにため息を吐くが、

（……飯、食えるのか？ ダメだったら、コンビニに行くか？）

自分の中にあるトラウマに眉間にしわを寄せる。

## 第178問

「……結局、力でごり押しか。霧島旦那とダーリンが居て召喚獣バトルね。くだらねえ」

「……黒須、お前は何をしているんだ？」

伐はFクラスの生徒達が女子風呂を覗くために正面突破を始めたのを見て、伐は気だるそうにため息を吐くと召喚フィールドを承認している西村教諭は伐を見て眉間にしわを寄せると、

「……くだらねえ事を始めたバカどもの見学」

「……手伝うと言う事はせんのか？」

伐は欠伸をしながら見学しにきたと言うと西村教諭は眉間にしわを寄せたまま、伐に手伝えと言うが、

「ただ働きをする気はねえよ。俺は俺を高く買ってくれた方に付く」

「……待て。覗き犯側に付くのは俺が許さんぞ」

伐は現状で言えば手伝う気はないと言い、西村教諭は伐に説教をしようとする。

「……勘違いするな。別に今回は覗き犯と女子生徒に別れてるわけじゃねえよ。これだけ人が集まってるんだぞ。人の考えてるのは人の数だけ存在する。俺はそれを見て動いただけだ。まあ、金払いの悪い奴には付かないけどな」

「……それは俺の手伝いはしないと云う事だな？」

「ああ。少なくともあんたは俺を使う時に金を払う気はないからな」

伐は西村教諭には従わないと言つと気だるそうに歩きだし、

「……まったく、あいつは」

西村教諭は頭を押さえながらため息を吐くと、

「鉄人、決着がついたんだが、これはどうしたら良いんだ？」

「……疲れたよ。体中、痛いし」

「本当なのじゃ」

「……雄二、吉井、お疲れさま」

「秀吉、あんたもね」

覗きに参加したFクラスの男子生徒を片付け終わったようで雄二が西村教諭に声をかけると明久はFクラスの男子生徒達の覗きに対するパワーに致命傷にはならない程度に召喚獣は攻撃を受けたように廊下に座り込み、協力してくれた明久、雄二、秀吉の3人に翔子と優子が缶ジュースを手渡す。

「ん？ サンキュー、翔子」

「あ、ありがとう。霧島さん」

「すまむのじゃ。姉上」

3人はプルタブを開けてジュースを飲みほすと、

「しかし、お前達3人はどうしてこちら側にいるんだ？ 木下はまだしも、吉井と坂本は本来なら、こいつらと一緒にここでのされているはずだろう……何を企んでいるんだ？」

「せっかく、頑張ったのにそれかよ。まあ、俺だってこっちに付く事になるなんて思わなかったからな」

「……うむ。確かにそうなのじゃ」

西村教諭は戦死したFクラス男子生徒全員を持ち上げ、3人が女子の防衛ラインにいる事を疑問に思ったように首を傾げ、雄二と秀吉は苦笑いを浮かべる。

「えーと……言った方が良いのかな？」

「たぶん、伏せておいた方が良いわよ。それをやると盗撮犯にも結びつくから」

明久は近くにいた友香に自分と雄二が脅迫されている事を西村教諭に話すべきかと言うが友香は首を振り、

「うん。今は未遂だし、それで、女子達がギスギスしちゃうと覗き犯達の思うつつばだと思っし」

「……うん。そうだね」



愛子は伐が何かをするつもりと言う事も知っているため、明久に言わない方が良いと言うと明久は頷き、

「女子はお風呂に入れないのはやっぱり嫌ですから、あたしと代表、愛子、小山さんで頼みました。認めたくはないですが試召戦争での事を考えれば、上手くやってくれると思いましたから」

「そうか。吉井、坂本、木下。くれぐれもお前達を信じた人間を裏切るような真似をするなよ」

優子は西村教諭に盗撮犯の事を伏せて、3人に協力を頼んだと言うと西村教諭は一先ず納得したようでFクラスの男子生徒を担いで歩きだし、

「……やっぱり、鉄人は人間じゃないと思うんだ」

「……明久、珍しく意見が合うな」

西村教諭の様子に明久と雄二は顔を引きつらせる。

## 第179問

「……寝てるね」

「寝てるわね」

「姉上、工藤、黒須にちよつかいをかけぬ方が良いのじゃ。黒須は寝起きは良くないのじゃ」

翌日の朝、自習に当てられた教室の隅の席で寝ているのを見て愛子と優子が物珍しそうに伐の頬を突いている様子に秀吉は慌てて2人を止めていると、

「でも、何で自習なんだろう？ 授業はやらないのかな？」

教科合宿での勉強方法は自習であり、この教室にはAクラスとFクラスが自習を行っており、明久は事業ではなく自習の事に首を傾げる。

「授業？ そんなもんやるわけないだろ」

「やらない？ どうして？」

「……この合宿の趣旨はモチベーションの向上だから」

明久の疑問に雄二は呆れたようにため息を吐くと雄二の隣にいた翔子がこの合宿の目的を明久に話すが、

「モチベーションの向上？」

明久は意味がわからないように首を捻り、

「翔子、それだけじゃ、明久はにわからんだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』とFクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そう言ったメンタルの強化が目的だから、授業はさして問題ではないって事だ。本来なら設備の関係でDクラスと一緒にだったはずなんだが……授業への取り組む姿勢としてFクラスは最低ランクと判断されているからな。Aクラスと一緒になりやがった」

「……雄二、一緒に勉強できて嬉しい」

雄二は翔子の説明では理解できない明久に噛み砕いて説明すると翔子は雄二の腕に抱きつく。

「まあ、今後の作戦を立てるとしたら、良かったのかも知れないんだけど……よく考えたらこっつて覗き犯の真ん中でもあるのよね」

「えーと、ごめん。木下さん」

優子は秀吉に伐の観察を止められた優子が覗き犯撃退のために作戦を立てたいと近づいてくるが周りで騒いでいるFクラスは昨日の覗き犯達であり、作戦は立てられそうにないため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべて謝ると、

「そう言えば、盗撮犯の方はどうなってるんだ？俺や明久はそっちも気にしないといけないから、こっちはかりをやってられないんだが」

「それに関しては伐くんがどうにかしてくれるよ。と言うか、昨日、隠してあったもう1台のカメラも外してくれたし、仕掛けられそうなどころは当たりをつけてくれたから、小山さんと話し合いして覗き犯がいるからA B CとD E Fのお風呂の時間に別れるはずだったのを全クラスを2つに分けて交替で入るようにしたから、前半はぼくと代表、後半は優子と小山さんが確認してくれるって」

雄二は盗撮犯をどうにかしないと言うと愛子はすでに盗撮犯への対策は取れていると言う。

「……あいつは何をやってるんだ？」

「さあ？ でも、口では面倒だとかだるいとか言うけど、ちゃんと協力してくれるんだから、黒須くんって良い人だよな」

雄二はすでに対策が取れている盗撮犯への対応にため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべながら伐は良い人だと言い、

「うむ。なんだかんだ言いながらも、クラス設備の交換や清涼祭の件では協力してくれたのじゃ」

「でも、そう言うのを面と向かって言ったらダメだよ。伐くん、機嫌が悪くなっちゃうから」

「確かにね」

秀吉は明久の言葉に同意すると愛子は伐が機嫌が悪くなるような事は言つなと言い、優子はため息を吐くと、

「それじゃあ、勉強しましょうか？ 3人はあたし達の防衛ライン

に重要な役割を担って貰うんだから、少しでも成績を上げて貰うわよ。特に吉井くんは観察処分者で物理干渉ができるんだから、最初に出て貰わないと腕力じゃあたし達は男子に勝てないんだからね。召喚獣バトルに持ち込むのが重要なんだからね」

「う、うん。わかってるよ」

優子は成績の劣る明久、雄二、秀吉の3人の成績向上に協力すると言いだし、明久は苦笑いを浮かべながら頷き、

「代表、坂本くんは任せるわよ」

「……わかった。雄二」

「待て。やるなら、みんなでやった方が効率が!？」

優子は翔子に雄二を任せると言うと翔子は雄二を引っ張って行くこうとし、雄二は2人になるのは危険だと判断しているようで声を上げるが翔子は雄二にスタンガンを押し当て気絶した雄二を引きずって歩いて行く。

「……坂本くんは大丈夫かな？」

「大丈夫よ。そこまでおかしな事はしないでしょ。愛子はこっちを手伝ってあたし1人じゃ、無理そうだから」

愛子は雄二と翔子の様子に苦笑いを浮かべるが優子は気にする事なく、愛子に明久と秀吉の勉強に付き合うように言つと、

「……ねえ。さっきから、こっちを姫路さんと島田さんが見てるん

「ただ、声をかけなくて良いの？」

「必要ないわ。あの2人を呼ぶと絶対におかしな展開になるから、黒須くんが起きてたら、おかしな事をしたら追いついてくれるけど、わざわざ厄介事を引き入れる必要はないわ」

愛子は席に座るところをずっと見ている瑞希と美波の視線に気づくが優子は瑞希と美波を斬り捨てる。

## 第180問

「……瑞希、どうにかしないとアキが木下に取られちゃうわ」

「そうですね。木下くん、木下さんや工藤さんを抱え込んで吉井くんを誘惑するなんてずるいです」

瑞希と美波は明久が秀吉の魔の手に囚われていると思っているようで殺気混じりの視線を秀吉に送っており、

「あ、姉上、姫路と島田もこちらに呼んではどうかのう？」

「黙りなさい。秀吉、そんな事を言ってる暇があるなら単語の1つでも覚えなさいよ」

秀吉は自分の背中に刺さる視線に涙目で優子に助けを求めるが優子は秀吉の泣き言を一蹴すると、

「だいたい、自業自得でしょ。黒須くんだって言ってたでしょ」

「で、でもさ。やっぱり、このままだと集中しにくいよ。それに暴走したのは代表も一緒だし」

2人に声をかけないのは勝手に暴走したあの2人の責任だと言うが愛子もやりずらいようで苦笑いを浮かべる。

「確かにそうなんだけどね……」

「……声をかけるな。頭に乗るからな。ダーリン、大化の改新は6

45年だ。625年じゃない」

「嘘！？ ありがとう。黒須くん」

「伐くん、おはよう。ここに座って、一緒に勉強しようよ」

優子は愛子と秀吉の言う事もわかるとは言うが瑞希と美波、2人の暴走娘を取り込むのは危険だと判断しており2人を味方に引き入れる事はできないと首を振った時、欠伸をした伐が自習用に用意されたプリントの穴埋めをしている明久の記入している答えを見て声をかけ、愛子は伐が起きた事が嬉しいようで自分の隣の席に座れと言うが、

「……断る。俺は便所に行くのに起きたただけだ。その後は一服してまた寝る。俺は俺でやる事があるからな」

「そうなんだ」

伐は余程眠いのか大きな欠伸をすると教室を出て行こうとして愛子は残念そうな表情をすると、

「……くだらねえ事を言ってる暇があったら、お勉強でもしてな。試召戦争に持ち込んだら、お前の点数が役に立つんだ」

「う、うん。わかったよ」

伐は乱暴に愛子の頭を撫でると教室を出て行く。

「……黒須くん、大丈夫かしら？」



「姉上、何かあったのか？」

伐が出て行ったのを見て優子がぼつりとつぶやくと秀吉は優子が何を心配しているのかわからないように首を傾げると、

「……見なさい。さっきの殺意を垂れ流した2人が黒須くんを追いかけて行ったから」

「黒須の事じゃ、大丈夫だとは思うのじゃが……」

優子は先ほどまでこちらに向けて殺意混じりの視線を向けていた瑞希と美波が伐を追いかけて行ったと言うと秀吉は顔を引きつらせながら伐なら大丈夫だと言うが不安は隠せないが、

「まあ、黒須くんならのりくらりと交わすでしょ……と言うか、黒須くんがああ2人に捕まる姿は想像できないわ」

「……確かに、そうかも」

優子は伐なら大丈夫かなと考え直すと愛子は伐が2人に捕まっている姿は想像できないように苦笑いを浮かべ、

「まあ、ここで心配しても仕方ないでしょ。それに……」

「……木下さん、ごめん」

優子は伐の事を心配するよりは簡単な問題で頭を抱えている明久を見てため息を吐くと明久は申し訳なさそうに謝り、

「秀吉、あんたも遊んでないでやるわよ」

「  
うむ」

優子はFクラスの成績にため息を吐く。

## 第181問

(……流石に便所には入ってこないか)

伐は瑞希と美波が自分の後を付けて教室を出てきた事に当然、気づいており、一先ずは男子トイレに入り用を足すと当然のように窓から脱出すると、

(一先ずはそろそろ、あのバカと接触しておくか?)

気だるそうにため息を吐いて、自分達の教室ではなく他の教室に向かって歩き出す。

「……邪魔するぞ」

「ミ、ミサちゃん!? わ、私に会いに来てくれたの? そう? そうよね。ミサちゃんがきてくれると思って私、ミサちゃんに似合う服、いっぱい持ってきたんだよ」

伐は当然のようにCクラスとDクラスが合同で自習をしている教室に顔を出すと伐の姿を見た美紀が目を輝かせながら伐に駆け寄ってくるが、

「……今はお前の相手をしてるヒマはねえんだよ。居ねえな。隠れているような気配もなしか」

「黒須くん、何かあったの?」

伐は美紀には用はないと言い、教室を見回すが目的の生徒は見つか

らないように眉間にしわを寄せると友香が伐が来た事で盗撮犯の事で何か進展があったのかと思ったように伐に声をかける。

「ん？ いや、たいした事じゃないが、友香、ここの教室での男子の動きはどうなってる？」

「……ちよつと良い？ ゴメン、平賀くんもちよつと」

「僕かい？」

伐は目的の生徒が見つからないため、友香に覗きに参加しそうな男子生徒達の動きはどうなっているかと聞くと友香は眉間にしわを寄せながら、Dクラス代表の『平賀源二』に声をかけると3人は廊下に出ると、

「……平賀くん、昨日の夜、Fクラスの男子生徒のほとんどが女子風呂の除きをしようとしたのは知ってるわね？」

「そうだね。あれだけ、噂になればね。それで何かあったのかい？」

友香は源二に昨日の覗き騒ぎを知っているかと聞くと源二は苦笑いを浮かべ、

「……平賀、現状で便乗しそうな男子生徒はわからないか？」

「便乗？ そんな事をするのかい？」

伐は表情を変える事なく、源二にDクラスにFクラスに便乗して覗きに移ろうとする男子生徒がいなかったと聞き、源二は首を傾げるが、

「建前を言う必要はない。男なんだ。誰だって覗きに行きたいだろ」

伐は全てを見透かしたような瞳で源二に問いかける。

「……そうだね。覗きたいと思う事は否定しないよ」

「……そう」

源二は伐の視線から逃れる事はできないと本能で察したようであめ息を吐いて本音を吐くと友香は少し顔をしかめるが、

「……友香、睨むな。逆に反応しない方が問題がある」

「それもそうかも知れないんだけど」

伐は源二の反応は当然だと言うと友香は納得がいかないようであり、

「……平賀、たぶん、近いうちに『覗きに協力しろ』と言う連絡が回ってくるはずだ」

「……どうしてだい？」

「人数が増えれば処罰の対象として見られる可能性が減るからだ。うちのクラスはバカどもは本能に従った時はたまに有効な手を打つて来る」

伐はFクラスが次に起こす行動に察しが付いているようであめ息を吐くと、

「……確実にお前は男子生徒をまとめあげる事はできない」

「そこまで言うかい？」

伐は源二にはDクラスの男子生徒をまとめる事はできないと言い切り、源二は少し気分を悪くしたようで表情をしかめるが、

「それだけ上級の餌が転がってるんだ。当然だろ。それで、平賀、お前は女側に付け」

「どう言う事だい？」

伐は気にする事なく、源二に女子の防衛ラインに参加しろと言う。

## 第182問

「代表のお前が覗きに参加するとこの後の立場的に悪くなる。本能に従いたくなるのもわかるがお前の立場で考えろ」

「べ、別に覗きに参加するとは言っていないよ!？」

「……平賀くん、それは参加したいと言ってるのと変わらないわよ」

「……」

伐は源二に後々の事を考えろと言うと源二は声を裏返して参加する気はないと言うが友香は源二の反応にジト目で源二を見ると彼はバツが悪そうに友香から視線を逸らす。

「……男どもと覗きに参加するのは論外。覗きに参加しないと言う立場で日和見をするとしてもクラスの男達が参加したらお前の女たちからの評価は下がる。そうなると立場的に悪くなるからな」

「でも、女子側に付くと男子からの信頼はなくならないかい？」

「多少はな。だが、世論的に正しい事をやってるんだ。そいつらにお前を批判する権利はない。男子の信頼も残したいなら、何人かでも説得して女どもの防衛ラインに引きずりこめ」

伐は源二が女子側になる利点を話すと源二は納得できる事はあるが男子側を裏切る行為にもなるため、気乗りしないようであるが伐はクラスの男子も防衛ラインに巻き込めと言うと、

「……確かにそうね。集団心理って言うのが働くでしょうから、反対意見が出れば戦力は分断できるわよね」

「ああ、お前がここで女ども側に着くと宣言しておけば、友香が上手くやってくれる。その場でお前らが覗き組に捕まったとしてもお前が覗き側に居なければお前の立場は守れるだから」

「……宣言は派手にやれって事だね？」

友香は伐が源二に話を持ってきた意味をようやく完全に理解したで領くと伐は源二の立場を守る方法を話して行き、源二も伐の言いたい事が理解出来たようで伐に視線を移して聞き返す。

「ああ。この覗き騒ぎが他のクラスに広がっているんだ。覗き騒ぎに参加した男子ってレッテルは『楽しい』学生生活にどんな影響を与えるだろうな？」

「……そうだね。そう言われると僕もそっちに参加した方がいい事は理解できるよ。小山さん、僕は女子の防衛ラインに参加させて貰う。宣言は僕のところにもメモが回ってきた時点で教室で派手に行くから、フォローをお願いできるかな？」

「ええ。うちの女子は全員防衛ラインに入っているから、平賀くんが入ってくれとDクラスの女子とも協力しやすくなるから、よろしくね」

「うん」

伐の言葉に源二は踏ん切りをつけたようで友香に頭を下げると友香も源二との同盟が取れた事に一先ず、ほっとしたようであり、



「……それじゃあ、ここは任せるぞ」

「黒須くんはどうするんだい？」

「…… BとEにも協力者を作りたいところだけだな」

「恭二に頼む気？」

伐はここはもう良いなと考えてどこかに行こうとすると源二は伐に声をかけると伐は他にも女子側に参加してくれる男子生徒を探したいと言うと友香の視線は鋭くなるが、

「……いや、あいつは俺の言葉には従わないだろ。それどころか俺が言えは意地になる。Eにも男には知り合いはいないから……仕方ないから、面倒だが、遊ばせておくのはもったいない戦力と接触してくる」

「……そう。頑張つてね。黒須くんはあの2人に完全に敵扱いされてるでしょうし」

「……ああ」

伐は恭二は自分の話を聞く事はないと思っているようで面倒そうに他に話をしてくる人間がいると言うと友香は伐が誰の事を言っているのか理解したようのため息を吐いて伐を見送る。

## 第182問（後書き）

どうも作者です。

番宣です。

今まで書いた特別問題を『繋ぐ絆と境界破壊』と言う題名で投稿し直します。

移動し終わったら、ここにある特別問題を削除します。

ほかに新作として第5問に伐とりザクさんの『バカとテストと極道娘』の福田夏帆ちゃんとコラボを書かせていただきましたのでよろしければご一読ください。

## 第183問

(……さてと、どうする？ 島田はまだしも巨乳娘は戦力になるから、話くらいしてお……見なかった事にするか)

伐は友香と源二と別れると一先ずは瑞希は防衛ラインに戻した方がいいかと考えながら廊下を歩いていると、

「お姉さま」

「ちょ、ちよつと、黒須！？ 助けなさいよ！？ 美春はあなたの管轄でしょ！？」

廊下の先では美春が美波を押し倒しかけており、伐は美波にはあまりようもないため、美波を見捨ててF、A合同の自習室に戻ろうとするが美波は伐を見つけて助けを求めるが、

「……さっきまで人に殺意を向けていた奴が言うセリフか？ だいたい、1度、食われてみれば価値観も変わるかも知れないぞ。何事も経験だ」

「そうですね。お姉さま、美春がお姉さまの価値観を変えてあげますわ」

伐は知らないと言い切ると美春の攻撃の手はさらに鋭くなって行き、

「ちょ、ちよつと、洒落にならないわよ！？ さ、さっきは悪かったわよ！？ あ、謝るから、謝るから助けて！？」

「バカじゃねえのか？ 頭下げるくらいで許して貰えるのはお互いの信頼関係があって初めて成り立つんだよ。俺とお前の中にそんなものはない」

美波はなりふりなどかまっておれないようにで伐に謝るが伐は知らないと答える。

「な、何でよ！？」

「……当たり前だろ。無条件で助けてくれるヤツなんてよっぽどのバカがお人好しだ」

美波は伐が自分を助けてくれない事に声をあげると伐は呆れたようにため息を吐くと、

「……そんなバカでもな。いつか、気づくぞ。自分は何で言われない暴力を受けてる人間に関わらないといけないのかってな。それに今回は周りが正当に評価してくれているしな」

「うつ！？」

美波に明久に行っている暴力で明久は放れて行くと言う美波は今朝から愛子や優子をはじめとしたAクラスの女子生徒達が明久に話しかけている事を思い出して美春への抵抗が緩み、

「お姉さま」

「……お前は空気を読め」

美春は今がチャンスと美波へと手を伸ばすが伐は頭を押さえながら

彼女の首をつかみ、

「別にお前が勝手に嫉妬しようがどうでも良いんだよ。バカだけならまだしも他の人間を巻き込むんじゃねえよ。お前と巨乳娘のせい  
で今回、どれだけの人間が迷惑をかけられてると思ってる？」

「何よ？ 全部、ウチと瑞希のせいだって言うの？」

美波に向かい行動を考えると言うが美波は未だに自分の行動に問題があるとは思っておらず、

「……盗撮犯騒ぎはまだしも」

「……」

「覗き騒ぎはお前らが考えないで動いた結果だろ。それを他人のせいにするんじゃないよ」

伐が盗撮犯と言うと美春は目を泳がせるが美波は気づく事なく、伐は美春の反応など気にする事なく、明久の時と同様にこの騒ぎは美波と瑞希のせいだと言い、

「……それもわかんねえなら、お前、生きる価値もねえよ」

「ば、伐くん！？ 放してください！？ お、お姉さま！！！！」

「……な、何よ。意味が分かんないわよ」

伐はイラついてきたのか舌打ちをすると美春を引きずって歩きだし、美波は伐の様子に意味がわからないように立ち尽くす。

## 第184問

「ば、伐くん！？ 放してください！？ お、お姉さま！！！！」

「……黙れ」

「……」

伐は美春を引きずって歩いていると美春は美波に未練があるため、引きずられながらも美波の名前を呼ぶが伐は不機嫌そうに美春に黙るように言つと美春は静かになる。

「……おい。お前はなんのつもりであんなものをおいたんだ？ と言つか、島田の絶壁を記録したかっただけだろうけどな」

「な、何の事ですか？」

伐は美春に盗撮カメラの事を聞くと美春は自分ではないととぼけようとするが、

「そうか。なら、<sup>カラダ</sup>肢体に直接聞いてやろう」

「い、言います！？ み、美春がお姉さまの裸を見たくてカメラを設置しました！！ 美春が犯人です！！ で、ですから、それは無しで！！ 無しでお願いしますわ！！」

伐は小さく口元を緩ませて美春の身体に聞いてやると言つと美春は身の危険を感じたようで全力で自白すると、

「……少しは考えて動け。お前の行動でバカどもが動き出したぞ。もしかしたら、お前の大嫌いな豚野郎以外で島田の絶壁を拝む奴が出てくるかもな」

「そ、そんな事はさせませんわ！！」

伐は美春の反応に小さなため息を吐くと美春は男が美波の裸を見る事に嫌悪感をあらわにし、

「感情的に動けばほころびが出るって事を覚えろ。お前はバカを島田から引き離れたかったようだが、お前の行動は逆効果でしかない。バカはお前らを守るために防衛ラインに回ったぜ。自分達を守るために動いた男に女はどんな反応を見せるんだろうな」

「あ、あの豚野郎！！ 引き裂きますわ！！ お姉さまを守るのは美春の仕事ですわ！！ あんな豚野郎に良い格好などさせませんわ！！」

伐は美春の行動で美波と明久の距離が縮まるぞと言うと美春は自分のやった事など気にする事なく明久へ殺意をただ漏らしながら駆け出して行き、

「……まっすぐ過ぎると言うかなんと言うか。まあ、バカも自分の身くらい自分で守れるだろ」

伐は美春の行動に気だるそうに頭をかく。

「後は巨乳娘か？ 戦力的には充分なんだが、島田と霧島嫁の行動に引きずられ過ぎるからな……まあ、木下姉とお子ちゃまも組ませる人間くらいは理解できるか。と言うか、何で俺がこんな風に動か

ねえといけねえんだ」

「……………それはお前が明久に当てられているから、お前が捨てたと言っているお前自身の強さを思い出したから、ノラじゃないお前自身の強さを」

伐は美春の背中が見えなくなると次の行動に移ろうとするが自分の今の行動に眉間にしわを寄せると伐の背後から康太の声が聞こえるが、

「…………俺自身の強さ？ くだらねえな。そんなもんは何の役にも立たねえよ。お前もバカな事をしてないでどこかで見切りをつけな。盗撮犯の目的はすでに瓦解したんだからな。これ以上調べて犯人に疑われるのもバカらしいぞ」

「……………伐」

伐は振り返る事なく康太の言葉を鼻で笑うと1人で歩きだし、康太は伐の名前をもう1度呼び、

「……………役に立たない事なんてない。お前の『心』はあの日と変わらずに強いままだ」

伐とは逆方向に歩き始める。



## 第184問（後書き）

どうも、作者です。

『繋ぐ絆と境界破壊』に新作を書きました。

今回は伐と秋雨さんの『大神白夜』くんとのコラボです。

楽しんでいただけると幸いです。

## 第185問

(……さてとどうするかね)

伐は自習室に戻る事なく中庭でタバコを吸っていると、

「伐くん、伐くん」

「……また、お前か。Aクラスは真面目にお勉強でもしてるよ」

愛子が伐を探していたのか伐の姿を見つけて駆け寄ってきて、伐は愛子の姿を見て眉間にしわを寄せながら、愛子を追い払うように手を振って自習室に戻るように言うが、

「聞いてよ。Dクラス代表の平賀ちゃんとDクラスの男子生徒が数名が防衛ラインに加わってくれて、後は清水さんが全身全霊を込めて覗き犯と吉井くんを八つ裂きにするって」

「……そうか」

愛子は源二達Dクラスの男子生徒と美春が女子側に参加してくれると笑顔で言うが伐は自分が仕掛けた事のため驚くわけもなく、

「……用は終わったな」

「何で、そんなに反応薄いのか？」

愛子と話をする気もないため、話を終わらせようとするが愛子は伐の隣に回り込んで伐の顔を覗き込む。

「……どうでも良いだろ。だいたい、盗撮犯もここまでの騒ぎになれば何もしてこねえだろ。ここまで騒ぎがでくなれば女どもにも盗撮カメラへの警戒は強くなるおかしな行動をしてる人間が居れば直ぐに取り押さえられるだろ」

「そうかも知れないけどさ……黒須くん、そう言えば、監視用に付けたカメラってどうしたの？」

伐は愛子がここに居座る気なら自分が場所を変えようと思ったように歩き出そうとすると愛子は伐の手をつかんで監視カメラはどうしたかと聞くが、

「……うるせえな。別に犯人を追いかむ必要はねえと言ったのはお前らだろ。仮に何か映っていて、そいつが防衛ラインに出てきた時、お前は冷静でいられるか、割りきれるような器用さがないなら気にするんじゃないよ。真実だけが答えじゃねえ。お前らが目をつぶると言ったんだ。それを変えるような事をするな」

「そうかも知れないけど……」

伐は愛子の手を振りほどくと盗撮犯の事は忘れるように言っていると愛子は納得がいかないように首を傾げると、

「でも、伐くんがそれを言うって事は犯人ももうわかってるんだよね？」

「……そう思うなら、そうなんだろ」

愛子は伐の言葉から伐の目には真実が映っていると思っているため、

首を傾げたまま聞き返すと伐は気だるそうに言い、

「犯人を探すよりは覗き犯をぶちのめす事を考えるよ。今年始まつてからのバカどもを見てきただろ。バカは感染拡大するんだ。今回は特に欲望も混じってくるからな」

「うん。そう思うなら、伐くんも防衛ラインに加わってよ。伐くんが数学のフィールドに陣取ってくれば心強いんだけど」

伐は愛子の手を振り払うと防衛ラインが厚くなろうと油断はするなと言うと愛子は伐の手に再び、抱きついて伐に防衛ラインに入るようをお願いする。

「だから、知らねえって言ってるだろ。ひつつくな」

「いや。うんって言うてくれるまで放れない」

伐は愛子の行動に眉間にしわを寄せたまま放れるように言うが、愛子は伐の反応が楽しくなってきたようで笑顔で言い切ると、

「……だりい」

「そんなこと言いながらも嬉しいんでしょ？　ぼくの胸も当たってるし」

「……悪いな。俺もいつも欲情してるわけじゃねえんだよ。後、無駄な殺意をまき散らすな」

伐は愛子の反応にため息を吐きながらも自分に向けられる殺意に気づいて気だるそうに言う。

## 第186問

「えっ！？ 誰かいるの？」

「……そこに欲望に忠実なバカが2人」

伐の言葉に愛子は驚きの声を上げてきよろきよろと周りを見回すと伐は気だるそうに中庭の1部分を指差すとFクラスの男子生徒が2人顔を出す。

「……で、何の用だ？ くだらない用なら消えろ」

『黒須、貴様を異端……』

「うるせえ」

伐は面倒そうに何の用だと聞くと愛子と一緒にいる伐を異端者とするとかみ足るが伐は眉1つ動かす事なく言葉の途中で男子生徒のこめかみを蹴り抜き、

『お、お前、何をする？』

「……あ？ なんか言ったか？ 覗き犯」

もう1人は伐の行動が予想外だったようで驚きの声をあげるが伐は小さく口元を緩めるともう1人の股間を蹴りあげ、

「……今更だけど、伐くんって悪役が似合うよね」

「あ？ 知るかよ。だいたい、悪いのはこいつら、俺の行為は正当防衛」

這いつくばっている男子生徒2人を見ながら愛子は苦笑いを浮かべるが伐は興味無さそうに言うつ、

「それで、俺に覗きの作戦でも考えさせようとしたけど嫉妬に負けて暴走したバカ2人、俺をいくらで雇うつもりなんだ？」

「ちょ、ちよつと、伐くん、そんな事をしないでよ！？」

伐は2人が自分を訪ねてきた理由にも見当が付いていたようで2人を手の甲を踏みつけながら言うつと愛子は伐に敵に回って欲しくないため、声をあげる。

「あ？ 俺はお前から受けた依頼分は働いたんだ。これ以上、縛られる気はねえよ」

「で、でも」

伐は自分にはこれ以上は女子生徒に味方する義理はないと言うつと愛子は悲しそうな表情で伐の顔を見つめるが、

『じ、これをお願いします』

「……この程度で動くか。まあ、これは今の迷惑料として貰っておく」

男子生徒は空気を読む事なく伐の前に2万円を差し出すが伐はその金額を見て鼻で笑うつと2万円を手から抜き取った後に男子生徒の腹

を蹴りあげ、

「俺を雇いたかったら、せめてこの10倍は用意しな。そしたら、話くらいは聞いてやるよ」

「ちょ、ちよつと、伐くん、待ってよ!? この2人はそのままの良いの?」

自分を雇う時の最低レートを提示すると1人で歩きだして行き、愛子は慌てて伐の後を追いかける。

「……付いてくるな。お前が付いてくるとわけのわかんねえ嫉妬を受けねえといけねえんだよ。後はさっきも言ったが正当防衛だ。あんな無駄な殺気を放ってカッターで切りつけようとしてたんだからな」

「そ、そんな事まで見てたの?」

伐は愛子に付いてくるなと言いながらも男子生徒2人の行動を予想して動いているようであり、気だるそうに欠伸をすると愛子は流石に顔を引きつらせるが、

「で、でも、ぼく達の方は安く引き受けてくれてるって事はやっぱり、伐くんはぼくの事を心配してくれてるのかな?」

「……勘違いするな。リスクを考えれば当然のレートだろ。お前の方が正当性がある事が多いんだ。同じレートで危ない橋を渡るバカはいねえよ」

愛子は女性陣が伐に依頼を受けて貰った時の値段で伐は自分達の味

方だと言つが伐はあくまでリスクとリターンの関係でしかないと言  
い切る。



## 第187問

「……それなりに壮観だな」

「そんな事を言っているなら、手伝ったらどうだ？」

2日目の夜になり、Fクラスの男子生徒を中心としてE、Bクラスの男子生徒も半数程度が参加した女子風呂覗きが廊下で展開されており、物理干渉のできる観察処分者である明久が廊下の真ん中を陣取っているため、男子生徒達は召喚しなければならず、明久の援護に回っている女子生徒、雄二、秀吉やDクラス代表の『平賀源二』を中心とした女子を守る側に付いた男子生徒に阻まれ多くの戦死者を出しており、伐はその様子をタバコを口にくわえて興味無さそうに傍観していると伐の様子に眉間にしわを寄せた西村教諭が伐に手伝うように言うが、

「……知らねえよ。そんな事より、さつさと補習者を連れて行けよ。それにこの状況は教師陣も望んでるんだろ」

「……まったく、お前はどこまで先を見ているんだ」

伐は気だるそうにこれは教師陣も望んだ結果だと言うと西村教諭は伐の言葉に大きなため息を吐き、

「どこまでだつて良いだろ。それより、早くしねえと」

「伐くん!？」

「……こうやって、実力行使に出るバカが出てくるだろ」

伐は西村教諭の言葉の途中で歩きだすと召喚獣が倒されて覗きに参加できなくなった男子生徒の1人が愛子に襲い掛かるうとしており、伐はその男子生徒を表情をかえる事なく蹴り飛ばす。

『く、黒須！？ 何しやる？』

「何？ さすがにこの状況で力づくはルール違反だろ？ 犯罪者になりたかったら別だけどな」

「……覗きも充分に犯罪よ」

男子生徒の1人が伐に蹴り飛ばされた瞬間、一瞬の時間の空白ができ伐に生徒達の視線は集まると伐は気だるそうに言う。優子はため息を吐き、

「良い。覗きに参加した男子生徒は全部補習室送りよ。早く終わらせるわよ」

「……まったく、代表として恥ずかしいよ」

友香と源二が率いる部隊が男子生徒達を蹴散らし始めると、

『平賀、裏切るなんてどう言うつもりだ！！ 吉井、坂本、お前らはそれでも男か！！ 今なら、まだ間に合う。俺達に協力するんだ！！ ここを抜ければ楽園が、パラダイスが広がってるんだぞ！！』

「……悪いな。こっちにもこっちの都合があるんだよ。俺はまだ自由でいたい」

男子生徒達は女子側に回った男子生徒達を非難するように叫ぶが雄二は翔子との間にまた何かあったようであり、大量の脂汗を流しながら男子生徒側に付く事はないと言い切るが、

「……」

「……ダーリン、そこで悩むと美春に首をかつ切られるぞ」

「な、何を言ってるんだよ!? 黒須くん!? ぼ、僕は覗きたいなんて考えてないよ!」

明久の心は一瞬、揺らいだようであり、伐は気だるそうに明久に死にたくなければ裏切るなと言うと明久は慌てて覗き組には回らないと言っがその姿は明らかに動揺しており、

「……吉井くんの決心が揺らぐ前に終わらせるわよ」

「うむ」

優子と秀吉は明久の様子にため息を吐くと突撃指示を出し、覗きに参加した男子生徒を全員補習室送りにし、2日目の覗き騒動は女子生徒側に軍配が上がる。

## 第188問

「しかし……変な感じだな」

「そうだね」

「まあ、当然の反応だとは思わよ。少なくともあたし達はあれだけの騒ぎを起こすような変態達と一緒にの教室にはいられないわ」

3日目の自習時間に明久と雄二は今の自分達の教室の状況に苦笑いを浮かべると優子はこれは当然の結果だと言い、

「だけど、よく先生方もぼく達の意見を聞いてくれたよね。昨日の覗きに参加した男子生徒は全員、鬼の補習室で西村先生とお勉強だもんね」

「……ひつつくな。暑い。少なくとも点数がなくなった奴らはシステムが判断するからな。見つけるのは簡単だ」

「確かにそうだね。さすが伐くん」

愛子は伐の隣に陣取ると伐の腕に抱きつき、伐が逃げないようにしており、伐はすでに諦めているようであめ息を吐くと、

『吉井くん、坂本くん、今日も期待してるから頑張つてね。木下くんも一緒に風呂の時間を守ろうね』

『頼りにしてるから、坂本くん、代表をしっかりと守るんだよ』

Aクラスの女子生徒達が明久、雄二、秀吉に声をかけ、3人は今までとは違う女子生徒の対応に戸惑ったように笑う。

「な、なあ。黒須、これはいつたい、どう言う事だ？」

「あ？ 普通に考えろよ。当たり前だろ。自分達の身を守ってくれた頼りになる奴らと覗きに走った奴らや傍観していた奴ら、評価が上がるのは決まってるだろ」

「だ、だけどさ。僕や雄二が女子達からこんな風に言われる事なんてありえないだろ」

雄二は女子生徒達の反応が信じられないようでどうしたら良いかわからないようで伐に声をかけると伐は表情を変える事なく当然の結果だと言うが明久はこの状況はあり得ないと言うが、

「……バカか？ 今までがおかしいんだよ。霧島は嫁がいるから嫁からの折檻は当然として」

「おい。ちよつと待て！？ それは違うだろ！！俺と翔子にはそんな関係はない！！」

「……雄二、浮気は許さない」

「げっ！？ 翔子！？」

「話を折るなよ。良いか、普通はこうなんだよ。バカなクラスに毒されて周りが見えなくなってるんだろうがな。FFF団とか言ってるバカはもてない男の集まりだ。女を守るため？ 言ってる事とやってる事が明らかに違うだろ。あいつらはただ単に自分達に彼女が

できないのを他の男どものせいに行っているだけの惨めなバカども、状況から次の流れを読む事もなく勢いで動くから失敗するただのバカ。それ以上でもそれ以下でもない。そこから出て冷静になれば自ずと道は広がって行くのにな、また、そんな奴らと比較されるからお前らの評価もさらにあがって行く」

伐は3人の評価が上がったのは男としての評価を落としたクラスメイトのおかげだと言い、

「……それは喜んで良いのかのう？」

「さあな。だけど、これで、選択肢は増えたぞ。このまま、この状況を維持すればもしかしたら強化合宿中に彼女の1人や2人できるかも知れねえぞ。少なくともお前はバカだがそれなりに評価されてもおかしくねえだろ」

「じよ、冗談は止めてよ。僕に彼女ができるわけがないじゃないか」  
秀吉は喜べる事なのかと苦笑いを浮かべるが伐は興味無さそうに明久に向かって彼女ができるかも知れないと言うと明久は驚きの声をあげると、

「あ。でも、伐くんの言いたい事もわかるよ。確かに吉井くんも弟くんも成績は悪いかも知れないけど、誰かのために動けるじゃない。そう言うのって、女の子は見てるとキュンとするんだよ　　ぼくもそうなわけだし」

「……放れろって言ってるだろ」

愛子は伐の言いたい事がわかって嬉しそうに伐の手に抱きつ

きながら言つと伐の眉間のしわはより深くなつて行き、

「……愛子もそろそろ止めなさい。ここで黒須くんへそを曲げられても困るんだから」

「……黒須は防衛ラインの切り札、いなくなれると困る」

優子と翔子はすでに伐を味方と認識しているようで愛子の行動で伐の機嫌が悪くなる事を考えて愛子を伐から引き離す。

## 第189問

「……何度も言わせるな。俺は知らん」

「そんな事を言っても手伝ってくれるんだよね」

「待て、明久」

伐は眉間のしわを寄せたまま防衛ラインに協力する気はないと言うと明久は何も考えずに伐が手伝ってくれるものだと思っているように伐に言うが雄二は明久の行動に伐の機嫌が悪くなっている事に気づき、明久を止めるがすでに遅く、

「く、黒須くん！？ いきなり、何をするのよ！？」

「うるせえな。何度も言わせるな。それに俺はこのバカに何度も言ってるんだ。この騒ぎの中心はこのバカだ。他人に頼らずに自分でどうにかしろってな」

伐は表情を変える事なく明久の鼻っ柱を殴りつけ、明久の顔は血で染まり優子は伐のいきなりの行動に驚きの声をあげるが伐は気にする事なく立ち上がるとタバコを吸いに行くつもりのようにで懷からタバコを取り出して教室を出て行き、

「明久、大丈夫か？」

「も、もの凄く痛いよ！？」

秀吉は心配そうに明久に駆け寄り、明久は顔を押さえて涙目であり、



「一先ずは保健室代わりになっているところに連れて行くか」

「ちょ、ちよっと、何で、そんな冷静なのよ!!」

雄二は頭をかきながら明久の治療をしてくるといって優子は顔を引きつらせたまま言うが、

「うちのクラスじゃ、この程度の流血は日常茶飯事だからな」

「そうじゃのう」

「うん」

Fクラス男子はやはりどこか常識からずれており、優子は顔を引きつらせる。

「……愛子」

「う、うん。大丈夫だよ」

翔子は伐のいきなりの行動に顔を青くしている愛子に声をかけると愛子は最近潜めていた伐の怖さにあてられた用ではあるが大きく頷き、

「伐くんの事だから、何か考えがあるんだよ」

「そうは思えないんだけど」

自分に言い聞かせるように言うと優子は愛子の考えは甘いと言いた

げに言っと、

「……まあ、黒須は人と距離を取るようになっているからな。見せしめもあつたんだろっ」

「……昔の雄二みたいに近くに來た人が傷つかないようにしている。黒須も雄二と一緒に優しいから」

「べ、別に俺はそんなんじゃねえよ」

雄二は伐の行動に何か感じる事もあるようで苦笑いを浮かべると翔子は笑顔で中学時代に悪鬼羅刹とまで言われて他人と距離を取っていた雄二と一緒にだと言つと雄二は翔子の表情に顔を赤くして目を逸らし、

「仮にそうだとしてもやりすぎよ」

「うむ。確かにね」

優子はため息を吐きながら伐の行動は行きすぎていると言つと秀吉は頷き、

「工藤、少し、距離を取つてやれ。あいつはあまり自分の本質を見せようとしないからな。近づきすぎると逃げて行くぞ」

「黒須くんって猫みたいよね」

「うむ。島田も言つておつたのじゃが、猫と言つ表現が1番適しておるのじゃ」

雄二は愛子に伐に近づきすぎるのは逆効果だと言つと優子と秀吉は伐の態度が猫に似ていると笑い、

「秀吉、木下、あんまりおかしな事を言つてると黒須に食われるぞ。猫は肉食だしな」

「……ええ。気をつけるわ」

「う、うむ」

雄二はそんな2人の様子にため息を吐いて伐の機嫌を悪くさせるなと言つと秀吉と優子は伐に押し倒されかけた事があるため、顔を引きつらせて頷く。

## 第190問

「……今日はお前かよ」

「あ、あの」

伐は中庭でタバコを吸っていると瑞希が伐をジッと見ており、伐は気だるそうにため息を吐くと瑞希は何かを決意したようで伐に声をかけようとするが、

「ど、どうして行っちゃうんですか!？」

「……知るかよ。俺がお前の相手をしないといけねえ理由はねえんだよ。だいたい、人の話も聞く気のねえ奴に何を言っても無駄だろ。何が悲しくて無駄な事に付き合わされねえといけねえんだよ」

伐は瑞希の事など気にする事なく歩き出し、瑞希は伐を追いかけて行くと伐は付いてくるなと言うと、

「む、無駄って、どうして黒須くんがそんな事を言えるんですか？」

「そんな事？ 今更、どの口が言うんだ？ 俺は何度も忠告をしたはずだ。それを聞く事もしなかったからこの結果なんだろ。お前は島田や霧島が何かをしたならそれが正しいとか言ってやがるがそれは自分の責任を放棄しているだけだろ。普通に考えろよ。お前らがやったのは事実を確認する事なく無理やり自分達の納得できる答えに事実を捻じ曲げようとしたに過ぎない。それも力づくって言う最低の方法でな。暴力でのありもしない事実を自供させてどうするつもりだ？ その先を考えて動いたのか？ 仮にあいつらが犯人だった

としてもお前達はその後の事を考えていたのか？ それにな。言われのない暴力を受けた人間がその人間に好意を抱くわけがねえだろ。少なくとも今回の件はお前らがダーリンや霧島旦那を犯人と決め付けた。これが真実であり、それ以上もそれ以下もねえだろ。それなのに疑いから入って犯人と決め付けた人間を好き？ 面白い冗談だな。お前も島田も本当にダーリンが好きなのか？ お前らは恋に恋してる自分達をかわいいと思ってるだけのバカ女だ。だから、疑われた人間の心も関係ない。無関係なのに巻き込まれている人間の事も考えない。そんな自己中女どもの相手は無償でするほど俺はヒマじゃねえんだよ……ん？ なんだ、それもわからずに俺に声をかけるなんて、あれか？ 自分に都合が悪い事実を突き付けられたから、俺にもダーリンと一緒に力づくで従わせようとしてるのか？」

瑞希は伐の言葉に納得していないようで伐を睨みつけるが伐は瑞希の視線を鼻で笑うと彼女に何を言っても無駄だと判断した理由を並べた後、バカな直情女は次は気に入らない相手を無理やりに従わせるつもりかと言う。

「そ、そんな事はしません！！ だいたい、心って言ったら、黒須くんは何なんですか！！ 私や美波ちゃんを責めるようなことばかり言って、黒須くんだって私達の気持ちを考えてくれないじゃないですか！！」

「は？ 笑わせるなよ。都合のいい事ばかり並べてるバカに何で俺が気を使ってやらねえといけねえんだ？ だいたい、俺とお前や島田の関係は何だ」

「そ、それは」

「友人だとかふざけた事を言うんじゃないぞ。少なくとも俺はお前

らみたいなあまちゃんのお友達ごっこに付き合う気はさらさらねえんだ。言っただろ。俺はお前らとは無関係なんだよ。それを勝手に自分の都合の良い関係を押し付けんなよ」

瑞希は伐だって何もわからずに人を傷つけてると言いたげに言うが伐はバツサリと瑞希を斬り捨てると、

「俺以外も同じだ。現状で言えば、お前とダーリンはクラスメートであり女友達でしかねえんだよ。嫉妬で暴力？ 100歩引いて付き合ってるならまだしもな。お前がやってる事は変わらねえよ。他人に責任をなすりつけてるヒマがあったら他にやる事をやれよ」

瑞希の言葉を待つ事なく1人で歩いて行ってしまい、瑞希はその場に1人取り残される。

## 第190問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

オリジナルファンタジーの小説を投稿しました。『性悪魔術師と白銀の歌い手』と

言う作品です。相変わらず、主人公の性格はよくないですがまあが作る新たな世界を楽しんでいただければ幸いです。

興味がある方は作者のページから探してみてください。

## 第191問

「……これで少しは考えて動いてくれれば良いんだけどな。何で、あいつらは俺を巻き込むのが好きなんだ？」

「何？ 黒須くんはまた考え事？」

「黒須君、タバコは体に良くないと思うんだけど」

伐は中庭に着くと先ほどの話で瑞希が少しでも冷静に考えてくれれば自分が巻き込まれる状況が減ると言った時、友香と源二が自習室を抜け出してきたのか伐に声をかける。

「……何かようか？ 俺の貴重な時間を邪魔するな」

「うーん。この間から思ってるんだけど、黒須くん、タバコの量、増えてない？ 強化合宿だといつもここでタバコ吸ってるわよね？」

「……仕方ねえだろ。バカクラスに巻き込まれる事が増えたんだからな。それも大した収入もねえのに人を便利屋かなんかだと勘違いして安い金額で俺を使おうとする奴らもいるしな」

「こ、小山さん、どうして、黒須君のタバコについて何も言わないんだい？」

伐は2人の相手をする気はないと言いたげに言う「友香は強化合宿での伐の喫煙量が増えていると言うと伐はこの騒ぎでストレスが溜まっていると言うが源二は伐の喫煙を止めない友香の様子に眉間にしわを寄せるが、



「最近、わかった事なんだけど、黒須くんのタバコに関してはなぜか西村先生もノータッチなのよね。西村先生でも止めさせられない事なら、私が言っても無駄でしょうし、それにタバコ以外で黒須くんのストレスを解消するために女の子達を差し出すわけにお行かないでしょ」

「……賢明な判断だな」

「そ、そうなのかな？」

友香は周りに被害が出るよりは伐にタバコを吸わせていた方が安全だと言い切り、伐は友香の最近の判断力には目を見張るものがあるように小さなため息を吐くが源二は納得がいかなさそうな表情をして首を傾げると、

「それで、本題だけど今日は男子生徒達はどう来ると思う？」

「……知るかよ。俺はただ働きをする気はないって言ってるだろ。お前らは俺をなんだと思ってるんだよ」

友香は伐に今晚の男子生徒の行動を教えて欲しいと言うが伐は興味などないと言うと自分をこれ以上、巻き込むと言い切り、

「ちょっと、どこに行く気？」

「……ここは待ち伏せされるみたいだから、他にタバコを吸える場所を探しに行くんだよ」

「ミサちゃん、これに着替えて」

「え？ 玉野さん？」

伐はタバコを携帯灰皿に押し当ててタバコの火を消すと友香と源二を置いて歩き出し、その後ろを女子の制服を手にした美紀が全力で追いかけて行き、

「……黒須くんって、おかしな事に巻き込まれる体質なんじゃないかしら？」

「……いや、黒須君が問題なんじゃなくて周りに問題があるんじゃないかな？」

友香は伐を追いかける美紀の様子にため息を吐くと源二は苦笑いを浮かべながら問題は伐ではないと言い切った時、

「黒須を異端者と判断する！！ これに対して反対意見はないか！！」

「黒須を捕まえる！！」

「会長、しかし、私はミサちゃんもみたいです！！」

「決まっているだろ！！ 異端者を捕まえた後、ミサちゃんにして、あんな事やこんな事を」

おかしな覆面を被った集団が殺意やおかしな妄想をまき散らしながら、伐と美紀の後ろを追いかけて行く。

## 第192問

「……康太、覗きか？」

「……そんな事実はない」

伐は美紀やFクラスから逃げきるために屋根の上に登るとそこにはすでに先客があり、伐はデジカメを手にしている康太の様子に眉間にしわを寄せるが康太は直ぐに否定すると、

「……伐、お前は どうするつもりだ？ 中立を保っているつもりか？」

「あ？ どつちかと言えば、今は女側だ。安くても金を払うからな。男共は金も払わないクセに協力しろだと平然に言いやる」

康太は伐と同様にすでに盗撮と脅迫の犯人が美春だと気づいているように伐に大きくなったこの騒ぎをどうするかと言うと伐は欠伸をした後、寝るつもりのようにで屋根の上に寝転んで女子側だと言い、

「……脅迫の件はどうするつもりだ？ 明久や雄二が納得するとは思えないぞ」

「知らねえよ。だいたい、脅迫騒ぎは俺には全く関係ねえだろ。あくまでも今回の件は覗き騒ぎだろ。元々、坂本だんなの件はとくに決着が付いているのにあのバカがわがままを言っているだけで脅迫されたと云う事実もない、ダーリンの件だって同じだ。ただの学祭での1コマだろ。現にFクラスは全員、チャイナを着てるわけだし、それで決着が付くだけだろ。それをあのバカが大げさに言ってるだけ

だ」

「……………確かに」

康太は脅迫騒ぎをどうするかと聞くが伐は興味がなさそうであり、康太も伐の言葉に少し考えると脅迫に関してはあまり問題になっていないと頷く。

「……………覗き騒ぎはバカ達の考えたらずの行動だから、俺には関係ない。後は好き勝手にやってくれ。俺には関係ない。ただ、バカの出す答えくらいは見させて貰う」

「……………ここまで煽ったくせにずいぶんといい加減な答えだな」

「そんなもんだろ。人の答えなんて人の数だけあるんだ。俺はノラ猫、興味のない事にはそんなもんだ」

伐は他の事は自分には関係ないと言うと康太はため息を吐くが伐は欠伸をすると、

「……………なら、工藤愛子の事は興味がああると思つて良いのか？」

「あ？ 何、わけのわかんねえ事を言い出すんだ？ ……後は人に質問をするなら、嫉妬を理性で抑えつけてから聞け」

「……………そんな事実はない」

康太は伐を真つ直ぐに見据えて愛子の事をどう思っているのかと聞き、伐は康太の言葉に眉間にしわを寄せて言う「と康太が手に持っていたスタンガンを抜き取り、康太は伐の手のなかに移動したスタン

ガンに視線を1度向けた後に嫉妬などしていないと言うが、

「……………説得力がねえな」

伐は眉間にしわを寄せたまま康太の言葉には説得力がないと言い、

「興味のある無しで言えば、<sup>カラダ</sup>肢体には興味がある。処女だしな。締まりは良さそうだ……………鼻血を吹くなら自分から話を持ってくるな」

「……………気にするな。ただの日射病」

「……………日射病じゃ鼻血は出ねえよ」

伐は康太の質問に愛子の<sup>カラダ</sup>肢体以外には興味がないと言うと康太は持ち前の妄想力で何を想像したようで鼻血を出して吹き飛んで行き、屋根から落ちそうになるが伐は康太をつかむと屋根の上に引っぱり戻す。

## 第192問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

オリジナルファンタジー小説を書き始めました。『勇者の息子と魔王の娘？』と言う題名です。

コメディータッチですかね？ ノラ猫のようなシリアスとは違う世界観を楽しんでいただければ嬉しいです。

## 第193問

「……ったく、あのお子ちゃまが気になるなら、くだらない事をや  
つてないで本人に行けよ。俺には関係ねえ」

「………そんな事実はない。ただ、工藤愛子と一緒にいると伐が  
昔と同じような表情を見せる時がある。俺はそれが嬉しい」

「……バカじゃねえのか。そんな事実はねえよ」

伐は簡単な手当てをすると康太が愛子の事を気になっていると思っ  
たようで自分には興味がないから好きにしろと言うが康太は首を振  
り、愛子がそばにいる事で時折、伐が見せる表情が以前の伐と重  
なると言い、伐はその言葉に眉間にしわを寄せて否定すると、

「……くだらねえ事を言っているヒマがあるなら、行動しろよ」

「………伐、逃げるな。お前は1人じゃない。何かあつたら俺は  
お前の力になる。あの時とは違う。俺だけじゃない。明久や雄二だ  
つてそうだ」

「……あのバカどもに頼るような事があつたら、俺は終わりだ」

伐は康太を置いて屋根から降りようとするすると康太は今の伐の行動は  
逃げていただけだと言うが伐は康太の言葉を鼻で笑う。

「……俺はノラ猫、あの日からな。1人で生きると決めたし、野垂  
れ死にするのも1人だ。お前にもお子ちゃまにも、それこそ、あの  
バカどもにも関係ねえよ」

「……………伐」

「くだらない事を言ってるヒマがあるなら、犯罪行為バカな事をしてないで真面目に生きろよ。お前は陽のあたる場所を歩けるんだ。そのうち、捕まるぞ」

「……………そんな事実はない」

伐は他人の事を心配しているなら盗撮や盗聴と言った犯罪行為を止めろと言つと康太は犯罪行為などしていないと首を振り、

「……………まあ、好きにしろ。俺にはお前がどうなろうと関係ねえしな」

「……………そう言つなら、どうして、人に助言をする」

伐は康太の反応に興味無さそうに言つと屋根を降りて行き、康太は先ほどまで伐が立っていた場所を見て小さな声でつぶやくと、

「ミサちゃん、見つけた！！これを、これを着てええええ！！！！」

「……………だりい」

伐の姿を美紀が見つけたようで彼女のスイッチは切り替わり、伐に向かつて突撃してきたようで伐は気だるそうにため息を吐き、

「……………着替えても良いが、高いぜ。しっかりと払って貰うぞ」

「もちろん、ミサちゃんが見れるなら、どんな事でも！！」



「ダメに決ってますわ！！　こんな性欲の塊に捕まったら何をされるかわかりませんわ！！　妊娠をして泣くのは玉野さんですわ。そんな事はさせませんわ！！」

伐は美紀の腰に手を回して美紀の肢体カラダを楽しもうと思ったようであり、美紀も自分の欲望を優先しているためか深く考える事なく拳を握り締めて返事をした時、美春も一緒にいたようで伐の手から美紀を引っ張り出し、

「……ガキを作るなんてへまをするかよ。それに今日はこいつもお前も安全日だろ。ちゃんと可愛がってやるよ」

「み、美春があなたに何かをされる事はありませんわ！！　だ、だいたい、お、おかしな事を言わないでください！！」

「根拠？　決まってるだろ。危険日は匂うんだよ。優秀な種を欲しがるメスの匂いがな」

「ふ、不潔ですわ！！　玉野さん、離れましょう。ここは危険ですわ！！」

「ミ、ミサちゃあああん！！！！？？？？」

伐は美春の心配を鼻で笑うがその言葉に美春は更なる警戒を強めて美紀を引きずって行き、美紀は伐の女装を諦めきれないのか彼女の魂の叫びが響く。

## 第194問

「……結局、策もなく突っ込むだけかよ。芸も何もないな」

「そうは言っても女子生徒の方が人数が少ないんだ。協力してやったらどうだ？」

3日目の入浴時間が開始されると男子生徒達はBクラスをも巻き込んで人数を増やしてきたようだが策はなく、女子の大浴場に突撃して行き、その様子を伐は気だるそうに欠伸をすると伐を見つけて西村教諭が声をかけるが、

「協力？ どっちにだ？」

「……決まっているだろ。女子にだ」

伐はやる気がないため、わざとらしく男子に協力しても良いのかと聞くと西村教諭は大きくため息を吐く。

「まあ、女どもは風呂に入らないといけないらしいからな。身の安全を考えるなら、部屋に付いている個室風呂に入れば良い。それなのにわざわざ、身の危険を冒してまで大浴場に行ってるんだ。自業自得だろ」

「……いや、その前に覗きに走るのはどうかと思うんだが」

しかし、伐は危険を冒してまで大浴場で風呂に入る女子生徒達は自業自得だと言い切ると西村教諭は覗きに走った男子生徒達の短絡さに呆れているようであるが、

「それまでに至った過程を考えると実際、責められるべきは女どもだと思っけどな。覗き程度で収まるんだ。減るもんじゃねえし、見せてやれば収まるだろ」

「……そんなわけに行くか」

伐は原因を考えると短絡的なのは男子だけではないと言い、原因を作った女子にも責任を取らせると言っが西村教諭はそんな事はできないと言っつと、

「理不尽だな。教育者は平等でないといけないんじゃないのか？ それなのに責められるのは男どもだけか？ 最初に女どもが理不尽な暴力での制裁に動かなければこの騒ぎは起きなかつたわけだろ」

「……そうかも知れないが、それとこれは別だ」

「別じゃねえよ。まあ、世の中が理不尽なのは世の常か？」

伐は西村教諭の言葉に気だるそうに言っつと西村教諭もそれは理解できるようだが割り切る事はできないと言っい、伐は世の中には理不尽で溢れていると皮肉を込めたように言っつ。

「……だから、暴力に走るんじゃねえよ」

「伐くん？」

伐は明久が加わった事で召喚獣を使う事になった覗き騒ぎを見て眉間にしわを寄せると気だるそうに試召戦争内に歩いて行き、愛子に襲いかかるうとした男子生徒を蹴り飛ばし、愛子は自分の前に現れ

た伐を見て嬉しそうに抱きつこうとするが、

「……ひつつくな。うぜえ」

「ここは抱きつかせてくれる所じゃないの？ カッコよく現れたんだし」

「知るか。おい。坂本、ダーリンきりしまだんなにそっちは任せて、力づくに走るバカの相手はお前がしろよ。悪鬼羅刹様」

伐は愛子の抱きつきを交わすと召喚獣を駆使して男子生徒を押さえこんでいる雄二に向かい、暴力で女子生徒を襲おうとする男子生徒は同じ目に遭わせても問題ないと言い、

「お。それは楽でいいな。黒須、せっかくだ。黒須、憂さ晴らしに付き合え。ぶちのめした人間で勝負しようぜ」

「ちょっと、坂本くん、何を言ってるのよ!？」

「……俺はただ働きはしない主義だ」

雄二は召喚獣を使うより、そっちの方が楽だと思ったのとその騒ぎのせいで翔子につきまとわれてる憂さ晴らしもしたいようで良い笑顔で伐の提案に乗ると伐にぶちのめした男子生徒の数で勝負をするかと言い始め、優子は驚きの声を上げるが伐は気だるそうにただ働きはしないと言つと、

「お前が勝つたら、明久をグロテスクに殺して良いぞ」

「……わかった」

「ちょっと待て！？ その誘い方はおかしいからね！？」

雄二は伐に1つ条件を追加し、伐は頷くと明久は勝手に決められた条件に声を張り上げるが伐と雄二は2人で男子生徒達を蹴散らして行き、

「結局、力づく？」

優子は積み上げられて行く男子生徒の様子に顔を引きつらせる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1890n/>

---

嘘と話術とノラ猫

2011年9月24日14時20分発行